

博士課程 学位論文

授受動詞「もらう」の補助動詞的用法の  
認知言語学的考察

—話者「私」の受益の〈事態把握〉における認知過程—

指導教員 石橋玲子教授

平成 25 年度  
昭和女子大学大学院  
文学研究科  
言語教育・コミュニケーション専攻  
関根 和枝

## 目 次

第1章 序 論.....	1
1. 1 授受動詞「もらう」 .....	1
1. 2 「もらう」の補助動詞形の意味と認知過程 .....	3
1. 2. 1 「てくれる」の含意.....	3
1. 2. 2 「てもらう」の含意.....	4
1. 2. 3 「てもらう」の認知過程 .....	5
1. 2. 4 「てもらう」の類型論的指摘 .....	5
1. 3 補助動詞形と話者の補助動詞的用法 .....	8
1. 3. 1 補助動詞形「てもらう」の研究 .....	8
1. 3. 2 日本語話者の〈事態把握〉のスタンス .....	10
1. 4 本研究の目的と構成.....	11
第2章 先行研究と本研究の立場 .....	16
2. 1 授受本動詞と補助動詞形の研究概観 .....	16
2. 2 本動詞「もらう」の研究 .....	19
2. 2. 1 意味の通時的概観 .....	19
2. 2. 2 「与える」類と「受ける」類の非対称性.....	21
2. 2. 2. 1 受け手の心理的变化の発生.....	21
2. 2. 2. 2 働きかけと物の方向.....	24
2. 3 補助動詞形「てもらう」の研究 .....	26
2. 3. 1 構造的特徴 .....	26
2. 3. 2 対象物の抽象化.....	27
2. 3. 3 「てもらう」文の主観性 .....	29
2. 3. 4 ヴォイスとしての研究.....	30
2. 3. 4. 1 使役としての分析 .....	30
2. 3. 4. 2 使役と受身の連続としての分析 .....	32
2. 3. 4. 3 受身としての分析 .....	34
2. 4 先行研究の観点への疑問と本研究の立場.....	36
2. 4. 1 先行研究の観点への疑問 .....	37
2. 4. 1. 1 小説・作例分析への疑問 .....	37
2. 4. 1. 2 働きかけ観点への疑問.....	38

2. 4. 2	本研究の立場.....	40
2. 4. 2. 1	話者の発話の観点 .....	40
2. 4. 2. 2	受益結果への指向性.....	41
2. 4. 2. 2. 1	「てもらう」文の結果性 .....	41
2. 4. 2. 2. 2	使役と受身の連鎖 .....	42
2. 4. 2. 2. 3	間接的心理的受益 .....	44
2. 4. 2. 2. 4	結果から見る受益事態 .....	45
第3章 話者受益の「てもらう」文 .....		46
3. 1	「私の受益」の意味 .....	46
3. 1. 1	話者のプラスの変化結果状態 .....	47
3. 1. 2	プラスの意味の表出.....	49
3. 1. 3	変化結果状態への評価.....	50
3. 2	話者「私」の受益プロセスと結果.....	51
3. 2. 1	「働きかけてもらう」文の受益プロセス .....	51
3. 2. 1. 1	因果連鎖.....	51
3. 2. 1. 2	二格の意味役割.....	53
3. 2. 2	結果再帰性 .....	58
3. 3	話者受益結果の「想定」 .....	61
3. 3. 1	受益未実現時の結果「想定」 .....	61
3. 3. 1. 1	「想定」の先行研究.....	61
3. 3. 1. 2	未来への自己投入 .....	63
3. 3. 1. 3	受益結果「想定」と「期待」 .....	65
3. 3. 2	行為者行為への見込み.....	66
3. 3. 3	話者「私」の受益結果からのプロセス .....	68
3. 4	「てもらう」文の話者受益のあり方 .....	68
3. 4. 1	「働きかけてもらう」文.....	69
3. 4. 2	「思いがけずてもらう」文.....	71
3. 4. 3	「間接てもらう」文.....	72
3. 4. 4	話者受益の「てもらう」文のタイプ .....	73
第4章 話者受益の確認と結果.....		76
4. 1	資料の説明 .....	76
4. 1. 1	自然会話コーパス .....	77

4. 1. 2 新聞資料.....	78
4. 2 話者受益の確認.....	80
4. 2. 1 「働きかけてもらう文」タイプ.....	80
4. 2. 2 「思いがけずってもらう文」タイプ.....	84
4. 2. 3 「間接てもらう文」タイプ.....	85
4. 2. 4 新たな「想定間接てもらう文」タイプ.....	86
4. 2. 5 話者受益の「てもらう」文の分類結果.....	88
4. 3 「てもらう」文の受益観点.....	90
4. 3. 1 話者受益の未実現時と既実現時.....	91
4. 3. 1. 1 「想定」と受益未実現時・既実現時.....	91
4. 3. 1. 2 「てもらう」文末表現.....	92
4. 3. 1. 3 従属節「てもらう」の接続表現.....	97
4. 3. 1. 4 受益の直接間接.....	102
4. 3. 2 話者受益「てもらう」文の考察観点.....	103
 第5章 考 察.....	 105
5. 1 話者受益のプロセス.....	106
5. 1. 1 ひとまとまりの受益の中の時間的プロセス.....	106
5. 1. 1. 1 受益気づきの時点とひとまとまり.....	106
5. 1. 1. 2 働きかけの時点と受ける時点.....	109
5. 1. 1. 3 ひとまとまりへの〈受益未実現時〉と〈受益既実現時〉.....	110
5. 1. 2 二種類の受益プロセスの辿り方.....	111
5. 1. 2. 1 想定プロセス.....	112
5. 1. 2. 2 顧みプロセス.....	113
5. 1. 3 話者受益のプロセスのまとめ.....	114
5. 2 話者受益の因果.....	115
5. 2. 1 想定プロセスの受益因果.....	116
5. 2. 1. 1 「てもらう」条件節と受益因果.....	116
5. 2. 1. 2 「てもらう」「て節」と受益因果.....	117
5. 2. 1. 3 想定プロセスでの時間的意識.....	118
5. 2. 1. 4 文末表現と接続表現の〈想定プロセス〉の並行性.....	119
5. 2. 2 顧みプロセスの受益因果.....	121
5. 2. 2. 1 「想定」結果からの原因顧み.....	121
5. 2. 2. 2 結果から見た「て節」の原因化.....	122
5. 2. 2. 3 文末表現と接続表現の〈顧みプロセス〉の並行性.....	125

5. 2. 3	想定プロセスと顧みプロセスの因果 .....	126
5. 2. 4	話者受益の因果のまとめ .....	129
5. 3	間接的事態からの話者受益.....	130
5. 3. 1	想定プロセスの間接「てもらう」文 .....	130
5. 3. 1. 1	他者受益の「想定」原因化.....	131
5. 3. 1. 1. 1	B.「話者誘因的てもらう」文の特徴 .....	131
5. 3. 1. 1. 2	他者への自己投入と共感 .....	132
5. 3. 1. 1. 3	話者受益への原因化とプロセス化.....	133
5. 3. 1. 2	拡張関与受益の「想定」原因化 .....	134
5. 3. 1. 2. 1	D-1「拡張関与的てもらう」文の特徴.....	134
5. 3. 1. 2. 2	受益原因の想定プロセス化.....	136
5. 3. 1. 3	受益未実現時の間接受益「てもらう」文のまとめ.....	138
5. 3. 2	〈顧みプロセス〉の間接「てもらう」文.....	138
5. 3. 2. 1	D-2「拡張関与的てもらう」文の特徴.....	139
5. 3. 2. 2	受益原因の顧みプロセス化.....	139
5. 3. 3	プロトタイプの枠組みからの派生.....	142
5. 4	話者受益表現「てもらう」の認知過程 .....	144
5. 4. 1	「てもらう」文の受益の認知過程 .....	144
5. 4. 2	体験的受益の話者「私」の〈事態把握〉 .....	148
第6章 結 論.....		149
6. 1	本研究のまとめ.....	149
6. 2	本研究の意義.....	157
6. 3	今後の課題 .....	160
参考文献 .....		166
参考辞典 .....		172
資 料 .....		172
謝 辞 .....		173

## 図表目次

### 〈図目次〉

図 1.1	「私」の受益結果と時間・因果プロセスのひとまとまりの認知 .....	14
図 1.2	本論文の構成.....	15
図 2.1	(a) 与える類の本動詞 (b) 受ける類の本動詞 .....	25
図 2.2	「てもらう」文の小説・作例分析と本研究の話者の観点との差異.....	40
図 2.3	使役的「てもらう」と受身的「てもらう」の連鎖 .....	43
図 3.1	「てもらう」文の話者のプラス (+) の変化結果状態.....	48
図 3.2	Croft (1993:93) の因果連鎖 .....	52
図 3.3	授受補助動詞「てもらう」が含意する意味 .....	53
図 3.4	使役と受身と「二格」動作主の関係 .....	54
図 3.5	「てもらう」のプロセスと話者「私」の意味役割のターン.....	55
図 3.6	「受ける」類の動詞における X の Y への関心 .....	57
図 3.7	「二格」誘因からの「気の動き」 .....	57
図 3.8	「てもらう」文の再帰性 .....	59
図 3.9	「働きかけてもらう」文のひとまとまりの「私」の受益 .....	60
図 3.10	「想定」時の「てもらう」 .....	69
図 3.11	「働きかけてもらう」文の受益 .....	69
図 3.12	働きかけの部分.....	70
図 3.13	思いがけず「てもらう」文.....	71
図 3.14	自動詞による結果状態.....	72
図 3.15	「間接てもらう」文の受益 .....	73
図 3.16	<話者受益の「てもらう」文のタイプ> .....	74
図 5.1	ひとまとまりの話者「私」の受益の中の受益状態気づき時点 .....	109
図 5.2	話者「私」の受益未実現時と既実現時の連鎖的ひとまとまり .....	111
図 5.3	〈想定プロセス〉の受益のひとまとまり .....	112
図 5.4	〈顧みプロセス〉の受益のひとまとまり .....	114
図 5.5	文末「てもらう」の〈想定プロセス〉の受益のひとまとまり .....	120
図 5.6	複文従属節「てもらう」の〈想定プロセス〉の受益のひとまとまり .....	120
図 5.7	文末「てもらう」の〈顧みプロセス〉の受益のひとまとまり .....	125
図 5.8	複文従属節「てもらう」の〈顧みプロセス〉の受益のひとまとまり .....	125
図 5.9	条件文の因果.....	127
図 5.10	理由文の因果.....	127
図 5.11	「てもらう」文における話者の受益原因とプロセスのひとまとまり .....	129
図 5.12	B.「話者誘因的てもらう」文の受益〈想定プロセス〉 .....	134
図 5.13	D-1「拡張関与的てもらう」文の〈想定プロセス〉 .....	136

図 5.14	D-2「拡張関与的てもらう」文の〈顧みプロセス〉 .....	140
図 5.15	関与づけられない受益原因と間接受益結果 .....	143
図 5.16	「てもらう」文の話者「私」の受益 .....	144
図 5.17	「もらう」の補助動詞的用法に含意される認知過程 .....	145
図 6.1	話者の発話する「てもらう」文の受益認知過程 .....	149
図 6.2	補助動詞的用法「てくれる」と「てもらう」の認知過程 .....	157

## 〈表目次〉

表 4.1	自然会話コーパスの概要 .....	77
表 4.2	「てもらう」文のタイプ別数値対比 .....	88
表 4.3	話者受益を表す「てもらう」文のタイプ .....	89
表 4.4	「てもらう」受益未実現時・既実現時の文末表現 .....	93
表 4.5	従属節「てもらう」の接続表現 .....	99

# 第1章 序 論

本研究は、日本語話者が受益を表現する際に、本動詞「もらう」の補助動詞形を用いて表現することについて、そこに含意される話者の認知過程のあり方を考察するものである。日本語の授受動詞には「やる」「くれる」「もらう」の3つがあり、その補助動詞的用法にも「てやる」「てくれる」「てもらう」という3つの形式がある。<sup>1</sup> 本研究では、そのうち授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」を、話者の発話する用法から考察する。まず、本研究の中身に入る前に、次の3点を説明しておくことにする。

第1点は、なぜ授受の体系の中で「もらう」を研究対象として扱うのか、2点目は「もらう」の補助動詞形の意味と、認知過程という用語について、3点目は文法形式としての補助動詞「てもらう」と話者の発話する補助動詞的用法についてである。

## 1. 1 授受動詞「もらう」

授受は、多くの言語で物を与える側と受ける側によって成り立つ事柄を表現する。そのうち最も基本的な表現方法は、山田（2004）によれば与える側からの表現であるという。<sup>2</sup> それに対し、日本語には与え手が差し向ける行為を受け手が受けることを表す2つの表現形式「てくれる」と「てもらう」がある。このことは、世界の言語の中では珍しいことだと言われ、特に「くれる」「てくれる」は「私」に物事が向かうことを表すというように、文の中に必ず「私」を含意させているという点が特徴的だと指摘されている。

澤田（2012:87）は、「移動動詞『来る』や授与動詞『くれる』が直示的な性格を有する

<sup>1</sup> 金（2003:101）は授受動詞を「あげる、もらう」「貸す、借りる」「授ける、授かる」のように「同じ事柄を別の観点から描く単独の動詞で、それぞれの主体は動作主として働いている」と説明している。本研究では授受動詞の補助動詞的用法を考察するため、授受動詞を狭義に「やる」「くれる」「もらう」を指すものとする。山本（2006:56）は「日本語の授受表現は『～（て）やる』『～（て）くれる』『～（て）もらう』の三系列にそれぞれ尊敬語や謙譲語があり、全部で七つの語からなっている」と説明している。

<sup>2</sup> 山田（2004:355）は、「言語普遍的に見て、物の授受にしても行為の授受にしても、最初に現れるとすれば、それは方向性に関して対立を持たない give に相当する語であり、次に現れるとすれば、受け手からの表現である receive 相当語である。そして、最も見られにくいのが、『方向性に関して対立を持つ』give 相当語であり、この方向性弁別型 give を物の授受にも行為の授受にも用いる日本語は、類型論的に見て極めて特異な言語であると言えよう」と述べている。

尚、本研究では脚注の例文番号について、本文の例に関するものは本文番号に従い、脚注で新たに参照する例文番号は、各脚注につき（i）（ii）と振ることとする。



ことはつとに指摘されてきた」と「くれる」をダイクシスであると説明し、「直示動詞に関わる視点は、直示的視点であり（略）、『来る』が表す視点は（略）主語の移動を出迎える『話し手』に固定される直示的視点であり、『くれる』が表す視点も（略）、事象を自分にとって恩恵的な事柄として捉える（受益者としての）話し手に固定される直示的視点である」と説明している。

すると、「くれる」を使って恩恵的な意味を表現する時、事物が話者「私」に向かうということを必ず含意させているということになる。そして、話者は自分を事態から受益をする「受益者」であると認識しているということである。このことから、本研究では以下、「話者」が恩恵的な事柄を捉えることを話者「私」の「受益」、そして受益を捉える話者を「受益者」と表現していく。また、話者以外の主語の受益については主語の部分を示明して受益として表現していく。

「くれる」がダイクシスとして研究されているのに対し、「もらう」は「やる」に対応する、補助動詞形を持つ授受表現「(て) やる」「(て) くれる」「(て) もらう」の三系列の1つとされているにとどまる。<sup>3</sup> しかし、「もらう」は「くれる」が必ず話者の受益を含意させているのに対し、話者の受益が表れない授受にも使われる。例えば(1)の例で受益者は話者ではなく、聞き手である。

- (1) 受付で番号札をもらってから、この辺でお待ちください。

さらに、「もらう」は話者が第三者間の授受も表現できる。

- (2) 太郎は花子に資料のコピーをもらった。

しかし、「もらう」が発話で「私」にとっての授受の事態を説明する時、日本語母語話者は一般的に(3b)よりも(3a)のように発話すると思われる。<sup>4</sup>

- (3) a. (私は) 花子に資料のコピーをもらった。  
b. ?? 太郎は私に資料のコピーをもらった。

このことから、「もらう」も発話では、「私」という制約を受けることがわかる。(3a)で

<sup>3</sup> 1.1で挙げた山本(2006:56)の説明の用語を引用した。

<sup>4</sup> 発話で「私は」と一人称を示明する場面は限られているため、(3a)のように( )で記してある。話者自身が言語化されないことを池上(2006b:190)は日本語話者の〈事態把握〉の傾向として「自分が臨場している事態の中に身を置いたままで、その視座から事態把握をする。その際の事態把握では、話し手は自らを原点として、そこから事態を眺め、把握する。それゆえ、話し手自身は自らの視野に入らず、客体化されない」と説明している。この事は1. 3. 2で詳説する。

「私」が「もらう」と発話した時、受益者は話者「私」である。発話では通常明示的に言語化されない一人称を主語とする授受動詞「もらう」は、物が話者「私」に向かうことを表現する。この点ではダイクシスの意味合いを持つと言えるだろう。

本研究では「もらう」が話者「私」の受益というダイクシスの意味を持つことについて、「話者『私』」という用語を次のような理由で使用することにする。「私」の部分が無く「『話者』の受益」という場合、それが自己の受益ではない場合もある。例えば第三者間の太郎と花子の行為の授受で、太郎が花子に「これを見てもらいたい」と話し、私が太郎の発話を偶然傍らで聞いたなら、受益をする『話者』は「私」ではなく、太郎である。また「話者」の部分が無く「『私』の受益」という場合、文法的な人称という捉え方によって一人称、二人称、三人称という区別が喚起され「話者にとっての意味」という要素が喚起されにくくなる可能性もある。そのため本研究では基本的に「話者『私』」として説明していく。<sup>5</sup>

次に、授受動詞の補助動詞形に表される意味を説明する。

## 1. 2 「もらう」の補助動詞形の意味と認知過程

本研究で授受動詞「もらう」ではなく、その補助動詞形「てもらう」を研究対象とする理由を、受益を表す「てくれる」と対比させながら示す。そして、「もらう」の補助動詞的用法に、本研究の結論である「認知過程」という日本語話者の〈事態把握〉の特徴が表現されていることを説明する。

### 1. 2. 1 「てくれる」の含意

授受動詞「くれる」の補助動詞的用法「てくれる」もダイクシスを表し、話者「私」に必ず行為や事態が向かうことを表す。補助動詞的用法「てくれる」は次の(4a)で、(4b)のような構造を持っている。

(4) a. 花子がコピーを取てくれる。

b. [花子が [花子がコピーを取る] てくれる]

「てくれる」の構造を見ると、補文の主語と主文の主語が同じであることがわかる。主語花子はコピーを取り、同じ花子はコピーを話者「私」にくれる。同一人物花子が意志的に行うコピーを取る、それを話者「私」に差し向けるという行為を、ひとまとまりに補助

---

<sup>5</sup> 「私」の受益の範疇には、英語でいう一人称単数の“I”だけではなく、「私」がその時の発話に際してウチと認識する私達や私側等が含まれ得る。これについては p.133 注 111 で説明を加える。

動詞的用法「てくれる」で表現している。さらに「てくれる」でも、「くれる」にあり「来る」には無い、話者「私」の受益の意味が表されている。

次に「てもらう」の意味を見ることにする。

## 1. 2. 2 「てもらう」の含意

本動詞「もらう」で表現される事態は必ずしも話者「私」にとっての受益を含意しているとは言えない。では、補助動詞的用法ではどうであろうか。(5a) は本動詞用法の再掲であり、(5b) は補助動詞的用法である。すると、補助動詞的用法では、受益の意味が出てくることがわかる。

(5) a. 受付で番号札をもらってから、この辺でお待ちください。

b. 受付で番号札を渡してもらってから、この辺でお待ちください。

(5a) は受益というよりも、受納「受け取る」と言い換えることもできる。しかし補助動詞的用法である (5b) は、番号札を受け取ることがとても得難い、有難いことのようなニュアンスが出てくる。「くれる」「てくれる」は本動詞の意味、補助動詞的用法の意味として受益が含意されているのに対し、本動詞「もらう」では文脈によって左右されていた主語の受益の意味が、その補助動詞的用法には明確に含意されている。

さらに「てもらう」は、日本語教育で初出項目として学習者に説明する時、私から頼んだ意味があるとして「てくれる」との差異を示すことがある。「てくれる」では先に説明したように、「てくれる」文に含意される 2 つの行為の意志が一人の主語行為者にある。

次に「てもらう」について「てくれる」と同様に意味と構造を示すと (6) のようになる。

(6) a. 花子にコピーを取ってもらう。

b. [私は [花子がコピーを取る] てもらう]

(6) の「てもらう」では、「花子がコピーを取る」という補文の花子の行為そのものには、誰かのためという意味は無い。それを、主文主語の私が「てもらう」事として表現しているのである。そのため「てもらう」では、「私」がその行為を頼んだという意味が解釈できる。<sup>6</sup> また、(6) で話者「私」がコピーを頼むのであれば、それは話者「私」がコピーを取ってもらいたい、という何らかの理由があると推測できる。そこでコピーを取ってもらえると、この「もらう」の補助動詞的用法では、話者「私」の依頼達成の嬉しさ、満足等の受益の意味も明確になる。

<sup>6</sup> さらに、花子が自発的にコピーを取る行為に対しても、話者「私」が受益だと感じればこの「てもらう」で表現できる。例えば私がコピーを取って花子に渡さねばならないのに、私が多忙でなかなかコピーができないので、花子が待ちきれずに自分でコピーを取るような場合でも、話者「私」の受益であり「てもらう」で表現できる。

### 1. 2. 3 「てもらう」の認知過程

(4) の「てくれる」は話者「私」の受益への 2 つの行為「コピーを取る」「くれる（私に差し向ける）」は同一主語である花子によるもので、ひとまとまりに表現されるのは、理に叶っている。では、(6) の「てもらう」ではなぜ花子がコピーを取ることと、話者「私」がそれを「もらう（受益する）」ということを、そして受益した私の嬉しさ、満足を「てもらう」という 1 つの表現形式でまとめて表すのだろうか。

(7) a. 花子がコピーを取った。それを私がもらった。私は嬉しい。

b. (私は) 花子にコピーを取ってもらった。

(7a) のように表現する言語では、行為者が「私のために」等の付加的要素によってその行為が私にとって受益だということを表すようである。しかし、日本語では (7a) のように表現することはほとんど無いと言ってよいだろう。補助動詞形「てもらう」はこのように補文の事柄と主文の事柄という別々の事が 1 つにまとめられた文を作り上げる。(7b) のように、1 つの表現形式「てもらう」では他者花子の行為「コピーを取る」を言語化し、それに「てもらう」を後接させて受益を表している。「てもらう」を用いた文では、なぜ他者が行為をしたことと受益をしたということという二つの事態を 1 つにまとめて表現するのかについての深い言及はこれまで特にはされてこなかった。

話者が「花子にコピーを取ってもらった」と発話するのであれば、まず補文に表される「花子がコピーを取る」事態があり、その結果、話者「私」が嬉しい状態になったことを表現している。「これから花子にコピーを取ってもらう」も同様に、私の嬉しさは花子の行為の結果による。何の原因も無く私が嬉しくなることは「てもらう」で表現せず、「てもらう」文は話者以外の行為者の何らかの行為や事態を原因として、その作用や影響が話者に及んだ結果として話者「私」が受益状態を実感することを表現している。

すなわち話者「私」が「てもらう」と表現する時、話者は自らの受益結果だけでなく、その結果のプロセスや原因も含意させ、それを「てもらう」を用いて表現しているということである。本研究ではそれを話者「私」の受益における〈事態把握〉の「認知過程」として指摘し、「てもらう」文が認知過程を含意する表現形式であることを明らかにしていく。そして、この「てもらう」が他言語にほとんど無い表現形式だということとの関連を指摘する。

### 1. 2. 4 「てもらう」の類型論的指摘

日本語で (7) のように「てもらう」で表現することを、「てもらう」という表現が無い言語では行為者を主語として、「主語が私のためにした」と表し、さらに「私は嬉しい」と

いう表現を加えることになるかと思われる。<sup>7</sup> 日本語の「てもらう」のように他者がしたことや事態を主語が「てもらう」という表現形式を持つ言語は他にどのくらいあるのだろうか。

山田 (2004:347) は、日本語のように、特に膠着語においては述部に恩恵表示のための形態を持つ言語は多いと述べ、韓国語、カザフ語、ネパール語、モンゴル語、ヒンディ語などはいずれも動作主を主語に置いた本動詞の *give* に由来する形態を補助動詞に用いていると説明している。しかし「テヤルとテクレルのような、話者からの方向性によって形式が分化するのは日本語だけである (p.354)」として、やはり「てくれる」が日本語に特徴的な表現形式であることを指摘している。<sup>8</sup> 「てくれる」「てもらう」という授受動詞の補助動詞的用法のうち、「てくれる」については本動詞「くれる」が日本語に特徴的な話者「私」の受益を表すダイクシス表現であることから、その補助動詞的用法も、日本語に特徴的な表現形式であると指摘できる。授受動詞の補助動詞的用法について池上 (2011:60) は「授受動詞を補助動詞的に用いて、問題の行為がある当事者にとって〈利益〉であるという意味合いを含ませる用法」を「例えば、『花子ガ本ヲ読ンデクレタ』: この種の用法を日本語のように発達させている例は極めて少ない(Newman(1996))とのことで、日本語と類似の用法を持つ韓国語と比べても、日本語の用法の方が広いこともよく知られている」と「てくれる」を例示して指摘している。

しかし、一方で「てもらう」については山田 (2004) が、「*receive* に相当する形式を補助的に用いたテモラウ相当表現を持つのは、日本語とカザフ語のみである (p.354)」と述べている。山田 (2004: 347-348) は「興味深いのは、カザフ語を除いて、テモラウに相当する表現は用いられない点である。(p.347)」と指摘し、本動詞を使って仮想的に作ったテモラウ受益文を示し、カザフ語以外はどれも不適格になると説明している。<sup>9</sup> 例えば韓国語では次の (8) ように、物の授受を「やる」と「もらう」に表現し分けるが、(9) のように「てもらう」は適格ではないと示している。

(8) 韓国語：系統不明<sup>10</sup>

<sup>7</sup> 守屋三千代氏 (p.c.,2013) から、“for me”は選択的であるが、「てもらう」という表現形式は、それが無いと有標であるというコメントを頂いた。

<sup>8</sup> 山田 (2004:356) は、「くれる」、「てくれる」が日本語に特徴的な方向性を表す表現形式であるということの例外を「一例だけ例外となりそうなのは、Matisoff(1991)が報告するチベットービルマ語属のラフ語 (Lafu) である。話者への遠心的方向性を持つ動作・行為には *pî* という小辞を、求心的方向性を持つ動作・行為については *lâ* という小辞を動詞に添えて表す。Matisoff はいずれも受益者を表す小辞 (benefactive particle) であるとのべており、このような *give* 相当の語に方向性による区別が存在するならば、テモラウに対応する表現も存在することが上のハイアラキーからは予測されるが、詳細は不詳である」と説明している。

<sup>9</sup> ただし、モンゴル語、韓国語についての近年の研究では「てもらう」相当の表現形式があるという指摘もあるようである。

<sup>10</sup> 山田 (2004:336) は韓国語の授受について、授受は (*juda*) と (*badda*) の二項対立しか持たないと説明している。

a.Nae-ga Cheolsu-ege chaeg-eul ju-eossda.

私ー主格 チョルスー与格 本ー対格 giveー過

「私はチョルスに本を やった」

c.Nae-ga Cheolsu-ege chaef-eul bad-assda.

私ー主格 チョルスー与格 本ー対格 receiveー過

「私はチョルスに本を もらった」 (山田 2004:336(8)a.c.)

(9) 韓国語：系統不明

Nae-ga Cheolsu-ege chaeg-eul ilgeo ju-eossda.

私ー主格 チョルスー与格 本ー対格 読む(連用形) 与えるー過去

「私がチョルスに本を読んでやった。」(山田 2004:346(22))

(9') 韓国語(車美恵 p.c.)：系統不明

\*Nae-ga Cheolsu-ege chaeg-eul ilgeo bad-adda.

私ー主格 チョルスー与格 本ー対格 読む(連用形) receiveー過去

「私はチョルスに本を読んでもらった」の意図で(山田 2004:347(22)')

それに対し、山田(2004: 349-350)はカザフ語について、膠着語である韓国語、ネパール語、モンゴル語、ヒンディ語の中では、「カザフ語の場合、やや判断に揺れがあるものの、モノの授受を含意しない恩恵的行為にも与え動詞・受け動詞のいずれも用いることができる(p.349)」と説明している。次の(10)はカザフ語の物の授受で、(10a)は「やる」、(10b)は「もらう」である。(11)は恩恵行為の授受を表し、具体的な物の移動は無い。授受(11a)(11b)は「てやる」にあたり、(11c)は「てもらう」にあたる。

(10) a. Men ogan ktap berd-im.

私(主格) 彼(与格) 本 give-1 単過

「私は彼に本をやった」

b. Men odan ktap ald-im.

私(主格) 彼(奪格) 本 receive-1 単過

「私は彼に本をもらった」 (山田 2004:335(3))

(11) a. ? Men olar-ga bilep berd-im.

私 彼ー与格 踊る(語幹) give-1 単

「私は彼らに踊ってやった。」<sup>11</sup>

<sup>11</sup> 山田(2004:349)は「(11a)は『やや言いにくい』が、それでも\*Men olar-ga biledim(彼らに踊った)のように言うより言いやすいとのことであった。このように具体的なモノの移動

b. Men o-gan terezen axip berd-im.  
 私 彼一与格 ドア 開ける (語幹) give-1 単  
 「私は彼に窓を開けてやった。」

c. Men doxtər-ga kərnup ald-im.  
 私 医者一与格 見る (語幹) receive-1 単  
 「私は医者に診てもらった。」

(山田 2004:349(27))

この山田 (2004) の指摘は限られた例示によるものであり日本語の「てもらう」との近い程度は分かりかねる。しかし、少なくとも (11c) で医者 of 直接的な行為を患者の私が受けるということを、私を主語として receive 相当の語を補助的に用いて一文で表現しているという点は注目できる。先にも説明したように、山田 (2004) は調査によって、30 余りの言語の中で「てもらう」相当の表現形式を持つのはカザフ語のみであったと述べている。すると受益を表す授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」を用いた文は、日本語に特徴的な表現の仕方の 1 つであると言える。他言語に行為者を主語とした (9) のような「てやる」はあるが、行為の受け手を主語とした「てもらう」は珍しい。「てもらう」は日本語話者が受益に際して表現したい何らかの意味の表出機能を担っていると考えられる。本研究ではそれを探り、話者「私」が受益という事態において、受益結果のみでなくそのプロセスや原因も共にひとまとまりとして捉え、それを「てもらう」と表現するということを明らかにしていく。

次に、補助動詞形と補助動詞用法ということについて説明する。

### 1. 3 補助動詞形と話者の補助動詞的用法

「てもらう」について、授受動詞の補助動詞形と、発話する話者の補助動詞的用法ということについて説明する。授受動詞の補助動詞形は従来構文として分析されているが、そこには主観性の含意があること、それが話者「私」の発話する際の〈事態把握〉のスタンスに於いて現れることを説明する。

#### 1. 3. 1 補助動詞形「てもらう」の研究

大江 (1975) は日本語と英語の比較研究の中で授受動詞の補助動詞形について「被行為者の側の主観的感情を含む」と、主観を表す表現形式であることを指摘している。

一方、先行研究では、「てくれる」と異なり、授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもら

---

が無くても恩恵的行為の授受を表現できる点で、カザフ語のベネファクティブは日本語にかなり近い性質を持つものと考えられる」と指摘している。

う」を用いた文では主語が「二格」で示される行為者に行為を働きかけるとして、ヴォイスの使役の観点からも研究されている。そこでは、「てもらう」文は(12)のような働きかけがある使役的な場合も、また(13)(14)のように働きかけが無い受身的な場合もあり、多義であると指摘されている。<sup>12</sup> また(15)のように、主語が関与しないことからの受益を表すとして、ヴォイスの受身の観点から、被害の受身文と意味的相補性をなすとも指摘されている。<sup>13</sup>

(12) (略) 私があの人にわざわざ辞めてもらったことをどう思っているか分かっていうものだわ。(山田 2004:121(21))

(13) 辞めてほしいと思っていた人に、思いがけなく辞めてもらったことで、直子は少しは気も晴れた。(山田 2004:122(23))

(14) いままでずっと見守ってもらっていた感じがした。(土の器) (山田 2004:119(12))

(15) 早く暖かくなってもらいたい。

(12)(13)は作例で、(12)の主語は私、(13)の主語は直子、(14)は詞の「私」である。(15)は本研究の筆者の作例であるが、主語が非明示であり、話者「私」の願望が表現されている。授受補助動詞形「てもらう」の従来の研究は、働きかけの有無について主語から他者への行動要求の強度の度合いから、使役的、許容的な「てもらう」であるか、働きかけが無い受身的な「てもらう」であるかが分析されてきた。しかしこれらの単文を見るとわかるように、その主語が誰であるか、話者であるか否かが問われずに働きかけの有無が論じられている。また、文法の観点からは例示された単文の「てもらう」に対し、その働きかけの有無が問われている。

しかし、「私」が発話する「てもらう」文では、話者「私」は自分で働きかけたのか、思いがけずに受益したのかは、わかっているはずである。また、何からどのように受益するかということは、話者「私」にしかわからない。大江が被行為者の主観を表すと指摘した「てもらう」を用いる文では、先行研究で主観を表すと指摘されていながらも、主観の持ち主は主語であり、話者「私」ではない。もし(15)が次の(15')のように他者の主観である時、「てもらう」を用いた文の適格性は変わってくる。

(15') \*太郎は早く暖かくなってもらいたい。

以上のように、「もらう」の補助動詞形が話者「私」の発話である時の用法については、

<sup>12</sup> 山田(2004:131)では「テモラウという形式自体中立であり、その埋め込まれた事態の自己制御性によって、意志的にも無意志的にも用いられ、意志的であれば働きかけが感じられたり許容的になったりするが、無意志的であれば働きかけが感じられないということに他ならない」と説明されている。

<sup>13</sup> 寺村(1982)等。先行研究については第2章で詳しく見る。



まだ十分に研究されているとはいえない。話者「私」が発話する「てもらう」用法は、多くの研究が話者「私」の待遇の観点からの語用研究であり、話者「私」の受益に際する事態の捉え方を探る研究は十分ではない。<sup>14</sup> これらのことから本研究では、話者「私」が産出する授受補助動詞「てもらう」の用法を研究対象とし、話者「私」がどのような受益の仕方を「てくれる」ではなく「てもらう」と表現するのか、という受益事態の認知のあり方について探ることを研究の目的とする。

本研究では授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」を話者が用いた文を研究対象とするが、便宜上、話者が発話する「『てもらう』を用いた文」というところを本研究ではそれを縮めて「『てもらう』文」と称して説明していくことにする。

太郎ではなく話者「私」が「てもらう」と表現する時、「私」は世の中の事態をどのように捉えて受益だと表現するのだろうか。

### 1. 3. 2 日本語話者の〈事態把握〉のスタンス

池上 (2011:52) は認知言語学の観点から、話者の事態把握について日本語話者は〈自己・中心的〉(ego-centric) な〈事態把握〉をする傾向にあると説明している。

池上 (2007:189-190) は日本語話者が世の中の事態を表現する時に、話者自身を事態の中に置いて体験的に表現するということを、英語の話者との差異として次の例を示している。

(16) [独白するという状況で、話し手がこれまでの自らの姿勢を反省し、自分を励まして  
いるという場面]

a) “You must work much harder!”

b) 「(私は) もっと頑張ってやらなくちゃ！」(池上 2007:189(27))

この例で、英語の話者が自己を他者化して“You”と表現するところを、日本語話者は「自己を自己として〈他者〉化することなく、〈1人称〉として言語化の方が自然と思われる (p.189)」と述べている。そして、「〈自己・中心的〉に事態を把握する話し手においては、(英語のような：本論筆者加筆) 〈自己分裂〉(self split) は起こらない。話し手は自分が臨場している事態の中に身を置いたままで、その視座から事態把握をする。その際の事態把握では、話し手は自らを原点として、そこから事態を眺め、把握する。それゆえ、話し手自身は自らの視野に入らず、客体化されないから言語化の対象にならない (p.189)」と説明している。<sup>15</sup>

<sup>14</sup> 「てもらう」の待遇についての先行研究は第2章で概観する。

<sup>15</sup> 池上 (2011) は日本語話者の事態把握についての説明と、英語の場合を例として〈主観的把握〉と〈客観的把握〉を取り上げているラネカー (Langacker(1990)ほか) の議論による〈事態把握〉の説明とに言語間での差異が認められると述べている。池上 (2011:53-55) は日本語話者の〈事態把握〉では、「主体としての話者が客体としての事態の内に身を置く (〈参与〉、〈主

本研究の対象である授受動詞の補助動詞的用法については『やる』、『あげる』、『もらう』、『くれる』などの授受動詞と、『いく』、『くる』といった移動動詞が補助動詞的に用いられる際の用法によく反映されている。」と指摘し、「それらが補助動詞として添えられていない表現は何かコンテキストから浮かびあがってしまっているような印象を与える。」と述べ、次のような例示をしている。

(17) a)\*彼は私に本を読んだ。(Cf. “He read me a book.”)

b) 彼は私に本を読んでくれた。／彼は子どもに本を読んでやった。／私は彼に本を読んでもらった。(池上 2006b:173(25)下線は筆者)

中でも本研究の対象である「てもらう」という、授受動詞「もらう」の補助動詞形のような文法的な表現形式が日本語にあるのは、日本語話者の受益の〈事態把握〉のあり方がそれを表現する手段を求めているということだとも言える。話者「私」が「てもらう」と発話する時に臨場、体験した、受益の〈事態把握〉とは何か。それを文法的な観点からの先行研究と異なり、話者「私」の発話、産出における認知という観点から探りたい。

以上のことを踏まえて整理し、次に本研究の目的を示す。

## 1. 4 本研究の目的と構成

本研究ではこの話者「私」の発話という観点から「てもらう」文の用法に見られる話者「私」の受益〈事態把握〉の特徴について考察していく。具体的には次の2点を研究目的とする。

1. 行為者に行為を働きかけるとして、「てもらう」はヴォイスの使役の観点で研究されており、働きかけがある場合には使役的、無い場合は受身的だということである。「てもらう」文はさらに間接受身文との共通性も言及されている。これらを全て「てもらう」と表現することの統一的な説明を探る。

---

客合一))か、外に身を置く(〈隔離〉、〈主客対立〉))か、という2つの場合を想定し、たとえば、前者は話者も事態も〈舞台上〉にある場合、後者は事態が〈舞台上〉にあって話者は〈舞台下〉(観客席)にいる場合というように視覚化されることになる。」と説明している。これに対し、「ラネカーの枠組みでは、〈舞台上〉に相当する部分がさらに〈舞台上の照明されている部分〉(onstage)と〈舞台上の照明されていない部分〉(〈舞台の袖〉: off-stage)とに分けて視覚化されるという構図になっている。この構図の差は、〈主観的把握〉で日本語なら話者がごく自然にゼロ化されて表現されるのに対し、主語の義務的な明示化という文法的な制約の介入によって明示的に一人称代名詞によって言語化されるという可能性に対応するためのもののようである。」と述べている。

2. 日本語話者は「私」の受益を、単に「私は受益した。」とは表現しない。「彼がした。私は嬉しい。」というように行為者の行為を表す文に、私の受益を表す文を付加するのではない。「てもらう」文では、他者の行為や事態を言語的に明示化し、私がそれを「てもらう」と、私が受益結果を 1 つにまとめて表現する。日本語ではなぜ「てもらう」を用いた文で 1 つにまとめて表現しているのか、日本語にそのような表現形式がなぜ存在するのかについて考察する。

本研究では結論として、それは、話者「私」が受益への変化のプロセスと受益原因からの作用や影響結果を、「私の受益」としてひとまとまりに認識しているからだということを指摘する。話者「私」は受益結果になったというだけでなく、自らの変化結果である受益状態は受益原因となる行為者の行為や事態からの影響を受けたからだと捉えている。言い換えると、話者「私」は自らの受益には、受益結果という部分だけでなく、受益結果に至る背後のプロセスや原因の部分もひとまとまりに関与づけて捉えている。受益した、という部分はおそらくどの言語にも表現形式があるだろう。しかし、日本語話者が「てもらう」と言う時、話者「私」はなぜ受益したのか、何によって受益できたのか、というプロセスや原因の部分も捉えている。

「てもらう」文で話者は、「私」にとっての受益を結果だけでなく、そのプロセスの部分も表現することから、本研究では「てもらう」が話者の受益事態を捉える認知過程を言語化した形式であるということを考察していく。そして、日本語話者がこのように顕れた結果のプロセスを意識化する〈事態把握〉を言語化した形式として、他にも日本語の特徴とされる「のだ」文や「ている」の結果残存用法があることを紹介し、「てもらう」も日本語話者の、結果への思考プロセスという〈事態把握〉の在り方を表出している形式であるとまとめていく。

具体的な分析資料として、本研究では話者「私」の発話する「てもらう」産出文を対象にする。産出文には発話による産出も書き言葉による産出もあるが、話者「私」という用語に倣って以下、基本的に話者「私」の「発話」と表現する。発話と書き言葉による産出文は自然会話コーパスからと、新聞記事の書き手やインタビューの発話として書かれた文章から、「てもらう」文を抽出したものとする。

次に、本論文の構成を述べる。

第 2 章で、まず授受動詞「もらう」の補助動詞的用法に関する先行研究を概観し、先行研究と、話者「私」の発話の「てもらう」文の分析という本研究の研究観点との差異を示す。そこでは、本研究の「てもらう」文がヴォイスの働きかけの観点だけでは説明できないことを指摘し、本研究では話者「私」の発話する「てもらう」文について、「受ける」観点からの表現形式であることを示す。そしてさらに話者の受益ということについて、単に受益状態を客観的に述べるのではなく、話者自らの受益状態に至る原因や変化のプロセス

を捉えているという日本語話者の〈事態把握〉の特徴が「てもらう」文にあるという見方を示す。

そして第 3 章で、本研究が考える、話者が発話する「てもらう」文に含意される意味について詳しく述べる。本研究では話者「私」が「受ける」ことを表すという立場から、話者「私」が受益するとはどのような意味なのかについて、行為者の行為や事態の影響による話者「私」自身の変化と結果という考え方を説明する。また、「てもらう」文には話者「私」が受益しようとして働きかけて受ける「てもらう」文と、思いがけず受益する「てもらう」文、さらに間接的に事態の影響を受益と捉える「てもらう」文とがあることを、話者「私」が受益することを表す「てもらう」文のそれぞれのタイプとして示す。そして、これらの「てもらう」文では全て話者「私」が何らかのプロセスを経た影響結果であることを表すという共通点を提示する。

第 4 章で、「てもらう」文を話者「私」の自然産出文の中から抽出したものを用例として、第 3 章で示した「てもらう」文の話者受益の各タイプがあることを確認する。用例から、話者「私」が発話のコンテキストの中で、他の表現形式ではなく「てもらう」を使って「受ける」ことを表現する受益の仕方を 4 つのタイプに分類し、全て行為や事態の影響を「受ける」ことを表すということを確認する。さらに、「てもらう」文に後接する文末表現と、従属節に「てもらう」が現れる際の接続表現の種類の特徴を分析する。話者「私」には、自らの受益について、未実現から既実現へというプロセス意識を持ち、さらに「私」の受益原因について、行為者や事態との関与という意識が表れている事を指摘する。それを次の第 5 章で考察する。

第 5 章では、第 4 章での考察観点によって、本研究の目的の 1 つ目、話者「私」の発話する働きかけや思いがけないことからの受益、関与できない事からの受益という多様な「てもらう」文を統一的に説明する、話者「私」の受益〈事態把握〉の時間的プロセスということを考察する。

また 2 つ目の課題である、本動詞の補助動詞的用法であるという意味を考察していく。そこではただ単に「私は受益した」と言うだけでなく、話者「私」が受益という影響結果をどのように受け、なぜ受け、何から受けるか、受けたかという結果に至る間のプロセスや原因も、「てもらう」という表現に含意して表現していることを指摘する。

そして、最後に 5.4 で「てもらう」文に含意されて表現されるのは、話者「私」の中で受益結果だけではなく、受益への時間的な事態の推移、「てもらう」結果をもたらすプロセス、原因事態の関心ということをして「てもらう」受益の中にひとまとまりに捉えた話者「私」の受益認知のあり方であるということを示す。

「てもらう」文にあるこの意味特徴を図に示すと、次の図 1.1 のようになる。

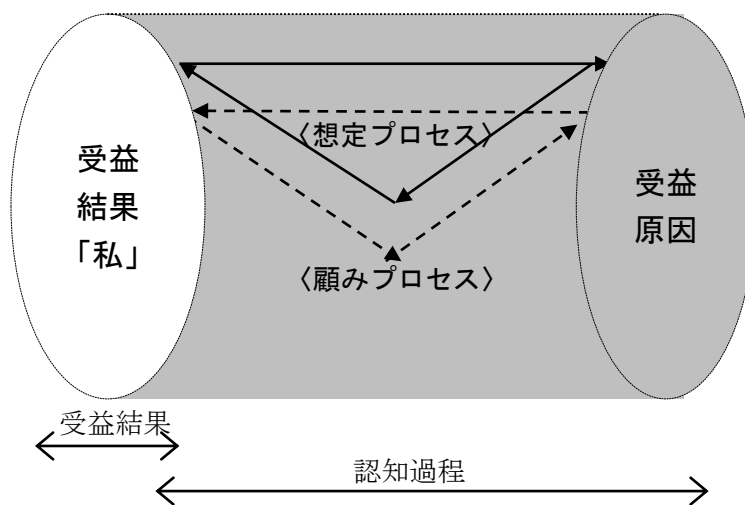


図 1.1 「私」の受益結果と時間・因果プロセスのひとまとまりの認知

図では、左側の話者「私」の受益結果だけでなく、そこに右側の受益原因を介した因果と時間的過程という経緯が、「てもらう」受益の認知過程として話者「私」自身にひとまとまりに捉えられていることを示している。

さらにこのような認知過程を持つ〈事態把握〉は「てもらう」文だけでなく、第 2 章先行研究や第 3 章の本研究での考え方で指摘するように、他にも日本語らしい表現形式である「のだ」文や「ている」文の結果の残存を表す用法にも見られること、そしてこれらの日本語らしい表現形式や用法と「てもらう」文とに共通性があることを指摘する。この第 5 章での考察を、第 6 章で結論としてまとめる。

第 6 章では結論として、日本語の「てもらう」がなぜ働きかける時も受益する時も同じ表現で言い表せるのか、また日本語では「彼がした。私は嬉しい。」となぜ言わないのかという研究の課題に対する回答をまとめる。日本語では授受動詞「もらう」の補助動詞的用法が表すのは、話者「私」が受益事態を結果だけでなく、時間的な順序によって受益結果までのプロセスをひとまとまりに話者「私」の事として捉える為、受益に至る前のことであれば使役的「てもらう」となり、受益してから「てもらう」と表現すれば、それは受身的な「てもらう」となると説明する。また、彼がした事と私の感情は、ともに「てもらう」というプロセスが話者「私」の 1 つの受益に至る時間順だけでなく、彼の行為を受益原因とした因果関係を持つプロセスであること、そこでは行為者彼との繋がりを含意した話者「私」の受益のひとまとまりを成しているということを説明する。

最後に、従来文法的観点では説明しきれなかった「てもらう」文の意味はこの話者「私」の〈事態把握〉という観点から統一的に説明でき、「てくれる」と「てもらう」の差異も認知の観点から示すことができることをまとめて、本研究の意義として示す。

以上を、次章から順に説明していく。本論文の説明の構成を図に示すと次の図 1.2 のようになる。

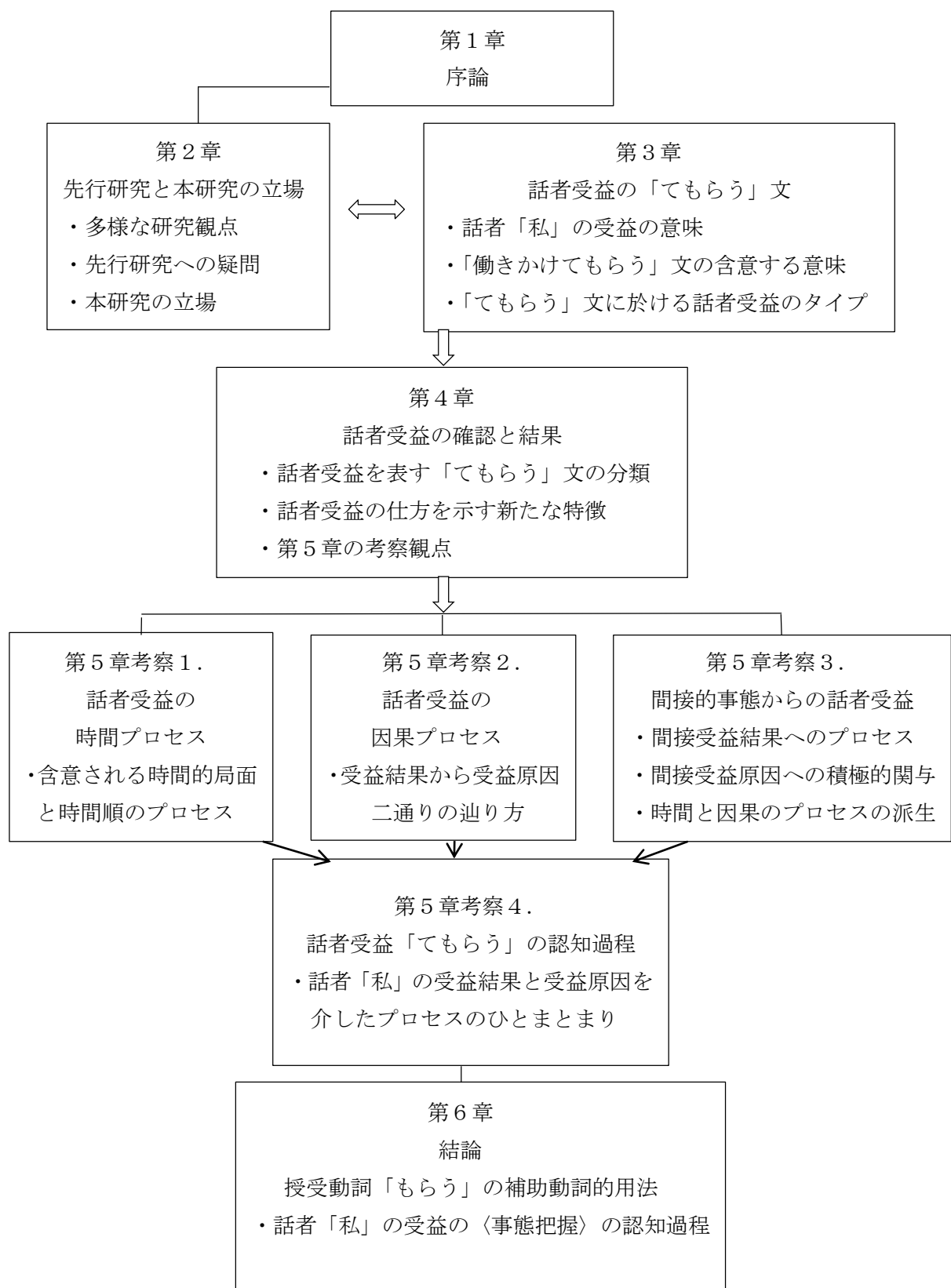


図 1.2 本論文の構成

## 第2章 先行研究と本研究の立場

授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」という表現形式には多様な角度からの研究があるが、他言語にほとんど無い表現形式「てもらう」を、本研究のように話者「私」の〈事態把握〉の仕方の観点から探る研究はまだ管見の限りまだ無い。日本語では序論で述べたように言語表現の際に、話者自身が事態に関与し、事態を体験的に捉えて描写するスタンスが採られる傾向にある。本研究ではこの日本語話者の一話者の視座が移動して事態に投入し、そこから事態を把握する一〈事態把握〉のスタンスが、日本語に特徴的な表現形式である授受補助動詞「てもらう」を解明する手がかりになると考える。このスタンスから話者は、授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」でどのように〈事態把握〉をして受益だと表現しているのかを探ることとする。

初めに2.1で日本語の授受動詞が、先行研究でどのような観点から研究されているのかを概観する。次に本研究の「てもらう」について、2.2でまず本動詞「もらう」の意味研究を、次の2.3で補助動詞形「てもらう」の研究を挙げていく。そこでは「てもらう」は主観を表現すると指摘されながらも、主観の持ち主である話者の発話という観点ではなく、主語と動作主という文法的な観点から分析されていることを説明する。2.4では「てもらう」は文法的な観点では多義であるとしてその意味の統一的な説明に至っていない点を指摘し、本研究では、話者の発話という観点から授受動詞「もらう」の補助動詞形を分析することという研究の立場を示す。

### 2.1 授受本動詞と補助動詞形の研究概観

授受動詞の範囲について、寺村(1982)のように広く捉える研究と、「やる」「くれる」「もらう」を授受動詞とする研究がある。本研究では後者の立場を取り、「やる」「くれる」「もらう」を授受本動詞または本動詞と称する。またその補助動詞(形)は「てやる」「てくれる」「てもらう」を指す。さらに本研究では敬語を研究目的としては扱わないため、それらの敬語形は本動詞、補助動詞に含むものとする。

まず、

大きく次のような観点から研究されている。まず、本動詞である授受動詞が補助動詞へと文法化していく過程の研究や意味変化の対比研究がある。

授受本動詞の「やる」「くれる」「もらう」の意味について、寺村（1982）は動詞を与える類と「受ける」類という観点から分類し、「やる」「くれる」を与える類、「もらう」を「受ける」類に含めている。授受本動詞について他の授受を表す動詞との意味の差異について金（2003）も「やる（くれる）」「授ける」「与える」「送る」や「もらう」「受け取る」「受ける」「奪う」等動詞を与える類と受ける類に分けている。また、「くれる」「もらう」を受ける動詞として、与える動詞「やる」との非対称性を指摘した部田（2009）の研究がある。由井（1996）は授受本動詞と授受補助動詞の意味の文法化の研究をしている。荻野（2007）は視点の獲得の観点から研究している。また、通時的な「やる」「くれる」「もらう」、「てやる」「てくれる」「てもらう」について宮地（1975）、荻野（2007）の研究がある。方言では日高（2007）の調査研究がある。

また、本動詞、補助動詞の授受の与える表現と受ける表現から次に、誰から誰へという方向性の観点での研究、一人称「私」の制約への指摘がある。初期の研究では授受を誰がどこから表現するのかという表現者の視座の観点では授受が「自分」から見た方向性であることを松下（1928）は「自行自利態／自行他利態／他行自利態」と表現し、授受に一人称の制約があると指摘している宮地（1965）を始め、久野（1978）の視点の指摘がある。話者が見るということについては、話者「私」がどこから何を見て表現するのかという視座と注視点という区別が、宮崎・上野（1985）を始め、茂呂（1985）や松木（1992）によってなされるに伴って日本語の研究の中に話者の視座と視点という観点が意識されるようになった。

話者の存在を観点に置いて「私」が視座であるという見方から、話者が与え手、受け手である時の表現として、授受動詞とその補助動詞形は私と授受の方向性、ウチ・ソトという日本語の特徴の研究へと広がっている。日本語の話者視座とウチソトの方向性について吉川（1995,2005）、沼田（1999）が指摘している。

それはさらに、発話行為の観点からの研究へと繋がり、発話機能を山岡（2008,2010）が研究している。語用をポライトネスの観点から指摘する研究は原田（2007）や、また授受補助動詞の付加の有無が従来から指摘されているが、母語話者の発話データから授受補助動詞の持つ方向性が対人関係にどのように機能しているかを山本（2002,2006）が研究している。さらに「てくださる」「ていただく」の対比を行っている熊田（2000）等敬語形に及ぶと、敬語研究という国語学からの研究が数多くある。

話者「私」の授受を表現し、授受補助動詞は私の主観を表す表現形式であるという指摘もある。授受補助動詞「てくれる」、「てもらう」の主観性については大江（1975）、天野（2003）、敬語の観点を含めればさらに多くの研究で言及がある。大江（1975）では英語との対比から視点と主観についての指摘がされている。話者「私」が事態を把握する主観的な把握か客観的な描写かという区別は池上（2004,2006ab,2007,2009,2011,2012）の認知言語学の観点からの一連の研究があり、その中で英語等他言語と比較した日本語の〈事態把握〉の特徴を表す表現、文法形式として、授受動詞やその補助動詞的用法への言及がある。



このような授受動詞、その補助動詞形における話者の視座の取り方や〈事態把握〉の言語間の差異については、言語教育や習得に関する研究でも取り上げられている。日本語教育では「やる」「くれる」「もらう」の提示範囲と提示順についての調査研究を行った田中（2005）等があり、また習得の観点では韓国人学習者のナラティブの視座の日本語母語話者の対比を金（2008）、同様に中国人学習者について奥川（2007）、中国語と韓国語の学習者について田代（1995）の研究をはじめ、近年さらに多様な言語の母語話者について研究されている。

授受補助動詞文は、格や統語構造からの研究の他、文の適格性をめぐって補文の内容と主文との関係が議論されてきた。文法の観点では、補文構造について柴谷（1978）が詳しく説明し、寺村（1982）は格から含意される移動などの概念までも意義深い研究を行っている。

授受動詞の補助動詞形の文構造から、補文の中身による文の適格性という点で柴谷（1978）、Shibatani（1996,2000）は適格性やその許容度の要因について検討している。また授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」の補文の動詞について、影山（1996）の指摘と、それに対する反論として高見・久野（2002）竹林（1998）等の言及があり、そこでは語用の観点からも文の適格性を判断すべきである、また話者の捉え方を考慮すべきであると指摘されている。

一方、主語が働きかけの仕手であるか受け手であるかということから授受はヴォイスの観点で研究されてきた。授受をヴォイスの観点から見る研究では、多くが本研究の主題である授受補助動詞「てもらう」をヴォイスの観点から研究している。例えば「てもらう」に使役性や受身性の「てもらう」があるという指摘は、佐久間（1936）、宮地（1965）、上野（1978）、鈴木（1984）、寺村（1982）、奥津・徐（1982）、天野（1991）、村木（1991）、益岡（1991,2001,2007）、岡本（1997）、澤田（2006b）の研究でされている。また、使役性と受身性があることから「てもらう」と使役と受身の連続の観点で池上（1981）、仁田（1991）の研究がある。さらに、「てもらう」を主に使役の観点で仁田（1991）、山田（2004）、澤田（2006c,2008,2009）が、類型論からの日本語の授受については Shibatani（1996,2000）や近年認知言語学の観点からも池上（2006b,2007,2011）等を始め、多くの研究が行われている。

山田（2004,2005,2006）は授受動詞の補助動詞形「てやる」「てくれる」「てもらう」について授受の方向性、補助動詞形の持つ構造的意味、ヴォイス等の文法範疇からの詳細な考察を行い、それだけでなく、依頼機能や複文における機能分析、類型論的考察まで広く研究している。

序論でも示した様に、本研究のテーマである「てもらう」は山田（2004）によると、主語を事態に対する受け手として事態との関係を述べる補助的な表現形式は、英語等ゲルマン系の言語やラテン語を始め、中国語にも韓国語にも見られないということである。韓国語にこの「てもらう」が無いことから、どのように訳し分けしているのかという対照研究は徐

(2007,2008)、キム(2006)が行っている。さらに対照研究は井上(2011)が韓国語と中国語の「動詞＋授受動詞」の考察を行い、また、王(2004,2006)も中国語母語話者の観点で「もらう」の補助動詞的用法を分析している。その他の個別言語対照研究では、トルコ語での「てもらう」の訳し方の指摘をダリア(2008)が、アラビア語母語話者の習得についてアハマド(2006)が研究を行っている。また、タイ語についてスチワロードム(2009a,b)、スペイン語について長谷川(2006,2007)の授受の観点からの研究がある。しかし近年盛んな対照研究の流れにおいて、ここでは一端を示したに過ぎない。

次に、授受動詞「もらう」の補助動詞的用法について、本研究との関連で先行研究を取り上げる。初めに本動詞「もらう」に含意される意味の研究からその指摘を確認する。次に補助動詞の意味の研究ではまず、その補文構造について柴谷(1978)の研究を概観する。その上で、本研究の授受動詞「もらう」の補助動詞の用法が、文法的にはヴォイスの観点から多く研究されていることを示し、その問題点を挙げる。

## 2. 2 本動詞「もらう」の研究

まず、受け手を主語とする授受動詞「もらう」の語彙の意味研究を紹介し、さらに与える動詞と受ける動詞という観点での研究を挙げる。そして補助動詞形「てもらう」が「てくれる」と異なる再帰的な意味を持つことを指摘する。

### 2. 2. 1 意味の通時的概観

荻野(2007:11)は授受動詞「やる」「くれる」「もらう」の意味の分化過程について、補助動詞形を含めて研究している。日本語の授受動詞「やる」「くれる」「もらう」という三つの形は、荻野(2007:1-2)によれば、古代語では意味的に今のような授受の体系的な対応関係はなかったということである。初めは「くれる」が求心的にも遠心的にも用いられていたものが、話者に対する方向性「くれる」が定まってから「やる」がそれに対して遠心的な方向性を担う意味になったと述べている。<sup>16</sup> 荻野(2007)は「くれる」や「やる」と比較し、「古代語のモラウの用例は少ない」と述べている。そして多くの言語では授受を、行為者を主語として「主語」が「やる」と表現するのと異なり、日本語では語彙の意味の分化、決定に「話者」の視点が要因として関わったという見方を示している。

<sup>16</sup> 荻野(2007:1-2)は「くれる」を「自分からの授与(遠心的方向、つまり話し手から遠ざかる方向、現代語のヤル相当)と自分への授受(求心的方向、つまり話し手に向かってくる方向、現代語のクレル相当)との両方向の授受を表していた」と述べている。そして、このクレルがあることに伴い、古代語ヤルは「文をヤル」「人をヤル」にほぼ限定され、授与というより「遣わす」の意が強いと説明している。さらに授受動詞の補助動詞的用法について荻野(2007:3-4)は、その中で最も早く現れたのはテクレルで15世紀半ばには現れていたと言えそうだと述べている。本動詞のクレルには無い特徴として依頼表現があり、依頼での多用により、授与の方向が一定化し、テクレルの与格に一人称制約が感じられたのではないかと述べている。

「もらう」「てもらう」について、荻野（2007）は古代語の「もらう」の意味を辞書から用例を示し、受け手から乞い求める意味があることを紹介している。例えば邦訳『日葡辞書』（1980:422）の説明で（1）のような記載を紹介している。<sup>17</sup>

（1）“Morai, ò, òta. モライ, ウ, ウタ（貰ひ、ふ、うた）”

「乞い求める． 例： Ifiuo morō（慈悲を貰ふ）慈善・寄進を乞う．」

本動詞の古代語「もらう」について荻野（2007:11）は、「原義は、相手の側で様子を窺い、何かを乞い求める意味といえる。<sup>18</sup> 17 世紀前半まで『私が乞い求めた結果、相手から授受をうける』 という意味があったと考える」と述べている。この説明によれば、本動詞の「もらう」に、こちらからそちらの様子を伺う、そちらに何かを乞い求めたり期待する結果、そちらから恵みや贈り物を受けるといった意味があったということである。

補助動詞形「てもらう」について荻野（2007:12）は「テモラウの用例は狂言資料の頃から見られ、（略）使用に『テモラワバヤ』『テモラオウ』『テモライタイ』といった願望を表すモダリティが多い（p.12）」と指摘している。そして、補助動詞的用法「テモラオウ」は、意志というよりも自分の願望を表していると述べている。例えば『角川 古語大辞典』（1999:686）の例からは「動詞連用形に助詞『て（で）』の付いた形を受けて、その行為が自分の利益になる気持ちを添える」として次の例を挙げている。（尚、以下の例で下線は本論文筆者による。）

（2）「このかけ物もろくにかけてもらひたい」〔狂言・乳切木〕

（3）「産でもらつたとゝさんやかゝさんより大事にをもふのに、あんまりきこへぬじやないかな」〔傾城仙家壺〕

さらに『日本国語大辞典』（2001:1398-1399）には本動詞「もらう」の一番目の意味として「〈動詞「もらう（守-）」からという〉他から何かを自分の身に受ける」という意味があるとして、その意味の拡がりを「送られたり請うたりして自分のものにする。物品や恩恵、許しなどを、与えられたり、願で出たりして自分のものとする」と示して、現在では通信を受ける意味もあると説明している。補助動詞の意味は次の（4）や（5）が紹介されている（以下、迷惑…アイロニー用法は（略））。

<sup>17</sup> 以下、3つの辞書の意味は次のものによる。

『邦訳 日葡辞書』（1980）第一刷 土井忠生・森田 武・長南 実 編訳 岩波書店

『角川 古語大辞典』第五巻（2001）初版発行 中村幸彦・板倉篤義・岡見正雄編 角川書店

『日本国語大辞典』（2001）第2版第12巻 小学館日本国語大辞典第2版編集委員会／小学館国語辞典編集部

<sup>18</sup> 荻野（2007:11）は、『時代別国語大辞典上代編』で、「守(も)ルに動詞語尾フのついた語で、そちらに向かって様子をうかがい、また、何事かを期待して待つ意。そうした状態から、他人にめぐみ（特に食物）を受け、さらには、一般的に贈物を受けることをいうにいたるものと思われる」と説明を紹介している。

- (4) 他人の好意により、または自分から依頼して行われた行為によって自分が利益を受ける。また、単に、依頼して行為をさせる意を表す。

「仏師と談合いたし、よささうなお仏をつくってもらはふと存る」

(虎明本狂言・仏師(室町末一近世初))

- (5) 自分の好意により、または他人の依頼によって自分が行った行為が他人に利益をもたらす意を表す。

「角筈の支部に家村を訪ね、夫の居所が解ったことを、家村に喜んでもらった」

(真理の春 (1930) 〈柳田民樹〉この歓び・六)

荻野 (2007) が『日葡辞書』を始めとして挙げる「もらう」「てもらう」には、総じて受け手から乞い求めるという共通の意味があることがわかる。また、本研究との関連では、『角川 古語大辞典』や『日本国語大辞典』の「もらう」に、「自分」や「他」という表現で説明があることから、主語ではなく「話者」である「自分」と「他者」という対立が意識されていることが伺える。

「話者」ということが受給動詞と結びつくことについて、荻野 (2007) は宮地 (1965) の指摘を挙げて説明している。宮地 (1965:25) の指摘とは「受給動詞 (宮地は授受動詞を「受給動詞」と称している) の意義の特性に、『話し手の立つ側』の配慮、あるいは『話し手の関与』ということが内包されている (p.25)」というもので、荻野 (2007) はさらにそれは敬語表現へとつながると言及している。

荻野 (2007) が日本語の授受動詞とその補助動詞形について、話者の視点という観点から意味変化を探っているのに対し、授受本動詞の意味を「与える」類と「受ける」類とに分けてその対応で分析している研究もある。次にその中から本研究では「受ける」ことを表す授受動詞について重点を置いて示す。

## 2. 2. 2 「与える」類と「受ける」類の非対称性

まず、授受動詞の「受ける」類の中で、授受本動詞の「くれる」「もらう」は主観的な心理的变化として受益の意味があるという指摘を紹介する。さらに、「くれる」「もらう」という「受ける」類の動詞が含意する意味が「やる」という「与える」類とは対称ではないという指摘、「受ける」類の「もらう」において、二格動作主が2つの意味役割を持つという指摘を示す。

### 2. 2. 2. 1 受け手の心理的变化の発生

金 (2003) は「受ける」類の動詞について「もらう」だけでなく、「与える」「受け取る」「受ける」等の動詞の意味を比較考察している。そして、例えば「受ける」としか共起できない名詞「手術、面接、診察、保護、相談、挑戦、追求、教育、ショック、プレッシャー... (金 2003:222(730))」を挙げ、「それらの『影響、作用に応じるといふ事柄を描く』と

考えられる。これらの事柄は所有権の移動には無関係な事柄である」と述べている。これらの名詞が「もらう」とは共起しないことから、動詞「受ける」は抽象的なものも表すが、授受の体系を成す動詞「もらう」はより具体的な物の授受を表すと指摘している。さらに金（2003:221）は「受け取る」と「もらう」の対比において、「もらう」に受け手の感情が表現されていることを「受け手の主観的な気持ち《主観的感情》が『もらう』と『受け取る』の違いである」と述べ、(6) の例を示している。

(6) a.ベトナムに行ってきた友人から、おみやげに現地のパンをもらった。

b.\*ベトナムに行ってきた友人から、おみやげに現地のパンを受け取った。

(金 2003:221(726)下線は筆者)

金（2003）は抽象的な物と所有権という点から受けることを表す動詞を分析しているが、その後、部田（2009:42-44）は「もらう」が表すのは所有権の移動ではなく、変化であると説明している。また、「くれる」「もらう」は「やる」とは非対称であるとも指摘している。本研究では「受ける」類の「もらう」に注目するため、これらの部田（2009）の主張に負うところがあると考え、ここに示すことにする。<sup>19</sup>

部田（2009:39）は金（2003）が抽象的な名詞として挙げた勇気、希望、感動などを「内面表現対象」と呼んで、「これらは太郎の中で自然にわき起こった感情であり、発生時から受け手に帰属するものである」と指摘している。<sup>20</sup>

(7) 花子は太郎に生きる希望を {くれた／もらった}。

(部田 2009:39(26)より。「やる」については筆者が略。)

部田（2009:40）は希望、勇気など受け手の中で自然にわき起こった感情について『花子』はその要因だと考えられる」と指摘している。

(8) XガYニZヲ クレル：Xが要因となって、YにZという好ましい感情が生まれる

→ Xのおかげで、YがZという好ましい感情を持つことができる

XガYニZヲ モラウ：Yが要因となって、XにZという好ましい感情が生まれる

→ Yのおかげで、XがZという好ましい感情を持つことができる

(部田 2009:41(36))

そして「この『内面的表現対象』の授受動詞文では与え手からの直接的な働きかけがあるわけではなく、受け手側に、ある感情を生み出すためのいわば間接的な働きかけを行っ

<sup>19</sup> 本研究の受益と変化については次の第3章で詳しく説明する。

<sup>20</sup> 部田（2009:38）は、例示語彙を「CD-ROM版新潮文庫の100冊」と「現代日本語書き言葉均衡コーパス 公開データ」より抽出したと注記している。

ていると言える」と説明している。それに対し、同じ抽象的な対象物に関して「やる」は働きかけが直接的であると(9)の例を挙げて指摘し、与えることを表す「やる」と「受ける」ことを表す「もらう」や「くれる」では、働きかけの直接間接という点で非対称的だと指摘している。<sup>21</sup>

(9) いろいろ助けてもらったから、今度は私が彼に元気と勇気をあげたい。

(部田 2009:41(37))

そして部田(2009:41)は「(9)では、あくまで与え手の願望を示しているので、受け手が実際に『元気、勇気』という感情を生成したかどうかは関係ない。」と述べている。

本研究の「受ける」観点から言えば、授受を多くの言語で「与える—give」の概念で捉えているというのは、このように「やる」側にとって、受け手が受益をするか否かという結果よりも行為の起点を中心に授受という事態を捉えていると言えるのではないかと考える。

次に、部田(2009)が授受の所有権について、従来の「所有権の移動」は「移動」ではなく「変化」であるという主張を示す。本研究では授受動詞の補助動詞形について取り上げるが、物の「移動」ではないという点から参照することにする。部田(2009:43-44)は、「授受動詞文の意味素性は〈対象の位置移動〉〈対象の所有権の移動〉とされてきたが、〈対象の位置変化〉〈対象の所有権変化〉である」と指摘して、次の(10)は(11)のように説明でき、また「もらう」の文(12)も適格文であることを示している。(以下の例の下線は本論文筆者加筆)

(10) 買い物客は店頭に並んでいるりんごを子供にやって、店員に注意された。

(部田 2009:42(42))

(11) 買い物客は店頭に並んでいるりんごを子供にやった。

→ 買い物客の働きかけで店頭のりんごが子供の所有に変化 (部田2009:43(48))

(12) 太郎は次郎の本を花子にもらった。

→ 花子の働きかけで次郎の本が太郎の所有に変化

(部田 2009:42(41)) : (41)の→以下は筆者加筆)

---

<sup>21</sup> 部田(2009)の指摘は、与え手の立場では「やる」という働きかけは与え手の意識化にあるため直接的であるということである。部田(2009:41-42)は「『ヤル』文では常に与え手側からの直接的な働きかけと授受行為に対する認識が必要となる。」と述べ、「『クレル・モラウ』文では、与え手からの直接的な働きかけだけではなく、間接的な働きかけも生じ得るが、『ヤル』文においては、与え手からの直接的な働きかけしか生じない。」と説明して(i)のようにまとめている。

(i) 「ヤル」文の〈働きかけ〉:《+直接性》《-間接性》

「クレル・モラウ」文の〈働きかけ〉:《+直接性》《+間接性》(部田 2009:41(38))

また次の(13)を上述の所有権の「変化」の説明として示し、『所有権の変化』は常に『対象の位置変化』も伴う。(13)では、その背景に対象の『発生』が存在している。つまり(13)で見られるのは『無から有への変化』である(p.44)」と説明している。

(13) 太郎は花子に解決のヒントをもらった

→ 太郎の働きかけで、今まで無かったもの(ヒント)が発生し花子の所有に変化

(部田 2009:44(49))

部田(2009)によって授受に「変化」という概念が指摘されたことは、本研究にとって意味のあることである。本研究では、授受本動詞によるこの「変化」の概念が、補助動詞的用法においてはさらに受け手の受益という「受け手の状態の変化」だと考える。それについては第3章で本研究の考え方として詳しく説明していく。

さらに部田(2009)の研究で興味深いのは、「授受動詞文においては『誰の所有物が移動したのか?』ではなく『誰の所有になったのか?』『誰がそうさせたのか?』が表現されているということになる(p.43)」と述べていることである。<sup>22</sup> 部田(2009)は授受本動詞について述べているのであるが、授受補助動詞を研究対象としている本研究では、この部田(2009)の指摘は、本研究の「てもらう」の考え方を支える指摘である。さらに受け手自身が感じる変化について「誰がそうさせたのか」、あるいは「無から有への変化」では「何がそうさせたのか」という「原因への注目」は、本研究の「てもらう」に含意される意味として、第5章で取り上げていく。

授受本動詞で「やる」と「もらう」「くれる」が非対称であるという指摘を見てきたが、次に、授受動詞を「与える」類と「受ける」類とで分け、受ける類の動詞は「与える」類とは異なる含意として、受け手からの働きかけも、受けることもあると指摘している寺村(1982)を示す。

## 2. 2. 2. 2 働きかけと物の方向

授受を表す動詞を「与える」類と「受ける」類に分けている研究として、寺村(1982)が挙げられる。寺村(1982:133)は「ヤル、アゲル、サシアゲル」は「与える」類の動詞、「モラウ、イタダク」は「受ける」類の動詞だと分類している。<sup>23</sup>

寺村(1982:127)は「与エル」表現を「仕手(X)が自分の所有するもの、ないし自分に属するもの、自分の支配下にあるもの(Z)を、相手(Y)に向かって移すことを表す表現」と説明している。そして図2.1.(a)を示し、『Xガ』は、物の移動を仕かける『仕手』であるが、物Zから見れば、もとXにあったのがYに移動するのだから、移動(この場合、「出ル」動き)の『出どころ』である。一方『Yニ』はXにとっての『相手』ではあるが、

<sup>22</sup> これは「抽象的な対象物の授受動詞文の特徴とも一致する」と説明している。

<sup>23</sup> 寺村(1982:137)で「クレル、クダサル」は「与える」類の分類に含まれている。

移動という点からいえばその『到達点』である。この種のコトを働きかけと対面と移動の複合と考える所以である (p.128)」と説明している。

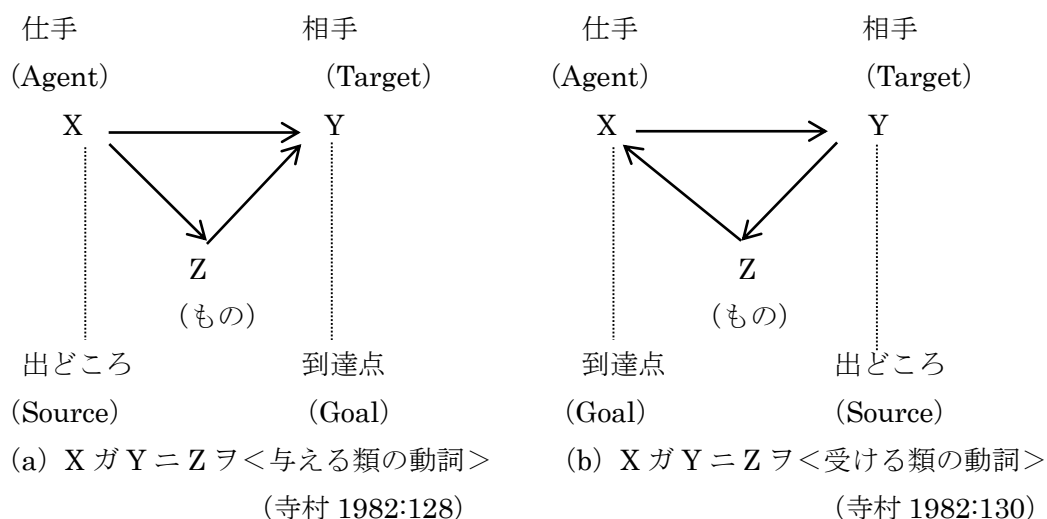


図 2.1. (a) 与える類の本動詞

図 2.1. (b) 受ける類の本動詞

(図の文型(a)(b)と図(a)(b)のタイトルは本論筆者が加筆)

一方、寺村 (1982:129) は「受ける表現」を『X ガ Y ニ Z ヲ』という形を取るが、授受関係では対称的なコトを表す動詞の一群がある」と指摘し、「やる」に対する「もらう」を意味的には対称と見てよいと述べている。<sup>24</sup> 説明の図 2.1. (b) では、X は相手 Y に対する仕手 (Agent) であり、Y から出たモノ Z の到達点 (Goal) であることが示されている。一方 Y は、X からの矢印 (→) の向かう関係の相手 (Target) であり、モノ Z の出どころ (Source) となっている。そして、「受ける」類では、X の意味役割は 2 つあり、1 つは他動 (詞) の仕手的役割、且つ受動の主体でもあるということを『受ケル』類のものは、X が Z に対しては働きかけの主体、つまり他動 (詞) の仕手的役割をもっているが、同時に Y に対しては、Y から発する動作、行為の効果を受けるような立場、いいかえれば受動表現の主体であるような関係に立っている (p.131)」と説明している。寺村 (1982) が「与える」類とは異なり「受ける」類で X に 2 つの役割を指摘しているという点では、「受ける」類が「与える」類とは X の役割について非対称だとも言えるだろう。

以上、「もらう」「てもらう」の意味を中心に先行研究を示した。「もらう」「てもらう」には古くから自らの利益を願望して乞い求める意味、他からの利益を自分のものにする意味がある。「もらう」「てもらう」にある「願望」、「乞い求める」の意味、さらに「自らの

<sup>24</sup> 意味的には対称と見てよいものとして他に「売る」に対する「買う」等を、「与える」類と対立を持つものは「預ける・預かる、授ける・授かる…」であると説明している。



利益」や「自分のものにする」という説明は興味深い点である。また、金（2003）や部田（2009）から本動詞の授受においても心理的な受益を表すことを見たが、これらは働きかけが無く自然に受け手の心の中に発生する授受という点では、授受は受けることに多様な含意があると予想される。また、部田（2009）は「受ける」類の「くれる」「もらう」が「受ける」ものは「やる」とは非対称的に心理的な影響もあることを指摘している。そこには、受け手からの、変化の要因への関心という心理も含まれている。一方、寺村（1982）に見られる「受ける」類の非対称性は、「受ける」類の主語に仕手的立場、受け手の立場という二つの役割があることである。これらの先行研究から、授受本動詞では「受ける」類に受け方、受け手の役割、受け手の変化、受け手の心理という点で特徴がある。金（2003）、部田（2009）、寺村（1982）の研究は本動詞についての言及であるが、「受ける」ことへの注目、は、「もらう」の補助動詞形においても何らかの特徴があることを予測させる。

次に授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」についての先行研究を見ていく。

## 2. 3 補助動詞形「てもらう」の研究

序論では、授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」の用法について、先行研究では「てくれる」との対比から「働きかけ」の点が特徴的だとされてきたことを述べた。本節ではその他の補助動詞形の先行研究として、まず、2. 3. 1 で補助動詞の構造的特徴について示し、次に 2.3.2 で授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」の意味の文法化の研究を、2.3.3 で先行研究から「てもらう」にある主観性の指摘を挙げ、さらに 2.3.4 でヴォイスとしての研究を示していく。

### 2. 3. 1 構造的特徴

授受動詞の補助動詞形の統語構造を、ここでは「てもらう」について柴谷（1978）から見る。柴谷（1978:306-308）は主文と補文からなる補文構造を（14）のように説明している。（14）は（14'）の補文を持ち、深層構造は（14''）である。

（14）ムスタングをボルボに乗りかえたのや今年の二月でこの金は祖父の悠一から出してもらった。（柴谷 1978:306(96)）

（14'）ア [祖父の悠一（が） この金（を） 出す]

（14''）ア深層構造：[X [祖父の悠一 この金 出す] もらう]

動作主 対象

起点

（柴谷 1978:308(98)(102)）

補文は1つの主語と動詞を持つ文である。そして主文〔X もらう〕の中に埋め込まれている。このことは、本動詞の授受が物の授受を、その補助動詞形が行為の授受を表すと言われる所以である。一般に行為の授受とされているのはこの補文に表される事態であると言え、それが主語の動作や主語によって起こる事態である。本研究の「てもらう」という補助動詞を用いた文では、主文の主語と「もらう」という動詞、また補文の主語と動詞という、それぞれの意味を持つ2つの文が、複合的に1つの文になっている。そして、主文の本動詞「もらう」が補助動詞化して「てもらう」となっている。次に、授受本動詞とその補助動詞形の意味について、本動詞の意味が抽象化されているという指摘を紹介し、補助動詞化する場合の抽象化とは何かを取り上げる。

### 2. 3. 2 対象物の抽象化

本動詞の用法と補助動詞的用法との間の意味の相互比較について、由井（1996）は孤立系の意味成分と本動詞の意味、補助動詞的用法の意味について比較対照している。孤立系の意味とは文脈に左右されない意味である。ここでは由井の研究の中から本研究の「もらう」「てもらう」について挙げる。

由井（1996:49-50）はモラウの孤立系の意味は＜移動＝具体物・所有権＞＜起点＝他者＞＜着点＝自己＞＜方向＝求心＞と指摘し、本動詞の用法では＜着点＝（原則的に）自分側＞、また《恩恵》は文脈に置かれ、対人関係の中で用いられると生じてくる意味であるとして、与え手から受け手への所有権を伴う物の空間的移動であることが中核的な意味であると指摘している。つまり次の（15）では、本という具体物は木下さんを起点とし、私を着点とした求心的方向で移動し、《恩恵》は木下さんの好意という解釈になる。

（15）私は木下さんに本をもらった。（由井 1996:49(31a)下線は筆者）<sup>25</sup>

さらに補助動詞「てもらう」の用法については、（16）（16'）のような「恩恵の～テモラウ」と（17）（17'）のような「行為の影響を～テモラウ」に「てもらう」文を分けている。

（16）義夫は洋子にセーターを編んでもらった。

（16'）〔義夫が洋子に〔洋子が義夫にセーターを編む〕もらう〕

（17）そんなこといいふらしてもらっては困る。

（17'）〔私が〔君がそんなことをいいふらす〕もらう〕（由井 1996:53(46)(46')(47)(47'))

そのうち『『恩恵の～テモラウ』の＜移動＞の内容は＜所有権を伴う具体物＞から埋め込まれた＜行為＞へと抽象化する」と説明している。そして、「＜起点＞＜着点＞＜方向＞は

---

<sup>25</sup> 本研究では、以下、下線について、先行研究での下線の有無にかかわらず本研究の必要に応じて付すものとする。

本動詞の意味が維持され、＜働きかけ＞は本動詞同様、文脈に依存している」と指摘している。「行為の影響を～テモラウ」でも意味の抽象化や成分の希薄化が起こっていると説明し、例えば事態の捉え方について「直接話者が関与していないことを話者が関わりがあると事態を捉える言い方もある」として、授受が移動に限らないことを(18)の例を挙げている。<sup>26</sup>

(18) 芸能レポーター「桜田淳子夫妻にはちゃんとやってもらえればいいんです。」

(18') [私が [桜田淳子夫妻がちゃんとやる] もらう] (由井 1996:53(48)(48'))

そして、「この場合移動するのは＜事態＞であり、また、＜起点＞成分は希薄化する。」と説明している。<sup>27</sup> 由井(1996)は恩恵について、「従来から言われてきた恩恵の意味は、所有権の移動という意味成分から派生する副次的な意味である《恩恵》が二者間で移動がある時に限り、付随する『推論的意味』であると考えられる。」と指摘している。<sup>28</sup> また抽象化については、「移動の意味成分はモノ→行為→事態へと抽象化していく。これらはいずれも存在論的カテゴリーで、本動詞の＜もの＞、恩恵の補助動詞の＜行為＞、行為の影響の補助動詞の＜事態＞はそれぞれ「何」で認識される抽象化である。」と説明し、「つまり、＜移動＞の意味成分が[何]で認識される範囲内で抽象化がおこっているのがわかる(p.55)。」とまとめている。

(19) a.それは何か <モノ>

b.何をしたか。 <行為>

c.何があったか(起こったか) <事態> (由井 1996:55(53))

由井(1996)の抽象化とは、つまりモノが行為「行為者は何をしたか」、さらに事態「何が起こったか」を表すということであり、本研究では文法化によって補文の内容がいわば「コト」化されることとまとめておく。

このように、1つの文の中に補助動詞と本動詞が併用されていることの意味は、物がコト

<sup>26</sup> 由井(1996:52)は次の例を挙げ、働きかけが文脈によることを説明している。(i)は＜働きかけ＞有り、(ii)は＜働きかけ＞無しの例である。

(i) 係にチップを渡して楽屋にいらしてもらいスワンを呼び出した。(由井 1996:52(43a))

(ii) 一位にしてもらって光栄です。(由井 1996:52(44b))

<sup>27</sup> 由井(1996:55)は「起点が希薄化し、着点は維持されているのは、求心動詞なので起点よりも着点の方がより重要な成分なのであろう」と述べている。

<sup>28</sup> 由井(1996:38)は推論的意味を「語が本来的に有する意味から推論によって導き出される意味」で「経験基盤による知識が必要とされ」、「理想認知モデル(Idealized Cognitive Model=ICM)とも関係がある」と指摘している。そして「理想認知モデルに、日本社会では物をあげるとお返しをしなければならないという社会の習慣ができており、物をもらうのは単に物の所有権にとどまらず、有難い感情や恩義がでてくるのであろう。そこから《恩恵》が生まれてくると考えられる(p.44)」と説明している。

に抽象化し、文構造としてコトに対する意味成分の付加を、本動詞が機能語化した補助動詞が担って表現しているということだろう。すると本研究の授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」は、補文に表されるコトに対して付加成分が加わっていると言えることになる。では、どのような付加成分が加わっているのか、授受補助動詞は主観表現であるという先行研究の指摘を次に示すことにする。

### 2. 3. 3 「てもらう」文の主観性

ここでは、「てもらう」文の主観性について述べている大江（1975）、天野（2003）の研究を示す。

大江（1975:179-180）は、「くれる」「もらう」の補助動詞形は被行為者の主観を表すと述べている。大江は「てくれる」の説明で、本動詞より補助動詞形の方がより主観を表すことを次のように述べている。「～テクレルでは、被行為者がその行為が自分にとって有益であると感じ、行為者に対しその行為をしてくれることに感謝する気持ちをもつことが含意される。」として、この主観的感情は補助動詞の場合の方が強いと述べている。<sup>29</sup> さらに「てもらう」についても「～テモラウも被行為者の側の主観的感情を含むと言える。被行為者はその行為が自分にとって有益であると感じ、その行為が実現することを望み、積極的にその実現をめざす」と、両者に主観性を指摘している。そして、「てもらう」の方には話者の願望や実現への積極性を指摘している。この大江の説明によれば、「てもらう」という補助動詞形によって付加されるのは、被行為者が行為を有益だと判断して実現を望み、積極的に目指すという、被行為者の主観であるということになる。

天野（2003）は、「てもらう」文と受身文とを対比し、受身文よりもさらに「てもらう」文に主観性が強いと説明している。天野（2003）は表現された（20）（21）という受身文に対する「てもらう」文（22）（23）は成り立たないと指摘している。

- (20) 人がモノに～（ラ）レル（太郎は杖に支えられて立っていた。）（事象に対する主観不問）
- (21) モノがモノに～（ラ）レル（この家は板塀に囲まれている。）（事象に対する主観無し）  
（天野 2003:10(18)(19)下線は筆者）
- (22) 人がモノに～テモラウ（\*太郎は杖に支えてもらっている）（事象に対する主観不問）
- (23) モノが人に～テモラウ（\*この家は板塀に囲んでもらっている。）（事象に対する主観無し）  
（天野 2003:11(22)(23)）

（20）（21）は「主語（この家）が心理的影響を受けるということは表さない」が、文の意味は適格である。一方、「てもらう」文（22）（23）が適格性を欠くのは文の意味に主観が入らないためであり、それに対する（24）は対象に対する主観があるので成立すると説

<sup>29</sup> 下線は原文では下点。筆者が便宜上下線に変更。

明している。

(24) 人に～テモラウ（警官は K 大佐にほめてもらった。）（事象に対する主観あり）

（天野 2003:11(24)）

天野（2003:11）は受身文と「てもらう」文の比較結果を、「つまり、受動文の場合には、事象に対する主観の意味は一部のタイプで表されるものであって、事象に対する主観の意味をあらわすことが受動文の基本的機能ではないのに対し、テモラウ受益文の場合には、事象に対する主観（恩恵）の意味を表すことこそが、この構文の抜き差しならない本質的な機能であるということである」と説明している。

しかし授受補助動詞が大江（1975）や天野（2003）が指摘するような主観を表す表現形式であるのなら、その主観の持ち主はだれであろうか。従来の研究では文の主語ということになるが、「てもらう」文の主語から対象に向けるものは、文法の観点では主観ではなく、働きかけ性であり、その有無が研究対象となっている。

次に、「てもらう」文をヴォイスの観点から分析している先行研究を示し、それに対する疑問点を指摘する。

## 2. 3. 4 ヴォイスとしての研究

「てもらう」の中の本動詞「もらう」は、2.2.2.2 での寺村（1982）の指摘のように、働きかけの仕手の役割も、恩恵を「受ける」意味での受身的な意味も持つ。

授受補助動詞「てもらう」が使役と受身のヴォイスの観点を持つという指摘は佐久間（1936）以来されている。<sup>30</sup> 本項ではまず、「てもらう」のヴォイスに関して 3 つの観点からの研究を示す。1 つは「てもらう」に使役の意味があるという観点からの研究、2 つ目は、使役と受身は連続しており、使役のコントロール性の弱化が受身につながっていくという考え方のもとで、その連続の中に「てもらう」が位置づけられるという研究、3 つ目は「てもらう」が恩恵を受けることを表現することから、受身の意味に注目している研究である。これらの研究を示した後、「てもらう」はヴォイスとしての分析の中でも「使役」の意味を中心に分析されていることから、次節 2. 4 では働きかけの有無強弱で「てもらう」文を分類している先行研究を示して、それに対する本研究の疑問を示すことにする。

### 2. 3. 4. 1 使役としての分析

寺村（1982）は「てもらう」文と受身、使役との関係を「日本語の間接受身は、中でもも

<sup>30</sup> 佐久間（1936:231）は、『…てもらう』は「その形成においても、意味においてもいわゆる受身に近似する一成句を形づくる」ものだと説明している。

新聞を読んでもらう。

直訳すると “to receive somebody else’s reading of the newspaper.”

英語の普通の言い方では “to have the newspaper read aloud to me.”

っぱら消極的関与、使役は積極的関与、『～シテモラウ』は両用（ただし積極的の方向が強い）である（pp.253-254）」と述べている。また、山田（2004）は授受補助動詞形「てやる」「てくれる」「てもらう」を、授受に限らずヴォイスや方向性、構文に参与する主語の追跡機能等、多くの観点があると捉え、そのため授受補助動詞ではなく「ベネファクティブ」と称して詳細な研究を行っている。<sup>31</sup>

山田（2004:120）は仁田（1991）の「てもらう」文（仁田 1991 では「テモラウ態」）の意味上の二分類＜依頼受益型＞と＜非依頼非受益型＞に対して、働きかけについて見ればさらに細かく分類する必要があるとし、「てもらう」文を働きかけのあり方から 3 つに分類している。<sup>32 33</sup>

また、澤田（2006b:254）は「てもらう」文を使役と受身に多義だとして考察しており、(25)の条件を挙げ (26) (27) を例示して、「この構文の『受動』と『使役』の解釈には『非対称性』が認められる」と述べて使役の解釈の優位性を指摘している。

(25)「影響性の条件」:「X が Y に V てもらう」構文では、主文主語名詞句が、与格名詞句による補文の行為の「影響」を受けている場合には、「受動」、「使役」の両方の解釈が（潜在的に）可能であり、その「影響」を受けていない場合には、「使役」の解釈となる。

（澤田 2006b:254）

(26) 私は生徒達に助けてもらった。

(27) 私は生徒達に帰ってもらった。（澤田 2006b:254(3)(4)(5)）

<sup>31</sup> 山田（2004:2-3）はベネファクティブ（benefactive）とは「補助動詞テヤル、テクレル、テモラウ、およびその待遇的バリエーション」を指し、この形式群は文法化による意味・機能として次の 3 つの特徴を共有するため、従来の用語を用いないと説明している。1 つは「基本的には恩恵の授受を表す」という意味、もう 1 つは「このような恩恵を含んだ形式として能動―受動・使役というヴォイス的な交替を持つ」こと、「最後の 1 つは、テヤル・テクレル・テモラウを含む文の項と項の間にある一定の方向性に関する制約を持つ」ことである（p.3）。

<sup>32</sup> 山田（2004）が指摘する仁田（1991:48-53）の分類とは、意味の上からは（i）のような依頼受益型＞と（ii）（iii）のような＜非依頼非受益型＞の 2 つの分類である。（i）のような＜依頼受益型＞を仁田（1991:49）は、「テモラウ態のガ格（主体）が、実際に動きを行う主体に、依頼などといった働きかけを行うことによって、実際の動き主体が動きを行い、そのことによって、テモラウ主体が益を得た（得る）、といったものである。（もっともこれが典型で、実際にはこの要件を欠いているものもあり、心理的にこれらに擬す、といったものも存する）。」と説明している。＜非依頼非受益型＞とは（ii）（iii）のように「テモラウ態の主体が、実際に動きを行う主体に依頼などといった働きかけを行っていないのに、動き主体の方が一方的に動きを行う、といったものである（p.49）。」と説明している。

（i）洋平に部屋に入ってきてもらった。

（ii）勝手に部屋に入ってきてもらっては困る。

（仁田 1991:49(1)(1) 本論筆者がカタカナを平仮名に改編）

（iii）…いやいや乗って貰うこたあねえ。（仁田 1991:50(6) 本論筆者が一部引用）

<sup>33</sup> 仁田（1990:372）は「働きかけ」について「働きかけとは、命令や依頼といったあり方で、話し手が相手たる聞き手に自らの要求に沿った動きの表現を訴えかけ・働きかけるといった発話・伝達的な態度の在り方を表した伝達のムードである」と説明している。

(26) は「受動」と「使役」の解釈ができ、(27) は「使役」の解釈のみということである。これらの研究からは、「てもらう」文は使役と受身の両方の意味を備えた文であり、どちらかということ「使役」や働きかけに注目して研究されていると言える。澤田 (2006b:258) は『てもらう』構文はなぜ受動と使役とに多義的となるか」という動機付けをを意味的観点から探り、その理由を本動詞の意味の意図性が「本動詞『もらう』は『(働きかけて) 物を手に入れる』、『(自然に) 物が手に入る』という 2 つの意味特性を有する。前者は『意図的』(volitional)、後者は『非意図的』(non-volitional) な意味特性である」として両義的であるからだと述べている。

次に、使役と受身は連続した概念であると述べる研究を示し、「てもらう」がその連続性の中でコントロールの度合いという観点から説明されていることを示す。

## 2. 3. 4. 2 使役と受身の連続としての分析

使役と受身は連続したものであるという考え方は、コントロールの強弱によって説明されることがある。英語など他言語では使役と受身が連続した概念であるという指摘は寺村 (1982) を始め、岡本 (1997) 鷺尾 (1997) 他のヴォイスに関する対照研究で指摘されている。澤田 (2006b:259-260) も「日本語、英語に限らず、『獲得』を表す動詞から構成される構文が『使役』と『受身』とに多義的となる傾向にあることが、幾つかの言語で観察されるという報告がある (鷺尾 1997)」と述べ、「てもらう」文についても『X が Y に V てもらう』構文は『受動』と『使役』に多義的である (p.259)」と指摘している。そして、「主語のコントロール (働きかけ) は積極的である」という依頼の例と、主語のコントロールが弱まった例、さらに「主語のコントロールが完全に消失すると、『使役』から『受動』へと通じる道筋が生じる」という新聞から抽出した例を示している。<sup>34</sup>

澤田 (2006b) も「てもらう」文が主語の働きかけの有無強弱によって使役的であったり、受身的であったりするという主張で、コントロールに注目し、その度合いによってその文を判断するというものである。「てもらう」を働きかけの観点から分類している先の山田 (2004) の「てもらう」文の働きかけも、使役のコントロールの度合いを中心とした見方であると思われる。仁田 (1991) もヴォイスに関わる諸表現として「能動表現、使役表現、

<sup>34</sup> 次の (i) (ii) (iii) はそれぞれ主語のコントロールが積極的な例、弱まった例、主語のコントロールが消滅した例として挙げられている。(原文の波線は (略))

(i) 「今朝の急行です。そうそう、電話でおたくの事務所にききあわせ、社員の方に、貞子さんの宿を教えてもらいました」義兄は、軽く頭を下げた。(松本清張『ゼロの焦点』)

(ii) 伊藤伝蔵は、主人の駒木根にいい役を付けててもらうため、賄賂の一つとして特別誂えの上等な煙管を然るべきところに納めたとは推察できるが、それはどの方面であろうか。

(松本清張『鬼火の町』)

(iii) 「要所でうまく打たれた。追いついてもらった後なのに悔しい」と松坂。

(『朝日新聞』2005.4.3) (澤田 2006b:259(36)260(37)(39))

受動表現、テモラウ態」を挙げている。<sup>35</sup>

このような使役と受身の連続の中に於ける本研究の、授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」を用いた文について、使役の仕手の意図ではなく、被使役者の自主性という観点で指摘する立場もある。柴谷（1978）は「を」使役と「に」使役の差異を説明し、また、池上（1981）にもこの観点からの指摘がある。

コントロールの弱化と被使役者の自主性について、柴谷（1978:310-312）の「を」使役と「に」使役の差異とは、例えば「誘発使役文における『を』使役文は、被使役者の意志を無視した表現」で、『に』使役文は被使役者の意志を尊重した表現である（p.312）」と〈意味の違い〉を説明している。<sup>36</sup> また「てもらう」文の「に」は対人尊重であると指摘している。

池上（1981: 137-138）は、使役者の支配性と被使役者の自主性の観点から、ヲ使役文、ニ使役文、「てもらう」文、受身文の順に被使役者の自主性が高くなることを指摘している。池上（1981）の使役と受身の連続は、使役の支配性が弱まると被使役者の自主性が高くなる、すなわち使役に従わなくてもよくなることになるという指摘である。<sup>37</sup>

また、仁田（1991:55）はヴォイス的諸表現を「それが有する自己制御性の度合い」が関わるものと述べている。自己制御性（self-controllability）とは仁田（1990:389-390）によると「＜自己制御性（self-controllability）＞とは、動きの主体が自分の意志でもって動きの実現化を計り、動きを遂行・達成することができる、言い換えれば、動きの主体が、動きの発生・遂行・達成を自分の意志でもって制御することができる、といった性質である」ということである。<sup>38</sup> そして、「動詞の示す＜自己制御性＞は、有るか無いかといったものではなく、度合・程度が存ずる」と自己制御性に度合いがあることを指摘し、「命令

---

<sup>35</sup> 仁田（1991:55）は「これらのヴォイス的諸表現を、それが有する自己制御性の高さの順に配列すれば、概略次のようになる」と示している。

能動→ 使役→ 依頼受益型のテモラウ態→ まことの受身→ 非依頼非受益型の  
テモラウ態、第三者の受身  
(仁田 1991:55)

<sup>36</sup> 柴谷（1978: 310-321）は使役文を「誘発使役」と「許容使役」の2つに分けている。そしてこの2つの使役文は反対の使役状況を表すとして、誘発使役状況とは「ある事象が使役者の誘発がなければ起こらなかったが、使役者の誘発があったので起こったという状況を指す」、また許容使役状況とは「ある事象が起こる状態にあって、許容者（使役者と形態的に同じ）はこれを妨げることができた。しかし許容者の妨げが控えられ、その結果その事象が起こったという状況を指す」と説明している（p.310）。これらはそれぞれに「を」使役と「に」使役では意味の違いがあるとし、誘発使役文での「に」使役は「を」使役よりも被使役者の意思を尊重していると指摘している。また、許容使役文では被使役者側からの意思を使役者が許す度合いが、「に」使役の方が高いとしている。

これらの説明からは、「に」使役文の方が被使役者の意思性が優勢であるという見方が伺える。授受補助動詞「てもらう」の行為者は「に」格で表され、「を」格ではないことから、行為者の意志性の点で「に」使役に通じる。

<sup>37</sup> p.55 注 61 で再説する。

<sup>38</sup> 仁田（1991）は＜依頼受益型＞テモラウ態の主語を「テモラウ態の主体」、動作主を「実際の動き主体」としている。



や意志の表現の表す動きの実現度に異なりの生ずることがあることが分かった (p.55)」と述べている。<sup>39</sup>

使役と受身の連続について、柴谷、池上、仁田の研究は、被使役者という「受ける」側の意志にも注目していると言えるのではないか。「する」側からだけでなく、働きかけを受ける有情の「受け手」の立場という事も日本語母語話者の認識にはあると思われる。本研究では「てもらう」文を、受け手が「受ける」ことを表すと考える。そこで、次に「てもらう」文が受身文と共通する意味特徴を持つという先行研究の指摘を示す。

### 2. 3. 4. 3 受身としての分析

「てもらう」文は受身と同様、受け手を主語とする。「てもらう」文が受け手を主語として、直接動作や作用を受け、また間接的な影響も受けるという、受身文との共通性は寺村 (1982) 等の研究者から指摘されている。ここでは「てもらう」文を働きかけではなく「受ける」観点で見ることを指摘している奥津・徐 (1982) と、受身文と授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」文の共通性を指摘している益岡 (2001,2007) の研究を示す。また、受身文には間接的な受身文もあり、それと「てもらう」文が意味的な相補性を成しているという寺村 (1982)、坪井 (2002) の言及を紹介する。そして、意味の上で受害と受益の差異はあるものの、受身文と「てもらう」文はどちらも「主語が受ける」という共通点があることを指摘する。

奥津・徐 (1982) は次の例を挙げて、これらは身内がよそものから行為を利益として受けたことを意味していると説明している。<sup>40</sup> また『『要求して利益を受ける』のように要求をその意味に含める記述が多い。しかし、(28) の 2 文はいずれも要求の意味を持つとは言えない (p.98)』と、働きかけへの重視に疑問を呈している。<sup>41</sup>

(28) a. 中学校でぼくたちは伊藤先生に英語を教えてもらった。

b. うわーはずかしい。先生に踊りをほめていただくなんて。

(奥津・徐 1982:98(23)1.2.)

<sup>39</sup> これらの指摘は、「てもらう」文が行動要求（依頼等）を行為者が断りやすくするための、配慮表現としての機能を持つという説明になると思われる。

<sup>40</sup> 奥津・徐 (1982:97) は、「てもらう」の意味を基本的意味と派生的意味とを区別するとして、基本的意味を (i) のように挙げている。

(i) 身内である主文の主語が、よそものである補文の主語の行為を、利益として取得する。

<sup>41</sup> 「てもらう」の要求の意味について奥津・徐 (1982:98-99) は、「てもらう」文の要求の意味を派生的意味だとして、『『要求して～もらう』というのは一種の使役である』、「使役というのは、使役者が被使役者に対して、要求したり許容したりすることによって、被使役者がある行為をする、ということである」と述べている。さらに (ii) a.b. のように「てもらう」は使役とは一種の待遇価値の違いがあり、その意味で「使役的行為の謙譲表現」となると述べている。

(ii) a. 私は彼にピアノをひかせた。

b. 私は彼にピアノをひいてもらった。 (奥津・徐 1982:(25)1.2.)

例えば、(28) は通常は頼んでして (教えて) もうらうものではなく、特別な場合には頼んでして (教えて) もらうという解釈もできるので、「要求してもらう場合もあるし、しない場合もあるというのでは、要求を『～してもらう』の意味に含めるのは無意味であるし、正しくもない。その基本的意味は、単に利益的行為の取得とすべきである (p.98)」と述べている。(下線は筆者による。)

益岡 (2001,2007) は『てもらう』構文に、受動構文に対応する ((29)のような)『受動型てもらう』構文と使役文に対応する ((30)のような)『使役型てもらう』構文の 2 種がある」として使役的「てもらう」文、受身的「てもらう」文があることを指摘している。

(29) 衛星放送などで見た方を含めると、相当数の方に楽しんでもらったと思う。

(30) そうであれば、代表の座を辞めてもらうしかない。

(益岡 2001:28(13)(14)下線は筆者)

また、益岡 (2001:29) は「『受動型てもらう』構文は受身構文と、当該の事態が好ましいかどうか—恩恵的か迷惑的か—で対立する」と指摘しているが、受身文には被害の受身文と「てもらう」文との相補性を指摘する研究もある。寺村 (1982:252) は「～シテモラウ」について「ある動作・行為が自らがするのではなく、誰か他の人を介して行う、その結果が自分に影響を与える、という点で、一方では (略) 間接受身、また一方では使役の表現と共通するところがある。」と述べている。寺村 (1982) が「結果が自分に影響を与える」と表現している「てもらう」文と被害の受身文の共通点は、受身文についての坪井 (2002) の次の指摘が「てもらう」文に当てはまるということである。

坪井 (2002:72) は、「受身文という有標の構文を用いて行為者ではなくあえて客体を主語に据える動機付けとして、受身文は客体を主語としてそれに何が起きたのかを語るものだ」と述べている。<sup>42</sup> 受け手を主語とする受身文が、自分に起きた変化を感じて、それを表現するということであれば、「てもらう」文も自分に起きた変化を感じて、それを表現しているはずである。<sup>43</sup>

<sup>42</sup> 坪井 (2002:72) は「そもそも、あるものに何かが起きたと言うのは、その起きたことによってそのものに何らかの意味での変化が生じ (略)、広義の変化は具体的な物理的变化だけには限られず、有情者の場合であれば、意志や感情に関わる面での変化も当然入ってくる。有標構文である受身文は、その行為によって主語に生じた広義の変化を語ることをその本来的な機能として持つと考える」として、受け手の感情の変化を語るという見方をしている。さらに坪井 (2002:72) は「二受身文の分析においてしばしば言及される『インヴォルヴメント』や『作用性』、『受影性』といった概念は、その点を捉えようとして理解することができる」と述べている。

<sup>43</sup> 尚、被害の受身は、間接受身として説明されることがあるが、間接受身には「太郎の財布が取られた」という物主語、また所有の間接性として分離可能性の度合いが柴谷 (1997) 等で指摘されている。柴谷 (1997) では「迷惑受身」とされているが、被害を被ったのは太郎であるという観点から見ると、間接受身という範疇では「てもらう」文との相補性以外の要素が加わる為、本研究では被害の受身と称することにする。

以上の指摘から、受身文と受益を表す授受補助動詞「てもらう」を用いた文との共通性をまとめると、どちらも意味の上で「受ける」観点から、受け手が行為から影響を受けた心情までも表す表現形式だと言えること、直接「受ける」ことを表す場合も変化を間接的に感じて「受ける」ことを表す場合もあるということである。

授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」で表される文は 2.3.1 で見たように補文構造であり、その意味内容は、主文の主語とその動詞「もらう」による事柄と、補文の主語とその動詞によって表される事柄との 2 つの事態からなっている。本動詞「もらう」で表される物の授受は、2.3.2 で見たように文法化して補助動詞形「てもらう」が表す文では、何がそれをしたか、何が起こったかという事態＝コトであり、主文主語がそのコトを「てもらう」という抽象化された意味になる。また 2.3.3 で示した様に、授受補助動詞形「てもらう」は被行為者の主観を表すと指摘されている。

さらに、「てもらう」文は 2.3.4 で見たように、ヴォイスの観点から研究されている。ここでは「てもらう」の文が使役としての見方と、使役と受身の連続の中にコントロールの度合いで位置づけられている見方、受身としての見方があることを示した。受身としての見方では、受け手を主語とすることによって、受け手の感情までもその表現形式の中に含められるということである。

受身文と「てもらう」文が主語の感情を表すということ、また使役と受身の連続に於いて日本人研究者の指摘する行為者の自主性という考え方からは、授受補助動詞「てもらう」を用いた文を分析する際に、発話の話者の運用として見るのか、文法の枠組みで見るのかを分ける必要があるのではないと思われる。

次に、本研究がこの点を分け、話者「私」が発話する「てもらう」文を分析対象とするという立場を説明する。

## 2. 4 先行研究の観点への疑問と本研究の立場

2.3 では、本動詞「もらう」の補助動詞的用法「てもらう」について、本動詞「もらう」にある本来的な語の意味「乞い求める」と、「受ける」類の動詞では、受け手の心の中に発生する心理的な受益も表現すること、また、「受ける」類の動詞で、その主語は「受ける」ための作用の「仕手」であるという意味役割と、作用の「受け手」としての意味役割とを持っていることを見てきた。本動詞「もらう」が持つ、作用の仕手であり受け手であるという意味特徴は、補助動詞「てもらう」を用いた文ではヴォイスの観点として研究されている。「てもらう」文には使役性と受身性とがあり、先行研究ではその文に使役者のコントロールが強い場合には使役性、弱い場合やコントロールが消失した場合では受身性という「てもらう」文の解釈が指摘されている。そして、これらはコントロールという働きかけ

を中心に分析されている。その一方で、使役と受身の連続には、受け手の自主性という、受け手に注目した言及もあった。

本節ではまず、2.4.1 で授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」の働きかけの観点からの先行研究に対する疑問を提示し、次の 2.4.2 で、「てもらう」文は受け手の側からの見方で研究するべきであるという本研究の立場を説明する。

## 2. 4. 1 先行研究の観点への疑問

本節では、次の 2 点で先行研究への疑問を提示する。第 1 点は、補助動詞的用法「てもらう」が話者「私」の主観を表すという指摘があるにもかかわらず、これまでの研究では「てもらう」文の主語は話者ではない作例も「私」である作例も小説からの抽出例もあることである。そして、そこではさらに、単文の分析で働きかけの有無を文法的に判断するという立場であり、当該の「てもらう」文に働きかけが例文の読み手に解釈できるか否かが分析されている。しかし、話者「私」の発話する「てもらう」文では、話者の主観が表現されているはずである。第 2 点目は、「てもらう」文には受身文と同様、話者「私」自身の感情の変化や受益の意識が含意されているはずであり、受け手が感じる「てもらう」の意味は、コントロールの有無強弱という働きかけの観点から説明できるのかという疑問である。これらを順に説明し、これらの疑問に対する本研究の立場を説明する。

### 2. 4. 1. 1 小説・作例分析への疑問

2.3.3 で示したように、大江 (1975) や天野 (2003) は「てもらう」文が主観性を表す文であると説明している。一方、文法的な観点での使役や受身との関係は、小説からの抽出例や作例によって分析されている。「てもらう」の働きかけ性について山田 (2004) は、「てもらう」文に働きかけ性が感じられる (または感じられない) 要因は何であるのかを追求しているが、そこでも小説からの例や作例によっている。それらの文では主語は発話の話者とは限らず、話者は必須ではない。山田 (2004) は働きかけの観点から「てもらう」文を分析しているが、山田 (2004:129) は働きかけの有無を次の小説からの例を挙げて「てもらう」は働きかけがあるのか無いのかが決定しにくい場合の方が多いと指摘している。

(31) 翌日また万医師に来てもらった際、「肺炎ではないでしょうか」と念を押したが、その憂いはないとのことであった。(城外) (山田 2004:129(48))

したがって「てもらう」は「意志的にも無意志的にも用いられ、意志的であれば働きかけが感じられたり許容的になったりするが、無意志的であれば働きかけが感じられないということに他ならない」とし、「テモラウという形式自体中立である (p. 131)」と述べている。また山本 (2006:70) は、「て節」による複文の前件と後件の関係について、「継起的な関係にあり、前件と後件が同主語で、前件が意志動詞の場合、「～て節＋～てもらう」の後

件の「～てもらう」は働きかけがあるように解釈されることが指摘されている」が、次の(32)の例を挙げて依頼的にも受動的にも解釈できるとして、「『～てもらう』の働きかけの現れ方は、常に一定の解釈になるわけではないという以上には言えない」と述べている。

(32) 母と買い物に行って、セーターを買ってもらった。(山本 2006:70(28))

次に、授受動詞の補助動詞的用法「てもらう」を働きかけの観点だけから分析することへの疑問を指摘する。

#### 2. 4. 1. 2 働きかけ観点への疑問

山田 (2004:22) は授受動詞の補助動詞的な用法「～てやる・～てくれる・～てもらう」をベネファクティブと呼び、「ベネファクティブは、佐久間 (1936) や寺村 (1982) が捉えているように、話者という参加者を大きく関与させた方向性、すなわち主観的方向性によって規定される形式である」と述べている。このような指摘の一方で、山田 (2004) が行っている「てもらう」文の分類では、山田 (2004:124 注 47) は、『～てもらいたい』というような未実現のムードとでも呼べる形式については、働きかけ性自体、話者の頭の中でのみ存在するものであり、これが実現するか否かは発話行為のあり方に依存する」として、「本研究 (山田 2004:筆者加筆) では発話行為としての働きかけ性は考慮に入れていない」と断っている。山田 (2004) が「働きかけ性」と呼ぶのは、「テモラウ受益文が構造的に持つ受影者から動作主に対する何等かの働きかけのあり方 (p.119)」のことである。<sup>44</sup>

山田 (2004:119) は、「従来の分析が (35) のような主語位置に置かれた受影者から動作主に対して働きかけを行ってその行為の影響を受ける使役的用法と、(36) のようにそのような働きかけがなく行為の影響を受ける受身的用法」の 2 分類であると示している。

(33) お医者さんに頼んで、いちばんいい注射をしてもらったら？ (鶯)

(34) いままでずっと見守ってもらっていた感じがした。(土の器) (山田 2004:119(11)(12))

その上で山田 (2004:121) は、事態に対して作用を及ぼす意図と実際の (積極的) 作用という観点から「てもらう」文を次 A,B,C の 3 種類に分けて分析している。<sup>45</sup>

<sup>44</sup> 「受影者」について、山田 (2004:118 表 4-1) で間接的関与者 (=受影者) と示されている。

<sup>45</sup> 山田 (2004) は間接受身、間接使役のように「事態に直接関与しない、すなわち動詞の要求する名詞句以外の参加者が、文法的に必須なガ格でマークされた場合、そのガ格参加者は、事態からの間接的な影響を受けることが示される」場合に受身文の解釈が得られ、「(事態に直接関与しない、すなわち動詞の要求する名詞句以外の参加者が、文法的に必須なガ格でマークされた場合：筆者加筆) 事態への積極的な働きかけをあらわさなければその存在意味が薄れてしまう」として使役の解釈となり、「てもらう」は「その両方の性質を併せ持ったものと位置づけることができよう」と述べている。

A 依頼的テモラウ受益文（意図・有、実際の作用・有）<sup>46</sup>

（33 再掲）お医者さんに頼んで、いちばんいい注射をしてもらったら？（鵜）

B 許容的テモラウ受益文（意図・有、実際の作用・無し）

（35）疲れてるようだったから、そのまま寝てもらった。（山田 2004:121 (20)）

C 単純受影的テモラウ受益文（意図・無し、実際の作用・無し）<sup>47</sup>

（36）そう言っていたいてうれしい、と陶さんは体を折ってほほえんだ。（村の）

（山田 2004:126(37) 原文の波線は（略））

（37）5 時頃になって、やっと子供に遊ぶことに飽きてもらって、帰ることができた。

（山田 2004:122(25)）

その上でこの 3 つは「動詞の自己制御性によって働きかけ性の強い順に依頼的、許容的、単純受影的なテモラウ文が 3 種類別個に（しかし連続的に）存在する（p.131）」と説明している。<sup>48</sup> 働きかけ性の観点からの A.B.C.の「てもらう」文の分類は、山田（2004）の例と説明では B.は働きかけの仕手の依頼が無いが、積極的な働きかけではなく動作主の動作を許容する文であると区別し、C.の（36）のように受け手に直接行為が向かう文と（37）のように行為に受け手への方向性を持たない文とを 1 つにまとめている。

しかし、話者「私」にとっては（36）では行為者にお礼を言えるが、（37）ではお礼を言

<sup>46</sup> 山田は各分類を次のように規定している。

A 依頼的テモラウ受益文<意図・有、実際の作用・有>は、働きかける意図があり、実際に積極的な働きかけ作用もあるという分類である。

B 許容的テモラウ受益文<意図・有、実際の作用・無し>を山田（2004:121）は、「実際に動作主は事態の出来もしくは持続に対し積極的な作用を及ぼさないが、その方向性を阻害しないという意図を持って許容している」と説明している。

C 単純受影的テモラウ受益文<意図・無し、実際の作用・無し>は、働きかけの意図も実際の働きかけの作用も無いテモラウ受益文である。

<sup>47</sup> 山田（2004:122）は C.単純受影的テモラウ受益文に前接する動詞は「達成の自己制御性を持った動詞と過程の自己制御性を持った動詞に加えて、一般に無意志動詞と呼ばれるグループの動詞が（すべて可能というわけではないが）テモラウに前節することもある」と説明している。本文例（37）は達成の自己制御性を持った動詞の例、（38）は無意志動詞（＝非自己制御性の動詞）の例である。

<sup>48</sup> 「動詞の自己制御性」を山田（2004:60）は仁田（1990:389-390）の<自己制御性（self-controllability）>（本論文 p.33 参照）に、山田での定義を次の様に説明している。

山田（2004:60）は仁田（1990）の分類の特徴を「達成の自己制御性とは『動きの発生・過程・達成をも自分の意志でもって制御できる場合』（「行く」「食べる」…）、過程の自己制御性とは『動きの成立そのもの・動きの達成は自分の意志でもって制御できないが、動きの成立・達成に至る過程、動き達成への企ては自分の意志でもって制御できる場合』（「落ち着く」「勝つ」…）、非自己制御性とは『動きの発生・過程・達成を全く自分の意志でもって制御できない場合』（「呆れる」「飽きる」…および非人間主体の動詞）」と説明している。そして、「てやる・てくれる・てもらう」に含まれる事態の特徴を考えるに際し、この仁田（1990）の 3 分類に拠って考えると、山田（2004）の「てもらう」文分析においてはそれを「実際には、動詞が自己制御性を持つというよりも、動詞を含む事態に対して動作主の制御が及ぶかということであり、ここで自己制御性と言った場合には、与益者の事態に対する自己制御性の意味で用いることにする（p.60 注 23）」と規定している。

うことは無く、受け手の話者「私」のみが捉える受益であるというように、受け方にも差異があると思われる。

次に「てもらう」文が受益を表すという本研究の見方を説明し、研究の立場を示す。

## 2. 4. 2 本研究の立場

ここでは、2.4.1 で示した、働きかけの観点からの先行研究への疑問に対し、まず「てもらう」には結果指向性があると指摘する。その上で、受益結果は「受ける」観点から研究すべきだという本研究での研究観点を示す。

### 2. 4. 2. 1 話者の発話の観点

2.4.1.1 で、従来の研究が主語と「てもらう」という補助動詞という文法の観点で進められ、その分析が作例や小説からの例であることを指摘した。それについての問題点も指摘した。ここでは本研究で、「てもらう」文が話者の発話という観点で研究すべきであることを指摘する。

「てもらう」文の働きかけについて、話者「私」が発話する場合を考えてみる。すると「私」自身は現実として医師や母に頼んだか否かは、自分のことであるのではっきりしている。つまり、発話の「てもらう」は話者「私」の意識が表出された形である。したがって、「てもらう」文は話者「私」が発話する「てもらう」文について研究していくことが必要なのではないかと考える。そのため本研究では、この話者「私」が発話する「てもらう」文を研究の立場とする。本研究と小説や作例からの分析との差異を、「てもらう」文の基本形と指摘される（山本 2006:69）「働きかけてもらう」文を例にとって図に示すと、次のようになる。図 2.2 で文法的観点での小説や作例では、働きかけの仕手が働きかけ、それを受け手が受ける。一方、本研究の立場では「てもらう」発話の話者は働きかけを行い、且つ行為の受け手である。

小説・作例による「働きかけてもらう」文

働きかけの仕手→行為者の行為→受け手

本研究の「働きかけてもらう」文

話者＝働きかけの仕手→行為者の行為→受け手＝話者

<仕手〈話者〉＝受け手〈話者〉>

図 2.2 「てもらう」文の小説・作例分析と本研究の話者の観点との差異

（関根 2012:37 図 1 一部改編）

話者の発話という産出文を分析している先行研究には、自然会話コーパスから抽出した

用例での語用研究がある。山本（2006）は授受の方向性と待遇の観点から授受補助動詞の用法を、また原田（2007）もコーパスを用いて待遇の観点からの研究をしている。奥川（2008）、金（2008）、田代（1995）は学習者が産出した文で話者「私」の視座について取り上げている。このように、授受補助動詞がポライトネスの観点や、教育・習得が話者「私」の表現視座に関係するという研究では、話者「私」の産出した資料からの分析研究が進んでいる。しかし、本研究のように話者の「てもらう」受益への意識という点で自然産出された「てもらう」文を取り上げた研究は、管見の限りまだ無い。

次に、働きかけの観点からというよりも本研究では「てもらう」文は話者が「受ける」ことを指向しているという見方を説明する。

#### 2. 4. 2. 2 受益結果への指向性

「てもらう」文は働きかけというよりも、話者の受益を「受ける」観点から見ると考える理由は、話者「私」が「てもらう」と表現する時、話者は自らの受益結果を頭の中に描いているのではないかと考えるからである。それを話者「私」の受益への指向性とし、「てもらう」と発話する話者に、受益結果への指向性があることを4つの点から説明する。1点目は「てもらう」文の含意する結果性について、2点目は使役・受身の連鎖という見方について、3点目は、話者「私」の心理的、主観的な受益という点、4つめは話者「私」が受益した結果からも受益事態を見るという点である。

##### 2. 4. 2. 2. 1 「てもらう」文の結果性

2.3.4.3 でも見たように、奥津・徐（1982）は、「てもらう」文は「受ける」ことを表すと述べている。仁田（1991:52）は＜依頼受益型＞のテモラウ態について「実際の動き主体がそれに応諾して、動きを実行してくれなければ、話し手が命令したり意志したりした動きが、実現されない」と述べている。では、「てもらう」と発話する話者「私」の意図は行為をさせる事であろうか、それとも、結果の実現を望んでいるということであろうか。次に使役文と、本研究の「てもらう」文とを対比させてみる。

- (38) a. 太郎を走らせる。  
b. 太郎に走ってもらう。  
(39) a. 該当者に手を挙げさせる。  
b. 該当者に手を挙げてもらう。

(38a) (39a) の使役は対象者への動作の要求であるが、動作をさせた結果について明確に意味付けできない。それと比較し、(38b) (39b) の「てもらう」は動作主の動作が行われた結果、話者が何か都合のよい状態になることが含意されている。山田（2004:132）も「てもらう」文と使役文とを対比させ、「てもらう」文には結果の達成が含意されていることを



注(52)で、「本章で扱うべき問題ではないが、テモラウ受益文と使役文は結果性の観点からも異なりを呈する」と使役文と「てもらう」文では、動作の結果への到達度の違いがあるとして、次の例を示している。

(40) 子供達 {a.を笑わせた／b.\*に笑ってもらった} が、笑わなかった。

(山田 2004:132 注(52)(v)下線は筆者)

そして「(40a) のような使役は結果性まで意図しないため実際に子供達が笑ったか笑わなかったかは問題とはならないが、(40b) のようなテモラウ受益文では、子供達が笑っていないければやはり不自然に感じられる」と説明している。

(40) について (40a) の使役文では、子供達を笑わせるという動作の実現に焦点があり、笑わせた結果子供達が笑ったか否かについては重要ではないということが読み取れる。一方、(40b) の「てもらう」文では働きかけだけでなく、話者にその動作結果の実現への期待が意識としてあると言えないだろうか。このような働きかけ結果の実現の含意については、働きかけの観点では捉えきれないと思われる。

山田 (2004) は働きかけ性の有無で「てもらう」文を分け、働きかけの部分さらに二つに働きかけ性の強弱で分類し、働きかけの弱い「てもらう」文を「B. 許容的テモラウ受益文」としている。このことは、山田 (2004) が働きかけと受け手が「受ける」までをコントロールの強弱で連続的に捉えていることを表している。先行研究の指摘のように、使役文と受身文が連続した概念であることは、汎言語的に認められることである。しかし、この観点だけを「働きかけてもらう」文に適用するのでは、「てもらう」文は「受ける」ことを指向するという見方が取られないままとなる。次に「てもらう」文に含意される使役性と受身性の関係を、使役と受身の連続で分析することへの疑問を示す。

#### 2. 4. 2. 2 使役と受身の連鎖

「てもらう」文は、文法的観点からは、使役と受身の連続であることは疑いが無い。しかし、本研究のように、発話の話者「私」が自分にとってその行為者の行為、事態がどうであるかを述べる場合には、連続の概念で説明できるのだろうか。「てもらう」文が「働きかけてもらう」という意味を持つことを山本 (2006:66) は、『～てくれる』は受動的な受け取りを表すのに対し、『～てもらう』は『働きかけ性』という性質がある。」とし、差異について『～てくれる』と『～てもらう』の最も大きな相違点は、受動的受け取りを表すか、依頼的受け取りを表すか、ということになる」と述べている。そして、(41a) のような「依頼的なものが最も典型的なものである」と述べている。

(41)a. 仕事に没頭していて気づかないでいたら、彼に子どもを迎えに行ってもらっていた。

b.こんなにもりもり食てもらうと、作りがいがあります。(山本 2006:66(24))

山本 (2006:66-72) は「てもらう」文について、「方向性の観点からみると、『～てくれる』は求心的方向性を表すと言えるが、『～てもらう』は働きかけの結果、恩恵を受けるという依頼的なものが基本であるので、『往復的』な方向性を表すものが基本であると言える (p.69)」として、その方向性を「往復的」だと表現している。

このような「働きかけてもらう」文を説明する際、仕手の働きかけの強弱で説明している観点については、次のような疑問が生じる。次の (42) の「てもらう」文は「働きかけてもらう」文である。この働きかけの仕手は上司、働きかけられて行為をすることになるのは部下である。仕事上、上司が発話する「てもらう」文であるので部下の行為の義務は強い。そのためこれは使役的な「てもらう」文である。

(42) 明日、君に計画書を出てもらうよ。

仕事の上司の働きかけの受け手「君」は明日、計画書を出す指示と解釈するだろう。この働きかけは受け手にとって、明日までに次第に働きかけが弱くなるということはない。受け手「君」にとって上司の指示はほぼ絶対的であり、働きかけの仕手にとっても明日になったら使役性が弱まるということでもない。つまり、使役と受身の連続を他動性の強さで説明する考え方は、あくまでその働きかけの度合いは強いのか弱いのかという、度合について連続的であるという説明である。一方、(42) のように話者「私」が発話で表現する1つの「てもらう」事態は、発話者である上司は、発話の今は働きかけの仕手であり、明日部下の「君」が計画書を出すと、今度はその部下の行為を「ごくろうさん」と「受ける」立場になるのではないだろうか。この考え方は、働きかけの仕手と行為を「受ける」受け手とが1つの「てもらう」で立場が繋がりつつも、部下という行為者の行為を介して、今日の場面と明日の場面の二つの場面が連鎖していると本研究では考える。

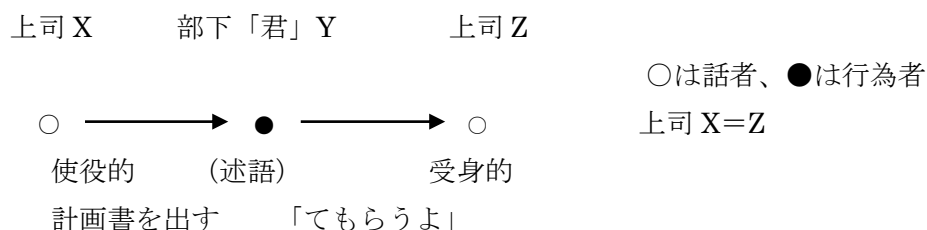


図 2.3 使役的「てもらう」と受身的「てもらう」の連鎖

図の上司 X が部下「君」Y に向ける部分「計画書を出す」は使役的である。次に部下「君」Y から出発する→が受け手 Z に向かう部分は、「計画書を出す」が部下「君」から受け手に

提出されることを意味している。これが、(42)の「働きかけてもらう」文の意味である。

但し、本研究では(42)の発話の意味として、受け手のZは、Xと同じ人物、話者X「上司」である。上司の中で計画書を受け取るという結果状態に向けて連鎖しているだけでなく、働きかけ手が結果の受け手である、往復的ということも含意していることに注目する。上司の働きかけの理由は、部下の書類の提出という受益が「結果」として自らに還ることを予定しているからであろう。この点で、従来の使役と受身の連続という、仕手の強制力が弱まり、行為者（例では部下）が望む行為を許容するまでになり、さらに強制力が無くなると受身文につながるという説明とは、本研究の使役と受身の関係は異なっている。本研究の使役と受身の連鎖という見方については、次の第3章でさらに詳しく説明する。

#### 2. 4. 2. 2. 3 間接的心理的受益

ここでは働きかけの観点から「働きかけ性」が無いという仕手に注目する見方だけでは表現しきれない、心理的な受益があることを説明する。本研究では次の(43)のように受け方に差異があると考ええる。

- (43) a.私は花子に相談に乗ってもらった。  
b.私は誰かに財布を拾って交番に届けてもらった。  
c.私は花子に美しく成長してもらった。

(43a)は私が花子に働きかけて花子の行為（相談に乗るという行為）から受益したという解釈ができるだろう。それに対し、(43b)(43c)は私から行為者に対する働きかけは無く、働きかけずに受益する点では共通であるが受け方に違いがある。(43b)は誰かの自発的好意的行為が話者に向けられた結果であるが、(43c)の花子は自然に美しく成長し、それは話者に向けられた行為ではない。話者「私」は花子が美しく成長したことに対して満足や嬉しさのような感情の変化を表現している。このような「てもらう」文の話者「私」の心理的な受け方は、2.2.2.1の授受本動詞の受け手の受け方で、心理的な受益の発生も「てもらう」で表現するという先行研究を紹介した。その補助動詞的用法でも、話者に他者の行為が直接及ばなくても、話者が自らの心に嬉しさや満足が発生した時、その受益が何かの影響を受けた結果だと心理的に捉えて「てもらう」と表現するのだと考えられる。それはいわば間接的な受益である。

今、話者「私」が行為者に働きかけたり、自然現象など事態の生起や進行に関与できないことからの影響を、話者が「私」にとって受益だと心理的に捉える場合を「間接」とし、「間接（的）受益」、話者の「間接（的）関与」というように表現することにする。

このような話者の心に発生する間接的心理的な受益は、誰がその行為を受益の受け手に対してするのか、という仕手に注目する見方では表現しきれない。そのため、「てもらう」は「受ける」観点からの研究が必要だと思われる。

その一方で、「てもらう」は話者「私」の受益をもたらす何らかの行為や事態があり、その結果が受益であるという結果に至る過程を持つとも言える。最後に「てもらう」文の結果指向性についてプロセスの結果的受益という考え方を本研究の立場として説明する。

#### 2. 4. 2. 2. 4 結果から見る受益事態

話者「私」が「してもらった」と言う時に、話者「私」は受益結果を述べているが、それだけだろうか。ここでさらに考えられるのは、本研究では話者「私」が「受け手」として「てもらう」と発話する時、行為者が話者「私」のためにしたことによってこそ、私が受益状態になったのだという意識も、行為者の行為を表す動詞に加わった補助動詞「てもらう」によって表しているということである。そこでは、話者「私」が他者行為者の行為や事態からの影響結果である時、受益した結果からもその受益の原因となる行為者のことや受益に至るプロセスを辿っており、それを「してもらった」に含意させているということである。

例えば、(43b)「私は誰かに財布を拾って交番に届けてもらった。」は誰かの自発的好意的行為が話者に向けられた結果であるが、話者は今、財布を手にしながらか、行為者や、その親切な行為に思いを馳せているのではないだろうか。このように、話者「私」が今ある結果状態だけでなく、結果に至るプロセスを辿る思考というのは、日本語にある「のだ」文、「ている」の結果残存の用法と共通すると思われる。例えば「のだ」文について三上(1953:240)はそれを「反省時」の「のだ」と表現している。<sup>49</sup>

「てもらう」と表現する話者「私」は、「行為者が私のためにした」だけではなく、「私は嬉しくなった、満足した」だけでもなく、「行為者が行為をした結果、私が受益状態になる」ということを表現していることは、「てもらう」表現が受益結果の立ち位置からの捉え方を表すとも言えるだろう。

以上の4つの点により、「てもらう」文が話者「私」が働きかけではなく、受益することを指向するという本研究の考え方、そして従来の研究とは異なり、話者「私」の発話における話者の意識の分析という点とを、本研究の立場として説明した。

次の第3章では、「てもらう」文が、話者が「受益」という「受ける」ことを捉えてそれを表現している形式であるという本研究での考え方をさらに詳しく説明していく。そして、それを第4章では、実際の話者の産出した「てもらう」文から確認していくことにする。

---

<sup>49</sup> 三上(1953)は「のだ」の反省時使用における文に与える意味あいについて、「半ば理由付け(ムウ道的)であり、半ば完了(テンス的)である(三上1953:242)」として、因果関係を示すことも、時間的順序を示すことも、どちらの意味もあるとしている。「のだ」文、「ている」文については3.3.3、5.2.2.2、5.4.1でさらに説明していく。

### 第3章 話者受益の「てもらう」文

第2章は、本研究が先行研究と異なる観点として、授受動詞「もらう」の補助動詞的用法を、話者の主観を表す表現形式であるという点からその意味を捉えるべきであると指摘した。そして、話者「私」の発話する「てもらう」文は働きかけるか否かではなく、行為や事態から話者「私」自身が受益することを表すのではないかということを説明した。また、話者「私」が結果を受ける観点からは、心理的影響も「てもらう」で表現できる。さらに「てもらう」という受益は、「私」に受益をもたらす他者の行為や事態と、それを結果的に「受ける」までの過程も含意していると言えるのではないかという見方を提示した。

本章では、授受動詞「もらう」の補助動詞的用法が、話者「私」にとって行為や事態をどのように「受ける」ことを表す表現形式であるのかについて、本研究の考え方をさらに根拠を踏まえて詳しく説明する。

本研究で考える話者「私」の発話による「てもらう」文とはどのような文なのかを示す上で、まず3.1で授受動詞「もらう」の補助動詞的用法の表す恩恵、利益とは何かを説明する。次に、3.2と3.3で山本（2006）が基本形だとする、働きかけも「てもらう」ことも含意する「働きかけてもらう」文について見ていく。そこで、話者「私」のどのような意識がこの文を表現する時に内在しているのかについて本研究での考え方を示す。本研究の授受動詞「もらう」の補助動詞的用法で話者「私」が捉えて「てもらう」と表現するのは、物ではなく構造で言えば補文にあたる部分の内容である。それは話者「私」が行う行為ではなく他者の行為や事態であり、それを話者が「てもらう」と表現している。そこには、本動詞「もらう」の意味を含意させ、さらに文法化した補助動詞的用法としての「てもらう」の意味があるはずである。

一方で「てもらう」文は働きかけが無い「てもらう」文もある。また、第2章でも見たように、他者の行為が話者に向かわない心理的な受益を「てもらう」で表現する文もある。「てもらう」文とは第2章で指摘したように働きかけを表すのではなく、受益を表す文であるという本研究の考え方をこの第3章で詳しく説明し、最後に3.4で話者受益の「てもらう」文のタイプとしてまとめる。

#### 3. 1 「私の受益」の意味

「てもらう」文は従来、恩恵や利益を表す表現形式であるとされている。益岡（2001:28）

は本動詞に恩恵性の萌芽があると指摘し、授受補助動詞では「事態に対する好ましさ」と表現している。そして、「より一般的には事態に対する評価の問題、言い換えれば主観的領域の問題ということになる (p.30)」というように主観を表す表現形式であると述べている。しかし、主観的であるにせよ「利益」「恩恵」「好ましさ」とはどのようなことであろうか。

### 3. 1. 1 話者のプラスの変化結果状態

本研究では、話者「私」の発話する「てもらう」文について「受益」ということを次のように考える。

「受益」とは：話者「私」が「てもらう」結果、私の状態が行為者の行為や事態の影響を受ける以前よりも、プラスに変化した結果の状態だと話者『私』が認識すること。

これを定義として、発話の話者が「てもらう」と表現する文では、その事態や行為の結果の影響が私にとって受益であると気づいたことを表現すると考える。以下、詳しく説明していく。

第2章 2.2.2 の本動詞の意味で、「もらう」は〈対象の所有権変化〉であるという部田の考え方を紹介した。池上 (1981:83) は所有権の変化はさらに抽象的な概念に拡張すると説明している。

池上 (1981:83) は (1) の例を示して「この例は〈一等賞〔農場〕はメアリのものになった〉の意味」で、「一等賞や農場は *went* という動詞の使用にも拘わらず、別に具体的な移動をしたわけではなく、変化は〈抽象的〉である。全体としての型は〈所有権の変化〉ということになろう」と説明している。

- (1) b. First prize (X) went to Mary (Y). / The farm (X) went to Mary (Y).

(池上 1981:83(1)b)

そして池上 (1981:93) はこの〈所有権の変化〉は「所有（予定）者の方を中心に捉えることもできる。この場合は、所有（予定）者が所有の対象者となっているものを所有していない状態（-Y）から、それを所有している状態（+Y）へと変化したという捉え方ができる (p.93)」と述べている。さらに池上 (1981:92-93) は、〈所有権の変化〉は〈場所の変化〉と〈状態の変化〉という二つの型の変化の対立の中間的な段階であり、所有する主体は人間であることという条件の下では、所有者の変化という意味で〈状態の変化〉に近いと述べている。<sup>50</sup>

本研究の「てもらう」文では、池上 (1981) の指摘する主語 X が話者「私」であり、アイデンティティを保ったまま、結果的に授受補助動詞「てもらう」によって変化状態になる

<sup>50</sup> 池上 (1981:93) は日本語では〈状態〉が抽象的であるが、それは状態の変化を中心として所有の変化や場所の変化へと拡大していく考え方であり、英語のように場所の変化を拡大の中心とする言語との差異を説明している。

ことだと考える。次に、その状態変化はマイナス状態からプラスの変化状態であり、また、発生という変化以前のゼロ状態からプラスへの変化状態であるということを説明する。<sup>51</sup>

「てもらう」の意味は、話者が働きかける以前と働きかけて生起した行為の結果を受けた時点で、次の (2) や (3) の a. に対する b. の「てもらう」文では、話者「私」の状態が変化している。

- (2) a. 花子がセーターを編んだ。  
       b. 花子にセーターを編んでもらった。  
 (3) a. 太郎が新しいパソコンを買った。  
       b. 太郎に新しいパソコンを買ってもらった。

(2) (3) の a. という事柄は、話者「私」に向けられなければ受け手にとって影響があるとは判断できない。しかし、b. のように授受補助動詞「てもらう」を付加すると、受け手である話者「私」はプラスの状態に変化する。このプラスの状態への変化を図にすると、図 3.1 になる。

「行為者の行為」＋補助動詞「てもらう」＝話者「私」がプラスの状態に変化

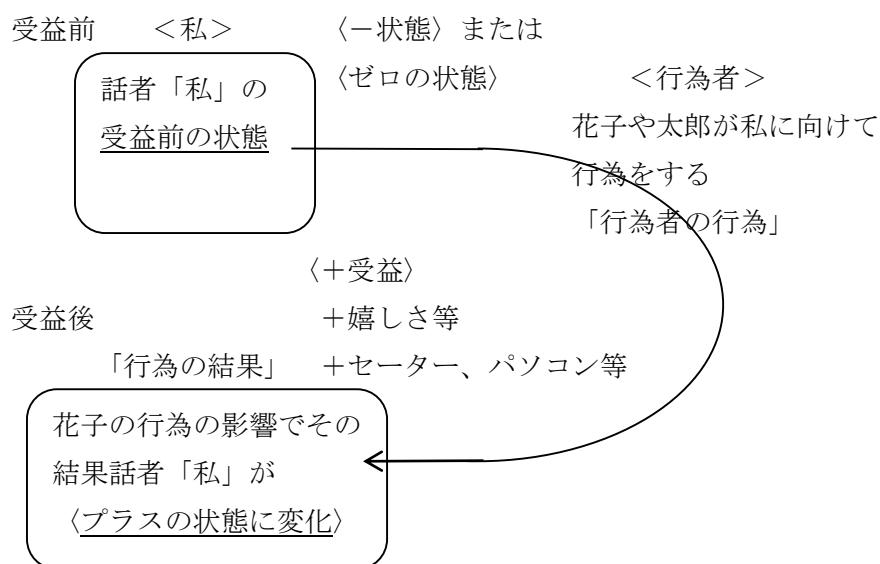


図 3.1 「てもらう」文の話者のプラス (+) の変化結果状態

図 3.1 では、プラスの状態に変化とは、話者「私」がセーターが無い状態から、受益によ

<sup>51</sup> プラスへの状態変化であるということを関根 (2010:21-22) では由井 (1996) の例によって指摘している。

ってセーターが増えた状態だけでなく、何より「てもらう」によって話者「私」が心理的に期待が適った、または結果を受けてうれしいということを表現している<sup>52</sup>。(2)で太郎がパソコンを買うことが「てもらう」を伴うことによって、話者「私」と関連づけられ、話者「私」の物理的・心理的变化が表現されている。このような心理的な変化は話者「私」が例えばセーターやパソコンを所有するだけでない、心のプラスの変化状態である。

寺村(1982)は授受を『働きかけ』と『対面』と『移動』の複合である」と説明している。そのうちの「移動」について寺村(1982:102-103)は「移動・変化の表現」と述べている。寺村(1982:118)はその「変化」について「変化というのは、ある存在主体(X)が、或る状態、始めの状態(S)から他の状態、結果の状態(G)へと移行することであるから、Xに次いでSもGも関心の対象になって良いが、Gの方がSよりはるかに重要な要素である(p.118)」と結果への注目として説明している。これを「てもらう」に当てはめると、「てもらう」結果状態が重要であるということになる。本研究では「てもらう」文の受益は、話者「私」がマイナス状態から、または変化以前のゼロ状態からプラスへの状態変化であると説明する。

### 3. 1. 2 プラスの意味の表出

しかし、「てもらう」文では、話者「私」の心理的なプラスの変化を表す語彙として「嬉しい」「安心する」「満足する」という感情を表す形容詞や動詞が明示されているわけではない。「てもらう」文にある埋め込み文の部分の動詞は、行為者の行為や事態を表す動詞である。「セーターを編む」「パソコンを買う」、さらには「写真を見せてもらう」の「写真を見せる」こと、「明日晴れてもらわないと困る」の「晴れる」こと、は、話者「私」の感情を表しているのではない。これらの動詞の表す行為者の行為が話者「私」に向かったり、話者「私」の望んだことであったり、その行為が起こると私がプラスの状態になると経験的に知っている場合というように、話者「私」に関係づけられたとき話者「私」はその作用や影響をもらって、心理的にプラスに変化するのである。行為や事態を表す動詞が受益の意味解釈となるのは、「てもらう」という表現形式の中に、話者がそれらの影響の結果、プラスに変化することが含意されるからである。<sup>53</sup> 次の(4)は行為者の動作が話者「私」に向けられているが、話者「私」にとっては思いがけない行為の生起である。話者「私」は花子の行為を直接的に受け、プラスの状態に変化している。

<sup>52</sup> 受益に完全には至らない可能性もあるが、行為主の行為が受益結果として達成する途中の段階であるということによっても心理的な受益ができる。

<sup>53</sup> この点について由井(1996:55)は「もらう」、「てもらう」に表される恩恵の意味は、所有権の移動という意味成分から派生する、《恩恵》が二者間で移動がある時に限り付随する推論の意味だと述べている。本研究では話者「私」の発話する「てもらう」文を対象に、話者「私」が捉えれば受益の原因となるものは行為者からの行為に限らず、事態からの影響からも心理的受益をすると考え、恩恵の受け手である話者からの推論であると考え。この点は第5章で説明する。



(4) ホームから落ちそうになったところを、花子に助けてもらった。

また、行為・事態は動作主の意志動作だけではない。次の(5)は全く話者「私」の意識とは無関係な事態であるが、話者「私」にとっては心理的なプラスの変化状態をもたらしたということが「てもらう」によって表現されている。

(5) 運よく特急電車に来てもらったので間に合った。

これらの様に、話者「私」は、心理的に期待が適って嬉しいということや、思いがけず結果を受けてありがたいという、行為を受ける前の状態に比べて、プラスに状態が変化していることを「てもらう」で表している。

さらに、この話者「私」の状態変化が、行為・事態からのプラスの影響の「結果」への話者による評価であるということを金水(2004)を示して説明する。

### 3. 1. 3 変化結果状態への評価

金水(2004:50)は、「てやる」「てくれる」「てもらう」等のテ形接続助動詞について「文脈的結果状態」という考え方によって考察している。ここではそれを本研究の話者「私」による受益事態の捉え方の裏付けとして紹介する。金水(2004)は文脈的結果状態  $S_p$  とは、「初期状態  $S_0$  において、出来事  $p$  が完成した時の結果状態 (p.48)」のことだと説明している。この考え方で金水(2004:50)は授受動詞の補助動詞形の表す意味を、『 $p$  てやる(てあげる)』『 $p$  てくれる』『 $p$  てもらう』は、 $p$  (出来事：筆者加筆)の完成によってある人物に利益がもたらされることを意味する。すなわち、ここでの枠組みで言えば、(略)  $S_p$  (文脈的結果状態：筆者加筆)がその人物にとって望ましいと評価できるものであることを示す」と説明している。そしてさらにその評価が変化の結果に対するものであるということをも「受益性というのは、動詞の語彙的意味だけで決まるものではなく、初期状態  $S_0$  と出来事  $p$  との相関によって決定されるものである (p.50)」と述べている。

「てもらう」文は、動詞が表わす行為や事態内容が、話者「私」の状態や心理状態にプラスの変化と結果をもたらすことを表す。この時動詞の表す意味だけでなく、文脈や話者「私」の経験的知識が加味されて話者「私」のプラスの変化結果への認識が生じるのである。この認識が金水(2004)の説明する、出来事  $p$  の完成により話者「私」にもたらされた結果に対する、話者「私」の評価だということであろう。<sup>54</sup> つまり、授受補助動詞「てもらう」に表されるのは、結果状態の話者「私」が変化の結果を望ましい、嬉しい、満足というようなプラス状態になることと捉え、行為者・事態によるプラスの影響だという認識、評価をすることだと本研究では考える。この評価は極めて主観的なものであるとも言える。話者「私」が何も感じなければ、またプラスの評価をしなければ、話者「私」が「て

<sup>54</sup> このことは、また次の観点、すなわち  $p$  の完成状態である授受補助動詞「てもらう」の話者「私」は、行為が実現した時点では行為・事態の「影響結果」という意味を含意しているとも言える。話者「私」の意識が受益結果にあるということは2.4で触れたが、また次の3.3.3で詳しく述べる。

もらう」を用いることは無いということでもある。

ここまで、「てもらう」文は受益結果の話者「私」が表現する形式であると説明した。しかし一方で「てもらう」文は先行研究の多くが働きかけに注目し、「てくれる」との差異が「働きかけ」にあると述べている。それに対して本研究のように、「てもらう」文は結果を受けることを表すと本当に言えるのだろうか。次から「働きかけてもらう」文について、本研究の立場である「受ける」ことを表す文だとする理由を説明していく。

### 3. 2 話者「私」の受益プロセスと結果

まず、「働きかけてもらう」文には話者「私」が働きかける部分と話者「私」が受ける部分という2つの事態が含まれていることを説明する。そして話者「私」にとって、働きかけたことが原因で話者「私」の結果が起こるということを因果連鎖の考え方をもとに示す。<sup>55</sup> しかし、本研究の「てもらう」文の意味としてはそれだけでは足りないことを指摘し、「てもらう」文では、話者「私」はまず働きかけ、それによって生じた行為を次には「受ける」が、受け手は働きかけた話者「私」自身であるという、時間順序と、再帰の意味があることを説明する。

#### 3. 2. 1 「働きかけてもらう」文の受益プロセス

「働きかけてもらう」文では、先行研究の指摘を大きくまとめると、者が行為者に行為を働きかける部分と、行為者の行為を受ける部分とは、使役の部分と話者がそれを受ける受身の部分とに分けられる。他者に働きかける行為は他動と言える。その他動結果が行為者に及び、次に行為者がする行為は話者に及び、それは受動と言える。本項では認知言語学の因果連鎖という考え方を示し、「てもらう」文ではそれが受益に至るプロセスとして説明できることを示す。

##### 3. 2. 1. 1 因果連鎖

連続した動作は認知言語学では因果連鎖として次のように説明されている。Croft (1993:93)は、因果関係を個体から個体への力の伝達に限り、例えば(6) The rock broke the window.を図3.2のように示している。<sup>56</sup>

---

<sup>55</sup> 小野(2004)は「事象構造を言語研究に積極的に取り入れる理論は大きく分けて2つある」と述べている。1つは「意味役割の研究から発展した事象の考え方」として、Croft(1991)を例示して「典型的な事象が『因果連鎖(causal chain)』という事象参与者間の相互作用によってとらえられる」と説明している。そしてもうひとつは、「動詞のアスペクト分類の研究から発展した事象構造論」として指摘している。

<sup>56</sup> ここでは影山(1996)からの日本語での引用を示す。

(6) The rock broke the window.

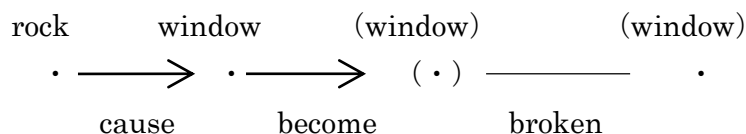


図 3.2 Croft (1993:93) の因果連鎖 (Croft 1993:93)

「この図は岩が窓に作用し、それが原因となって、窓に変化が起こり、窓が結果として壊れた状態になる」ということを説明している。<sup>57</sup>

次に「てもらう」文の基本的な意味とされる「働きかけてもらう」文について、この因果連鎖の理論との照合を行う。本研究では話者「私」の受益を表す「てもらう」の使役性と受身性も連鎖しており、話者にとっての 1 つの受益のプロセスと因果を表していると考ええる。すなわち、「てもらう」に表される受益事態は「受け手」である話者「私」の意識によって発生し、行為者への働きかけを経て、話者「私」が受益したと認識するというプロセスを含意しているということである。例えば、学生が「調理室の使用を許可してもらった」と言ったとする。学生にとって受益事態であるこの状況は、なぜ起きたのであろうか。それは (7) のように考えられる。まず学生が教室を使用することによって、やりたいことができたという状態を思い描くことに始まる。そして (7a) のようにその状態を実現したいという意志を持ち、次に (7b) のように学生に対して使用を許可するという行為を学校側に意思表示し、働きかける。学校側の行為 (7c) の結果、学生は (7d) のように許可してもらおうという期待の実現を達成でき、受益したのである。この想定→働きかけ→原因行為→結果を次の例に示す。

- (7) a. (学校側に) 調理室の使用を許可してもらいたい／許可してもらおう。  
 b. (学校側に) 調理室の使用を許可してもらう。  
 c. (学校側が) 調理室の使用を許可する。  
 d. (学校側に) 調理室の使用を許可してもらった。

このように「てもらう」には結果を受けるための主語の意志と、結果に至るプロセスと因果が含意されている。もし、学生が何もしないと「(学校側が) 調理室の使用を許可する」事態は発生しないと思われる。その点で、何もしないで得られた結果を受益として表す「てくれる」には、受益状態発生に対する話者「私」の想定や働きかけの部分が含意されない。次の (8) は、なぜかそういう結果になった、という解釈ができるだろう。

<sup>57</sup> また、このような 1 つの対象から発した「エネルギー」が別の対象に伝わり、それが順々に伝達されることで一連の出来事が生じるという捉え方を大堀 (2002:99) は「因果連鎖の上で玉突き式に出来事が起きるという意味で、ビリヤード・モデルとも言われる」と説明している。

- (8) a.働きかけたわけでもないのに、(学校側が) 調理室の使用を許可してくれた。  
 b.働きかけたわけでもないのに、行政が情報を開示してくれた。

この「てもらう」文の意味である「〈1〉話者が期待する、〈2〉調理室の使用許可を実現させることへの行動化として働きかけが起こり、〈3〉働きかけによって行為者が行為をし、〈4〉その結果、話者が受益する」を図にすると次のようになる。

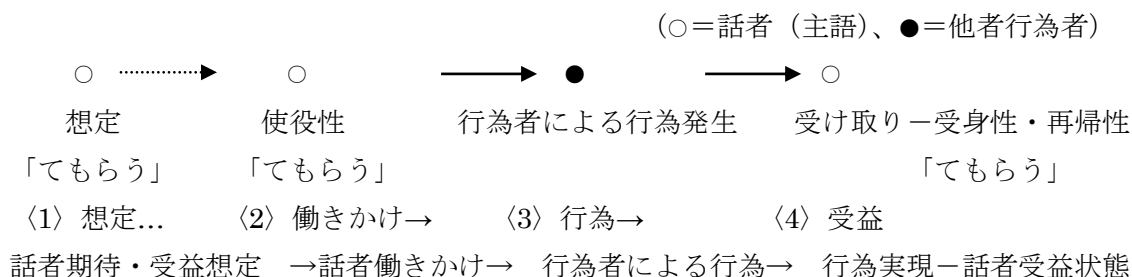


図 3.3 授受補助動詞「てもらう」が含意する意味

この図は「てもらう」には事態が「○ の話者 (主語) が受益状態を想定し、その実現を期待し目指して、事態実現のために行為者に行為をするように働きかけ、● の行為者の行為による事態実現の結果、○ の話者 (主語) が結果として受益する」という一連の流れとして含意されていることを示している。事態の発生からその影響を受けた主語である話者自身の状態変化までのプロセスは、使役は受益状態への原因を生起させ、受身は行為や事態の影響を受益した結果状態という因果である。

このように考えると、「てもらう」文に 2.3.4.3 で示した益岡 (2001) の指摘のような使役型、受身型があるのは、「てもらう」文が働きかけも恩恵結果の受け取りも一連のプロセスとして含意している為と言える。もし働きかけを焦点化すれば使役型「てもらう」文、恩恵行為の受け取りを焦点化すれば受身型「てもらう」になると思われる。

では、使役者としての話者と受け手としての話者はどこで切り替わるのだろうか。本研究ではその接点は「二格」動作主にあると考える。<sup>58</sup> 次にそれを説明する。

### 3. 2. 1. 2 二格の意味役割

「てもらう」文は、表面的には 1 つの表現形式「てもらう」で、使役の意味、受身的意味を含意する。使役と受身は先行研究で多く、コントロールの強弱によって連続的であると指摘されてきている。また連続した中で、被使役者の意志の度合いの観点から説明され

<sup>58</sup> 以下、使役文、受身文の「二格」等文法について述べる際には、話者から見た「行為、行為主」ではなく、「動作、動作主」という表現を用いる。また、先行研究で「動作、動作主」とされている場合にはそれに従う。

てきている。しかし、本研究での見方は私が「てもらう」という文の使役性と受身性は、受益のために話者が使役の仕手として働きかける事態と、話者が行為者の行為を受益する事態の二つが、「二格」で表される行為者を接点とする連鎖であるというものである。これを次のように説明する。(9) は「てもらう」文と使役文、受身文である。

- (9) a. 私は 花子に 案内してもらう。  
 b. 私は 花子に 案内させる。  
 c. 私は 花子に 案内される。

(9) の a.b.c. で共通なのは、「私は・花子に・案内する」である。この共通の名詞句「私」、「花子」の関係は、使役文、受身文では図 3.4 のように示される。

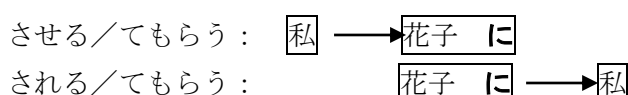


図 3.4 使役と受身と「二格」動作主の関係

(関根 2011:39 図 12)

すなわち、「させる」も「される」も「二格」を取るということである。この「二格」は受身文の「二格」動作主 (agent) である。そして、使役文の被使役者である。使役文には「を」使役と「に」使役があるが、柴谷 (1978) は「に」使役文では被使役者である「二格」動作主の意志が尊重されていることを説明している。<sup>59</sup> また、池上 (1981) は『二使役』の『二』が本来の〈起点〉代の〈到達点〉であるということは、使役主による支配の程度がもっと少なくなった『シテモラウ』という表現も併せて比較すると興味深い。ここでは被使役者に相当するものは『二』を伴って現れ、『ヲ』を伴うことはない。」として (10) を挙げ、この「二」と起点と到着点の「二」の曖昧さとの関連を指摘している。<sup>60</sup>

<sup>59</sup> 本論文 p.33、注 36 に詳細。

<sup>60</sup> 「二格」の起点と着点について菅井 (2001:21) も「二格」の基本的意味を、「個々の意味役割は《着点》への程度差によって一元的に整理される」と述べている。

(i)) 《起点》 → 《過程》 → 《着点》

カラ ヲ ニ (菅井 2001:13(1))

そして、「個々の意味役割はそれぞれ《起点》《過程》及び《着点》が「具現化 (instantiate)」されたものと特徴づけられる (p.13)」としている。そして菅井 (2000:19) は [着点] と [起点] となる「二格」について次の (ii) を示し、「[着点] の与格は、主格 NP から着点 NP への順方向的なエネルギー伝達が、〈到達性〉を満たしていることを表し、(先輩と密着)、[起点] の与格は、着点 NP への〈到達性〉を前提に、その [着点] を [起点] として逆方向に汎用したもの」だと説明している。

(ii) 花子が先輩に携帯電話を借りた。(菅井 2000:19(32a))

そして菅井 (2000:19) は「重要なのは [起点] の与格が [着点] の与格を前提にしているということであり、起点 NP に対する順方向的な働きかけが含まれていること」だと述べている。

(10) 太郎は次郎に行ってもらった

(10') \*太郎は次郎を行ってもらった (池上 1981:136(65)(65)')

そして「ニ格」が起点と着点に曖昧であることについて「<もらう>行為では所有の対象となるものの移動は<抽象的>であり、したがって方向性について曖昧さの生じる余地がある。(p.123)」として(11)を挙げ、(10)との関連を次のように述べている。<sup>61</sup>

(11) 私ハコノ本ヲ彼ニモラッタ (池上 1981:122(48):下線は筆者による)

すなわち(11)の文は「『zにxをもらう』という型のものであり、xのところにく本>という個体的なくもの>の代わりに<行く>という<行為>が入っているだけの違いである(p.136)」のであり「到達点の「ニ」は起点の「ニ」であり、使役の「ニ」であり受身の「ニ」である」と指摘している。

「てもらう」文でも使役的な働きかけの対象到達点の「に」と受身の動作主相当の行為者という起点を表す「に」の意味を「てもらう」文の「に」が兼ねている。すなわち「私」は次の図3.5の①から③までの全体を、「てもらう」文の受益プロセスという流れとして捉えていると言える。

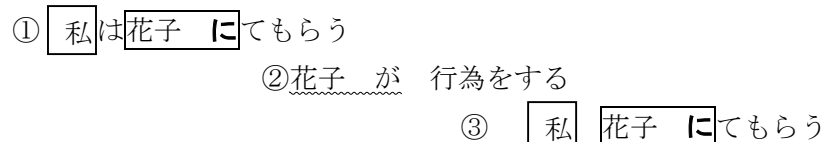


図 3.5 「てもらう」の受益プロセスと話者「私」の意味役割のターン

(関根 2011:39 図 13 一部改編)

②の花子は文法的には①の使役的「てもらう」の被使役者であり、③の受身的「てもらう」の動作主である。一方、発話の話者「私」にとって、花子は働きかけに応じる行為者であり、話者「私」に受益をもたらす行為者である。働きかけを受けた花子が行為者に切

<sup>61</sup> 池上(1981:137)は使役者の支配性と被使役者の自主性の観点から、ヲ使役文、ニ使役文、「てもらう」文、受身文の順に被使役者の自主性が高くなることを指摘している。

I <太郎の支配> > <次郎の自主性>

(i) 太郎ハ次郎ヲ行カセタ

II <太郎の支配> > <次郎の自主性>

(ii) 太郎ハ次郎ニ行カセタ

III <太郎の支配> < <次郎の自主性>

(iii) 太郎ハ次郎ニ行ッテモタッタ

IV <太郎の支配> << <次郎の自主性>

(iv) 太郎ハ次郎ニ行カレタ

(池上 1981:137-138(64)(63)(65)(67))

り替わるきっかけは何であろうか。

それは、柴谷（1978）の「に」使役で見たように、「二格」行為者の行為は力を及ぼす者が一方的に「させる」ことではなく、尊重された「二格」行為者の意志による、働きかけへの合意がなされていると考える。例えば①では私は花子に行為を働きかける。①から②への接点で「二格」花子が主体性を持って行為をするということに合意すると、今度は②の花子が主体的に「私」に「与える」意志を持って行為をし、③の私に受益をもたらす。この③は私にとって一方的なものであれば「される」という意識であるが、「てもらう」では①の働きかけの時点で私が意図していたことである。その結果③では行為をし「てもらう」という私の働きかけは達成し、受益するということになる。

このように「てもらう」文における使役「させ」と受身「され」の切り替えは話者「私」が行為者に行為を委ねた時点である。「私」の発話する「てもらう」文には「二格」で示される行為者の行為の実行を期待して働きかけ、行為者が合意して意志的に行う行為の結果、「私」が受益するというプロセスが含意されている。そして「二格」によって「てもらう」文の使役と受身が切り替わると考えると、行為者に行為をさせる「私」であるのか、行為を受ける「私」であるのか、「私」が事態にどの立場で関わっているのかによるという、「てもらう」の意味解釈の差異が説明できることになる。

さらに、本研究では「二」格行為者と話者「私」の関係で、行為者に働きかけ、行為者から受益するというように受け手である話者「私」は「二格」で表される行為者の行為から受益するため、行為者に「関心を寄せている」と考える。その説明のために寺村（1982）「二格」についての説明を援用する。<sup>62</sup>

寺村（1982）は「二格」で表される動作主について「何らかの動き」「気の動き」ということを述べている。寺村（1982）は動詞を5つに分類し、授受動詞を『働きかけ』と『対面』と『移動』の複合である」と説明する。そのうち「対面」を表す動詞は「対面、あるいは対象に対する態度」を表す。そこには対面する「相手に対する何らかの動き」があり、それは「反対する、恋する」等の意識的なことも、「ぶつかる、会う」等の無意識的・偶然のできごともあるということである。また、物理的・身体的動き・可視的なもの以外にも「恋する、あこがれる」等の心理的、不可視的な「外から必ずしも伺い知れないような動き」もあると説明している。寺村（1982）の「対面」を図にすると次のようになるだろう。Xから相手Yへ何らかの動きは実線矢印は行為、点線矢印は心理的な動きである。

<sup>62</sup> 竹林（2007:119-120）も、受益構文の「二格」について言及し、「二格」が受け手から見る与益者だと述べている。「てもらう」文をA.依頼使役文タイプの受益構文（「てもらう」文）とB.非依頼使役文タイプの受益構文（「てもらう」文）とに分けている。そして、「に」格項目（与益者）について、A.依頼使役文タイプでは、「＜依頼内容＞を受け止め、それに応答しうる存在」だとしている。B.非依頼使役文タイプでは、「＜視線＞が一方（主部に立つ受益者）から他方（「に」格に立つ与益者）へと移動する」、「視線の移動ということは、言表者（話し手／書き手）が主部項目の側（受益者）に立って、与益者（「に」格項目）を対者として設定するということである」ので、非依頼使役文の「に」格項目は、主部項目の側に立つ言表者によって「与益者」として設定される対者であるとしている。

XはYに<sup>□</sup>対面する。 X  $\xrightarrow{\quad\quad\quad}$  Y=「に」格相手  
 $\xrightarrow{\quad\quad\quad}$

XはY「=相手、<Target>」に  
 何らかの動き:「～に恋する」「～に会う」「～に憧れる」

図 3.6 「受ける」類の動詞における X の Y への関心

(寺村(1982)を基に筆者作成)

さらに寺村 (1982: 132-133) は、相手「Yに」はXから向かう何らかの動きだけでなく、相手YからXにもたらされる動きもあると説明している。その動きは具体的なモノのやり取りではなく、(12) ～ (14) の「物音に」や「結果に」や「一点差に」のような「Yに」であり、それはいわばXの「気の動き」の誘因であると言い、その気の動きの誘因を表す補語は「二格」で表すと指摘している。<sup>63</sup>

(12) 物音に驚く／おびえる／ぎょっとする

(13) その結果に失望する／がっかりする

(14) 一点差に泣く (寺村 1982:140-141(1)(2)(3)筆者がカタカナを平仮名に改編)

寺村 (1982:141) は「この『～に』は『受ける』類の動詞の補語『～に』とも、また受け身文の『～に』とも通ずる性質のものであろう」と述べている。

それを図にすると次のようになるだろう。図の矢印は驚く、泣くのようにXの感情や気の動きという心理的な動きを点線、物音、結果のような実際の作用を実線で示した。

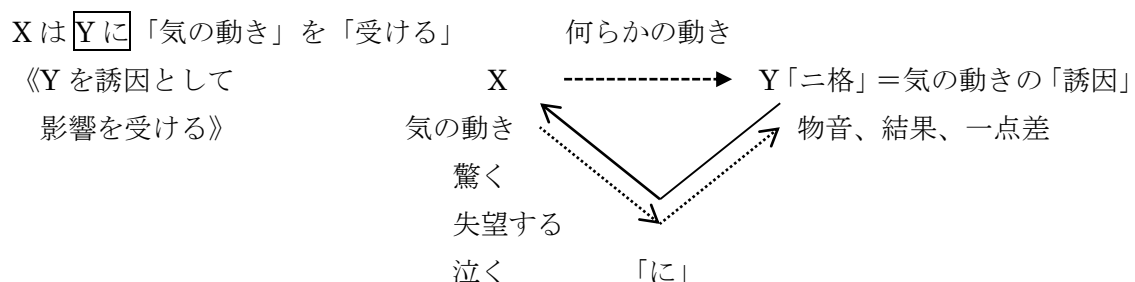


図 3.7 「二格」誘因からの「気の動き」

(寺村(1982)を基に筆者作成)

本研究の「受ける」類の動詞「もらう」の補助動詞の用法「～に～てもらう」の「に」

<sup>63</sup> 寺村 (1982) は本文 (12) ～ (14) の「驚く」、「がっかりする」「泣く」等は、原因「Y」から受ける影響が、顔の表情や身体の動きの表現となって現れているのだと述べている。



は、1 つには対面する Y という行為者へ態度としての何らかの動きであり、さらに対面する Y は X の感情の動きの誘因となり、そこから X の気の動き、感情の動きが発生する。このように、「てもらう」文で話者「私」は「てもらう」文の「二格」で表される行為者を、1 つは働きかけ、もう 1 つは気の動きを誘因として位置づけ、またそこから受益という感情の動きを表現していると言える。

しかし、これだけでは使役と受身の関係を述べるだけで、「X=Z」という条件を設けなければ、「てもらう」文の話者「私」が働きかけの仕手であり、且つそれによって起こる行為の受け手であることを説明できない。

「てもらう」では、話者「私」が働きかけた結果を話者「私」が受けるということを、どのように説明できるのかを次に述べる。

### 3. 2. 2 結果再帰性

「てもらう」文の働きかけは、話者が受益するためである。それは働きかけを起こす話者自身に結果が還ること、再帰することであると言える。ただし、ここで言う再帰とは自動詞化の文法形式というものではなく、意味として「還る」ということを表す。

他言語には再帰的作用によって他動詞が自動詞の意味になるという言語現象があることを大堀（2002:174）は、「ヨーロッパの言語等に見られる再帰代名詞や再帰の接辞は、他動詞の作用を動作主自身の自動詞に変える働きかけをする」として、ドイツ語の例で説明している。<sup>64</sup> これに対し、話者「私」が行為・事態の起こし手である本研究の「働きかけてもらう」文についての再帰性という意味は、「てもらう」文の使役性と受身性が行為者の行為によって切り替わり、結果が話者「私」に還ること、主語である話者が受益することである。本研究で言う再帰性は、あくまでも話者「私」を中心として話者「私」に行為・事態の結果が及ぶことを表す。

そして本研究で「てもらう」文に再帰性があるのは、寺村（1982）が指摘している本動詞「もらう」という「受ける」類の動詞に再帰的意味が含意されているということによると考える。

寺村（1982）は本論 2.2.2.2 で示したように、「受ける」類の本動詞には再帰的な意味があることを図示している。本研究の（15）の「働きかけてもらう」文では、プロセスとして

<sup>64</sup> 大堀（2002:174）は「(i) では他動詞の verändert (原形 verändern) が再帰形の sich をとることで、動作主自身が変化を経るという内容が伝えられている」とし、「直訳すると、『彼の妻が自らを変えた』となるが、ふつうは意図して自分を変えたというのではなく、自然に変わったという解釈をとる」と説明している。この再帰的作用はいわば他動詞の自動詞化と言える」と説明している。(3sg は三人称単数、PRES は現在、REFL は再帰形、Vt は他動詞、PP は完了分詞)

(i) Seine Frau    hat        sich        verändert.  
       his    wife    have.3sg. PRES REFL    change(Vt).PP  
       ‘彼の妻が変わった’                    (大堀 2002:174(59))

働きかけて生起させた行為者の行為が話者「私」に向かうことが示される。

- (15) 〈1〉 私達は（実情を知るために）行政に情報を開示してもらおう。  
      〈2〉 私達は（署名運動をして）行政に情報を開示してもらう（/される）。  
      〈3〉 行政が情報を開示する。  
      〈4〉 私達は（行政に）情報を開示してもらう（/される）。（関根(2011)より一部改変）

(15) の〈1〉〈2〉では、話者が予め想定した自分自身の受益状態を実現するために、働きかけによって事態を起こそうとする使役的な意味が現れ、〈3〉では行為者が合意して動作を行い、〈4〉では〈3〉の行為を話者が受ける受身的な意味が現れる。(14) で私達の中の一人である「話者」は、〈1〉で「想定」し、〈2〉で「働きかけの仕手」である。そして〈3〉の行為を通して〈4〉の「受け手、すなわち受益者」となる。(15) で〈3〉の行為者は行政であり、開示するという「行為」をする。このように話者「私」の受益想定から働きかけ、同じ私が受益するまでのプロセスは、私から始まり私に帰るため再帰的だと言える。これを、寺村（1982）の本動詞に倣って授受補助動詞「てもら」に対応させると次の図 3.8 のようになるだろう。

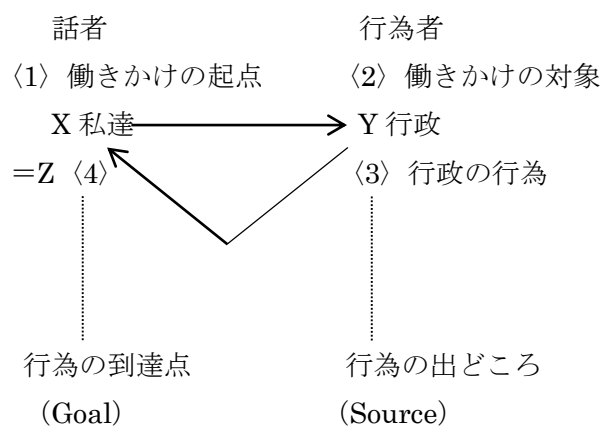


図 3.8 「てもら」文の再帰性

（寺村 1982:130 を基に筆者作成）

この図では「てもら」働きかけの起点である「私達」X の矢印は行為者 Y に働きかけて、行為者 Y の行為から到着点の話者 Z に向かい、Z は起点の話者 X であることを示している。この一連の矢印は再帰的に「私達」X に還り、「働きかけてもらう」の話者「私達」が、働きかけの起こし手である起点であり、行為の結果受益する到達点であることが示されている。つまり、話者「私」の「てもら」という 1 つの受益事態が再帰的に完結する。いずれも矢印は話者「私」の意識である。

「X=Z」という意味が本動詞の「もらう」の意味に含意されるということを 2.2.2.2 で示したが、そこでは、話者「私」X が働きかけること、行為者 Y が行為をすること、行為の結果 Z は X であること（再帰）をそれぞれ表現するのではなく、話者「私」は「働きかけってもらう」の働きかけることと「てもらう」こと、という 2 つのことを 1 つの「てもらう」事態の中に流れとして捉えていると考えられる。その流れが次の (16) である。(16) では〈1〉私に始まり、〈4〉私に還るまでが、私の受益のひとまとまりであり、〈2〉〈3〉は受益結果〈4〉になるまでのプロセスということである。

- (16) 〈1〉私は実情を知るために行政に情報開示を請求しよう。＜開示してもらおう＞  
 〈2〉その為私は署名運動をする。署名を行政に提出する。＜開示してもらう＞  
 〈3〉行政が情報を開示する。  
 〈4〉私は実情を知ることができるようになる。＜開示してもらった／ている＞

本研究では「てもらう」を話者「私」にとってのひとまとまりの受益の事態と考える。話者「私」は働きかける前に、これから働きかければ、そのことによって行為者が行為をし、今度はその行為の作用を自分が受けて、受益できると考える。働きかけ、行為、受益はその順序で起こっていく。そして、話者「私」が起こした結果は私が「受ける」という再帰的受益結果状態の私になるのである。この話者「私」の一連の受益プロセスを示すと、図 3.9 のようになるだろう。

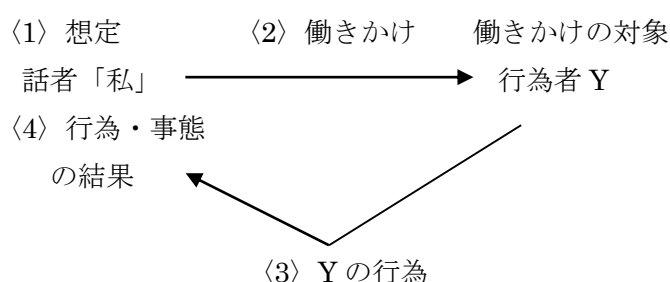


図 3.9 「働きかけてもらう」文のひとまとまりの「私」の受益

図を見ると、話者「私」は行為者の動作の起点であるが、行為達成の結果でもある。このような一連のプロセスと結果は、話者「私」がなぜ行為者の行為によって受益するとわかるのかという問いを提起する。話者「私」は行為の生起によって受益できると、一連のプロセスの初めの段階では既に知っていて働きかけを行っていると言えるのではないか。本研究では行為の結果の話者「私」の受益が、働きかけ以前に話者「私」の頭の中で「想定」されていると考えている。しかし、この一連のプロセスと結果では、話者「私」がな

ぜ行為者の行為によって受益するとわかるのかということとは説明していない。次節で、話者「私」が行為者の行為の結果受益できることに、働きかける以前に気づくということについて説明する。

### 3. 3 話者受益結果の「想定」

3.2 で、「働きかけてもらう」文は話者「私」にとって使役と受身の時間的プロセスを含意する1つの話者「私」の受益を表すということを説明した。本節では、話者「私」が発話する際に、「てもらう」受益のひとまとまりを「てもらう」のか、「てもらったのか」によって、話者「私」が「てもらう」と発話する時に行為・事態に対する認識が異なること、また行為者に対する認識が異なることを説明する。

例えば既に「てもらった」と言えば、プラスに変化した受益結果状態での表現となる。一方、「行為者に（これから）てもらう」という場合には、行為者に対する働きかけをこれからする、または今、まさに行動要求の発話をしている時点であり、また受益も未だ実現していない状態での表現となる。次項では話者「私」が、受益がまだ実現していない段階での「てもらう」について説明する。

#### 3. 3. 1 受益未実現時の結果「想定」

本項では、「てもらう」文に話者「私」のプラスの変化状態が含意されていることから、「働きかけてもらう」文では、話者「私」は行為者の行為によって受益できるということを頭の中に描いていると考える。言い換えると、行為者の行為の結果である話者「私」の受益状態が、行為者に働きかける前に想定されていることになる。本研究では行為者に働きかける動機にこの想定があると考え、以下にその根拠を示す。まず、話者「私」自身が行為者の行為によってプラスに変化することの想定であるため、「てもらう」文の「期待」「希求」という表現で先行研究でも断片的には指摘されていることを示す。次に、想定とは何かということを、認知言語学の考え方によって説明する。そして、「てもらう」に想定が含意されるのは、「てもらう」行為がまだ実現していない段階であること、さらに「てもらう」文の働きかけとは想定と言語化を経た発話の機能であるということを説明していく。

##### 3. 3. 1. 1 「想定」の先行研究

話者「私」が「てもらう」と表現する時、そこに話者「私」の受益結果への仮想や期待があることは、先行研究でも触れられている。各研究では次のように言及されている。

大江（1975:180）は「てくれる」だけでなく「てもらう」にも話者の主観が表れることを説明し、その中で「てもらう」には行為実現への願望と期待が含意されていることを「～てもらうも被行為者の側の主観的感情を含むと言える。被行為者はその行為が自分にとつ

て有益であると感じ、その行為が実現することを望み、積極的にその実現をめざす(p.180)」と説明している。「てもらう」に話者の期待があるという言及はこの大江（1975）を初め、高見・久野（2002）、澤田（2006a,2007）といった先行研究に散見される。

高見・久野（2002:297）は「～に V してもらう」構文の基本的機能として『～に V してもらう』構文の機能は、その埋め込み文の主語（＝ニ格名詞句）指示物が行う行為や関与する事象を、話し手が主文主語指示物にとって好都合である（利益になる）と考え、その利益が『ニ格』格名詞句の指示物のおかげであると考えていることを示すことである。」と説明している。

澤田（2006a,2007）は、「てもらう」文が典型的には「X ガ Y ニ V テモラウ」という統語形式を有するが、(17) のような「X ガ Y が V テモラウ」の形を「主格型」と呼び、『テモラウ』構文が『主格型』として実現できるのは、『テモラウ + α』全体が未実現の事象の成立／不成立を希求する話し手の心的態度を表す構文として機能しており、『テモラウ』の授受性が希薄化しているためである（澤田 2006a:95）」として、話者の心的希求があることに言及している。

(17) こんな状態がいつまで続くのか。早いところ景気が回復してもらいたい。

（『朝日新聞 2005.9.7』）（澤田 2006a:93(3)）

これらをまとめると、「想定」に当たるのは大江（1975）ではその行為の有益性の判断から、次にその実現を期待し望むのでそのため働きかけを行うという、結果へのプロセスが「想定」されていると言える。高見・久野（2002）は行為者の行為や関与する事象という利益の原因を想定することだと言える。澤田（2006a）の心的希求というのは、本研究と同様の未実現の想定事態への実現期待だと言える。

次の(18)は高見・久野（2002:293）で示されているものである。これらの行為者は話者が働きかけられない自然現象であるが、このうち事態が実現してからの「てもらう」文(18a)を除き(18b)(18c)の「てもらう」文にも期待が含意されていることがわかる。<sup>65</sup>

<sup>65</sup> 高見・久野（2002:293）では他にも（i）を始め例示があるが、期待の含意される文に適格性が認められる。

（i）a.\*物価に下がってもらった。

b.就職難やリストラで不景気が続き、給料さえカットされるんだから、もうあとは物価に下がってもらうしか道はないね。（高見・久野 2002:293 (21)下線は筆者）

また、高見・久野（2002）が「非対格動詞で適格文になる」と説明している（ii）のうち、次の例は行為者の行為が実現しておらず、話者「私」がそれぞれの事態の実現を想定・期待し、望んでいることから、行為が実現されていない時点では結果状態を想定・期待が含意されていると言えるだろう。

（ii）a.子供に早く大きくなってもらい、仕事に復帰したい。

c.夫に早く昇進してもらわなくては、家計が苦しくてたまらない。

e.早くお客さんに着いてもらわなければ、料理が冷めてしまうわ。

（高見・久野 2002:290-291(19a.c.e.)下線は筆者）

- (18) a. \*雨に降ってもらい、こんなに木々の緑が鮮やかになった。  
 b. こんなに木々の緑が鮮やかなのは、昨夜恵みの雨に降ってもらったからだ。  
 c. もう数週間も日照り続きなので、早く待望の雨に降ってもらわなくちゃ！  
 (高見・久野 2002:293(20)下線は筆者)

「てもらう」文には想定、期待があると指摘されているが、指摘というだけで「てもらう」文の中で、想定、期待と意図との関係、そして受益結果との関係についてはこれらの研究では言及されていない。本研究ではこの話者「私」の想定、期待があることが、「てもらう」文と受身文との差異であり、行為者の意志行為を受ける「てくれる」文との差異であると考えられる。

未来において話者が「てもらう」事態とは、3.3.1 で見たように一連のプロセスの結果としての話者「私」の受益状態である。これは、未来の受益結果状態であるということになる。<sup>66</sup> この未来の自己の変化結果状態という見方について、次に認知言語学の立場からの説明を示す。

### 3. 3. 1. 2 未来への自己投入

池上 (2004:24) は、話者の体験は〈いま・ここ〉だけでなく、「発話の主体は〈いま・ここ〉に身を置きつつも、把握の対象とする事態をそれに関わる自己もろとも、〈いま・ここ〉から時間的、空間的にずらした上で体験的に把握するという認知的な操作をすることもできる。」と述べている。その場合に「このような場合には、発話の主体は〈いま・ここ〉でない時点や地点での出来事に関わる自己に自らの意識を投入し、それと一体化した上で事態を把握するというスタンスの採られることが前提である。」としている。そして〈いま・ここ〉でない時点や地点での出来事に関わる自己とは、(2004:20-26) は、1 つは未来や過去という時空への自己投入、もう 1 つは他者や物語の登場人物への自己投入だと述べている。<sup>67</sup>

池上 (2006:190-192) は、話者が今、この事ではない場合の表現スタンスが日本語と英語のような言語とでは異なっており、日本語では次の説明のように、自己が臨場して体験的に表現することを説明している。<sup>68</sup>

<sup>66</sup> このことから、「してもらう」に対する「してもらった」は、「働きかけてもらう」話者「私」が働きかけた行為者の行為実現の結果、作用が働きかけた「私」に再帰的に還って受益する時点であると考えられる。この意味では、未来のことに対する過去の事というよりむしろ、一連のプロセスの完了結果や結果状態の達成といった、事態の流れのひとまとまりの完結結果を表す。

<sup>67</sup> もう 1 つの他者への自己投入も本研究の「てもらう」文にあることは 5. 3 で述べる。池上 (2004:24) は過去の事と自己のスタンスについては、「〈過去〉の時点における自己として〈記憶〉された場に残される自己は、発話の主体として〈いま・ここ〉に位置する自己とは別の自己として客体化が容易になされ得る」と述べている。

<sup>68</sup> 池上 (2006:190-192) は、英語の話者のスタンスについては「自分自身が臨場していない—つまり、空間的にも時間的にも自らと隔絶している一状況について事態把握をして言語化しよ

臨場的な事態把握にこだわる言語の話し手にとっては、話し手が時空の隔た  
りを超えて、問題となる事態の中に身を置くという操作が必要である。この  
ような操作は〈自己投入〉(self projection)とでも呼べよう。話し手は自分が  
身を置く〈ここ・いま〉の座標軸を背負ったまま時空を隔てた事態の中にそ  
れを持ち込み、そこで変わらない臨場的なスタンスで事態把握をするという  
わけである。」そして、このような〈自己投入〉の〈事態把握〉をする話者は  
「〈自己〉はそのまま〈主体〉としてあり続ける。〈主体〉としての機能は維  
持したまま、把握の対象とする事態の中に臨場することによって、いうなら  
ば〈視る主体〉と〈視られる客体〉の合一——〈主客合一〉の構図が演出さ  
れることになる。」

その中で、〈未来〉の出来事と関わる自己に自らの意識を投入するということについて池  
上(2004:21-22)は、「〈未来〉の時点における意識の主体は〈いま〉の時点における意識  
の主体としての自己によって創出されるものであり、その意味で〈いま〉の時点で自己と  
対立する客体としてよりも、主体として〈いま〉の自己と連続性を有していると受け止め  
られるということなのであろう」として、やはり今・この私の意識を持ちつつ未来と関  
わることを説明している。<sup>69</sup>

では、話者はどのような未来の体験をするのだろうか。それについては、「このような〈未  
来〉の時点の体験ということであれば、それは想像されることでしか有り得ない(p.22)」  
と述べている。池上(2004:21)によれば、自己の関わる未来の出来事には「希求の対象で  
ある」ことやその「存在を想定する」ことがあるが、自己の力による統御が可能なものは  
〈意志〉として表明し、自己の力による統御が不可能なものは〈願望〉として表明する  
ということである。

本研究の「てもらう」文での未来の自己投入体験は、話者「私」のプラスの結果状態に  
なる事である。行為者に働きかけられる場合には、話者の〈意志〉として働きかけて受益  
実現という目的を達成し、それができない事態に対しては、事態の実現を〈願望〉として  
表明すると考えられる。

すると、今ここで、話者「私」が想像するのは未来の場で受益を体験する「私」という

---

うという場合には、どうなるであろうか。臨場している場合でもわざわざ自己分裂を行って〈視  
る主体〉としての自己はその事の外へ身を退かせ、そこから事態の中に残した自らの分身を〈視  
られる客体〉としてそれと対する—こういう型の言語の話し手にとっては、このような事態の  
処理はごく自然にできる。もともと〈視る主体〉と〈見られる客体〉とが隔絶されているとく  
構図が成立しているからである。」と説明している。

<sup>69</sup>「てもらう」に対する「してもらった」は、「働きかけてもらう」話者「私」が、働きかけ  
た行為者の行為実現の結果、作用が働きかけた「私」に再帰的に還り、受益する時点であると  
考える。それは過去の事というよりむしろ、想像した未来に於ける「私」の体験的受益の、時  
間的プロセスの完了結果や受益結果状態の達成といったひとまとまりの流れの完結結果を表  
すと考えている。

ことになる。受益を想像する話者「私」はその体験が受益というプラスのことであるので、その受益状態を実現したいと願望を持ち、実現を期待するのではないだろうか。

次に、「これから～てもらおう」と言う時に「てもらおう」文は受益結果を想定し、受益結果に至るプロセスの実現を期待するという本研究の考え方を説明する。

### 3. 3. 1. 3 受益結果「想定」と「期待」

話者「私」が発話する「てもらおう」にはなぜ「期待」が起こるのかについて、本研究では、話者「私」は行為・事態の生起によって、その影響を受けた結果の話者「私」自身の状態を「想定」するからであると考ええる。<sup>70</sup> 例えば 3.2.2 での (16) や図 3.9 で、受益結果を流れ（プロセス）の結果として意識していることを説明した。そして、この影響を受けた結果の話者「私」自身の状態というのは、本章第 1 節で説明したように話者「私」自身のプラスの変化状態である。話者「私」は行為・事態が生起すると、その影響でプラス状態に変化するということをまず、瞬時ではあろうが、「想定」するのである。その「想定」はプラスの変化への「期待」に直結すると考えられる。

次の (19) では「てもらおう」文は話者「私」の、働きかけ前の「想定」の段階である。働きかけの「意志」を持つ以前の、(19) の内容が実現すれば受益だと気づく段階の「てもらおう」文である。

(19) 急な用事ができたので、友達に発表の順番を代わってもらおう。

(19) では、問題を抱えた話者が、解決というプラスの変化状態になりたいと思い、それは、友達が発表の順番を代わることだと思い当たる。友達の「順番を代わる」行為によって、話者の状態はマイナス状態からプラスの状態へ変化するため、話者「私」は友達が承知することを「期待」する。順番を代わるという友達の行為が行われると、話者は友達から「てもらおう」ことになり、受益状態に変化する。したがって、「てもらおう」は、働きかけ以前にも、行為者の行為以前、つまり行為未実現の時に、話者自らの行為の結果状態になることを「想定する」と言える。

そして「想定」は、その内容が話者「私」の望むことであるので、「想定」はそのまま実現への「期待」に変わる。このように話者の結果への「想定」と「期待」は連動して起こるものと考ええる。

「想定」は、話者の状態変化前からプラスの変化後までに、行為者の行為を介したという経緯を表現している。つまり、「想定」には、話者が働きかけて再帰的に受けるまでの、

<sup>70</sup> ここから、動詞としての想定する、期待する、またその名詞化の想定、期待は一般的な意味の動詞、名詞として用い、「想定」する、「期待」する、「想定」「期待」というのは本研究での話者「私」が行為主の行為や事態の作用の影響を受けて受益結果状態になったこと、またはその結果状態への進行過程を想い描く（こと）とし、また受益結果状態の実現や、その実現に向けた行為や事態の進行を「期待（する）」として説明していくことにする。



話者の受益のプロセスが含意されていると考える。そこで本研究は、「想定」を次のように定義する。

(20)「想定」の定義：話者が行為・事態の影響を受けて、自らがその結果のプラスの変化状態になること、また受益結果状態へのプロセスの実現を、行為者への働きかけによる行為や事態の生起以前に思い描くこと。

話者「私」は「想定」した行為・事態が実現して自らが「想定」したプラスの変化状態になることは、話者「私」が「そうになりたい、そうありたい」と思うことであるので、行為や事態が未実現の時点ではそのまま「期待」をすることに連動し、話者「私」は「想定」「期待」した結果になるために働きかけを起こす。そして行為者の行為によって、再帰的にプラスの変化結果状態になる。このことから、「てもらう」文では話者「私」は結果状態を指向し結果状態に帰結する、いずれも「結果」に位置しており、そこから行為者の行為によるプラスの変化状態になるという経緯を捉えているということになる。

次に行為がこれから実現する、つまり行為未実現の段階で、話者「私」が「想定」することは自らの結果状態だけでなく、行為者の行為も見込むことも含むということを説明する。

### 3. 3. 2 行為者行為への見込み

話者は行為者の行為生起も見込んでいることについて説明する。ここではまず、発話される前に独り言として「想定・期待」の言語化があるという説明をする。次に「想定・期待」と働きかけとの関係を示す。

話者「私」の結果状態実現への期待が言語化されるまでの過程として、まず話者「私」の頭の中で思考が言語化される。聞き手への発話以前の頭の中で言語化された思考としての「独り言」を池上（2004:16-17）は、次のように説明している。

言語を操作する〈発話の主体〉(locutionary subject /subject parlant)としての人間は、同時に〈意識の主体〉でもある。ただし、このレベルでの〈発話の主体〉としての人間は、言語使用の典型的な状態〈ダイアログ／対話〉(dialogue)に参加する存在である必要はない。むしろ、発話に先行して、発話の対象とする事態をどのように把握するか—Slobin (1996:76) の言う〈発話のための思考〉(thinking for speaking)の過程—に関わっている存在としての人間の姿であろう。そこでは〈発話の主体〉としての人間が〈自己〉以外のすべての〈他者〉と対立するという構図であり、そのような構図のまま発話まで状況が進展すれば、それは〈モノログ／独話〉(monologue)と呼ばれる言語使用の状況である。(池上 2004:16)

〈モノログ〉的な状況では、事態把握は話し手自身が原点となる形で—したがって、〈主観性〉の顕著なやり方で—行なわれ、発話の流れは（自らを聞き手

に擬している場合でも) 一方向的である。(池上 2004:17)

このように、話者「私」の頭の中での言語化はまず他者に向けることではなく、話者「私」自身の思考である。

次に、話者「私」が行為者の行為について、自らの受益結果状態を「想定」する際に既に他者の行為実行を見込んでいることを説明する。堀口(1987:66-67)は『モラウ』も他の意志動詞同様、基本形によって話し手の意志を表すことができる」と述べ、『モラウ』が未来のことを表し、仕手の了解が有る場合の『モラウ』は、話し手にとっての確定未来を表すと考える」と説明している。<sup>71</sup> この話者の頭の中には仕手が行為をすることが想定される段階があると言えるだろう。

まとめると、先の(19)「急な用事ができたので、友達に発表の順番を代わってもらう」でも、話者はその友達なら承諾するだろうと「想定」している。その時「てもらう」と発話する話者「私」は、行為者を未来の話者自身の受益までのプロセスの中に確信的に組み込んでいる。そのため、次に話者は行為者に対して発話し、または読み手に文面化して表出するという働きかけが行われるのである。言い換えると、話者「私」の受益状態への変化は、行為者の行為や事態によって起こるものである。行為者の行為が未だ実現されていない時点では、話者「私」はその行為の結果状態になることを「想定」する「私」であり、行為者の行為が行われて「てもらう」と表現する時には、その行為の結果を想定通りに「受益」した「私」である。つまりいずれの時点でもプラスの変化結果状態の「私」が「てもらう」と表現していると言える。

以上、「てもらう」文の基本形である「働きかけてもらう」文では、3.1 で話者「私」はプラスの変化結果状態になるために、話者「私」は働きかけをしてから行為者の行為を経て、再帰的に受益結果になるという一連のプロセスを説明した。3.2 ではそのプロセスについて連鎖的に、再帰的に話者「私」が受益をするまでを説明した。そして 3.3 で述べたように、働きかける際にはその前に、既に未来の話者自身の受益結果状態を「想定」し、その実現を「期待」して働きかける。その実現までの「想定」で、話者「私」は他者行為者や事態が、「想定」通りの行為や事態の成り行きになることを見込んで、確信しているということも述べた。

次に、「てもらう」がこのような「働きかけてもらう」文だけでなく、話者「私」が受益結果状態であることを表現の際に起点に置いて、受益結果から話者が発話する「てもらう」

---

<sup>71</sup> 「仕手の了解がある」とは、例えば上司が部下に既に出張を指示しており、その状況で「明日出張してもらう」と発話するような場合である。堀口(1987:66-67)は『モラウ』は仕手がその行為をすることを了解していなくても使える」と述べている。そしてそれが仕手に直接向けられている場合には、「意志の表明にとどまらず命令または依頼の機能を持つこともある(p.67)」と説明している。

(i) 君には今日限りでやめてもらう。(堀口 1987:67(38)下線は筆者)  
堀口(1987:61)は、行為の実行に関しては、「積極的に実行する」から「実際にはしない」までの幅があることを指摘している。

にも受益プロセスが含意されているということを説明する。

### 3. 3. 3 話者「私」の受益結果からのプロセス

第2章で見た先行研究が働きかけの有無強弱を観点として説明されているのに対し、本研究では発話の話者「私」が「てもらう」と言う時に、受益状態を単に表現しているだけでなく、受益結果に対して、そこに至るプロセスをも含意して表現していると考えている。さらにこのような話者「私」の受益までの「過程」は、これから受益する想定時点だけでなく、既に受益した結果から、それが他者の行為や事態から「受けた」ことだと意識する考える。つまり結果からそこに至るプロセスを意識しているということである。

この、結果から辿る思考プロセスというのは、日本語に特徴的な表現形式であると言われる「のだ」文や、「ている」文の結果残存用法にもあるとされている。<sup>72</sup> 角田（2004）は「のだ」文について、先行事情 P から「ノダ」という表現に至る話者の認知・思考プロセスがあり、それは「1. 認識→2. 疑問→3. 推察→4. 答え」というもので、「4. 答え」に表れるのが「のだ」文だと述べている。「てもらう」文でも受益した結果、なぜ受益したのかを振り返って「あの時親切にしてもらったから、今の私がある」というような、受益に至るまでのプロセスがあるのではないだろうか。

次節ではこれまで見てきた「働きかけてもらう」文の受益に含意される話者「私」の意識をまとめる。さらに「てもらう」文には働きかけが無く受益を表す「てもらう」文やその他のタイプの受益の仕方を表す「てもらう」文がある。それらも含めて本研究での「受ける」立場からの「てもらう」文の各タイプとして指摘する。

## 3. 4 「てもらう」文の話者受益のあり方

まず、3.2と3.3で説明した「働きかけてもらう」文についてまとめ、次に動作主の意志によって話者「私」に向けられた、話者「私」にとっては思いがけない「てもらう」文と間接的な「てもらう」文について説明する。そして「てもらう」文に、3つの受益のタイプがあることを説明する。

1つは「てもらう」文の基本と指摘される「働きかけてもらう」文、2つ目は話者「私」が働きかけず、しかし行為者の好意的な行為から受益することを表す「てもらう」文で、これを「思いがけずてもらう」文と仮称する。そして3つ目は、話者「私」に行為や作用が向かわないことから話者「私」が受益することを表す、仮称「間接てもらう」文である。これらの受益のタイプは全て話者「私」の受益を表すため、最後にこれらを「話者受益の『てもらう』文のタイプ」としてまとめる。

---

<sup>72</sup> 「ている」文の結果残存用法は、5.4.1で説明する。

### 3. 4. 1 「働きかけてもらう」文

「働きかけてもらう」文には、3.3 まで説明してきたように自らのプラスの変化結果状態になった「想定」と、その実現への「期待」がある。話者「私」は、プロセスと結果をひとまとまりとして受益した自分を「想定」している。この段階では話者「私」の受益結果状態は未来の自己が体験した受益結果状態である。それを図にすると、図 3.10 のようになる。白い○は話者「私」、黒い●は行為者を表し、矢印は行為の方向と行為の連鎖的な時間順序を表す。点線で囲んだ楕円は、逆三角形型の矢印の全体が、話者「私」の受益までの時間的な流れに沿った行為の連鎖のひとまとまりを表す。この楕円は、それが働きかけ前の話者「私」の頭の中の「想定」であることを表している。この「想定」は「期待」となり、次に図の下部の中のある矢印である、実際の意図と行為に移行していく。

＜受益「想定」結果までのプロセスのひとまとまり＞

(○＝話者、●＝他者行為者)

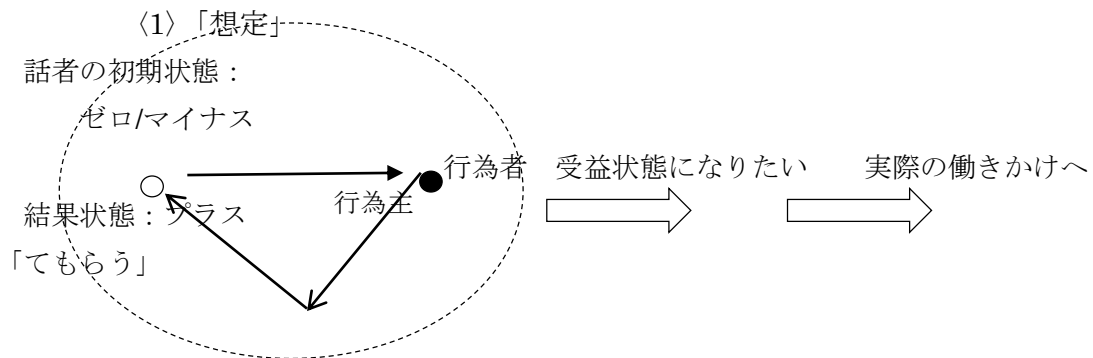


図 3.10 「想定」時の「てもらう」

図 3.10 の「想定」を、働きかけから受益までの「働きかけてもらう」文として図示したのが図 3.11 である。

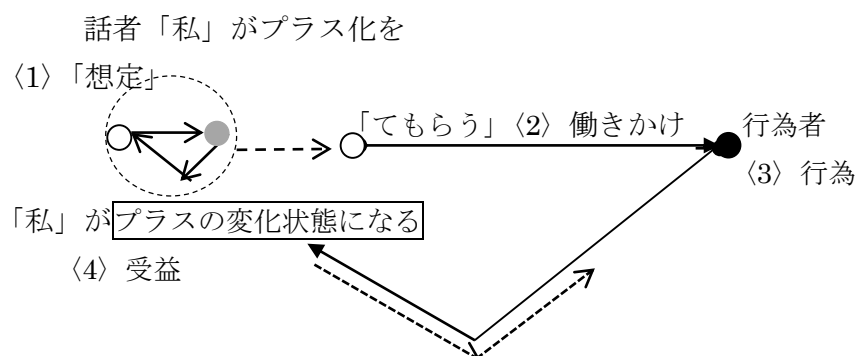


図 3.11 「働きかけてもらう」文の受益

左上の点線の楕円は、「てもらう」事態が「想定」であることを表している。その中のプラス「てもらう」は仮想された自己の「てもらう」結果状態である。次に、この「てもらう」は話者「私」の中で実現される。点線矢印は結果からの意識を表している。

例えば「花子にコピーを取ってもらおう」は次のようなプロセスとなる。話者「私」は花子にコピーを取ることを依頼（行動要求）する意図を持つ。そして「私が花子に働きかける」。すると働きかけに応じて「花子がコピーを取る」<sup>73</sup>。私が花子のコピーを取るという行為の実現を認めて、そのことの影響を受けて満足する。「てもらう」文には働きかけがあり、多くはこの観点から「てもらう」文を説明している。しかし本研究では、「働きかけてもらう」文でも、「私」が受益したのは、花子のおかげだという図 3.11 の結果からの点線矢印の様な意識もあり、受益という結果を「受ける」ことを表すことが本義あると考える。まず、働きかけは受益状態になるための行為主の行為を起す部分である。それを図で表すと図 3.12 のようになる。

### (23) 「急いで花子にコピーを取てもらう。」

話者「私」がプラス化「想定」→発話〔私が花子に働きかける〕

〈1〉想定... 〈2〉働きかけ→

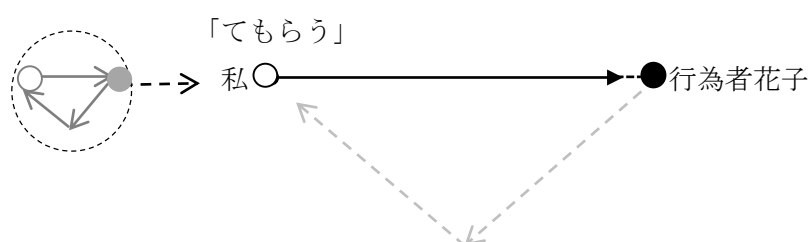


図 3.12 働きかけの部分

(23) の「てもらう」は話者「私」が花子にコピーをとるように発話して働きかけ、花子が行う行為をするということを表している。この「コピーをとってもらおう」の意味は働きかけである。「てもらう」を働きかけとするのは、この時点では話者「私」の「想定」した受益への「期待」を言語化したと考えるからである。

ここまで、働きかける以前に「想定」があるという説明をしてきた。しかし、本節で述べている「想定」は、「てもらう」文すべてにあるわけではない。次に考えるのは、働きかけの無い「てもらう」文である。そこでは 3.3.3 で言及したように、受益した結果からの顧みである。結果からの意識ということはまた、3.2.1.2 の二格行為者への、受益結果の「私」からの意識もあることを述べる。

<sup>73</sup> この場合、花子の行為は話者「私」に向けられるのが一般的解釈であるがそうでなくても構わない。

### 3. 4. 2 「思いがけずもらう」文

「てもらう」文では、「不良にからまれているところを、通りかかった花子に助けてもらった」という文は普通に使われるだろう。話者は受益結果から花子に感謝しているという解釈もできる。これらのような「てもらう」文には働きかけが無い。花子の行為が話者「私」に向けられている次の(24)について、図に示すと図 3.13 のようになるだろう。

(24) 私は思いがけず花子に助けてもらった。

話者「私」は行為者の行為を受け手として「受ける」という次のような図になる。白い○は話者「私」、黒い●は行為者を表し、矢印は行為の方向と時間順序を表す。点線矢印は結果からの意識を表している。

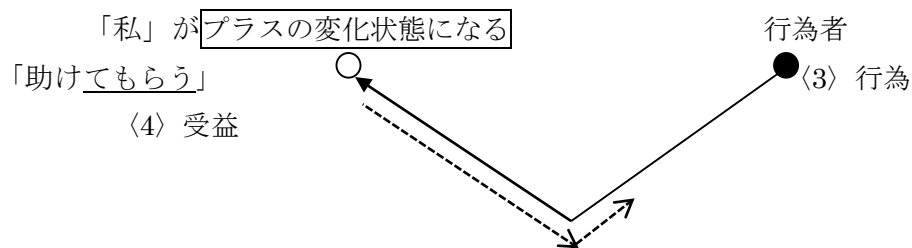


図 3.13 「思いがけずもらう」文

図 3.13 は、話者「私」の視座から、影響の受け手であることを「受ける」部分を表しており、働きかけがなくても起こりうる事態を表現している。すると、行為者の行為を話者「私」が「受ける」意味を表すため、この「てもらう」文は「花子が（私を）助けてくれた」という「てくれる」で表現可能ということになる。これらはいずれも行為者の行為の結果による話者「私」の受益を表現している。

それとは対比的に、例えば行為者の行為の明示が無い自動詞表現によるプラス状態の例を示す。(24') は自動詞「助かる」で、花子が私を「助ける」という他動詞の作用の結果であるとしても、表現されるのは話者「私」の変化状態である。この自動詞の意味は話者「私」の状態がプラスになることである。<sup>74</sup> しかし、他動詞の結果であることを明示的に表現しているわけではない。それを図にすると図 3.14 のようになるだろう。

<sup>74</sup> 張（1998）は中国語母語話者の立場から、日本語の「開ける・開く」のような有対自動詞に結果可能の意味が含意されると指摘している。

(24') 私は（花子の行為を受けて）助かった。

(○＝話者、●＝他者行為者)

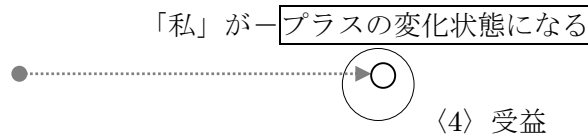


図 3.14 自動詞による結果状態

このような文では話者「私」の結果状態に重点が置かれ、受益原因である行為者への積極的な関心は解釈しにくい。そのため話者「私」の恩恵的な状態が花子の行為によってもたらされることを表現するには、「花子のおかげで」と説明したり、「花子に」という「二格」で対象を明示して「てもらう」という、「もらう」の補助動詞的用法が必要となる。また、プラスの意味を表すためにも受身文ではなく「もらう」の補助動詞的用法が要る。

次に、間接的な「てもらう」文の受け方を示す。

### 3. 4. 3 「間接てもらう」文

次の (25) は話者「私」は働きかけや依頼をしていない。

- (25) a.      先生が 騒いだクラスメートを 叱った。  
                 ↓                    ↓  
             b. 僕は 先生に 騒いだクラスメートを 叱ってもらった。

(25b) の解釈として、先生の行為は先生自身の意志によって生起し、話者「私」は好ましい影響を受けていることだけが表されている。「先生が騒いだクラスメートを叱った」ことは先生とそのクラスメートの間の行為者、被行為者の関係であり、が話者「私」に向けられていない。そのため、話者「私」が自分の心の中で「クラスメートが静かになる」という期待が、先生によって叶い、間接的な影響を「受ける」ことを「てもらう」文で表現していると言える。これを「間接てもらう」文と呼ぶことにする。

この間接受益を図示すると、実際の行為や事態の作用ではないため、話者「私」に向かう矢印→が点線で示されている。また、受益した話者「私」にとっての心理的間接的影響は、結果の私からの点線矢印は結果からの意識を表している。

「先生にクラスメートを叱ってもらった」

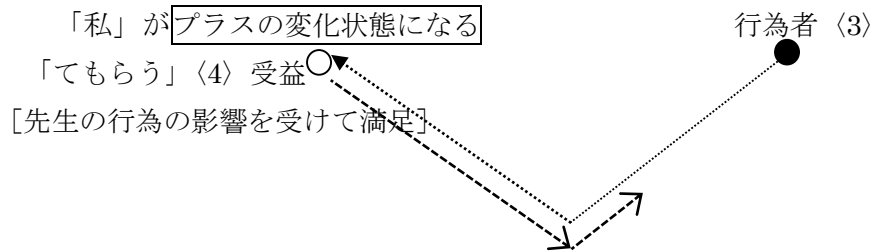


図 3.15 「間接てもらう」文の受益

以上、授受補助動詞「てもらう」文は「働きかけてもらう」タイプの文における働きかけと行為者と受益の関係だけでなく、思いがけず行為の結果を受益したことを表す「てもらう」文も、自動詞で表す場合と比較して「行為者に」という行為者への言及が強いことを示した。さらに、話者「私」が直接関与しないことからの受益も「てもらう」文で表す場合を図示した。ここでも話者「私」は行為・事態からの影響という受益結果であることが示されている。そして、働きかけがある場合も無い場合も、話者「私」の受益は何らかの受益原因からの影響結果であるという、プロセスを経た受益であるという共通点がある。

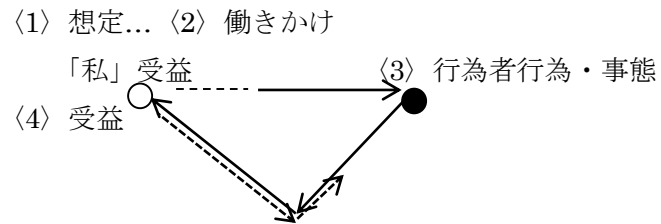
以上、「てもらう」文には3つのタイプがある。しかし各タイプはまとめると、「てもらう」文は全て話者「私」が受益原因からの影響結果として受益することを表す。それを「話者受益の『てもらう』文のタイプ」として次に示す。

#### 3. 4. 4 話者受益の「てもらう」文のタイプ

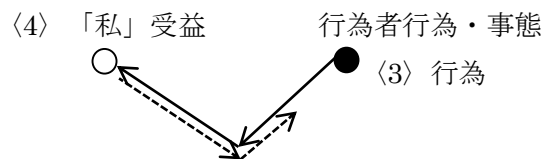
本研究で「てもらう」文はいずれも、話者「私」が、行為・事態の影響を受けてプラスの変化結果状態になる、すなわち受益することを表すと考える。そしてそれを「てもらう文の話者受益のタイプ」として立てる。本説は3つの「てもらう」文のタイプ〈i〉「働きかけてもらう」文タイプ〈ii〉「思いがけずてもらう」文タイプ〈iii〉「間接てもらう」文タイプからなっており、いずれも話者「私」が最終的に受益することを表している。



〈i〉「働きかけてもらう」文タイプ



〈ii〉「思いがけずってもらう」文タイプ



〈iii〉「間接してもらう」文タイプ

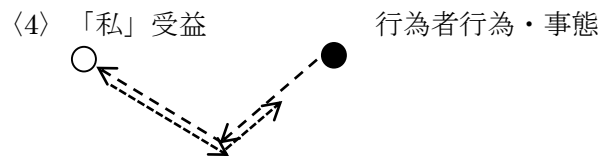


図 3.16 <話者受益の「てもらう」文のタイプ>

話者「私」の受益を表す〈i〉〈ii〉〈iii〉という3つのタイプの「てもらう」文には順に次のような特徴がある。

〈i〉「働きかけてもらう」文タイプは、話者「私」が自らの受益結果を「想定」することが動機となって行為者の行為を経て再帰結果的に受益していることを示している。図では、プロセスを矢印で「想定」部分は点線、働きかけと行為者の行為が話者「私」に向けられる行為であるとし、実線で表している。従来「てもらう」文で指摘されてきた働きかけは、この図の「想定」に続いている実線で示す部分であり、行為者の行為の前である。また、「受ける」部分は行為者の行為から話者「私」に向かう矢印の部分である。ここで気をつけることは、プラスの変化状態を「想定・期待する」のは、受益が未だ実現していない時点だということである。

行為の影響結果の自分を「想定」というのは、未来への自己投入を行っているということである。〈自己投入〉した話者「私」は、「想定」の中で「私」自身の受益を体験している。また、「想定」する話者「私」は自らの受益結果へのプロセスとして他者行為者の行為の実現を、必ず行われることとして見込んでいる。さらに、結果的に受益をしてから話者「私」は、その原因を顧みて行為者とその行為に定めている。図では逆向きの行為者への細い線が、話者「私」の顧みと原因行為や行為者への関心である。

〈ii〉「思いがけずもらう」文タイプは、何も働きかけをしていないのに行為者の行為が話者「私」を目指して意志的に行われて、思いがけず受益している「てもらう」文である。図では行為者が意志的に話者「私」に向けて行為を行い、話者「私」がそれを直接「受ける」ことをというプロセスを実線で示している。また、「私」は〈i〉と同様、受益してからその原因として行為者に関心を向けている。

〈iii〉「間接てもらう」文タイプは、話者「私」とは関係の無い、話者「私」に向かわない行為や事態に対して関心を持ち、話者「私」が結果的に影響を受けたと心理的、間接的に受益する「てもらう」文である。このような話者の間接的な受益プロセスを図では点線で示している。「私」は〈i〉〈ii〉と同様、受益してからその原因として行為者に関心を向けている。

授受動詞の補助動詞的用法「てもらう」には、図 3.16 で示した様に、それぞれの差異を有しながら3つのタイプがある。簡単にまとめると、〈i〉のように受益をまだ話者「私」がしていない時点で受益結果を「想定」「期待」し、働きかけ、受益結果に至ることを表現する「てもらう」文、〈ii〉のように話者「私」が受益してからその受益を表現する「てもらう」文であり、このような文には働きかけて行為を起すという部分が無い。そして、〈iii〉のように話者「私」は行為者の行為や事態からの影響を心理的に受けていることを表す文である。本研究では、これらの3つのタイプの「てもらう」文は、〈i〉も〈ii〉も〈iii〉も、話者が受益しプラスの変化状態になることを表すという観点、すなわち話者「私」が「受ける」視座から表現している「てもらう」文である。また、話者「私」の受益はプロセスを経た、受益原因からの結果であると考えている。本研究ではこの3つを総じて「話者受益の『てもらう』文のタイプ」として示す。

これらの特徴を持つ「てもらう」文が実際に話者「私」の発話や産出文の中にあるのか、次章では、話者「私」の産出用例から探る。そしてさらに、本研究での主張のように、「てもらう」文は働きかけを表現しているというより、結果的に話者「私」が受益することを表現しているのか、実際に話者「私」は受益結果を指向し、受益原因からプロセスを経て受益すると捉えているのか、〈i〉、〈ii〉、〈iii〉について話者「私」の産出文によって確認していく。

## 第4章 話者受益の確認と結果

本第4章では、話者「私」の発話する「てもらう」の事態把握を探るために、実際の発話資料から抽出した「てもらう」文によって、話者の受益を表現していることを明らかにする。

まず4.1で、本研究で採用する資料について説明し、次に4.2で抽出用例にある「てもらう」文が第3章で示したように話者が受益することを中心に表現しているのかを確認する。それをもとに、改めて本研究で主張する話者「私」が受益することを表す「てもらう」文のタイプ分類を示す。4.3では話者の受益を表す「てもらう」文がさらに「てもらう」に後接する表現に現れる2つの特徴によって再分類できることを指摘し、それらによって第5章からの本研究の考察観点を示す。

### 4. 1 資料の説明

本研究では話者「私」が「てもらう」と発話する時の意識を探る為、できるだけ自然な発話から「てもらう」文を抽出することが必要だと考える。そのため話者「私」が「てもらう」と表現するときに「てもらう」がどのように使われているのかを調査する資料として、話し言葉として自然会話コーパスを、書き言葉については新聞からインタビューや投書や意見文を取り上げ、用例を調べた。資料の選択は日本語話者の意識であるため、母語話者であること、男女に偏らないこと、また、話題についても与えられた話題「～について話す」というような討論ではなく、談話で流動的な自然なやりとりの中での「てもらう」文ということから、現代日本語研究会によるコーパス『男性のことば・職場編』(2002)、『女性のことば・職場編』(1999)を用いている。さらに、資料として新聞からの「てもらう」文も検証する。その理由は3点あり、まず話者「私」の産出文として、話し言葉だけでなく書き言葉があるということ、2点目は場面の点で、コーパスが職場での発話であるために発話場面を補う必要から、3点目は、自然発話のテープの書き起しは、資料分析者である筆者は場面にいないため、その文脈を推測に頼る部分があるためである。新聞では特定の読み手にしかわからないという文脈は少ないと判断した。

まず、それぞれの資料についての説明を、次に資料に現れる「てもらう」という表現形式の現れる場面の説明をする。次に、そこから抽出した「てもらう」文を用例として、第3章で立てた各タイプの「てもらう」文が実際に使用されているのか、そしてそれらは「受ける」ことを表す形式であるのかを検証していく。尚、本研究では「てもらう」と「ていた

だく」の待遇差についての区別はせず、「ていただく」についても「てもらう」文として扱う。本研究の目的が「てもらう」文の話者自身の受益事態の把握の仕方であるため、本研究では話者からの聞き手や話題の対象者に対する待遇の観点や、行動要求内容の軽重、話者や書き手個人の配慮の度合いに伴う敬語形の選択の観点にまでは拡張しない。

#### 4. 1. 1 自然会話コーパス

自然会話における授受補助動詞「てもらう」の用例の資料として本研究では、先にも示した様に現代日本語研究会によるコーパス『男性のことば・職場編』(2002)、『女性のことば・職場編』(1999)を用いている。このコーパスは、協力者の職場に録音テープを置き、朝・会議時・休憩時の3場面で収集した録音を書き起こしたものである。「男性の」「女性の」とは、テープを置くことを依頼した対象者が男性または女性であるという意味で、詳細は表 4.1 の通りである。

表 4.1 自然会話コーパスの概要

	『女性のことば・職場編』(1999)	『男性のことば・職場編』(2002)
調査時期	1993 年 9 月～1993 年 11 月	1999 年 10 月～2000 年 12 月
地域	首都圏	
依頼対象	有職者 20 代～50 代の女性に協力依頼 20 代 5 名.30 代 5 名. 40 代 6 名. 50 代 3 名. (協力者と会話参与者についてのフェースシート有り、属性・人間関係情報) できるだけ異なる職種の計 19 名が協力者	有職者 20 代～50 代の男性に協力依頼 20 代 5 名.30 代 5 名. 40 代 6 名. 50 代 5 名. (協力者と会話参与者についてのフェースシート有り、属性・人間関係情報) できるだけ異なる職種の計 21 名が協力者
調査方法	録音機を身につける又は近くに置く。	
会話時間	フォーマル：朝、職場着～1 時間・会議・打ち合わせなど 1 時間・インフォーマル：休憩時 1 時間の計 3 時間のうち、まとまった談話のある 10 分前後を取り扱う。 朝 221 分、会議等 138 分、休憩 193 分 計 552 分 (9 時間 12 分)	朝 251 分、会議等 246 分、休憩 231 分 計 728 分 (12 時間 08 分)
会話数	職場の会話なので男女が参与した自然会話 レコード総数：21,866 レコード <sup>75</sup> 女性のことば・職場編－11,102 レコード   男性のことば・職場編－10,764 レコード	

表からわかるように、会話の参与者の年代、性別は偏らず、会話採集場面も仕事に限らず休憩時の雑談もあることから、本研究の意図に適った自然会話である。資料の抽出箇

<sup>75</sup> レコードとは、「基本的に 1 文を 1 レコードとしので、文の数もこれとほぼ等しい (『女のことば・職場編』(1999:20)『男のことば・職場編』(2002:21))」と説明しており基本的に 1 文の単位である。

所は、朝、職場着～1時間・会議・打ち合わせなど1時間・インフォーマル：休憩時1時間の計3時間のうち、まとまった談話のある10分前後を取り扱っている。表4.1に示したこれらの二つのコーパスは計21時間20分の録音、発話レコード数は合計21,866例からなっている。ここから抽出した「てもらう」文の中で、さらに発話の文脈が読み取れる文を用例として分析の対象とした。その抽出数は二つの資料を合わせて241例であった。内訳は自然会話コーパスからの抽出例117例(48.5%)、新聞からの抽出数124例(51.5%)と、結果的にはほぼ半々ずつという構成となっている。<sup>76</sup>

自然会話コーパスはこれらの2つから成り立っているが、共通点は、採集が仕事で繋がっている人間関係だということである。したがって、自然な「てもらう」文の産出という条件は満たしているものの、さらに広く「てもらう」文の抽出範囲を広げるという意味で、新聞資料からの抽出を行っている。

#### 4. 1. 2 新聞資料

新聞の中でも本稿で用いた新聞資料は、その背景となる文脈が参与者の立場が読み手に共通知識としてあるようなトピックであるという点で採用している。「てもらう」は話者「私」が行為や事態から「受ける」時の表現であるという本研究の観点から、話者「私」が何かを「受ける」必要がある、または「受けた」と認識した時に産出されると考え、それが現れやすい期間に絞って採取している。具体的には、日本で2011年3月11日に起きた巨大地震・津波と原子力発電所の事故からなる東日本大震災という、当時日本にいれば誰もが知っていると思われるトピックを最も中心に扱った、翌日の2011年3月12日から2011年4月20日までの朝日新聞朝刊と夕刊、号外から、筆者が「てもらう」文を抽出した。<sup>77</sup> その理由は被災者から国や関係組織への要求、国や自治体や機関から国民や住民への要求や、被災者への人々からの好意的援助への感謝など、行為要求と行為結果への多様な場面での「てもらう」を収集できるという考えからである。

次に各資料の話者について説明する。自然会話コーパスでの話者は「私」である。新聞資料の話者「私」について説明する。新聞の「てもらう」は話者の行為・事態に対する声を紙面に載せたものである。新聞記事で「てもらう」と述べる場合、「てもらう」文の主語が行為・事態の生起を望み、また、その受け手である。本研究で抽出した新聞記事の「てもらう」は、分析すると「話者の個人の声」と、記事の書き手が、事態の当事者である話者に寄り添い、当事者の発話を代弁する「仮装当事者の声」が見られる。<sup>78</sup>

<sup>76</sup> 本研究は話し言葉と書き言葉の数値的な対比分析をするのではなく、「てもらう」という表現形式がどのような話者「私」の意識で使われていることを探るため、産出の場を広く取るために二つの資料を使用しているのであるが、どちらかの資料に極端に例数が少ないという偏りが無いことが示されている。

<sup>77</sup> 但し、この間の全ての号外と朝刊と夕刊からの抽出ではないことをお断りしておく。

<sup>78</sup> 新聞記事の書き手の主観性については、進藤(2009)では新聞記事を *hard news* (社会的秩序を混乱させるような事件を報道) と *human interest stories* (比較的安定した出来事や人々の日々の生活の様子を取り扱う)、*commentary* (社説など書き手の思想が現れる) に分けて

「話者の個人の声」というのは、次の(1)の例のように、話者の括弧書き(「」)の発話や「〜と話した」というインタビューなどによる引用の部分の声、(2)のように投書による話者の意見や感想の中に現れる「てもらおう」、(3)のような「国民には〜てもらおう」という政府や行政からの要請のような会見やスピーチの声、さらに(4)社説の声である。

尚、例の末尾にある(3.20M)等は朝日新聞からの抽出例であること、その数字は月日、Mは朝刊、Eは夕刊を示す。例えば(3.20M)は2011年3月20日の朝刊からの用例であることを表している。

(1) (インタビュー) (甲子園で被災地チームの主将が)

「沢山の方に(野球する:筆者加筆)環境を作ってもらえた。」(3.20M)

(2) (投書) (被災者が)

「家族の少ない家を優先にボランティアを派遣していただけないでしょうか。」(4.2M)

(3) (会見) (官房長官が)

「海外(の援助組織:筆者加筆)に協力してもらえるようにしておきたい。」(3.12M)

(4) (社説) (社説執筆者が)

「原子力安全委員会に安全のお目付役としての本来の役割を果たしてもらわなければならない。」(4.6M)

また、新聞では事態を客観的に描写するのではなく、書き手が当事者の立場になって「てもらおう」という表現もある。本研究で採用した記事には、被災者達の立場に立った、被災者の目から見た周りの状況を、記事の書き手がそれを代弁(代筆)しているいわば「仮装当事者の声」の書き方が多く、これは客観的な記事に対して「ドキュメント記事」とでも言

---

いる。そして、Appraisalという我々が物事や人物に対してどう感じたかを述べることにより、聞き手や読み手との対人的関係を遂行するための言語資源の使われ方を、Hard news、Media exemplum (human interest stories の下位区分として、すでに過ぎ去った事件や出来事に対する人々の対応や信念を示す)、media exposition (社説)について分析している。Appraisalが多く見られる文章は書き手の感情などの主観が多く含まれたテキストであると言えるとしている。Appraisalはengagement(関与)、attitude(価値判断)、graduation(程度)の3つの領域から成り、それぞれがテキスト内で同時に選択されながら評価が行われるということである。Hard newsにおいては価値判断(attitude)の使用はほとんど見られず、書き手の主観は表面的には感じられない。Media exemplumにおいては限定的ではあるが書き手の価値判断が数例見受けられ、また第3者の声としてモダリティ表現を使うことで間接的ではあるがテキストにメッセージ性が感じられる。Media exposition(社説)の価値判断は豊富で、モダリティ表現も多い。また多くのモダリティはobligation(義務)に関するものであり、社会変革に向けた行為を読者に求めるメッセージ性を持っている。と述べている。このことから、本研究で社説を含む新聞記事を資料としたことは妥当だと考えられる。尚、進藤の分類を用いない理由は、本新聞資料では、発話当事者の立場に立った記者や、読み手に訴えるドキュメント記事の記者としての記事の書き手の声の特徴的に現れており、一般的な分類ではなく、記事の書き手の立場を特に分類する必要があると考えるためである。また、「話者の個人の声」「仮装当事者の声」という呼称も本研究の筆者の命名である。

うような書き方がされている。

(5) (ドキュメント記事) (桜祭り実行関係者が)

「被災者に元気を取り戻してもらおうと考えた。」(4.16M)

これらをまとめると、客観的記載であると思われる新聞の中にも新聞資料の話者「私」の「てもらう」は、個人の声として {インタビュー、投書、会見、社説} と、記事の書き手が個人に寄り添う声 {仮想当事者の声 (ドキュメント記事)} として現れている。このような新聞からの「てもらう」文の数は 124 例である。<sup>79</sup> 本研究ではこれらを全て話者の「てもらう」として「」で用例を示した。

次節から第 3 章で提示した各「てもらう」文のタイプについて、コーパス、新聞の両資料から抽出した「てもらう」文の用例によって、結果的に話者「私」が受益することを表現しているのか、実際に話者「私」は受益結果を指向し、受益原因からプロセスを経て受益すると捉えているのか、確認を行っていく。

## 4. 2 話者受益の確認

第 3 章で「てもらう」文を「受ける」観点から分類し、話者「私」の受益を表す「てもらう」文に 3 つのタイプがあると説明している。本節ではそれぞれを確認していく。

尚、用例末尾にある(m2529) (f11404)等はコーパス資料からの例であること、そのうち m は『男のことば・職場編』から、f は『女のことば・職場編』からであることを示しており、数字はコーパスの番号である。また、コーパスに付された記号のうち、前の会話者との重なる記号、間の秒数、＜笑い 複＞等会話者間の相互関係を表す記号については用例から省いて記してある。<sup>80</sup>

### 4. 2. 1 「働きかけてもらう」文タイプ

まず、タイプ〈i〉、いわゆる働きかけてもらう文で、話者は受益状態を「想定」しているのだろうか。用例からは、「〈1〉 想定…」に当たる次のような例が見られる。中でも、(6) は第 3 章で話者「私」の主観として池上 (2004) で指摘されていることがコーパスの録音に、聞き手に向けない＜独り言＞として納められている。

(6) (話者が目的の場所への行き方の説明をアルバイトに求めている。しかしアルバイ

<sup>79</sup> 自然会話コーパスと違い、文脈がわかりやすいという点でこの期間の新聞を資料として採用しているが、逆に特別の背景という点で新聞資料にも「てもらう」文の使用に偏りがある可能性は認める。

<sup>80</sup> 例えば間には話者が場所を移動している間もあるということである。

ターの説明がはっきりしない)

「電話してもらうことにしよう。」＜独り言＞(f11404)

(7) (ドキュメント記事：『町が漂流する』でのある避難者の思い：町が他県へ集団移転すると知った町在住の被災者が)<sup>81</sup>

「(略) 働き口も紹介してもらえるかも。」(4.11M)

(8) (インタビュー：被災地の避難促進担当者)

「(避難先の生活の方がいいという) こういう話が広まり、少しでも避難を決意する人が増えてもらえれば」と担当者は話す。(4.13M)

(6) は抱えている問題が解決することを思い浮かべ、(7) (8) は期待する実現可能性を可能形と条件節で表している。これらの例から「想定」する話者「私」には、行為の結果を受益することによって、自らがプラスの変化状態になるだろうという見込みがあることがわかる。しかし、これらは行為者に向けて発話され、直接的に行動要求として機能しているわけではなく、「期待」する状態が話者「私」の頭の中にあることを述べているに止まる。

次に、「想定」したことが働きかけ意図を持つもとなり、話者は働きかけの仕手として働きかけが行われることがわかる用例を示す。〈i〉「働きかけてもらう」文のプロセスのうち、働きかけ部分までを表す「〈1〉想定... 〈2〉働きかけ→」の「てもらう」文には次のような用例が見られる。

(9) (インタビュー：被災者の声)

「また漁がしたい。行政には、元通りの生活ができるように支援してもらいてえな。」

(4.13M)

(10) (商談で、翻訳会社の主宰者が出版企画を商談相手に伝えている)

「これは、もう、あの一、日本文のほうはこちらで書きますから、(はい Inf(女)) それを英訳してもらって、(うん Inf(女)) いっしょにもうひとつ、1冊つくろうと。」(f2481)  
(Inf(女))は相槌：筆者加筆)

(9) では行政側に願望を訴えているだけで、実現の可能性がどのくらい直近に可能かという観点からは、弱い働きかけであると思われる。このような差は文脈によりあるとしても、受け手である話者「私」が「受ける」ことを「想定」し、発話という手段で話者が「想定」した受益結果の実現に向けて行為者に働きかけている。(10) では行為者が yes か no かの選択肢を持っている為、行為の実行や受益はあくまで可能性である。

受益結果を「想定する」ことは話者「私」が「受ける」ための働きかけの意図を持つ動機であり、働きかけは話者「私」が「受ける」ための一連のプロセスの受益未実現の部分の「てもらう」であると言える。一方、多くの働きかけの観点からの「てもらう」文分析

<sup>81</sup> 災害に関する引用中の固有名詞については他県、被災地、[施設名]、などとしてある。



では、話者「私」の「想定」や「期待」という部分はなく、働きかけの意図と働きかけ作用の有無強弱によって「てもらう」文のタイプを分類している。

次に、「てもらう」文が話者「私」の想定から結果の再帰的な受益までのプロセス「〈1〉想定... 〈2〉働きかけ→ 〈3〉行為→ 〈4〉結果受益」を経ている例を挙げる。この受益未実現部分から受益既実現までの一連の流れによって受益することを表す「てもらう」文には次のような用例が見られる。

(11) 話者（大学教員）が昔から利用しているホテルが、話者が交渉すれば 3000 円か 4000 円にディスカウントされることを休憩時に聞き手（大学教員）に話している。

「ディスカウントしてもらって。」(m2529)

(12) (インタビュー：避難所の炊き出し)

「町内で被害の少ない家を回り、カレーのルーをわけてもらいました。」(3.21M)

(13) (インタビュー：避難高齢者の受け入れ施設部長)

「〔施設名〕は被災地の福祉施設から 229 人もの高齢者を受け入れ、その後少しずつ全国の病院や老人ホームに再度移ってもらったが...」(4.12M)

(11) は、話者（大学教員）が昔から利用しているホテルが、交渉して一泊 3000 円か 4000 円にディスカウントされたことを聞き手（大学教員）に話している。(12) は被災者である話者がインタビューに答えて、避難所で炊き出しをするので、話者達が町内で被害の少ない家を回り、カレーのルーをわけもらったということを話している。(13) は被災地の高齢者が話者の施設に避難してきたが、多人数であったため、高齢者にさらに移動を働きかけたことを述べている。これらのことは、話者側が頼んだ結果、実現したのである。そして、話者「私」が頼んだのは、例えば (11) でディスカウントしてもらうというように、話者にとっての受益と結びつく行為である。

このプロセスを経た「てもらう」は、働きかけの観点からの 2.4.1.2 で見た山田（2004）の分類の A、働きかけの意図も実際の作用も有るタイプに重なる。違いは、話者「私」が「想定」し、さらに話者「私」が再帰的に受益するという話者「私」の捉え方の部分である。この (11) (12) (13) は、働きかけて再帰的に受けているという、〈i〉「働きかけてもらう」文というタイプがあることを裏付けるものである。このような「働きかけてもらう」文を「想定再帰的てもらう文」と呼ぶことにする。例えば (12) (13) のような、働きかけ部分までを表す「〈1〉想定... 〈2〉働きかけ→」の「てもらう」文では、話者「私」はその結果が実現した時には、「支援してもらった」、「英訳してもらった」と発話するだろう。また、受益結果を発話している (11) (12) (13) では行為者の行為「ディスカウントてもらう」「カレーのルーをわけてもらう」「再度移ってもらう」ことで話者「私」が受益できることを予め想定し、その実現のために依頼したと言えるだろう。

この話者受益説のタイプ〈i〉「働きかけてもらう」文は、「私」が行為者に働きかけ

て、受益はその結果であるというプロセスが、話者「私」の中に「想定」としてあるといえることができる。このタイプで表現されているのは、想定においても行為の結果においても話者「私」の受益、つまり影響を受けた後の状態である。

では、第2章第2節で見た山田（2004）の働きかけの観点からのB.「許容的テモラウ受益文（意図・有、実際の作用・無し）」のような行為者の行為を許容する働きかけの弱い「てもらう」文は、本研究の受益の観点ではどのように説明できるのだろうか。次の例は、文脈から当初は依頼という働きかけをして行為者の行為を生起させたということがわかる。しかし、そのうちに行行為者は主体的に行行為をするようになり、話者は一方的な受益者になっているという例である。「〈2〉働きかけ→〈3〉行為→〈4〉受益」のうち〈2〉働きかけの部分が弱まり、〈3〉行為者の主体性が強くなってくる場合である。

（14）（介護施設の事務局長が、保険の営業担当者に対して打ち合わせの時に）

「結局、この前の時もー{はい}、全部まー、やってもらっちゃったってゆうかねー。」(m7570)  
（{はい} は営業担当者の相槌：筆者加筆）

介護施設の事務局長が、前回も保険の営業担当者に手続きを頼んだが、営業担当者が事務局長を煩わせないようにと共同ですべき仕事を一人で進め、事務局長はそれに甘えて全部任せ、事務局長自身はその仕事をしなくて済んだということを思い出している。（14）の事務局長は行為者である営業担当者の行為を受益だとして（申し訳無いが）全部やってもらうまで止めなかったのである。この場合行為者の意志行為ではあるが、受益者の側では、行為者のサービス行為を敢えて止めないことで受益できるという確信があると言える。このような「てもらう」文は他にもある。

（15）（インタビュー：被災地の社会福祉協議会が、各地からの個人ボランティアは受け入れていないのに、ボランティアバスの受け入れをしたことについてのインタビューに答えて）

「（ボランティアは現地市民に限定していたが）ボランティアバスは『受け入れ側の負担が少ない』として来てもらった。」（4.9M）

（15）ボランティアバスが来ることは、本来、話者達が実現を待ち望むことである。各地からの個人のボランティアではなく、組織化されたボランティア達を乗せたバスという、行為者ボランティア側の工夫と熱意が上回り、行為者側の主体性が優位になって受け入れが実現し、受け手である話者や話者側の受益したのである。この（14）（15）は行為者の意志によって生じた行為は、話者「私」が受益を「想定・期待」して起こした行為ではない。行為者自身の意志行為をそのまま受けることを期待して、行為の達成を待ち受ける。

このような向かう行為を止めずに受ける「てもらう」文は、受け手の話者からみると、

思いがけず話者に向かう行為に対して、止めなければ受益できると判断するからである。したがって、受け手の「受ける」意志が表れた「てもらう」文という見方が自然なのではないだろうか。

次に、話者受益説のタイプ〈ii〉「思いがけずてもらう」文の「〈3〉行為→〈4〉受益」の部分に当たる用例を挙げる。

#### 4. 2. 2 「思いがけずてもらう」文タイプ

用例からは「想定」や働きかけを行わず、行為者自身の意志で起こす行為を受ける「てもらう」文も抽出されている。受け手が判断する間が無いまま、思いがけず話者「私」に向かう行為が達成して話者「私」が受益する場合である。

(16) (インタビュー：被災地への天皇皇后両陛下の訪問を受けた被災地町長がインタビューに答える)

「みなやるせない思いになっていたが、今日訪問していただいて笑顔が多くなったように思います。」(4.9M)

(17) (インタビュー：被災地の、乳児の母の話。近所の住民たちが紙おむつの買い出しに行ってくれた)

「みなさんに助けてもらって本当に助かってます。」(3.20M)

(18) (休憩時の雑談で特産物の話。それを食べたことがあるかを聞かれた話者が答える)  
「あります、あの一、お土産で買ってきてもらって」{あー (聞き手の相槌：筆者加筆)}  
(m6521)

これらの行為者の意志による行為は、それを受ける発話の話者「私」(達)に向かっていく。行為者の行為の直接ターゲットである話者(達)は、働きかけずに受益している。このような受益は、第2章第2節で見た山田(2004)の働きかけの分類では、働きかけ意図も、行為者に行為を起させようと働きかける作用も無いC.のタイプに相当するだろう。

話者が頼まないにも関わらず、行為者が自ら意志的に話者「私」をターゲットとして行為をする理由は何であろうか。(16)(17)(18)を見ると、行為者が行為をする理由は行為者が見た話者「私」の状態にあることが考えられる。そこには被災者の私(達)、赤ちゃんを抱えて動きが取れない母である話者、その特産物を食べたことがない話者という、行為を起こさせる言わば「遠因」としての話者「私」がいる。(16)(17)(18)では、話者「私」のマイナスの状態を知った行為者が行為を差し向けることによって話者「私」を現状より良い状態、すなわち受益状態にしようと意志的行為を行っていることが読み取れる。するとこの受益者「私」は行為者の行為の起因であり、受益結果の話者「私」の受益原因である行為の起因は、すなわち「遠因」である。話者「私」は行為者が行為をしようという好意等の意志の遠因であるので、この「てもらう」文を「話者遠因的てもらう文」と呼ぶこ

とにする。

さらに用例からはタイプ〈iii〉のように、行為の生起や進行に話者「私」が関与しないことからの受益が見られる。

#### 4. 2. 3 「間接てもらう」文タイプ

タイプ〈iii〉で、話者「私」の想定・期待が無く、被害の受身と相補的と言われるように行為者の行為が話者「私」に向けられるのでもない「てもらう」文には次のような例が見られる。

(19) (会見：支援窓口の市長がドイツ市民団体の応援来訪に対し)

「私はドイツ企業で通算 15 年働き、育ててもらった」(4.15M)

(20) (インタビュー：一人暮らしの男性)

「一人暮らしで、医療と介護の両輪で支えられているという男性は『看護師さんには気持ちの部分でも支えてもらっている』と話す。」(4.8M)

(21) (インタビュー：教育ボランティア大学生)

「初めは教えに来たつもりだったけど、逆に人と接する楽しさを教えてもらった」(4.7M)

(19) では行為者に関心を向け、行為者との接点から受益したと感じている。また、(20) (21) のように、受益の行為者と受け手という関係にあるが、行為者が与益として与える事以外の事で、話者「私」が想定や期待をしていなかった事を受益と感じている例も見られる。<sup>82</sup> 話者が関与しない行為からの受益を感じるというような影響は、話者「私」が「受ける」立場であるからこそ感じる事ができるのである。

このような「てもらう」文は、話者「私」の間接受益を表し、〈iii〉「間接てもらう」文タイプとして示した文に該当する。この「てもらう」文では話者「私」が自らの関与を直接的な場合だけでなく間接的な関与にまで拡張していることから、「拡張関与的てもらう文」とする。この「拡張関与的てもらう」文でも話者「私」は働きかけず、影響を「受ける」ことを表している。

以上、第 3 章で挙げた 3 つのタイプの「てもらう」文があることが用例で確認された。しかし、この他にも「間接てもらう」文に当たる、話者「私」に行為が向かわないことからの受益を表す「てもらう」文が 2 つ、用例から抽出されている。1 つは、この「間接ても

---

<sup>82</sup> 本文例 (19) (20) では、行為主と話者「私」の行為の授受はあるが、話者「私」が、行為主が与えないことを受益している。話者「私」の受益内容は看護師さんが私の気持ちの部分を支えることであり、行為主の看護師さんは私の体のケアをしているのであって、気持ちを支えるための行為を話者「私」に向けてしているということではない。また (21) でも、子供達が私に人と接する楽しさを教えようとしているのでもない。子供達は私から勉強を教わっているのである。つまり、行為主が与えようとせず、且つ受け手も「期待」していなかったことを受益だと感じて受ける受け方があると言える。

らう」文のように、働きかけが無く、さらにまだ受益結果にも至っていない「てもらう」文である。もう 1 つは間接的な向かわないことからの受益であるが、話者「私」が働きかけを行っているというタイプである。次に、新たな間接的な「てもらう」文として説明する。

#### 4. 2. 4 新たな「想定間接てもらう文」タイプ

話者「私」が働きかけず、且つ話者「私」に向かわないことから受益することを表す「拡張関与的てもらう」文がもう 1 つあり、新たに抽出された方は、話者「私」が行為者の行為の結果への「想定」があるということが特徴である。

次の (22) (23) (24) は、話者「私」は行為者に働きかけられないばかりか行為者と何の関連性も無く、行為者の行為に話者「私」への与益の意志も無い事から受益している場合である。しかし、話者「私」は行為が「期待」した通りになればよいと言っている。

(22) (残暑が厳しいという雑談の話題で)

「そろそろ、30 度は遠慮してもらわないと。」(m9000)

(23) (雑談で、旅行の候補地を挙げている)

「九州はいいんだけど、台風はやめてもらって。」(f10349)

(24) (避難対象圏内被災者が)

「子供達に新しい学校・園に慣れてもらうしかありません。」(4.12M)

この (22) (23) では「30 度になる気候」も「台風」も「子供達」も話者に向けて「なる」「来る」「慣れる」ことをするのではない。しかし受け手である話者が、(22) (23) (24) では向かわない行為の実現からの影響を受益だと「想定」し、「期待」している。話者「私」が積極的に、自らが関与しない事に対し「期待」を寄せるということからわかるのは、話者が行為や事態に強い関心を寄せているということである。表面的には関与できない、または積極的に受益結果が得られないとわかっていても、その行為や事態が話者「私」の思い通りになってほしいと強く願っている。

本研究での話者が受け手として受益を表す「てもらう」文という分類では、「思いがけず受益するてもらう」文には話者「私」に向けた実際の行為があり、(19) (20) (21) のような間接的な受益では、なぜ受益できたのか受益結果から受益原因に関心を寄せている。また間接的な受益を表すタイプでも (22) (23) (24) のようなタイプの「てもらう」文は意図や作用は無いが期待がある。

さらに本研究での用例からは、「てもらう」文には、話者「私」からの行為者への働きかけがありながら話者「私」が行為者からの行為の直接の影響の受け手ではないという「てもらう」文が見出されている。次の「てもらう」文は、話者「私」が働きかけるが、行為

を受けるのは他者であるという「てもらう」文である。<sup>83</sup>

(25) (インタビュー：イベント副委員長の話。この話者は商店街のフェスティバル実行副委員長である。)

「イベントを通して、地域の人々に笑顔を取り戻してもらえたらと思う。」(4.18M)

(26) (インタビュー：自粛されていた試合を再開することについてスポーツ選手が)

「真剣に野球をして、少しでも被災地の方に勇気を持ってもらえるように頑張っていきたい。」(3.25M)

(25) で、商店街のフェスティバルで被災者を励まそうと実行副委員長が考えていることがわかる。この発話は、働きかける話者は、働きかけの結果、被災者が元気になることを「想定」し、商店街のフェスティバルを実行するという働きかけをする。その働きかけによって行為をするのは被災者である。また、直接的な受益者もフェスティバルによって心の中で元気になるという心理的行為を行い、その結果自らが元気になるという受益状態になる被災者である。他者の元気になるという受益状態が実現すれば、フェスティバルを催した効果を見た話者は、喜びを感じる。話者の受益は心理的であり、且つ間接的である。

(26) は、インタビューに答えたスポーツ選手は、懸命なプレーをすることという働きかけで、被災者に勇気が芽生えるという、受け手が望ましい変化状態になることを望んでいる。行為者はそれを見て、自ら勇気を持つという行為をし、勇気を得る。その行為者の様子から話者が受益するという他者受益から受益する間接的な「てもらう」文である。

「想定」する直接受益者は話者ではなく他者であり、この時、話者は他者の受益を意図的に働きかけて誘い出す原因である。このような「てもらう」文を「話者誘因的てもらう文」とする。この「てもらう」文は、コーパスでの 117 例中 8 例 (6.8%)、新聞での 124 例中 14 例 (11.3%) と、「てもらう」の用例の合計 241 例中 22 例 (9.1%) で見られている。用例として多くはないが、「受ける」ことを表現する「てもらう」文の分析からはずすことはできないタイプだと思われる。

受益の想定や期待を表現する「拡張関与てもらう」文や「話者誘因的てもらう文」文という、新たな「てもらう」文をまとめて今、「想定間接てもらう文」と呼んでおく。本研究では、話者「私」の受益の観点から間接的な「てもらう」文を、話者「私」が行為や作用からの影響を心理的に受益だと捉えた場合であるとする。文法的には働きかけが無いとされる受益のあり方も、話者「私」の受益の捉え方から見れば、一通りではない。そのため、文法的に補文の動詞が求める主語以外の主文主語の存在が間接的であるという構造的な説明や、働きかけの観点からの説明だけでは十分とは言える。

以上の、実際の発話データから得られた「てもらう」文の表す受益の仕方と結果を次にまとめる。「てもらう」文は行為者の行為を話者「私」がどのように受益するかという受け

<sup>83</sup> 2.2.1 (5) で提示したように、日本国語大辞典にこの意味が記載されている。

方の違いで4つのタイプに分けられる。働きかけの有無ではなく、受ける観点からの4つの「てもらう」文の分類をまず明らかにし、さらに受益は何かから受けた結果であるということがどの「てもらう」文の中にも含意されていることを指摘する。

#### 4. 2. 5 話者受益の「てもらう」文の分類結果

「てもらう」文は用例から4つのタイプの話者「私」の受益の仕方が見られる。便宜的にアルファベットのAからDを充てて説明していく。A.「想定再帰的てもらう」文は「想定」し、再帰的に受益する文である。B.「話者誘因的てもらう」文は「皆さんにリフレッシュしてもらう」というように他者が受益をし、「私」の直接的な受益を表してはいない他者受益の「てもらう」文である。C.「話者遠因的てもらう」文は思いがけず受益して、受益したと表現している文である。そしてD.「拡張関与的てもらう」文は、行為者の行為や事態が話者「私」に向かわないことから話者「私」が受益を間接的に捉える「てもらう」文である。このようなそれぞれの受益のタイプの割合は、「てもらう」文の用例計241例中、A.「想定再帰的てもらう文」が最も多く192例(79.7%)である。次に他者受益から心理的に受けるB.「話者誘因的てもらう」文が22例(9.1%)であった。そしてC.「話者遠因的てもらう」文という思いがけず話者に向かう行為をそのまま受ける例が18例(7.5%)、受益者への方向性が無い行為から受ける「拡張関与的てもらう」文が9例(3.7%)となっている。<sup>84</sup> A.B.は働きかけがあり、C.D.は働きかけが無い「てもらう」文である。特にAのタイプの用例数の多さから、「てもらう」文はやはりA.「想定再帰的てもらう」文という「働きかけてもらう」タイプがプロトタイプであると言えるだろう。

表 4.2 「てもらう」文のタイプ別数値対比

(数値は用例数。( ) は%)

「てもらう」文のタイプ	対比(n=241)	
A.「想定再帰的てもらう」文	192	(79.7)
B.「話者誘因的てもらう」文	22	(9.1)
C.「話者遠因的てもらう」文	18	(7.5)
D.「拡張関与的てもらう」文	9	(3.7)
計	241	(100.0)

さらにこれらの4つの「てもらう」文を、用例に見られる特徴によってさらに分類し表にしたものが次の表 4.3 である。また表 4.3 では「てもらう」文のタイプと、それぞれのタイプの簡略化した用例、そのタイプの受益の仕方を(i)から(v)まで、各「てもらう」

<sup>84</sup> 本研究では「てもらう」文の受け方の違いを見るため特徴として「てもらう」文を区別しているが、実際には話者「私」の受益か他者の受益かが明確に分かれる場合ばかりではない。両方である場合や、どちらの受益かの判断が話者の中でも曖昧である場合もある。

文のタイプ間の差異を観点としてまとめている。

表 4.3 では、第 3 章で挙げた 3 つの受益のタイプが、新たに間接的な「てもらう」文 B、「話者誘因的てもらう」文を加え、D、「拡張関与的てもらう」文が（i）「想定」の有無によってさらに「想定」がある D-1「拡張関与的てもらう」文と、「想定」が無い D-2「拡張関与的てもらう」文に分類されている。

まず、（i）は話者の受益「想定」の有無、（ii）は受益に向けた話者からの働きかけの有無である。これらは行為者の行為や事態の生起が実現していない時間的側面を持つか否かというタイプの差異となっている。（iii）は行為者からの受益行為が実際にあるか無いかである。（iv）と（v）は話者が受益をどの様に捉えるかである。（iv）は受益原因となる行為や事態（表ではスペース上「事態」としてある）があると話者が捉えているか否かである。これらは行為者の実際の行為や事態の実際の生起の有無ではなく、話者「私」が受益した時に何かから「受けた」という意識の有無である。（v）は話者が受益を直接しているか間接的にしているかという意識を分類している。

表 4.3 話者受益を表す「てもらう」文のタイプ

	話者受益「てもらう」文のタイプ	受益のし方の特徴				
		(i) 受益 「想定」	(ii) 受益へ の働き かけ	(iii) 行為者から 話者への受 益行為	(iv) 受益原因 事態の有 無	(v) 話者受益 結果の 直間
A	想定再帰的てもらう文 受益を「想定」し働きかけて再帰的に受ける (a)ディスカウントしてもらう	有	有	有	有	直接
B	話者誘因的てもらう文 他者受益から間接的に受ける (b)皆さんにリフレッシュしてもらう	有	有	無	有	間接
C	話者遠因的てもらう文 向かう行為を直接受ける (c)命を助けてもらった	無	無	有	有	直接
D	拡張関与的てもらう文 向かわない行為から感じて受ける (d) D-1.子供達に慣れてもらう D-2.会社にて育ててもらった	D-1 有 D-2 無	無	無	有	間接



(i) と (ii) で、「想定」や「期待」、そして働きかけがあるのは A.「想定再帰的でもらう」文と B.「話者誘因的でもらう」文、(i) の「想定」のみがあるのは D-1「拡張関与的でもらう」文である。次にこれらの有無にかかわらず、行為者の行為や事態が話者「私」に向かうかを (iii) で見ると、直接作用があるのが A.「想定再帰的でもらう」文と C.「話者遠因的でもらう」文である。その他のタイプは作用としては間接的である。特に (i) (ii) (iii) が無く、(iv) と (v) のみであるのが D-2「拡張関与的でもらう」文である。直接の作用でも間接的にでも、話者「私」自身の受益を何らかの受益原因がありその影響結果だと捉えているかを (iv) でまとめた。すると、本研究の調査で確認した全てのタイプの「でもらう」文が、話者が自らの受益を、その原因となる行為や事態の結果だと捉えている。話者がどのように捉えているのかという観点から、表では (iii) を (v) で再提示した。(v) は話者が「でもらう」と表現する当該の受益が、直接作用を受けたのか、心理的間接的な影響なのかという認識である。例えば D-2「拡張関与的でもらう」文は、受益原因はあるが、作用は間接的だということである。

本研究の目的は、話者「私」が「でもらう」と表現する際の受益認識についてである。次に、この (i) から (v) までは本研究の目的に対する考察観点とすることを説明する。

#### 4. 3 「でもらう」文の受益観点

4. 2. 5で述べた表 4.3 の観点を再度まとめると、(i) では受益がまだ生起していないが、(v) では受益結果からの観点であり、(i) から (v) は話者「私」の意識が受益結果に至る順に観点として現れている。(i) から (ii) では、話者「私」が受益を想定し、その実現を期待して働きかけを行うという、受益がまだ実現されていない段階での話者「私」の意識である。次に (iii) では行為者から何らかの行為が話者に向けて実際に生じたのか、話者に向けた行為や事態が無いのかということを示している。(iv) では受益結果状態である話者が、自らの受益が何らかの原因からの影響を受けた結果であると捉えていることを表している。そして (v) では受益結果状態の話者が受益を、行為者の行為からの直接的受益であるのか、話者が自ら受益だと感じる間接的な受益なのかという差異を表している。このことから、(i) (ii) は受益が未実現の時点での話者「私」の意識、(iii) の話者「私」に向けた行為の有無にかかわらず (iv) (v) は話者「私」が何らかの行為や事態を受益原因として、自らが既に結果的な受益状態にあるという話者「私」の意識を表している。すると、これらは話者「私」の受益について、受益が未だ実現していない段階か、既に実現している段階かという時間的な話者「私」の意識として分類することができる。

次にこの話者「私」の受益までの意識について、4.3.1 で「でもらう」と発話する話者に、受益実現までの時間の各時点での受益結果への指向意識が表出されていること、4.3.2 で話者「私」の受益が受益原因からの影響結果であるという意識があることについて、4.3.3 で

話者「私」が受益を行為から直接受けているのか、心理的間接的に受益を捉えているのかという意識があることについて説明し、それらを第5章で考察観点としていく。

#### 4. 3. 1 話者受益の未実現時と既実現時

話者「私」の受益結果は、「てもらう」文の表す「想定」の有無で、話者「私」が受益を「想定」している時点は話者「私」はまだ受益を実際にはしていないということである。それに対し「想定」が無いのは、話者「私」が既に受益をしていると感じているということである。このような話者「私」の受益の未実現、既実現という意識があることは、話者「私」が産出した「てもらう」文の、「てもらう」と共に用いられる表現形式の傾向からわかる。まず、「てもらう」文が先のA～Dのタイプから、話者「私」の受益の未実現、既実現という意識によって大きく2つに分けられるということを説明し、次に未実現、既実現という意識が「てもらう」と共に用いられるどのような表現に表れているのかを用例によって示していく。

##### 4. 3. 1. 1 「想定」と受益未実現時・既実現時

第3章の話者受益説では、「想定」して働きかけ、行為者の行為によって再帰的に話者「私」が受益する「てもらう」文が、「想定」して結果を受益する一連のプロセスを持つ「てもらう」文であると説明した。

表4.3の(i)(ii)から、A.「想定再帰的てもらう」文 B.「話者誘因的てもらう」文 D-1「拡張関与的てもらう」文は、「想定」・働きかけ時という受益未実現時を含意する文である。一方、思いがけず受益したことを表す C.「話者遠因的てもらう」文 D-1「拡張関与的てもらう」文は、受益が実現した後で発話されているということになる。これらの文には「想定」は無い。

このことが話者「私」の受益にどのような意味を持つのだろうか。「想定」が有るというのは、話者が「私」の受益結果を想定し、まだ実現していない時点から、実現に向けて働きかけるまでの時間的なプロセスと、話者に受益をもたらす働きかけの対象とに関わっていることを含意する「てもらう」だと言える。本研究では以降、このプロセスの時間の巾を<受益未実現時>と称することにする。

一方、「想定」が無い「てもらう」文では、話者「私」は何らかの受益原因によって結果的に受益状態になっているということを表現している。「想定」が無いのは、受益が既に実現した時において、その受益の起きた原因と、原因行為や事態から話者「私」の受益結果までのプロセスを含意する「てもらう」文であると言える。以降、この時間の巾を<受益既実現時>と称する。

- (27) 「想定」が有る=A.B.D-1「てもらう」文=<受益未実現時>の「てもらう」文  
「想定」が無い=C.D-2「てもらう」文=<受益既実現時>の「てもらう」文

これらのことから話者「私」の受益結果には、受益結果を「想定」するというように受益に初めから関わり、結果的受益状態になるまでを含意するのか、受益状態に気づいてから受益への経過や原因と関わるのか、つまり受益原因から受益結果までのどの時点で受益だと表現するのか、という時間的な経過と結果と原因という意識があると言える。では、その意識はどこでわかるのだろうか。次に、本研究で抽出した「てもらう」文の用例で、その意識が、「てもらう」とともに用いられる文末表現と、「てもらう」が複文従属節に用いられる際の接続表現に現れていることに注目していくことにする。<sup>85</sup>

分析が有効な「てもらう」文 241 例から、「てもらう」が文末表現として現れる場合と、複文従属節で接続表現を伴って現れる場合の分析を説明する。「てもらう」文が文末で表現を伴って用いられているの 133 例(55.2%)であり、複文従属節に用いられる用例のうち、主節との因果関係や前後関係を表す表現を伴っているのは 100 例(41.5%)である。後者の 100 例の他に例示や強調を表す複文従属節接続助詞（とか、しか、なり何なり等）の用例があるが、それらは受益未実現時で 7 例（コーパス 3 例、新聞 4 例）、受益既実現時で 1 例（コーパス 0 例、新聞 1 例）、計 8 例であり、「てもらう」に接して用いられる表現形式全体の 3.3%である。このような接続助詞の用例は数値的に少なく、その機能も「てもらう」事態の例示と強調であり、「てもらう」文の未実現、既実現とプロセスの分析に直接的な影響力を持たないと判断した。本研究では文末の「てもらう」に後接する表現と、複文の従属節と主節との時間的前後関係、因果関係を表す複文従属節の「てもらう」に伴われる表現について考察することにする。次の 4.3.1.2 でまず、「てもらう」が文末に現れる際の表現を用例から示す。

#### 4. 3. 1. 2 「てもらう」文末表現

話者「私」の受益に時間的な意識があることが「てもらう」文末に後接する表現に現れていることを示す。初めに、文末に現れる「てもらう」に後接する表現を取り上げ、話者「私」が受益を表現する際に、「てもらう」事がこれからなのか、今、してもらっている

---

<sup>85</sup> 対象となる「てもらう」とともに用いられる表現が文末か否かという判断は、本研究では形式名詞への接続と、複文従属節が主節との関係を表す接続助詞ではないと判断した場合全般について扱っている。新聞の書き言葉での文末か否かの判断は表記に現れる。それに対し、話し言葉である談話の文末は、話者の意識とは別の理由で実質的な文末である場合も含まれる。例えば対話で相槌が入ったり、聞き手に遮られている次のような場合には、接続助詞への付帯ではないが、正確には文末ではない。

(i) それ、だから 9 人だけのツアーみたくしてもらった（はー 他者(女)) み、みたいなもんだけどー。(f389)

(i) では聞き手の「はー」によって、話者の「てもらった」という発話は文末ではなくなっている。しかし、「はー」によって「み、みたいなもんだけどー」を後から加えたのか否かは、書き起しの文字化だけではわからない。「はー」が、話者の押しの強さへの聞き手からの感嘆だとすれば、本来文末であったものが、あわてて「みたいな…」と緩和させているという可能性もある。このような場合があるため、複文従属節と主節との関係を見る本研究の対象（接続助詞と形式名詞への接続以外）を広く文末表現とした。

るのか、もうしてもらったのかという、いつの時点で実現に対する意識を持ったのかが異なることを示す。まず表現の種類を示し、次にその用例を挙げる。尚、文末に現れる「てもらう」に後接する表現の呼称については、本研究での受益の時間的な意識の考察において、文法的な終助詞、助動詞という品詞別には行わない。本研究ではまた益岡(2007:21(14))に示されるような「判断のモダリティ」と「発話のモダリティ」を分類するような文法的な考察は行わない。「てもらう」が文末に現れる際に、そこにも話者「私」の受益への意識が表出しているとして、「てもらう」文の「文末表現」と称して考察していくことにする。

表 4.4 「てもらう」受益未実現時・既実現時の文末表現

文 末 表 現 (n=133) <sup>86</sup>	受益未実現時(n=88)			受益既実現時 (n=45)			計 (n=133) (%)
	コーパス	新聞	計(%)	コーパス	新聞	計(%)	
1)「～おう」	4	4	8(9.1)	0	1	1(2.2)	9(6.8%)
2)「～たい」	10	32	42(47.7)	0	0	0(0.0)	42(31.6%)
3)禁止(てもらうな)	1	0	1(1.1)	0	0	0(0.0)	1(0.7%)
4)言い切り ル形	3	5	8(9.1)	0	0	0(0.0)	8(6.0%)
5)言い切り タ形	0	0	0(0.0)	4	12	16(35.6)	16(12.0%)
6)ている／てしまう ／ておく	2	0	2(2.3)	7	4	11(24.4)	13(9.8%)
7)可能「てもらえる」	3	9	12(13.6)	0	5	5(11.1)	17(12.8%)
8)「てもらう/た」+ 形式名詞(の,様に 等)	8	7	15(17.1)	10	2	12(26.7)	27(20.3%)
計 (未実現、既実 現の文末表現全体 に対する割合)	31	57	88(66.2%)	21	24	45(33.8%)	133(100.0%)

この文末表現の表 4.4 から、文末表現の 1)「～おう」～4) ル形の「これから受益する」時点と、6)「ている」形での「今受益進行中である」と気づく時点、5) タ形や 6) の「ている」「てしまう」「ておく」による「受益した」時点に分けられていることがわかる。7)「てもらう」の可能形、8) の形式名詞への付帯は、受益の実現が未だなのか、既に実現したことを表す時に使われるのかについて、どちらにも例が見られた。

「これから受益する」用例には、次の (28) (29) のようなものがある。「これから受益

<sup>86</sup> 分析有効用例 241 例中、複文従属節接続詞 100 例(41.5%)と接続助詞 8 例(3.3%)を除いたものである。

する」話者「私」が受益状態を「想定」し、それを受益実現前に「てもらう」という「ル形」での発話である。その中に受益実現状態を目指す意志があること、すなわち既に話者「私」の「想定」に与益主の行為の結果、受益実現状態になった状態があることが伺える。

(28) 「名字先生にやってもらいますね。」(f1527)

(29) (首相が)「T 社にはやれるところまでやてもらう。」(M4.6)

(28) は、会場設営担当の教師が、その場にいない教師に仕事を割り当てている。(29) は首相から加害者の会社への立場上の要望である。行為の実現により話者は目指した受益結果状態になれる。

さらに文末表現に意志の「おう」、願望の「たい」、条件節、その他結果状態を目指す意志を表す「ようにする」「ことにする」、目的を表す「ために」等がこれから受益する時点で発話されている。つまり、これらの表現形式は、話者「私」に、与益主である行為者の行為の結果受益できるという気づきが、行為生起前に既にあるということを意味している。

(30) 「2 時にしてもらおうか。」(m7631)

(31) 悪いんだけど作ってもらいたいんだよ。(m7645)

(30) は仕事で、相手先との打ち合わせ時間を、自分のサイドで都合の良い時間にしてもらおうと相談している場面である。(31) は休憩時に上司が部下に仕事の指示をしており、上司の願望を表している。一方、次の(32)(33)はまだ話者「私」が働きかけていない。

(32) 「電話してもらうことにしよう。」<独り言> (f11404) (=6)再掲

(33) (官房長官が)

「海外(の援助組織)に協力してもらえるようにしておきたい。」(3.12M) (=3)再掲

話者「私」は、行為者にどのような行為を要求すればよいかが、既に行行為者の行為結果の受益状態に変化した自分を「想定」しているので、具体的にわかっている。そのため、行為者の具体的な行為を条件節によって示し、または願望の「たい」「おう」と表現し、または発話して要求しているということがわかる。これらは、すべて話者「私」が受益する以前の「これから受益する」意識化を「てもらう」で表現している。

次に、「今、受益が進行中である」受益途中の局面では、話者「私」は、働きかけによって行為者が行為に着手しつつあり、受益の進行中であるという意識化を(34)(35)のように表現している。これらは「ようになつて／ようにしてある」という表現を伴い、「ている」「てある」という文末表現によって表されている。この進行過程では、話者「私」は行為や事態が既に生起し、証拠として実際に見たり情報を得ているわけではないが、話者「私」

の中では受益が結果に向けて実現している途中であるという確信を表現している。

(34) 「15 日も 来てもらうようになってるでしょ」 (m49)

(35) 「あの一、周知みたいな感じのファイルに、まとめてもらうようには指示してあります。」 (m8612)

さらに、断続的にこれまで行われてきた受益行為が、今回も、今後も実現できると考えている (36) (37) も、長いスパンでの継続中と言える。

(36) 「各学部ともこちらでやしてもらってるでしょ」 (m524)

(37) 「何人か、ま、今まで行ってもらってると思いますがー」 (m3612)

「ている」は、いつも／行為の進行中への確信／結果の残存の各用法が見られる。次の (38) (39) (40) は「今～ている」という、事態が進行しているという確信を持って発話されている。(41) の「ている」は「行為結果の残存への確信」として発話されている。

(38) 「今、ちょっとね、調べてもらってるんですよ、」 (m1747)

(39) (首相が)

「防衛大臣に自衛隊の（さらなる）動員を検討していただいているところです。」 (3.13M)

(40) (被災者が)

「(家を押しつぶされ) 住む家を探してもらっている。」 (4.6M)

(41) 「[社名] からー、[社名] に一送ってもらってるはずだからー。」 (m5543)

これらは、すべて話者「私」が受益進行中の局面で受益への意識化気づきを「てもらう」で表現している。

次に「受益した」面の用例からは、局面で受益への与益主の行為の結果を体験してから初めて受益に気づいたことが「てもらった」という「タ形」で表現されている。

用例から抽出された「てもらう」文の「タ形」の意味は二つの用法に分けられる。<sup>87</sup> 1 つには、頼んだことの完了報告である。この用法の「タ形」の意味は、既に起こった行為者の行為によって話者「私」が頼んだ、または指示したことが完了していることを表している。

---

<sup>87</sup> 「タ形」は過去の意味があるが、本研究での受益に至るまでの時間的なプロセスの中の「タ形」は話者「私」の受益にとっての受益が実現に向けて既に実現しているのか、その過程であるのか、これから実現に向けて行為や事態が起こるという想定段階であるのかという点で完了、未完了の意識に準ずる。

(42)「上にずらっとう並ぶと、いうかたちでいちおうその一、なん、セッティングはしてもらっ、いました。」(f1299)

(43) (遺体探しの女性が安置所を回って)

「(安置所の職員に) 遺体の写真を見せてもらった。」(4.7M)

(44)「あの、視察があるので、ずらしてもらいました。」(f5585)

(42) (43) はプロセスの完了でその出来事は頼んでやってもらったのだということを話している。(44) は完了を担当者への報告で、「てもらう」事態が完了したことを伝達している。ここでは、話者が機転を利かせて行為者に頼んだことの効果が今表れていることを表明している。

またもう1つは、結果からのプロセスと原因の顧みである。この「タ形」の意味は、(45) では結果を受益した話者「私」が、行為者のおかげであると振り返っている。

(45)「それは、だから、もう、知り合いの旅行会社の人にやってもらったの、」(f385)

以上の文末表現から、「てもらう」文には受益未実現、既実現の各局面があることがわかる。さらにそれらを「てもらう」と表現していることは、発話する話者「私」が自身の受益を、プロセスを持つものとして捉えているということである。これらの文末表現は、プロセスの中で話者「私」が自らの受益を意識化した時点での発話である。

また、本研究の抽出用例によると、遠い過去、より間接的な事態からの受益は次の例のように、受益したことを過去のひとまとまりの話者「私」にとっての出来事として捉えているように思われる。尚、文末表現ではないが、(48) のように形式名詞によって名詞化する「てもらう」事態はさらにひとまとまりに感じられる。<sup>88</sup>

(46) (阪神経験者でボランティア希望者が)

「(被災県出身：筆者加筆) の人にたくさん (当時私を：筆者加筆) 助けてもらった。」

(47) (支援窓口の市長が)

「(支援申し出国の：筆者加筆) ドイツ企業に当時、私 (市長：筆者加筆) を育てもら

---

<sup>88</sup> 金水 (2000:56) は、アスペクトの完成相とパーフェクトについて、区別しがたい部分があることを「そもそも、完成相過去とパーフェクト相現在とは、意味的にはきわめて近い関係にある。前者は、発話時から完成的に捉えられる出来事を過去に位置づけるというものであるのに対し、後者は、設定時 (視点) = 発話時が出来事の限界達成後の段階にあるという認識を示すものであるということになるが、つまるところ出来事の主観的な捉え方の違いであり、その境界を引くことは難しい。」と指摘している。鈴木 (2012:39) は、パーフェクトをアスペクトと区別する観点を次のように、焦点化の差異だと説明している。「古典日本語のパーフェクト形式であるタリ・リ形とアスペクト形式のはだかの形やツ・ヌ形をくらべると、タリ・リ形で表されている意味は、アスペクト形式のように運動の過程に焦点はなく、運動の結果として出現する物の存在や状態が表現されている (p.39)。」

った。」(4.15M) (=19 再掲)

(48) (官房長官 (首相代弁：筆者加筆) が)

「(国民に：筆者加筆) できるだけ摂取しないようにしてもらいたいことが望ましい」(と語った。)(4.23E)

以上の「これから受益する」、「今受益進行中である」「受益した」ことを表す文末表現を伴った用例から、話者「私」は 1 つの自らの受益に、それぞれの時間的な意識が内在されていることが伺える。

この話者「私」の 1 つの受益に対し、文末表現に現れているように、どの時点で話者「私」が気づくかによって、受益はさらに話者「私」がこれから受益をするのか、受益を既に行っているのか、という 2 つの面に分けられる。話者「私」は、これから受益するのは「想定」から働きかけの時点であり、それは行為者の行為が生起する前であるので、＜受益未実現時＞である。また、今受益進行中である意識を「～してもらっている」と表現している場合、または受益したとして「～もらった」と発話されている時、それらは受益を確信しており、また受益した結果であるので、＜受益既実現時＞の発話である。

以上の「てもらう」文の用例に現れる文末表現から、話者「私」が自らの受益を＜受益未実現時＞なのか＜受益既実現時＞なのかという時間的な受益までのプロセスの中の時点として意識しているのではないかと考えられる。

では、「てもらう」文で話者「私」は発話の際に自らの結果的受益について、プロセスとしてではなく＜受益未実現時＞のみ、または＜受益既実現時＞のみを意識して表現しているということはあるのだろうか。次章では話者「私」の受益にとってのこの二つの面の関係を見る。そのため、次でまず表 4.3 の (iii) 行為者から話者への行為の有無にかかわらず (iv) 受益したと捉える話者からの受益事態への原因への関心という点に注目する。話者「私」が何によって受益結果状態になるのかという受益の仕方について、「てもらう」が複文で用いられる場合から探る。複文では従属節の事態と主節の事態との関係が、従属節接続表現によって示される。そこで話者「私」の発話する「てもらう」受益原因行為や事態への意識が、「てもらう」従属節に現れる接続表現によって探ることができると考える。そして「てもらう」＜受益未実現時＞と＜受益既実現時＞とが別々ではなく受益結果への進行と結果として連鎖しているのか、話者「私」の受益が何らかの原因によってその影響結果であるという捉え方をしているのかという、「てもらう」話者「私」の受益の時間的プロセス意識と因果意識を探っていく。

#### 4. 3. 1. 3 従属節「てもらう」の接続表現

ここでは、「てもらう」と表現する話者「私」の受益が何らかの原因による影響結果であると捉えていることを、従属節に現れる「てもらう」の接続表現の特徴から説明する。表 4.3 で、(iii) (iv) (v) は、話者「私」の受益にとって、行為者の行為という受益の原因



が実際にあるか、実際に無いとしても話者「私」が原因事態を設け、その影響から受益したと考えているということについて、4つの「てもらう」文の特徴を対比した。そこでは、全ての「てもらう」文に原因事態による受益なのだという意識がある。これは話者「私」が「てもらう」と言う時には、何らかの原因からの影響結果であるという意識が含意されているということである。まず、話者「私」が他者の行為や事態を「私」の受益原因であると捉えていることが複文従属節に現れる「てもらう」の接続表現の特色を数値の傾向から示す。次に、その用例を例示する。

従属節の「てもらう」に接続する表現という用語と分析について、次のように扱う。本研究では「てもらう」が従属節に現れた時、従属節と主節との関係がどのような意味関係にあるのかを見る為、接続助詞ではなく「接続表現」という呼称を用いる。この「接続表現」とは、角田（2004:5）が「日本語には多くの接続表現（従来、接続助詞と呼ばれているものも含む表現）がある。例えば条件節を作るものには、ト、バ、タラ、ナラ、テモなどがあり、原因・理由を表すものにはタメ（ニ）、ノデ、カラその他があり、逆説を表すものにもニモカカワラズ、（略）その他、多くの接続表現がある」と説明している呼称に倣っている。<sup>89</sup> また、本研究では接続表現の傾向を見る上で、類似した意味を持つ表現形式間の差異や対比は行わない。例えば条件節での接続助詞「と」「ば」「たら」「なら」の差異という形式の分析ではなく、条件節というカテゴリーとして捉える。そして形式の種類について、条件節（てもらう＋ば、たら、と）、譲歩節（ても）、否定形＋条件節（てもらわないと・等）、可能「てもらえる」＋条件節がある。本研究で条件節は、話者「私」の受益が未実現か否かという観点で扱うため、発話の「～てもらったらいいいよ」と「～てもらえばいいよ」の差異は問わず、また譲歩節「～てもらってもいい」や「～てもらわないと困る」も全て「条件文」として考える。

従属節「てもらう」の接続表現を挙げると次の表 4.5 のようになる。

---

<sup>89</sup> 本研究は結果的に、角田（2004:5）が「日本語の中で、多様な接続表現を使い分ける根底に、モダリティ、および従属節と主節の接続が表す意味関係が重要な役目を果たしている」としている主張に、逆に接続表現の特徴を見ることから「てもらう」従属節と主節との関係を探るものとなっている。詳しくは 5.2.2.2 で説明する。

表 4.5 従属節「てもらう」の接続表現

接続表現 <sup>90</sup>	受益未実現時(n=84)			受益既実現時 (n=16)			計 (n=100) (%)
	コーパス	新聞	計(%)	コーパス	新聞	計(%)	
1)条件節(ば、たら、と)等	28	15	43 (51.2)	0	0	0 (0.0)	43(43.0)
2)て節 (～てもらって、～)	24	8	32 (38.0)	5	11	16(100.0)	48(48.0)
3)条件節以外の「と」(引用の「～てもらう」と言う等)	5	4	9(10.7)	0	0	0 (0.0)	9(9.0)
計	57(67.9)	27(32.1)	84(100.0)	5(31.2)	11(68.8)	16 (100.0)	100(100.0)

表から、＜受益未実現時＞には条件節と「て節」が多く用いられている事、＜受益既実現時＞では「て節」が用いられる傾向にあることがわかる。このうち 3)の「と」という接続表現は、本研究の資料に見られる「てもらう」文では他者の会話の引用で使われている。そこで複文後件との事態間の関係を見る上で、本研究では条件節と「て節」に注目して、「てもらう」前件が後件に対してどのような関係になっているのかを例示していく。

条件節は、その節の内容があれば、後件主節の事態が成立することを表す。まず条件節の用例を挙げる。

(49) (部長が、販促担当者に、ケーキを買った場合に、配達してくれるといい、という希望を提案している。)

「配送してもらえるといいですねー。」(m1748)

(50) (印刷物を一緒に作っている教師同士の話。1人の教員が、印刷担当の教員に、もう印刷が終わってしまったか聞いている。その理由を説明して。)

「いや、ここんところちょっとさ、うん、かえてもらえればわかりやすいかなーと思ったの。」(f3946)

次に「て節」は、研究者によってその意味分類の仕方が様々である。<sup>91</sup> しかし、本研究

<sup>90</sup> 有効用例 241 例中、表 4.4 に示した文末表現 133 例(55.2%)と接続助詞 8 例(3.3%)を除いたものである。分析対象の複文は全て前件と後件が話者「私」という同一主語であった。

<sup>91</sup> 「て節」の分類は、例えば仁田 (1995:91) では次のように用法概要が示されている。

で抽出した「てもらう」文の「て節」の用例に見られるのは、時間的な進行順序関係の用例と原因を示す用例であった。「て節」は＜受益未実現時＞、＜受益既実現時＞のどちらでも用いられている。話者「私」は「て節」で、これから行為者にしてもらいたい順次行為を表現して、行為を列挙する用例はわずかである。<sup>92</sup> 次の(51)(52)は＜受益未実現時＞で、時間的順序関係を表す「て節」の用例である。

(51) (デマンド計を取り付けるためには、新しい型のメーターに取り換える必要があることを、会議で説明している)

「それで、それーをまずつけてもらって、あとはもー、デマンド計ってゆうのは、それにプラスアルファ、はめつけるだけですから。」(m3279)

(52) (大学のシンポジウム運営担当の教授達の間で、発表していない他の発表者の居場所をめぐって意見が交わされている。)

「まず前半の部分については(相槌(略):筆者加筆)、あの一、えーと一、話さない方は下に下りてて、(相槌(略):筆者加筆)それで、やってもらって、(相槌(略):筆者加筆)それであと一、後半はみんな上がってもら(相槌(略):筆者加筆)ってと、ゆうことですね(相槌(略):筆者加筆)、やるならば。」(f1301)

次の「て節」は、時間順でもあるが、後に続く主節のための条件という意味もある。

(53) (JA 全農の園芸課長が)

「消費者にまず食べていただき、安全と実感してもらえれば」と話した。(4.10M)

タイプ		シテ節の表す意味	生起時関係	主体
付帯状態		主たる事象の実現のし方	同時	同一
継起	時間的継起	時間的先行関係	継起	同一(異種)
	起因的継起	起因的事象	継起	同一(異種)
並列		共存並立する事象	同時(異時)	同一/異種

(仁田 1995:91 表 1)

<sup>92</sup> 本研究の資料では、「て節(相当)」に時間、原因理由の意味が無いと解釈できたのは次の 2 例である。

(i) (若い世代という記事：大学生がアラブ地域を訪れ、滞在中は何度か地元の家族に招待されたという話)

「ごちそうを出してもらい、歌ってもらい、アラビア語を教えてもらいと、人々の優しさに接した。」(4.16M)

(ii) (首相指示と明示した、官房長官発言)

「念のために早い段階から出荷を差し控えていただき、かつできるだけ摂取しないようにしてもらうことが望ましい」と語った。(3.23E) この例は「且つ」で並列の意味が明示されている。

(54) (農林水産副大臣が 検査数値を上回った品目のみを会見で言及した官房長官に)  
「基準値を下回った品目も言ってもらい、風評被害を防ぎたい」と述べた。(3.25M)

(55) (被災者の声)  
「自宅は(略)津波が恐ろしく、もう住みたくはありません。仮設住宅を早く造って頂  
き(略)地区の顔なじみの人達と一緒に移り住みたいです」(4.3M)

さらに、時間順を複数の「て節」でつないで順次結果に向かっていく「てもらう」文もある。

(56) (会議。仕事で得た情報を掲示しているが、掲示の後、情報をみんながいつでも確認できるようにしようという話になった。サブリーダーがそれについて説明している。)  
「でー(略)はがしたやつを一、(略)[名字]さんに一、今、その一、データで打ち込  
んでもらって一、」(m8612)

(57) ((56)同場面)  
「あの一、周知みたいな感じのファイルに、まとめてもらうようには指示してあります。」  
(m8612) (= (35)再掲)

これらの条件節や「て節」を伴って従属節で用いられる「てもらう」文を見ると、「てもらう」従属節前件と、その主節である後件との間にも、時間的な前後関係と、因果関係があることがわかる。例えば (55) では、「仮設住宅を早く造って頂く」ことが実現してから、移り住むのである。また、「地区の顔なじみの人達と一緒に移り住みたい」という願望の達成には、仮設住宅ができることが条件である。つまり、前件の「てもらう」従属節で示される行為という原因によって、後件の話者「私」の願うプラス状態が達成できるという、複文による話者「私」にとっての受益の因果関係が表現されている。本研究の複文従属節と主節の関係は、必ずしも論理関係上成立していなくても、話者「私」が自らの受益によって、それが受益の原因である、その結果の受益である、と捉える場合を話者「私」にとっての原因、結果とし、複文従属節と主節の因果関係として扱っていく。<sup>93</sup>

次に、＜受益既実現時＞で「て節」が用いられている用例を示す。受益既実現時の「て節」は既に受益した話者が受益結果から「てもらう」と表現する時の受益原因を表現している。

---

<sup>93</sup> 中右 (1994:43) では、「条件文に限らず、複文に含まれる意味関係の可能な解釈」として、「命題内容領域」という「現実世界の客観的事態間の条件・帰結の関係」、「命題認識領域」という「前件の命題内容の真実性を前提として、後件の命題内容の真実性を結論づける主観的推論関係」、発話行為領域という「条件節の中身が主節を軸とした発話行為を適切に遂行するための保留条件、ただし書き、前書き、ていねいさの対人関係配慮など、多様な談話機能を果たす」という関係機能があると指摘している。

(58) (教師同士、宿泊費の話)

「ディスカウントしてもらって。で。(3 千円か 4 千円)」(m2529) (= (11)再掲)

(59) (完成車メーカー)

「世界的なサプライチェーン (供給網) を断たない為、T 県の会社に不足分を陸送してもらい、しのいだ。」(4.11M)

(60) (天皇皇后両陛下の訪問を受けて被災地町長が)

「みなやるせない思いになっていたが、今日訪問していただいて笑顔が多くなったように思います」と話した。(4.9M) (= (16)再掲)

(61) (休憩時の雑談。特産物の話。食べたことがあるかを聞かれた話者が答える。)

「あります、あの一、お土産で買ってきてもらって」(相槌(略):筆者加筆) (m6521) (=18 再掲)

この用例では「て節」に現される行為「ディスカウントする」「お土産で買ってくる」「訪問する」「不足分を陸送する」が、話者「私」の受益の原因である。(58) (59) のように受益原因に話者「私」が頼んだその結果話者「私」が受益することができたと表現している場合も、(60) (61) のように話者「私」が思いがけず受益した結果を表現している場合もある。これらはいずれも話者「私」の受益には、原因となる「てもらう」行為や事態があって、そこから「受けて」話者「私」がプラスの変化結果状態になっていることがわかる。このことから、従属節における「てもらう」の接続表現の傾向からの特徴は、受益原因への話者からの関与意識が伺えると言えるのではないだろうか。

次に、表 4.3 から (iii) 行為者から話者への受益行為と (v) 話者受益結果の関係が直接か間接か、という観点を再度説明する。

#### 4. 3. 1. 4 受益の直接間接

話者「私」に向かう行為・事態を直接受益することを表すのは A.「想定再帰的てもらう」文と C.「話者遠因的てもらう」文である。その時話者「私」は行為者の行為のターゲットである。一方、間接受益「てもらう」文である B.「話者誘因的てもらう」文と D.「拡張関与的てもらう」文は、いずれも行為作用が話者「私」に直接向かわないことからの受益を表す。4.2.4 で見た、子供達に園に慣れてもらう事や、30 度の暑さになるのを遠慮してもらうことを表す「てもらう」文は「想定」があり、受益の実現の面ではこれから受益することを表す<受益未実現時>の「てもらう」文であると言える。それに対し、D-2「拡張関与的てもらう」文は「想定」が無く、既に「会社に育ててもらった」と心理的にプラスの変化結果状態になっている。これは受益の時間的な進行、経過を経た<受益既実現時>の「てもらう」文である。このことから、間接的な受け方を表す「てもらう」文の中にも、さらに<受益未実現時>と<受益既実現時>の「てもらう」文があるということがわかる。このような間接的な受け方を表す「てもらう」文の用例は表 4.2 の B.「話者誘因的てもらう」

文 D.「拡張関与的てもらう」文を合わせても 31 例 (12.9%) と多くはない。しかし、話者「私」は<受益未実現時>に行為や事態が話者「私」に向かわないことにも「想定」や「期待」をし、<受益既実現時>に、直接話者「私」に向かわない事に対しても受益の原因理由だと捉えて「会社に育ててもらった」と表現する。次章ではこの点についても考察していく。

以上をまとめると「てもらう」文には次の 3 つの特徴的な観点があることがわかる。次項で整理して、これを第 5 章で考察することにする。

#### 4. 3. 2 話者受益「てもらう」文の考察観点

この第 4 章で「てもらう」文の用例から、話者「私」が発話する「てもらう」文が「私」の結果的な受益を表す文であることを検証した。用例は 4 つの「てもらう」文のタイプに分けられた。本研究では、それらの表す意味と文末表現と複文従属節の接続表現の使用傾向から、話者「私」の「てもらう」という発話には自らの受益結果についての特徴的な意識が 3 点見出せると指摘する。次にその 3 点の意識を話者「私」の「てもらう」受益認知の考察観点としてまとめ、第 5 章で考察していく。

第 1 点は「てもらう」文には受益の<受益未実現時><受益既実現時>の時間的意識と、受益が発話時に既に実現したかことであるか否かという意識があることである。話者「私」が「てもらう」受益を時間的な推移のプロセスを経た結果だと捉えると考えることで、「てもらう」文が使役的な意味も受身的な意味も持つことを説明できると思われる。

第 2 点目は「てもらう」受益の原因への意識である。話者「私」には受益結果が何らかの原因によって自分にもたらされるという、いわば原因を自らの受益結果にプロセスとして含意している。この意識は、想定して働きかけた結果だけでなく思いがけず受益した場合も、自らを何らかの原因からの結果として受益状態になったと意識している。

そして、これらの受益のプロセスという時間的意識と受益結果、受益原因という意識は、1 つの「てもらう」で表現される。これらの第 1 点目と第 2 点目は、受益がプロセスの結果として意識されているという観点である。話者「私」の受益には第 3 章で説明したような、話者「私」の受益結果へのひとまとまりのプロセスが話者「私」の頭の中にあるものとし、それを考察観点として、第 5 章の考察を行う。話者「私」にとっての 1 つの受益という事態の中のプロセスであれば、受益するための「働きかけ」と、受益という「受けた」ことの報告や感謝という 2 つの事を 1 つにまとめ「てもらう」と表現することも自然なことであるからである。

第 3 点目は、受益の直接間接という捉え方である。4.3.1.3 では間接的な受益を表す「てもらう」文でも<受益未実現時>の受益と<受益既実現時>の話者「私」の受益プロセス意識があるだろうということを示した。逆に話者「私」が間接的な事態からの受益を捉えられるのは、上述のプロセスの枠に沿っているからなのではないか。

本研究での目的は、話者「私」が行為や事態からの受益を表現する時、「てくれる」ではなく「てもらう」と表現する話者「私」は、どのように受益を捉えているのかを探ることである。さらに、話者「私」の受益であれば、「彼が私のためにそのことをした。私は嬉しい。」という私が受益状態になった結果のみでなく、彼がしたことも含めて1つの表現形式「てもらう」で表現するのはなぜなのかを探ることである。次章ではここに挙げたつの観点から「てもらう」で表現される話者「私」にとっての受益を考察していく。

## 第5章 考 察

第4章では話者「私」が受益することを表す、大きく4つの「てもらう」文があることを示し、話者「私」の「てもらう」と表現する用例から、話者「私」が受益する際の意識の表れとして次のような観点を抽出した。

まず、文末表現からはこれからの受益と、今受益進行中と、受益した結果の「てもらう」文があり、それが話者「私」の3つの時点の時間的な意識と、時間順の意識が含意されていることを指摘した。そして話者が「てもらう」と発話するこの3つの時間順の時点は、さらに話者の受益実現という観点で文末表現と接続表現から大きく＜受益未実現時＞と＜受益既実現時＞の2つに分けられることを述べた。また、話者「私」が直接話者「私」に向かわないことから間接的に受益し、「てもらう」と表現するという特徴もあった。

本章ではこれらの特徴を考察し、3つの点を指摘する。すなわち、「てもらう」文には話者「私」が受益結果を表現するだけでなく、自らの受益に至る時間的プロセスがあると認識していること、行為者の行為や事態という受益原因によって自らの受益が結果的に実現するという因果関係のプロセスの認識があること、話者「私」が関与できない間接的な行為や事態からの受益は、時間的因果的プロセスで話者「私」が受益を捉えるため、その捉え方の派生的な用法として「てもらう」と表現できるということである。そして、日本語話者「私」は自らの受益をただ「受益した」と言うだけでなく、どのように受益する／したのか、何から受益する／したのかも、「てもらう」によってひとまとまりに捉えて表現している。本章ではこれらのことを考察していく。

さらに授受動詞「もらう」の補助動詞的用法が表現する受益結果と、その結果に至る時間的プロセス、受益結果をもたらす原因との因果関係という捉え方について、日本語に特徴的な表現形式であるとされる「のだ」文や「ている」の結果残存用法にも、同様の思考プロセスがあるとされており、それらとの共通性が指摘できることを述べる。そしてこの「てもらう」という表現形式も日本語話者の〈事態把握〉の特徴が言語化されたものと言えることを考察としてまとめる。考察は次の順で説明していく。

5.1 でまず、文末における「てもらう」文を取り上げ、「てもらう」文が時間的プロセスと受益原因の関与を表すうちの、主に「てもらう」文に時間的プロセスがあることを、「働きかけてもらう」タイプから考察する。

次に5.2で、複文前件の従属節で接続表現を伴った「てもらう」文を取り上げ、「てもらう」文が時間的プロセスと受益原因の関与を表すうちの、受益原因が関与した結果的受益を表すことを考察する。

この5.1と5.2では話者「私」が直接受益するタイプについて考察するが、次の5.3では、



間接的な事態からの受益について考察する。そこでは第 4 章で指摘した話者「私」の受益の仕方で、話者「私」に向かわないことから受益するということについて、話者「私」がなぜそのような向かわないことから影響を受けて「てもらう」と表現できるのかを探る。

最後に 5.4 で 5.1 から 5.3 まで見た本研究の話者「私」が発話する「てもらう」文についての受益の捉え方の考察をまとめる。

## 5. 1 話者受益のプロセス

「てもらう」が文末で用いられている時と、従属節で用いられている時の表現の特徴のうち、本節ではまず「てもらう」文末表現の時間的局面的意識について考察する。

### 5. 1. 1 ひとまとまりの受益の中の時間的プロセス

4.3 で「てもらう」文の文末に、受益がこれからのことか、受益進行中か、受益した後で「てもらう」と発話しているかということが文末表現からわかることを示した。ここではそのような時間的各時点が、ひとまとまりに受益への時間的順番となることを説明する。

#### 5. 1. 1. 1 受益気づきの時点とひとまとまり

本研究では「働きかけてもらう」文については第 3 章で、「想定」し働きかけて行為者の結果を再帰的に受益すると考え、それを第 4 章で確認した。話者「私」はまず、自身が受益結果状態になることを「想定」し、意図して行為者に働きかける。それに応じて次に行行為者の行為が生起する。そして、その行為が話者「私」に及び、話者「私」が結果的に受益する。その時、話者「私」がひとまとまりにこれらの流れを受益結果に結びつけて意識していると考ええる。

第 4 章 4.3.1 の表 4.4 で見たように、表中での例文 (1) ～ (4) のル形で「これから受益する」時点と、(6) の「ている」形で「今受益進行中である」と気づく時点、(5) タ形や (6) の「ている」「てしまう」「ておく」による「受益した」時点という 3 つの時間的意識が表現されている。<sup>94</sup> これらをそれぞれ〈はじめ〉〈なか〉〈おわり〉としよう。各時点で

<sup>94</sup> 奥田 (1993:50) は、1 つの目的への達成には各局面が時間的に達成に向けて順序づけられており、「ル」形 (動詞の終止形)、「ている」や「タ」形はその時間的順序を捉えた表現形式であると次のように説明している。

「おそらく、アスペクトのかたちの選択の必要は、なによりまず、ふたつ、あるいはそれ以上の動作の、変化の、状態の時間的な関係をとらえるときに、おこってくるのだろう。人間の社会的な活動にしろ、個人的な活動にしろ、いくつかの動作の連続であって、それぞれが独立して存在しているわけではない。ひとつの目的でひとつの活動へとむすびつく、いくつかの動作は、因果関係にしばられているばかりではなく、時間的にも条件づけられていて、きびしい時間的な順序のなかに配置されていなくてはならない。」(奥田 1993:50)

の「てもらう」意識はこの順番に受益プロセスを成し、各時点はひとまとまりの受益の中の1つの受益認識時点であることを指摘していく。<sup>95</sup>

まず、「てもらう」文の〈はじめ〉の時点では話者は「想定」した自らのプラスの変化結果の実現を目指し、意志表出や働きかけを行っている。(1)は「(書類を)作ってもらう」ことが実現すれば、話者「私」は自分が受益状態になると思って発話している時点である。

(1)「悪いんだけど作ってもらいたいんだよ。」(m7645)

〈なか〉は(2)のように今まさに受益が進行中という確信を持って発話されている。

(2)(首相が)

「防衛大臣に自衛隊の(さらなる)動員を検討していただいているところです。」(3.13M)

〈なか〉の時点で、話者「私」は「動員を検討する」行為が未実現なのではなく、実現しているが達成までには至っていないという捉え方をしている。検討するという行為は今、目の前で確認しているわけではないが既に着手され、行為の生起は既にあると話者は確信している。

さらに、断続的にこれまで行われてきた受益行為が、今回も、今後も実現できると考えている(3)のような「てもらう」文も、長いスパンでの継続中という実現意識と言える。

(3)(仕事の獲得。担当が例年取れる仕事をまだ取っていないので、上司が注意している。)

「各学部ともこちらでやらしてもらってるでしょ↑(↑は上昇調：筆者加筆)」(m524)

また、次の「ている」は話者「私」が行為結果の実現を確信していることが読み取れる。

(4)(仕事で、話者が送るように頼んだことが既に行われて、[社名]に頼んだものが既にあることを話者が確信している)

「[社名]から一、[社名]に一送ってもらってるはずだから一」。(m5543)

---

<sup>95</sup> 話者「私」の中の時間的な受益達成までのこれらの推移は、動詞「する」という語彙についてアスペクトを指摘した奥田(1993)の呼称を援用している。奥田(1993:49-50)はひとつの動作の中には時間的な局面があると次のように説明している。

『する』というかたちの動詞は、限界へ到達した動作・変化・限界へ到達することで完結した動作・変化を言い表している。限界にまでいたって、完結し、そこからさきへはつづかない、ということで、このような動作・変化を言い表す『する』は、《完成相》とよばれることになる。さらに、この完成相の動詞は、《はじめ》から《なか》をへて《おわり》にいたるまでのひとまとまりの動作を言い表すこともできる。完成相の動詞は、限界へ到達した動作・変化とひとまとまりの動作とを、その意味にいいあらわすのである。ひとまとまりの動作は、完結しているということでは、限界へ到達した動作でもある。」(奥田 1993:49-50)

これらの「ている」は、受益に至るプロセスの中での結果の受益状態への確信、恒常的実現確信、結果の残存確信を表し、全て受益状態が生起または達成しつつあると話者「私」が受益に気づいた時点で表現している。

それに対し、話者「私」が受益したと実感して発話される「てもらう」文は、〈おわり〉の時点だと言える。(5)の「(時間を)ずらしてもらいました」のように、受益が既に実現している段階で話者「私」が受益したと認識し、それを表現している。

(5)「視察があるので、(時間を：筆者加筆)ずらしてもらいました。」(f5585)

(5)のタ形は過去のことを表現しているのだろうか。話者が約束の時間をずらしてもらう交渉をしたのは過去のことであるのは間違いない。しかし、話者の発話の意識で、「ずらす」という行為が過去であることを述べているタ形か、「ずらす」ことによって起こり得る支障を回避してあることを述べているタ形か、その発話意図を考えた時、(5)の発話では、後者であろう。話者が相手行為者に交渉して、行為者がそれに合意し、話者「私」側が支障を回避して視察の準備が完了していることを述べているのだと言えるだろう。したがって、過去というよりも受益状態の想定から、その実現に向けて依頼し、受益達成完了までというプロセスを経た、むしろ事態のアスペクト的完成相状態のタ形の「ずらしてもらいました」であると言える。<sup>96</sup>

用例の〈はじめ〉では話者「私」の「想定」が意図した受益結果になること、〈なか〉〈おわり〉は、受益結果になる確信や、受益状態になったことという、すべて話者「私」が結果的に受益状態になっていることに集約されて、話者「私」は自らの受益をこれらの各時点がプロセスでそれがひとまとまりになった結果状態として捉えている。それぞれの時点はその結果に対して発話の今の時点が、受益前で仮想結果を「想定」している時点なのか、受益進行中だと気づいた時点なのか、受益結果として変化した状態の時点なのかということを行い表している。それを図にすると図 5.1 のようになる。

<sup>96</sup> 現代日本語（共通語）のアスペクト・テンスの基本は、スル／シタは完成相、シテイル／シテイタは継続相であるとされている。工藤（1995:36）は次の表のようにまとめている。

	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

一方で、完成相のシタは、アスペクトから独立させて捉える見方がある。鈴木（2012:39）は、古典日本語ではアスペクトとパーフェクトを区別すると次のように指摘している。

「工藤真由美（1995）などのつかい方にしたがって、ひろくアスペクトといったときにパーフェクトをふくめることもあるが、古典日本語においては、パーフェクトはアスペクトと完全に区別されるべきものである（鈴木 2012:39）。」そして、結果に焦点を当ててパーフェクトとする考え方を「古典日本語のパーフェクト形式であるタリ・リ形とアスペクト形式のはだかの形やツ・ヌ形をくらべると、タリ・リ形で表されている意味は、アスペクト形式のように運動の過程に焦点はなく、運動の結果として出現する物の存在や状態が表現されている（p.39）」と示している。

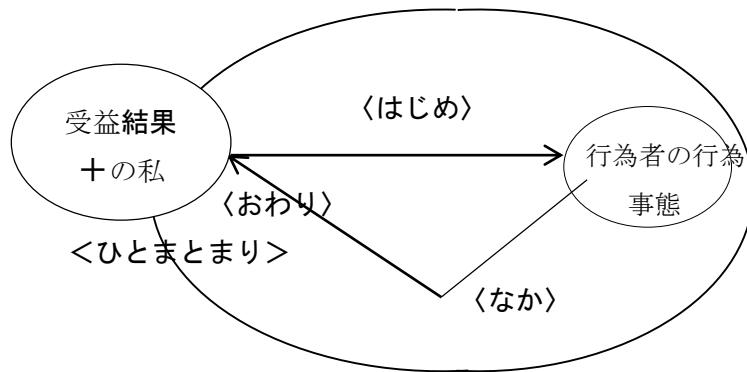


図 5.1 ひとまとまりの話者「私」の受益の中の受益状態気づき時点

次に、「てもらう」文の文末に現れる話者「私」の受益の捉え方から、ひとまとまりの受益の中での3つの受益の時点は、そのプロセスの中の焦点化であることを指摘する。「てもらう」文には働きかけも「受ける」面もあり、多義であるということが第2章先行研究で示した澤田（2006b:258）等から指摘されている。本研究のプロセスのひとまとまりという考え方から「てもらう」の多義の説明ができることを次に述べる。

#### 5. 1. 1. 2 働きかけの時点と受ける時点

ここでは「てもらう」文の働きかけと受ける意味がその時点の局面の焦点化であることを指摘する。〈はじめ〉〈なか〉〈おわり〉は、話者「私」が受益に気づく時点の3つの局面である。「てもらう」文にある〈はじめ〉の時点で話者「私」が受益に気づくと、話者「私」はその実現を意図する。それを「てもらう」で表現すると、「てもらう」に働きかけの機能が生じる。〈なか〉の時点で話者「私」が受益に意識を向けると、話者「私」はその時点で、今、受益の結果達成に向けて進行中、継続中の曲面だという確信を持つため、「ている」は、話者が受益実現への確信の表出機能の他、その行為に既に着手したはずの行為者への信頼を表現するという機能も生じる。〈おわり〉の時点での気づきは、受けた結果に対する感謝や、目的達成、影響を受けた結果だということの表出である。これを各機能が生じる時点で見ると、行為者の行為の着手や事態の実現をターニングポイントとして、〈はじめ〉は〈受益未実現時〉、〈なか〉〈おわり〉は〈受益既実現時〉に分類される。それとともに、話者「私」は〈はじめ〉の〈受益未実現時〉では、受益結果になる「想定」や働きかけの「仕手」であり、〈なか〉と〈おわり〉の〈受益既実現時〉では、行為や事態が既に「私」の受益に向けて進行し、そして受益した「私」であるので話者は「受け手」である。使役的「てもらう」文、受身的「てもらう」文と言われて、どちらが「てもらう」文の本質が議論されているが、本研究では、話者「私」の時間的プロセスを持つ結果的受益というひとまとまりの中の、それぞれの時点が焦点化された機能だと説明する。使役的と言われるのは〈はじめ〉の〈受益未実現時〉での働きかけ、受身的と言われるのは〈おわり〉の〈受益既実

現時>での受益ということである。

次に、「てもらう」ひとまとまりの結果的な受益で、話者「私」の<受益未実現時>の受益への意識と<受益既実現時>の受益への意識が時間的に連鎖していることを説明する。

### 5. 1. 1. 3 ひとまとまりへの<受益未実現時>と<受益既実現時>

「てもらう」受益へのプロセスに3つの時点での気づきを表現するということを、別の見方で見れば、ひとまとまりの受益の中に<受益未実現時>と<受益既実現時>があることを説明したが、ここではさらにその未実現から既実現へは連鎖的につながっているということを指摘する。<sup>97</sup> (1 再掲) の例で説明する。(1) は休み時間に上司が部下に書類作成を頼んでいる状況である。

(1 再掲) 「悪いんだけど作ってもらいたいんだよ。」(m7645)

「てもらう」文の〈はじめ〉の時点では話者は「想定」した自らのプラスの変化結果の実現を目指し、意志表出や働きかけを行っている。(1) の〈はじめ〉で話者は話者「私」は書類が要る状況になり、まず、「(書類を) 作てもらう」ことによって、自分が受益状態になると想定する。そこで部下に発話によって願望を伝達する。

図 5.1 の「想定」から働きかけまでの〈はじめ〉の時点では、話者「私」が行為者の行為や事態によって受益できる、と気づいたのが、まだ行為や事態が起きていない<受益未実現時>だということである。話者「私」はまだ起きていない行為や事態をこれから実現させたいと思い、働きかけを意図した願望「してもらいたい」や言い切り「してもらう」という発話をしている。この<受益未実現時>で話者「私」が働きかけを行うのは、既に「想定」という仮想体験での受益結果を実現させたいからである。しかし、この時点で部下の行為は未実現で、書類はまだ作成に着手されていない。

次に、(1) の〈はじめ〉で部下に依頼をした上司は、〈なか〉の時点で誰かに「あの書類はできたか？」と尋ねられる。その時の(1) の話者「私」は焦って「今、作ってもらってます。」等と答えるだろう。〈なか〉の時点で「今、してもらっている」と発話する時、話者「私」は行為を、たとえ実際に見ていなくても進行中だ、と話題の行為に意識を向けて、自らが受益する確信を述べている。つまり話者「私」は話題化されたその時に、その行為の実現と進行を確信的に意識したのであり、意識は<受益既実現時>での「てもらう」である。

その後、部下が作っていた書類が出来上がって話者が書類を手にした時、上司である話者「私」は〈おわり〉の時点である。(1) の話者「私」は誰かに、「あの書類、どうなった？」と尋ねられた時、私は安心して「もう、作ってもらって、今コピーしています。」等と言うだろう。話者「私」が「してもらった」と言う時、話者「私」は行為者の行為や事態から

---

<sup>97</sup> 用語は本論 4.3.3.1 による。

受けた結果によって、プラスの変化を体験し、実感している。つまり、＜受益既実現時＞では話者「私」が受益を確信または体験している。この＜受益未実現時＞と＜受益既実現時＞とに共通した特徴は、話者「私」が「てもらう」と発話する時に、話者「私」にとっての受益の、結果状態を常に指向して表現しているということである。「想定」時は受益結果を仮想体験し、働きかけ時は受益結果を目指すため、さらに進行中の確信と受益完了時点とをあわせて、いずれも話者の頭の中にあるのは、受益結果状態の「私」である。つまり、「てもらう」と発話する話者「私」は、常に受益した結果状態から、自らの受益を表現している。

さらに、＜受益未実現時＞から＜受益既実現時＞への連鎖は、時間的な推移として＜ひとまとまり＞の受益結果に内在する。つまり「てもらう」にはプロセスを経る時間的な巾がある。言い換えると、話者「私」は自らの受益結果を＜受益未実現時＞と＜受益既実現時＞を時間的な連鎖プロセスとして受益結果までを＜ひとまとまり＞に捉えている。また、プロセスでは行為者の行為の実行や受益原因事態がターニングポイントとして、話者「私」の立場が「仕手」から「受け手」に換わることが含意されている。それを図 5.2 のように図示する。

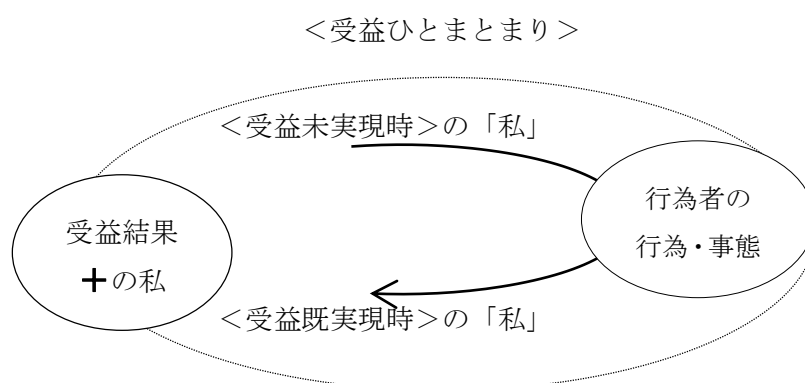


図 5.2 話者「私」の受益未実現時と既実現時の連鎖的ひとまとまり

次に、話者「私」が自らの変化結果状態にはプロセスを経ているという意識が強いことについて、この受益プロセスが二種類あることを指摘する。

## 5. 1. 2 二種類の受益プロセスの辿り方

5.1.1 で、話者「私」は仮想的に、また体験的に受益結果から受益を捉えていると説明した。このような話者「私」は自分自身の受益結果状態には、受益結果までの時間的な巾があり、話者「私」は受益結果に至る時間的順の＜受益未実現時＞から＜受益既実現時＞への推移を、自らの体感として連鎖的に、ひとまとまりに捉えている。言い換えると、受益結果に付随させて受益の結果と過程すなわちプロセスを、ひとまとまりの受益の中の時間

的推移として捉えているのである。次にこの話者「私」の中の受益までの推移の辿り方に〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉という二通りがあることを説明する。

### 5. 1. 2. 1 想定プロセス

話者「私」がこれから受益しようとする〈受益未実現時〉では、話者「私」は、4.2 (9) 「また漁がしたい。行政には元通りの生活ができるように支援してもらいてえな」(4.13M) という被災者は、その願望が実現して、被災者の「私」が望んだ状態になった結果状態が、既に一度、「想定」という時点で仮想体験されている。働きかけや行為者の行為、事態はそのプラスの結果状態実現へのプロセスである。また、〈受益既実現時〉の「てもらう」文は、4.2 の (12) 「町内で被害の少ない家を回り、カレーのルーをわけてもらいました。」(3.21M) という被災者のインタビューの応えから、話者「私」が望んでいた、カレーを作って被災者がそれを食べることができたという受益達成までのプロセスを話している。先に示した話者「私」の受益結果に対する〈受益未実現時〉と〈受益既実現時〉に分けるなら、話者「私」が仮想体験的に受益結果を「想定」し、行為者に行為を働きかけるところまでの〈受益未実現時〉のプロセスと、働きかけに応じた行為者の行為や、望んだ事態の実現があったから受益できたと発話する〈受益既実現時〉のプロセスは、この順番に受益のひとまとまりのプロセスを成す。この「想定」から結果までの一連のプロセスを本研究では〈想定プロセス〉とする。これは、前節 5.1 で示した受益の〈受益未実現時〉と〈受益既実現時〉の連鎖のひとまとまりと同じ方向の辿り方となり、しかし話者「私」の受益プロセスである〈想定プロセス〉は、さらに具体的な働きかけや行為からの受益ということと話者「私」が体験的に辿る。それを図にすると、〈想定プロセス〉の矢印は結果を「想定」する話者「私」から出発し、話者「私」が結果状態になることで再帰的に還るという示し方になる。

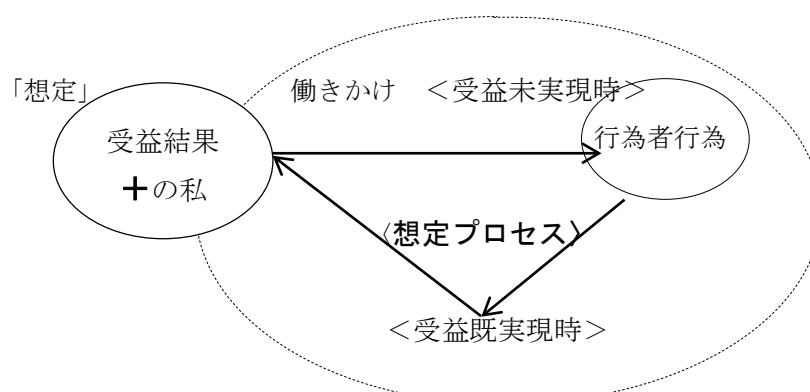


図 5.3 〈想定プロセス〉の受益のひとまとまり

〈受益既実現時〉の文末表現の「してもらった」結果は、「想定」して働きかけた結果だけでなく、思いがけず受益した場合にも、間接的なことから影響を受けたことも「して

もらった」と表現している。後者の間接的な事からの受益については 5.3 で考察する。

次に、思いがけず受益した「してもらった」話者「私」の受益にも、プロセスが含意されていることを指摘する。

#### 5. 1. 2. 2 顧みプロセス

話者「私」が受益結果になったとき、話者「私」は次のように「してもらった」と発話し、自らが受益状態になるという変化結果を体感している。しかし、「してもらった」は単に受益結果状態になったということだけを表示しているのだろうか。

(6) 話者（大学教員）が昔から利用しているホテルが、話者が交渉して 3000 円か 4000 円にディスカウントされたことを休憩時に聞き手（大学教員）に話している。

「ディスカウントしてもらって。」(m2529)

この (6) で話者「私」の受益は話者「私」が「安い費用で泊まれた」ことである。〈おわり〉の時点で話者「私」が「してもらった」と言う時、話者「私」は働きかけて生起する行為者の行為、「ディスカウントしてもらうこと」によって行為者の行為や事態からプラスの変化を体験できたことが「てもらう」文で表現されている。<sup>98</sup>

さらに、受益結果で「てもらった」と表現する時、話者「私」が働きかけないことからの受益がある。

(7) (阪神経験者でボランティア希望者が)

「(被災県出身：筆者加筆) の人にたくさん (当時私を：筆者加筆) 助けてもらった。」

(8) (支援窓口の市長が)

「(支援申し出国の：筆者加筆) ドイツ企業に当時、私 (市長：筆者加筆) を育ててもらった。」(4.15M)

これらは「想定」や働きかけという〈受益未実現時〉が無い。〈受益既実現時〉の受益結果状態から話者「私」が顧みて、その受益状態になぜなったのかという原因があったことを語っている。このように話者「私」が受益結果から受益した原因を体験的に辿ることは、いわば話者「私」の顧みである。これはただ単に「受益した」というだけでなく、その原因に対する話者「私」の体験的意識を表している。本研究ではこれもプロセスとみて、〈顧みプロセス〉と名付ける。〈顧みプロセス〉には、(8) のように、話者「私」が感じただけで、実際には作用が無いことからの受益を顧みている場合もあれば、(7) のように話者「私」が顧みて、受益原因行為に感謝を表している場合もある。

---

<sup>98</sup> 「てもらった」というタ形が、過去の回想だけではなく、どのように受益できたのかというプロセスや原因への話者の意識が含意されていることが伺える。



(7) のように有情の行為者の行為のおかげであるとき、有情の行為者は話者「私」に好意的な行為をしている。その好意的行為は、話者「私」が頼んだわけではないが、行為者が話者「私」の受益前の状態を知っていて、その状態には好意的な行為が必要だ、してあげたい、と感じたことによる行為だということが言える。例えば(7)では、被災したマイナス状態の私である。すると、話者「私」の結果的な受益状態をもたらす原因行為者の行為の、そのさらなる原因は話者「私」だということになる。そして、話者「私」は行為者の好意的行為が自らのマイナス状態、またはゼロ状態であったから、好意的行為が自分に差し向けられたのだということを、受益結果から顧みて納得している。次の(8)でも「私」は企業に入ったばかりの時は、仕事力が無いゼロ状態または一人前という意味ではマイナス状態である。企業での経験で力を付けたプラス状態の今の話者「私」は、企業によって受益しているということである。受益の実際は＜受益未実現時＞から＜受益既実現時＞の時間の流れがある。〈顧みプロセス〉の特徴は、あくまでも話者「私」の頭の中の受益過程と原因への体験的な辿り方であるという点である。図 5.3 ではそれを点線矢印で表している。行為者からさらに〈はじめ〉の話者「私」に至る点線は、話者「私」が(7)のようになぜ行為者が好意的な行為をしたのかという点で話者「私」の震災での被災というマイナス状態に、その原因があることを意識しているということを表している。また、(8)では話者「私」は企業に入ったばかりの時は仕事に対し未経験の私だったと、受益前の状態を顧みている。この受益感受は「私」の心理的な、自信と満足であろう。ここまでの顧みはさらに話者「私」の深層にある意識だと思われるため、図ではさらに細い線で表している。

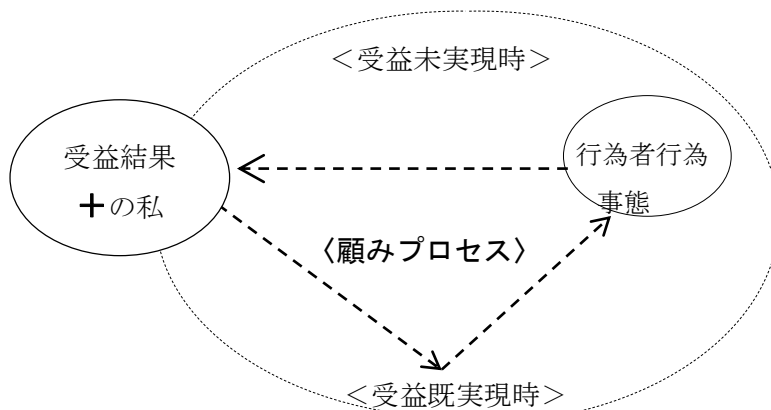


図 5.4 〈顧みプロセス〉の受益のひとまとまり

### 5. 1. 3 話者受益のプロセスのまとめ

以上、＜受益未実現時＞から行為者の行為を経て＜受益既実現時＞に至るプロセスの辿り方を〈想定プロセス〉と称した。また＜受益既実現時＞に受益原因を顧みている、またその原因の原因が＜受益未実現時＞のゼロ、またはマイナスの「私」だと顧みて納得しているプロセスの辿り方を〈顧みプロセス〉と名付けた。このそれぞれのプロセスは矢印の

方向が異なる。〈想定プロセス〉は、「想定」受益結果に向けて、時間的な経過順にプロセスが進行する。一方、〈顧みプロセス〉では、時間順ではあるが、その辿り方が逆向きである。さらに〈顧みプロセス〉は受益結果から話者「私」が受益原因の存在に意識を向け、話者「私」がなぜ受益したのかという原因に関心を示している。また、〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉はともに話者「私」の（仮想／実際）体験的受益結果に始まり、帰結している時間的な連鎖である。

これらのように、「てもらう」文には話者「私」の受益とその受益までを話者「私」が辿るというプロセスの含意がある。話者「私」は単に受益結果になった、ということが発話するのではなく、「てもらう」文で発話するということは、話者「私」が受益という変化結果状態になるまでに時間的なプロセスを経た結果なのだという、時間意識があるということである。

ここまで、「てもらう」の文末表現を中心に話者「私」の受益の意識を考察した。次節では4.4.3で挙げた「てもらう」に後接する表現のうち、従属節「てもらう」に伴われる接続表現の傾向が表す、話者「私」の受益の意識を考察する。

## 5. 2 話者受益の因果

4.3から複文従属節に「てもらう」が用いられ、そこに特徴的に表れる接続表現が条件節と「て節」であることを指摘した。本節では「てもらう」条件節と「て節」と主節からなる「てもらう」発話の含意について考察する。そして条件節の「てもらえば」「てもらえると」等、また「て節」「てもらって、～」に表される部分が、話者「私」の一連の受益に至るプロセスの中で、受益の原因として捉えられていることを説明する。

5.1では「てもらう」に付帯する文末表現から、受益結果の話者「私」にとって、＜受益未実現時＞と＜受益既実現時＞という時間順が意識され、受益結果である話者「私」に受益が達するまでには、その時間順に受益がプロセスとして進行することを説明した。さらにその時間順の〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉のひとまとまりを、話者が「私」の結果的受益として捉えていることを説明した。

本節では、「てもらう」従属節接続表現の種類の傾向から、「てもらう」が複文従属節で用いられる場合について考察する。そして「てもらう」複文の主節と従属節で同一の主語、それも発話の典型である話者「私」が主語である場合、主節で述べられる事態は話者「私」の受益であること、そしてその原因となる事態を「てもらう」従属節が表現していることを示す。またそれに加えて、「てもらう」従属節と主節の関係が、受益への因果の関係になっていることを指摘する。

まず、複文でも主節に表される話者「私」のプラスの状態にとって、「てもらう」従属節の行為や事態を原因として主節の受益結果に至る辿り方に、5.1で見た〈想定プロセス〉と

〈顧みプロセス〉の二種類のプロセスがあることを示す。そこではやはり話者「私」の受益は受益原因をプロセスとして介しているという意識があることを説明する。さらに新たに明らかになる事として、5.1 と 5.2 に見られる〈受益未実現時〉の〈想定プロセス〉は条件文の因果プロセスの脈絡であること、5.1 と 5.2 に見られる〈受益既実現時〉の〈顧みプロセス〉は理由文のプロセスの脈絡であることを説明する。そして条件文と理由文は同じ因果のプロセスを根底に持つということから、「てもらう」文には話者「私」の受益への因果プロセスが受益結果とともに込められていることを指摘する。

## 5. 2. 1 想定プロセスの受益因果

5.2.1 ではまず〈受益未実現時〉に特徴的に表現されている条件節と「て節」の表す意味を確認し、次に話者が〈受益未実現時〉に、自らの受益結果にとって「てもらう」文の表す行為や事態が受益原因となると「想定」していることを考察する。次の 5.2.2 で〈受益既実現時〉では、話者「私」の受益原因が「てもらう」「て節」で表現され、話者「私」が受益した原因を顧みて「て節」のおかげだと表現していることを説明する。そして、5.2.3 で、想定する結果状態の受益も、受益結果から顧みている受益も、話者「私」の受益は〈受益未実現時〉に対する受益原因となる行為や事態の生起によって〈受益既実現時〉に受益結果状態になるというプロセス意識があることを指摘する。

### 5. 2. 1. 1 「てもらう」条件節と受益因果

まず、「てもらう」文が条件節として複文前件で用いられているために、「てもらう」行為が条件であり、後件はその結果であるということを説明する。<sup>99</sup> 条件文ではこれらは全て話者「私」が「見てもらう」という他者の行為による受益は未だしておらず、これから受益する局面での発話である。このような条件文は藤井（2012:108）では予測的条件文と呼ばれ、次のような例が示されている。<sup>100</sup>

(9) 名医が早期に手術をすれば、きっと良くなるだろう。(藤井 2012:108(1))

藤井（2012:111）は「この発話の話者は、『名医が早期に手術をする』という事態と『良くなる』という事態との間に現象的相関関係があることや（この事態の場合は）事態間に

<sup>99</sup> 日本語の条件節接続表現については 4.3.1.3 で説明したように、多くの研究で「と」「ば」「たら」「なら」を中心としてそれぞれの意味や用法の差異が取り上げられている。しかし本研究で取り上げるのはこれらの形式間の意味の差異についてではなく、話者「私」が「てもらう」文を条件文として用いていることである。そのため、これらをまとめて条件節として考察する。

<sup>100</sup> 藤井（2012:108）では 3 つのタイプの条件文が例示されている。他の 2 つは次の通りである。  
(i) 良くなったのなら、きっと名医が早期に手術したのだろう。〈認識条件文〉  
(ii) 手術をご検討でしたら、こちらに可能医療機関と医師のリストがあります。〈発話行為条件文〉（これは非予測的条件構文であり非内容的条件文の一例である(p.113)）

（藤井 2012:108(2)(3)）

因果関係があることを、経験的背景知識として『想定』しているのである」として、話者によって条件文の前件と後件は、(9) の場合は因果関係という相関関係があると関係づけられていると説明している。この 2 つの事象の間を話者「私」が関係づけているということの意味を藤井 (2012:111) は「(発話前の一般的世界知識にも適合してはいるが、それのみではなく) この話者が『(れ) ば』という条件接続形態素を含む条件構文を用いていることによって露呈され、発話のための確固たる話者『想定』知識として認められることになるのである」と説明している。つまり、条件文を発話することで話者「私」の事態への信念がわかるというのである。「てもらう」文でも、「想定」の中で結果になった話者「私」の状態が、原因行為者の行為や事態の影響によるのだという信念が、「てもらう」によって表現されていると考えられる。

- (10) (部長が、販促担当者に、ケーキを買った場合に、配達してくれるといい、という希望を提案している)

「配送してもらえるといいですねー。」(m1748)

- (11) (印刷物を一緒に作っている教師同士の話。1 人の教員が、印刷担当の教員に、もう印刷が終わってしまったか聞いている。その理由を説明して)

「いや、ここんところちょっとさ、うん、変えてもらえればわかりやすいかなーと思ったの。」(f3946)

話者「私」は、行為者の行為・事態の実現という前件によって話者「私」が受益状態になれることを、受益がまだ実現しない段階で気づいており、その受益を実現させようとして行為者に実現期待や可能性を条件節によって発話している。(10) (11) では、前件「てもらう」条件文で表されている行為者の行為「配送する」「変える」は、後件の話者がプラスになること「(私達お客が) いい (=ケーキを持ち帰らなくてよいので楽である)」「(プリントの読者にとって) わかりやすい (=話者が書いた文が受け入れられやすい)」である。受益未実現段階で話者「私」が発話する、前件が「てもらう」条件節である文は、前件は話者「私」にとっての受益の原因となる行為者の行為や事態、後件はそれによる話者「私」の受益結果状態である。つまり、条件文によって、前件行為者の行為と後件話者「私」の受益が話者「私」の中で受益への因果関係として結び付けられているということである。

次に、＜受益未実現時＞の「て節」について話者「私」の受益結果状態にとって、原因行為者の行為が必須プロセスとして話者「私」の頭の中にあることを見ていく。

## 5. 2. 1. 2 「てもらう」「て節」と受益因果

本研究では「～てもらって (～する)」も、「～てもらい (～する)」も「て節」として扱う。本研究で抽出した「てもらう」文の「て節」の用例に見られるのは、原因と、時間的な順序関係を示す「て節」である。前件「て節」で明示される行為者の行為が、後件で表

される話者の受益の原因となることを話者「私」が見込んでいるので、話者が後件受益を実現させたいとして願望で表している用例が本研究の新聞資料に見られる。

(12) (農林水産副大臣が 検査数値を上回った品目のみを会見で言及した官房長官に)  
「基準値を下回った品目も言ってもらい、風評被害を防ぎたい」と述べた。(3.25M)

(13) (被災者の声)  
「自宅は(略)津波が恐ろしく、もう住みたくはありません。仮設住宅を早く造って頂き(略)地区の顔なじみの人達と一緒に移り住みたいです」(4.3M)

(12) では後件の風評被害を防げることが話者「私」の受益であり、そのためには「下回った品目を言う」行為が必要だと発話している。(13) では「顔なじみの人達と一緒に移り住む」ことが話者「私」の望みであり受益であるので、そのためには仮設住宅が出来上がるという事態が必要だと言っている。これらは、後件で話者「私」のプラス状態になるための受益原因として、行為者の「てもらう」行為を表現している。

後件の変化結果であるプラス化状態は、＜受益未実現時＞では前件「て節」や前件条件節が実現してこそ、達成できる結果である。これは、話者「私」のプラスの変化結果に対して、複文前件の「てもらう」文がその原因になっているということである。話者「私」の受益のためには行為者の行為、事態という原因が必要であり、話者「私」の状態のプラス化はその影響や作用を「受ける」結果だと言える。

### 5. 2. 1. 3 想定プロセスでの時間的意識

5.2.1.2 で「てもらう」複文で話者「私」のプラス化のためには、受益の原因の必須性を説明した。次に、話者「私」には＜受益未実現時＞から＜受益既実現時＞結果へのプロセスが因果関係だけでなく時間順のプロセス意識もあることを説明する。

受益未実現の段階での「てもらう」が前件「て節」で用いられている(14)(15)(16)では、行為者にしてもらいたい行為を表現し、後件の話者「私」のプラスの結果状態までに至る時間的順次行為を表現している。

(14) (JA 全農の園芸課長が)  
「消費者にまず食べていただき、安全と実感してもらえれば」と話した。(4.10M)

(14) で、話者「私」の受益は消費者が安全だと実感し、生産物を買うこと、つまり生産物が売れることである。そのためには、まずそれを消費者が食べることで、次に実感すること、というプロセスが、私達の生産物が売れるという話者「私」のプラス結果状態をもたらすという受益プロセスの遂行が「想定」され、「期待」されている。前件の「てもらう」は後件の前提となっている。

(15) (デマンド計を取り付けるためには、新しい型のメーターに取り換える必要があることを、会議で説明している)

「それで、それーをまずつけてもらって、あとはもー、デマンド計ってゆうのは、それにプラスアルファ、はめつけるだけですから。」(m3279)

(16) (大学のシンポジウム運営担当の教授達の間で、発表していない他の発表者の居場所について居場所をめぐって意見が交わされている。)

「まず前半の部分については、あの一、えーと一、話さない方は下に下りてて、それで、やってもらって、それであと一、後半はみんな上がってもらってと、ゆうことですね、やるならば。」(f1301) (この発話中の聞き手の相槌 5 か所は (略))

(15) では話者「私」のプラス状態はデマンド計の取り付けに賛同を得ることである。発話の話者にはデマンド計が無事に取り付けられた結果状態が「想定」されている。それをまずつけることが受益への必然プロセスなのである。(16) では話者の受益は会がスムーズに進行するように企画できることである。シミュレーションによって首尾よく会が行われる受益結果には、発表者の移動がうまくできるという事態が必要であり、下りる、上がるという行為はそのためのプロセスである。すると、結果のプラス化状態の話者「私」にとって、前件の行為や事態を原因としてその原因の実現以前には、受益未実現状態の話者「私」のゼロ状態があることになる。企画段階では今の状況からまだ何も変化していないが、計画されたこの後の行動が実行されると、受益が発生するということである。

このように、「てもらう」文の<受益未実現時>から<受益既実現時>までには、単なる因果関係だけでなく、時間的な意識もある。次に、複文の「てもらう」文での因果と時間の<受益未実現時>から<受益既実現時>へのプロセスという考察が、5.1 で見た文末表現から解釈できるプロセスという考察と重なることを指摘する。

#### 5. 2. 1. 4 文末表現と接続表現の〈想定プロセス〉の並行性

5.1 で文末表現を通して話者「私」が発話する「てもらう」文には<受益未実現時>から<受益既実現時>への時間的なプロセスがある事を指摘した。そこではさらに、話者「私」の受益が他者や事態から「てもらう」という影響結果であることも説明している。このプロセスを〈想定プロセス〉と称し、「てもらう」と表現される話者「私」の受益では時間的な順と、受益原因からの影響による結果という 2 つの結果性を含意していることを説明した。この 5.1 で文末表現の特徴から見た〈想定プロセス〉は、本節 5.2 の従属節の「てもらう」でも同様の指摘をしたことから、従属節「てもらう」での捉え方と 5.1 で文末で表される場合の事態の捉え方が、同じ捉え方であることが指摘できる。図にすると、図 5.5 と 5.6 のようになる。

〔文末〕「てもらおう。」「てもらいたい。」

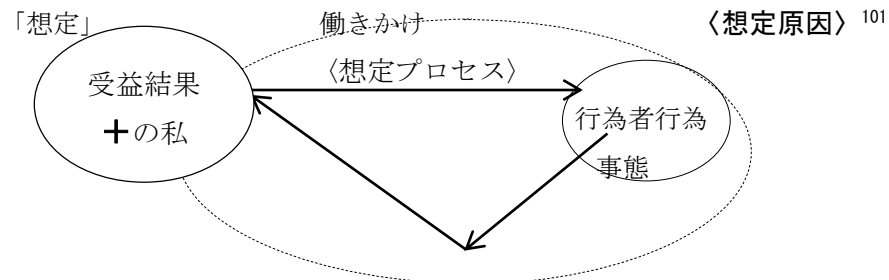


図 5.5 文末「てもらおう」の〈想定プロセス〉の受益のひとまとまり

〔複文従属節〕「てもらえば」「てもらって、」

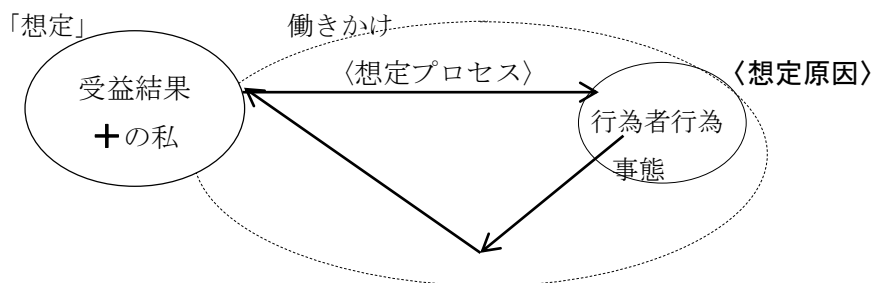


図 5.6 複文従属節「てもらおう」の〈想定プロセス〉の受益のひとまとまり

このことは、話者「私」が文末でも従属節でも「てもらおう」と言う時、頭の中に「てもらおう」行為や事態という原因を経た受益結果としてひとまとまりに捉えられているということである。言い換えれば、「てもらおう」に特徴的に付帯して用いられている条件節と「て節」は接続表現の働きとして受益原因行為や事態の生起前と生起後という前後の事柄の時間順と、受益結果状態の私と受益原因の行為者や事態という因果という脈絡を意味づけている。それが文末の「てもらおう」文と並行的であるということは、文末で用いられている「てもらおう」にも受益への時間順と因果ということが含意されているということが確かめられるということである。

<受益未実現時>の「てもらおう」文では〈想定プロセス〉の結果と、〈想定プロセス〉に組み込まれる受益原因行為や事態を〈想定原因〉とすると、その〈想定原因〉の影響結果であるということが、話者が「てもらおう」と発話する際に含意されていると言える。

では、<受益既実現時>の受益結果に対し、「てもらおう」文では時間的な順序プロセスと因果が話者「私」の頭の中にどのように描かれているのだろうか。次項では受益結果から

<sup>101</sup> この並行性から、5.1の文末表現における「てもらおう」でも、話者「私」の受益は影響結果であることから、その原因行為や事態を〈想定原因〉と呼べることになる。

「てもらう」と表現していることについてさらに考察する。

## 5. 2. 2 顧みプロセスの受益因果

話者「私」の受益未実現段階で「想定」として話者「私」の頭の中にあるのが受益結果状態であること、「てもらう」文の条件節と「て節」はその原因であり、且つ、結果に向けたプロセスであるということを指摘した。話者「私」が「てもらう」受益の結果状態であるということは、話者「私」がプラスの変化状態になっているということである。話者「私」はひとりでに自然にいつの間にか受益結果に変化をしているのであれば、受益状態に「してもらった」と言わずに、「なった」と言えばよいことになる。「てもらう」で受益結果状態になったことを表すからには、「私」が何らかの原因によって変化をしたということが含意されているはずである。本項では、その原因が「～てもらう」行為者の行為、事態であるということを説明する。まず働きかけた結果的受益の原因への意識について、次に働きかけが無く結果的に受益した「てもらう」文の話者「私」の原因への意識について考察する。

### 5. 2. 2. 1 「想定」結果からの原因顧み

ここでは<受益既実現時>の「てもらう」文の接続表現「て節」が、話者「私」の結果的受益状態の原因理由を表していることを考察する。

<受益既実現時>の「てもらう」複文には、「想定」によって働きかけて結果を受益する「てもらう」複文と、思いがけず受益する、「想定」の無い「てもらう」複文の結果がある。2つのタイプの「てもらう」文の話者の受益結果と原因との関与づけの在り方を考察する。

まず「想定」して「受ける」ことを表す「てもらう」複文で、受益は「想定」して働きかけた結果を受けていることが次の用例からわかる。受益結果から原因事態を表す接続表現の用例は「て節」が多いという特徴がある。<sup>102</sup> そこでは、結果状態に対してなぜ話者「私」が結果状態になったのかという理由が説明されている。

(17) 話者（大学教員）が昔から利用しているホテルが、話者が交渉すれば 3000 円か 4000 円にディスカウントされることを休憩時に聞き手（大学教員）に話している。

「ディスカウントしてもらって。」(m2529) (= (6)再掲)

(18) (完成車メーカー)

「世界的なサプライチェーン（供給網）を断たない為、T 県の会社には不足分を陸送してもらい、しのいだ。」(4.11M)

この用例では「て節」に現される行為「ディスカウントする」「不足分を陸送する」が、話者「私」の受益の原因である。(17) (18) のように受益原因に話者「私」が頼んだその

---

<sup>102</sup> 本論 4.2.5 の表 4.3 による。



結果話者「私」が受益することができたと表現している場合である。したがって、「想定」時点で行為者の行為や事態は結果の受益原因として予定されていたことであり、受益プロセスの中に組み込まれていたことである。

次の例は、受益達成は確認していないが、「～てもらってある」と述べられ、結果の原因である行為者の行為の生起が確信されている。「て節」で表された行為は、結果状態になるための原因手段となっている。

- (19) (会議。仕事で得た情報を掲示しているが、掲示の後、情報をみんながいつでも確認できるようにしようという話になった。サブリリーダーがそれについて説明している。)  
「でー (略) はがしたやつを一、(略) [名字] さんに一、今、その一、データで打ち込んでもらって一、」 (m8612)

- (20) ((19)と同場面)

「あの一、周知みたいな感じのファイルに、まとめてもらうようには指示してあります。」 (m8612)

これらの「てもらう」文の行為者の行為は連続的であり、話者「私」が目指す受益結果状態へと向かうものである。そのため、この行為が達成すると話者「私」はプラスの変化結果状態となる。したがってこれらの行為は受益結果へのプロセスの中で受益原因である。

では、「想定」の無い、思いがけず受益したことを表す 4.2 で挙げた表 4.2 の C. 「話者遠因的てもらう文」や D-2 「拡張関与的てもらう」文では、受益プロセスは無いのだろうか。本研究では、結果の受益を表す「てもらう」文も、ただ「恩恵行為を受けた」「結果の受益状態になった」ということを表すだけでなく、結果を受益した話者「私」が、自らのプラスの変化結果に対し、その原因を顧みているということを示す。

## 5. 2. 2. 2 結果から見た「て節」の原因化

次の (21) (22) のように、行為者の話者「私」に向けた好意的行為を話者「私」が思いがけず受益した結果を表現している場合もある。

- (21) (休憩時の雑談。特産物の話。食べたことがあるかを聞かれた話者が答える。)

「あります、あの一、お土産で買ってきてもらって」 (相槌(略):筆者加筆) (m6521)

- (22) (天皇皇后両陛下の訪問を受けて被災地町長が)

「みなやるせない思いになっていたが、今日訪問していただいて笑顔が多くなったように思います」と話した。(4.9M)

(21) でプラスの結果状態は、話者「私」が食べたことのなかった特産物をお土産として食べた経験である。(22) での話者「私」のプラスの結果状態は、話者「私」達が天皇皇

后両陛下の訪問によって励まされたことである。(21) (22) のような場合には、話者「私」は実現された結果を体感的に受益し、実現の結果から行為者の行為を原因として顧みている。

結果から顧みるということは通常行われる思考回路なのだろうか。顧みという、いわば逆向きの原因への辿り方について、藤井 (2012)、有田 (2007)、角田 (2004) の言及を示し、「てもらう」文だけにある思考プロセスではないことを説明する。

藤井 (2012: 123-124) は、後件の判断の根拠を前件に逆に遡って推論する構文があることを「(略)『～ということは～ということだ』構文で、判断の根拠と判断との推論関係を明示したりすることもよくある」と指摘している。この推論は、「てもらう」文で話者「私」が自らの受益状態を自覚した結果の時点で、その判断の根拠となる受益原因を求める推論という、一種の話者の「顧み」であると言える。

有田 (2007:107) は、(23) の例を挙げて結果から原因を推論する文があることを指摘している。

(23) 今度の試験に息子が受かったなら、私は神様から優秀な子供を授かったのだ。  
(有田 2007:107(27))

(23) は「のだ」文である。この「のだ」文は、結果事態の原因を話者が辿って自らがその原因経緯に納得した場合に用いられる、話者の主観を表す表現形式である。この逆向きの思考プロセスが「てもらう」文にあると本研究では考える。<sup>103</sup>

有田 (2007:107) は「ことになる」のような前件から当然の帰結としての判断の表現や「のだ」あるいは「のだろう」という、「後件に逆向き推論を可能にするモダリティ要素がある場合に限り、後件の出来事時が発話時に先行するような関係を表すと言ってよいだろう」と述べている。

また、3.3.3 でも示したように、角田 (2004) も「のだ」文について説明している。「1. 認識→2. 疑問→3. 推察→4. 答え」というもので、「4. 答え」に表れるのが「のだ」文だと述べている。角田 (2004:73(a)) は次のように例示して説明している。

(24) 1. あれ、外でみんなの声がする [1. 認識]  
2. 日曜日の朝なのにどうしてだろう [2. 疑問]  
3. 何かあるのかな [3. 推察]  
4. あっ、今日は町内会でゴミ拾いをするんだった。 [4. 答え]  
(角田 2004:74(3-2))

---

<sup>103</sup> 「てもらう」文と 3.3.3 で紹介した「ている」文の結果残存用法の思考回路の類似性については本研究 5.4 で述べる。

例えば、本研究の「てもらう」文では(21)の思いがけず受益したことを表す場合、次のように〈顧みプロセス〉によって行為者の行為が話者「私」の受益の原因であり、行為者は与益主であることが話者「私」の結果状態から逆向きに指定されると説明できる。

(21 再掲) (休憩時の雑談。特産物の話。食べたことがあるかを聞かれた話者が答える。)  
「あります、あの一、お土産で買ってきてもらって」(相槌(略):筆者加筆) (m6521)

- (21') 1. 話者「私」の受益結果認識→それを食べたことがある  
2. なぜ食べたことがあるのか→お土産でもらった  
3. その原因は?→その行為者がそれを買ってきたから  
4. なぜ買ってきたのか?→「私」がそれを(まだ)食べていないだろうから

この話者「私」の結果状態に対する原因を本研究では、5.2.1.4 の〈想定原因〉に対して〈顧み原因〉と称することにする。さらに本研究で指摘した日本語の「顧み」を説明すると思われる推論がある。

米盛(2007)は、アメリカの論理学者・科学哲学者チャールズ・パーズ(Charles Sanders Peirce, 1839-1914)が提唱している「アブダクション(abduction)」または「リトロダクション(retroduction)」と呼ばれる新たな推論の概念を研究し、解説している。<sup>104</sup>

- (25) 驚くべき事実 C が観察される、  
しかしもし H が真であれば、C は当然の事柄であろう、  
よって、H が真であると考えるべき理由がある。(米盛 2007:54)

「ある意外な事実 C が観察されると、その事実 C がなぜ起こったかを説明するために仮説 H が発案される。そして『もし H が真であれば、C は当然の事柄であろう』というふうにいうことができるならば、『H は真であると考えるべき理由がある』として、仮説 H を暫定的に採択することができる(本論文筆者が丁寧体を改編)」。これは、米盛(2007:60)の「アブダクションの推論形式」の説明である。アブダクションという、意外な事実の観察がまずあり、その原因を説明するための仮説を発案して辿るという思考プロセスは、「のだ」文、「ている」文の結果残存用法に当てはまると共に、本研究の「てもらう」文の〈顧みプ

<sup>104</sup> 米盛(2007)はアブダクションを、これまでの演繹と帰納という推論に加えられた推論だと説明し、「化石が発見される。それはたとえば魚の化石のようなもので、しかも陸地のずっと内側で見つかったとしよう。この現象を説明するために、われわれはこの一帯の陸地はかつては海であったに違いないと考える。これも 1 つの仮説である (p.54(2))」と例えて、「アブダクションは驚くべき事実 C の観察からそれを説明しようと考えられる仮説 H へのいわば『遡及推論』(retroduction) (p.61)」だと説明している。

ロセス) もこの推論にあてはめて説明できると言えるだろう。<sup>105</sup>

### 5. 2. 2. 3 文末表現と接続表現の〈顧みプロセス〉の並行性

5.2.2.1 の働きかけた結果や 5.2.2.2 の思いがけず受益した結果について説明したように、「てもらう」が従属節で現れる複文にも〈顧みプロセス〉とそこに〈顧み原因〉がある。それは文末で「てもらう」が用いられる場合と同様である。「てもらう」が文末で用いられている時、話者「私」の受益状態は行為者の行為を原因とした影響結果である。「てもらう」が複文で表されるとき、その主文は、(21) ではお土産でそれを味わうことができた、という話者「私」のプラス状態である。「てもらう」は文末でも従属節でも、図 5.7 と図 5.8 のようにいずれも話者「私」は「てもらう」原因からの影響でプラスの結果状態である。

〔文末〕「てもらった。」「てもらっちゃった。」

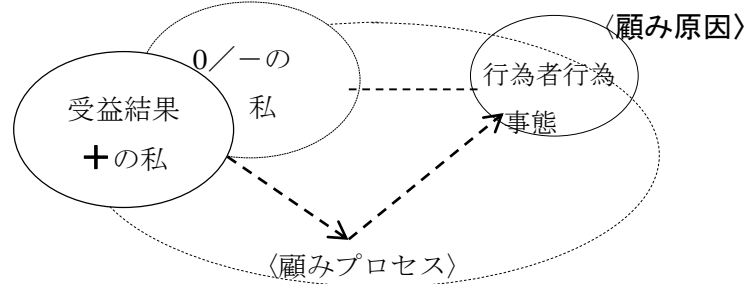


図 5.7 文末「てもらう」の〈顧みプロセス〉の受益のひとまとまり

〔複文従属節〕「てもらって、」

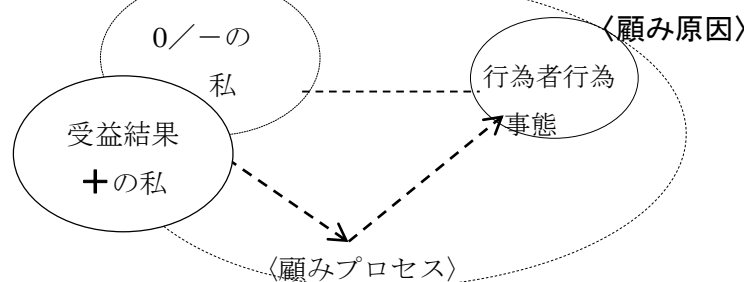


図 5.8. 複文従属節「てもらう」の〈顧みプロセス〉の受益のひとまとまり

さらに話者「私」が受益結果から受益に至るプロセスを顧みる際に、表現として明示化

<sup>105</sup> 本研究で指摘する「顧み」は、日本語では「のだ」文を始め、「ている」文の一用法や話者が受益結果を表す「てもらう」文という、使用頻度が高い表現形式での思考回路である。アブダクションは推論の例を科学分野から多く取り上げているが、提唱時期を見るとこれからさらに言語においても応用されていく推論形式ではないかと思われる。尚、「ている」文の結果残存用法については、5.4.1 で取り上げる。

されていない文脈からの注目点がある。それは、話者「私」は行為者の行為が受益原因だと気づくが、行為者の行為がなぜ私に向けられたのかについても気づいているということである。(21) (22) や、さらに頼んだことによる陸送行為 (18) でも、それぞれ行為者の好意的行為は話者「私」の変化前の状態によって生起している。行為者の行為前の話者「私」は未経験の私、被災者の私、工場の操業ができなくなっている私である。私のこれらのゼロ状態、マイナス状態に対し、行為者の関心が私に向けられ、好意的行為が生起している。それを話者「私」は「てもらった」と表現している。図では行為者からの話者「私」への注目を点線で示してある。この行為者からの注目は話者「私」が、行為者が「私」のマイナス状態に注目したのだらうという話者「私」による推測である。この場合、話者「私」はいわば受益の原因（行為者の行為）の原因であると言える。

以上、受益結果からみると「てもらう」従属節の行為や事態は、話者「私」の受益にとって、頼んだことであってもなくても、必須原因であることがわかる。したがって、「てもらう」文で表される行為者の行為や事態は、話者「私」の結果的受益の原因であるということである。話者「私」が「てもらう」と表現する時、話者「私」はただ受益結果だけを述べているのではなく、話者「私」が受益結果になったプロセスと、受益原因とを、変化してプラスになった結果にひとまとまりに含意しているのである。

では、〈想定プロセス〉という、従来働きかけという観点から指摘される局面と、〈顧みプロセス〉という、受身文との共通性の局面とが、なぜ「てもらう」と 1 つに表現されるのか、次にこの二つが話者「私」の受益というひとまとまりだと言えるのは、両者が同じ因果の脈絡だからであることを、坂原 (1985) の指摘をもとに考察する。

### 5. 2. 3 想定プロセスと顧みプロセスの因果

本項では、これまで見てきた〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉が、実は同じ因果の脈絡を持つことを指摘し、「てもらう」と表現する話者「私」の受益には、受益結果をただ表現するだけでなく、受益結果が受益原因を含んだ因果プロセスの中でひとまとまりとなっていることを指摘する。

まず、坂原 (1985) の論理において、〈想定プロセス〉の脈絡を持つ条件文と、〈顧みプロセス〉の脈絡を持つ理由文とが、原因と結果で同じことの因果の見方の違いであることを説明する。

坂原 (1985:113) は、「条件文の中には背景、焦点の関係が逆転しているものがある。このとき条件文“p ならば q”は、“なにならば、q か？”また、もっと自然な言い方では“q のためにはどうあれば良いか？”に対する答えとなる。」という条件文があると指摘している。<sup>106</sup>

---

<sup>106</sup> 坂原 (1985:114-115) は「いくら円持っていれば、70 円のリンゴが 2 個買えるでしょうか」というような条件文だと説明している。

(26) どのような状態であれば、q であるか？

→ 答え：p ならば q である。(坂原 1985:114(43)に筆者が「答え：」を加筆)

そして、返答に使われている条件文は、後件が成立するための限定を断定しており、焦点は前件に移っている (p.114)」と説明している。これは、有田の逆向き推論と同様、結果からの推論の説明である。

例えば、5.2.1.1 で挙げた (11) 「いや、ここんところちょっとさ、うん、変えてもらえればわかりやすいかなーと思ったの。」という「てもらう」文において、条件文“p ならば q”は「変えてもらえれば」の後件は「わかりやすい」である。ここでは前件の条件の結果、後件状態になることが「想定」されている。図 5.9 は条件文による受益〈想定プロセス〉と結果の関係である。

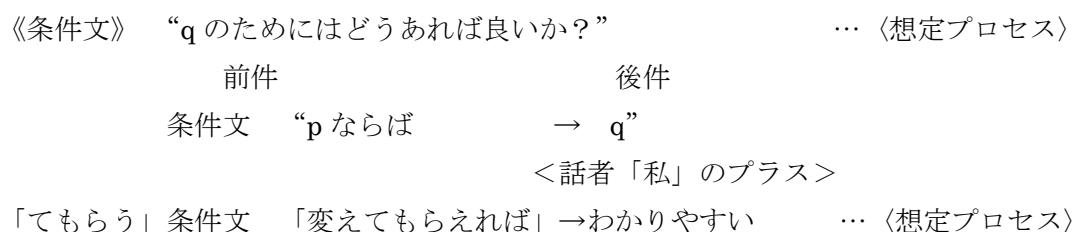
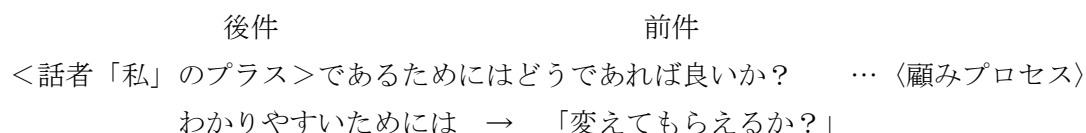


図 5.9 条件文の因果

一方、それが答えになるためには、前件が必要である。ここでは、後件が規定されて、そのためには前件が推定である。さらにこの時、後件が確定的証拠（結果の実感、体感、痕跡、等々）であれば前件は後件確定の原因が推定されると考えてもよいことになる。図 5.10 で現れている結果に対する理由文の原因顧みプロセスを示す。



後件が確定的証拠（結果の実感、体感、痕跡、等々）であれば … 〈顧みプロセス〉  
《理由文》 わかりやすい ので → 「変えてもらえた」 (のだ。)

図 5.10 理由文の因果

「てもらう」文では、受益既実現時の複文の「て節」は、既に受益したことの原因を「て節」で述べている。原因を結果から顧みている「宿泊費をディスカウントしてもらって」「帰りの飛行機を延ばせるだけのばしてもらって」のような「てもらう」は、このような、結果から原因を探し求める「てもらう」文である。これは坂原（1985）の「後件成立のための条件を尋ねる疑問文」の指摘に当てはまると言える。<sup>107</sup> さらに、この条件文と理由文が、話者「私」の中では実現性の差異であり、1つの因果関係という意味では同じであることを坂原（1985:118）は、条件文と理由文は、前件と後件が因果関係で繋がるのが文の基底にあると指摘し、それを「理由節から、真であるという前提を取り除くなら、条件文の仮定節を得る。逆に、条件文の仮定節が真であると確認されるなら理由節になる」と説明している。<sup>108</sup> このことから本研究の「顧み」の「てもらう」文は、「想定」がある「てもらう」文とプロセスの辿り方で対を為し、しかし因果は同じであると指摘できる。<sup>109</sup> 3.3.3と5.2.2.2で有田（2007）、藤井（2012）から、既知の事実を踏まえた上でその根拠を結果に至る以前の事態に求めるという共通した思考回路を示した。

本研究の「てもらう」文は、話者「私」が受益の既実現の段階で「てもらう」を用いる際に、話者「私」が受益した結果を報告するだけでなく、体感した受益が何からなぜ発生したのかを顧みる思考回路が働いているとした。話者が自らの受益を、受益原因である行為・事態からのプロセスの結果のひとつとまりであるという捉え方をしないのであれば、「他者に・てもらう」ではなく、「他者が行為をした。私が受益状態になった」と言えよ。い。「てもらう」文に言語化して明示されている行為や事態は、話者の行為ではなく他者の行為や事態だからである。

これらをまとめると、「てもらう」複文でも、＜受益未実現＞から＜受益未実現＞への時間順に、「私」の受益が行為者の行為や事態を介してひとつとまりの受益結果までの因果のプロセスが、話者が発話する「てもらう」文に内在されていると言える。

次に5.2節の考察をまとめる。

---

<sup>107</sup> 坂原（1985:114）は「質問」とも言っている。

<sup>108</sup> さらに坂原（1985:119）は、条件文が既定にある関連文を次のように説明している。

「私達の知識は何らかの関連によって組織されている条件文のネットワークと考えることができる。そこでは、条件文は真とみなされているが、要素命題の真偽は定まっていない。そして、条件文的知識は要素命題の真理値が知られるにつれ、さまざまな言語形式をとって表面化する。それは、条件文のまま実現することもあるし、また理由文、反事実的条件文、譲歩文として現れることもある。」

(i) a. コーヒーを飲めば眠れないぞ。

b. コーヒーを飲んだから眠れないぞ。

c. コーヒーを飲んだから眠れなかったのだ。（坂原 1985:120(50)）

また、有田（2007:73-77）もこの坂原（1985）の説明を支持し、条件文と理由文の関係を論理文の体系だと表現している。

#### 5. 2. 4 話者受益の因果のまとめ

5.2 では「てもらう」文が従属節に現れる場合に注目して「てもらう」文を考察した。そして大きく 2 点を指摘した。第 1 点は、従属節において、他者行為者の行為や事態を介する時間的なプロセスを辿って受益結果に至るということである。5.1 でも見た「てもらう」文の中の話者「私」の時間順と受益の時点の意識は、5.2 にもある。5.2 では<受益未実現時>から<受益既実現時>に至るまでの、受益原因を介した話者「私」の受益のひとまとまりの中に、時間的なプロセスがあることを指摘した。2 点目は、「てもらう」文では自分でプラスの結果になったのではなく、「てもらう」従属節が表す原因によって、主文の話者「私」がプラスの変化結果状態になったことを表現しているということである。そこでは話者「私」が原因から「てもらう」時に、〈想定プロセス〉では〈想定原因〉行為や事態によって受益できると想定し、働きかけの結果受益した時、受益結果から今度は受益原因となる行為や事態を〈顧みプロセス〉で顧みる。また、思いがけず受益した際の〈顧みプロセス〉でも〈顧みプロセス〉で〈顧み原因〉を辿る。この〈顧みプロセス〉は、「てもらう」文だけにみられるのではなく、日本語に特徴的な「のだ」文等にも見られる思考プロセスであることも示した。これらの〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉について、話者「私」の受益が受益原因からの影響結果であることを、この 5.2 では複文従属節の条件節と「て節」を証拠に指摘した。

さらに、この二つのプロセスが、5.1 で見た単文文末の「てもらう」文と、5.2 での複文従属節の「てもらう」文とで並行することを示し、「てもらう」文にあるこの二つの時間的、因果的プロセスは、話者「私」の受益結果と受益原因とをひとまとまりに捉える受益の思考プロセスであることを確認した。そして 5.2 では、〈想定プロセス〉にある条件節の因果と〈顧みプロセス〉の理由節の因果は、1 つの同じ因果の脈絡を意味しており、その 1 つの脈絡は話者「私」の発話する「てもらう」文における、話者「私」の受益のひとまとまりの捉え方に当たるものである事を述べた。「てもらう」と表現する話者「私」は、ただ「受益した」ということだけを表現しているのではない。図は図 5.11 のようになる。

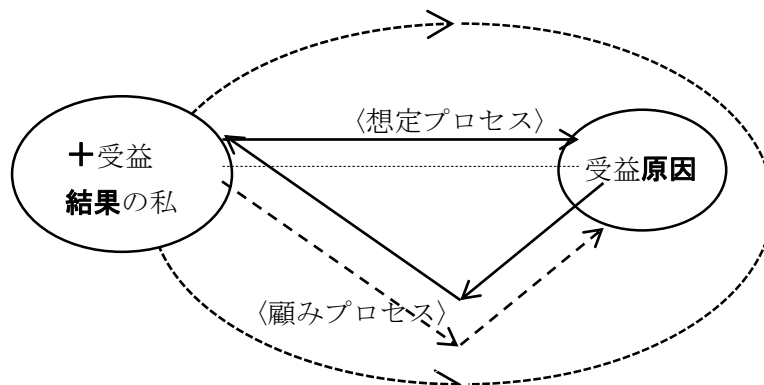


図 5.11 「てもらう」文における話者の受益原因とプロセスのひとまとまり



次に、4.4.3 で示した、受益の直接性と間接性について次節で考察することにする。この〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉による受益原因からの影響の捉え方は、話者「私」が間接的な受益の仕方を表す場合にも働いているということを考察する。

### 5. 3 間接的事態からの話者受益

時間的プロセスと原因とを含意する「てもらう」文のうち、5.1 では主に時間的なプロセスがあることを、「てもらう」文の基本形である「働きかけてもらう」タイプの「てもらう」文によって説明した。また、5.2 では話者「私」は受益結果を仮想体験、または実際に体験した結果、「想定」がある場合も無い場合も、話者「私」が受益原因の行為や事態の影響の結果、受益したと認識していることを「てもらう」文で表していると説明した。ここまで見てきたのは、直接的な受益を表す典型的な「てもらう」文である。

しかし、完全な受益プロセスを辿らなくても、行為や事態から話者「私」が受益したと捉えて表現している「てもらう」文もある。行為や事態からの影響が直接話者「私」に及ばないのに、話者「私」がその行為や事態によって受益したのだと原因化するような受益のあり方を、本研究では話者「私」の「間接的な受益」とする。間接的な受益を表す「てもらう」文は、4.2.5 の表 4.3 の分類で B.「話者誘因的てもらう」文、D-1「拡張関与的てもらう」文、D-2「拡張関与的てもらう」文という3つのタイプがある。本節では、なぜ話者「私」に行為や事態が向かわないことを原因として「てもらう」と表現するのかについて考察する。そして、5.1 と 5.2 で見た「てもらう」文の受益のひとまとまりの中の時間的プロセス性、原因関与の因果プロセス性によってこの間接的な受益を表す「てもらう」文が説明できることを示す。具体的には〈想定プロセス〉を辿る間接的な受益を表す「てもらう」文と、〈顧みプロセス〉を辿る間接的な受益を表す「てもらう」文とを考察していく。前者である B.「話者誘因的てもらう」文と D-1「拡張関与的てもらう」文について 5.3.1 で考察し、続いて後者である D-2「拡張関与的てもらう」文を 5.3.2 で考察する。

#### 5. 3. 1 想定プロセスの間接「てもらう」文

〈想定プロセス〉とは、話者「私」が受益結果を「想定」することが起点となり、それを実現すべく行為者に行為を働きかけ、行為者の行為を原因としてその結果話者「私」が再帰的に受益するというプロセスを辿る「てもらう」文である。このプロセスを辿る「てもらう」文の基本型は、4.2.5 で分類された A.「想定再帰的てもらう」である。しかし、「想定」はするが受益の仕方が間接的である B.「話者誘因的てもらう」文と、D-1「拡張関与的てもらう」文でも、話者は受益結果を「想定」し、実現を期待をしている。本節ではこの基本型を逸脱した B.「話者誘因的てもらう」文と D-1「拡張関与的てもらう」文について、これらの「てもらう」文の話者が〈想定プロセス〉の思考回路を辿るため、話者「私」

に直接向かわない行為や事態からの受益を「てもらう」と表現できることを説明する。

### 5. 3. 1. 1 他者受益の「想定」原因化

「想定」がある間接「てもらう」文について、5.3.1.1 でまず B.「話者誘因的てもらう」文という他者受益の「てもらう」文の受益を説明し、次の 5.3.1.2 で D-1「拡張関与的てもらう」文の受益について説明する。そして、これらの「てもらう」文でも、話者「私」は行為者自身の受益という行為を原因として、話者「私」が間接的な原因から心理的にマイナス状態からプラス状態に変化しており、他者を原因化、想定プロセス化して結果的に受益していることを指摘する。

#### 5. 3. 1. 1. 1 B.「話者誘因的てもらう」文の特徴

Bの「話者誘因的てもらう」文とは、話者「私」が他者受益のために他者に働きかけ、その働きかけによって他者行為者が直接受益をするという機能を持つ「てもらう」文である。そのため、話者「私」は他者の行為の実現を「想定」するに止まっているよりも、発話して他者に働きかけたり、実際の援助行為を通して働きかける際の「てもらう」文が多い。

(27) (インタビューに答えたイベント副委員長の話。この話者は商店街のフェスティバル実行副委員長である。)

「イベントを通して、地域の人々に笑顔を取り戻してもらえたらと思う。」(4.18M)

(27) ではイベントの実行委員である話者は、まず条件節「取り戻してもらえたら」という「想定」をし、実際には積極的に地域の人々のためにイベントを催して働きかけ、それによって笑顔を取り戻す行為者は地域の人々、直接受益するのも地域の人々である。

次の (28) (29) も＜受益未実現時＞であり、受益「想定」が「てもらえるように」「てもらって」「てもらうようにすれば」というように表現されている。

(28) (県協会事務局長が、被災地の子供達に絵本を届ける準備で)

「(子供達に：筆者加筆) 楽しんでもらえるようにに本を選ぶのが難しい」(4.10M)

(29) (バンドメンバーの仲間との会話。話題のバンドリーダーは、奥さんが出産で、練習に出てくるのは大変だろうと話者が気遣い、提案)

a. 「だから、土曜日はさー、抜けてもらってさー、ホーンのフレーズ、二人だけで作っちゃえばいいじゃん。」 (m10852)

b. 「それから来てもらうようにすれば。」 (m10855)

この (28) (29) で、だれがどのような受益をすることを表しているのかを見ると、まずどちらも他者自身が行為をし、受益状態になっていることがわかる。例えば (28) で他者

自身の行為とは「楽しむ」であり、送り先の被災地の子供が楽しむという受益である。(29)で他者自身の行為とは活動を「抜ける」、他のメンバーが作業を終わらせたなら「それから来る」であり、その行為が行われると、他者リーダーが楽をする、その分奥さんと過ごせるという受益をすることがわかる。また、この(28)(29)で他者とは、(28)では話者からは距離のある、普段関与の無い他者であり、一方(29)はもう少し距離的には近いメンバーである。しかし、両者とも受益は話者「私」自身ではない。他者のことであるのに、話者が自らの受益表現「てもらう」と発話しているのはなぜだろうか。<sup>110</sup> それは、次の心理学や認知言語学の指摘によって説明できる。

### 5. 3. 1. 1. 2 他者への自己投入と共感

まず、他者の受益を話者が捉えるのは、認知言語学の考え方による「他者への自己投入」ということが起こっているからだと考えられる。3.3.1.2 で話者の自己投入について、未来への自己投入と他者への自己投入があるという池上(2004)の指摘を示した。話者は、「実際には問題の事態の中に身を置いていないような場合であっても、自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする」とあるように、ここでは他者に自己を投入し、他者を体感してそこから話者自身も間接的に受益していると考えられる。

話者は他者に心理的に接近していることを見た。つまりこの時、日本語話者「私」は〈事態〉、ここでは〈他者の出来事〉の中に身を置いている。そこでは、話者「私」が接近した子供達やリーダーの、心理的受益から日本語話者「私」が自己・中心的、主観的に〈他者の事態＝心理的受益〉を把握していると考えられる。自己投入をする話者「私」は、自らの視座を他者の中に移動させ、他者に仮想的になってみて、他者の体験を疑似体験する。

---

<sup>110</sup> そこには心理的な接近ということも起こっている。話者「私」の投入の起こりやすさということについて、本研究の「てもらう」文の用例から次の(i)と(ii)で心理的距離と受益の中味に差異があることが指摘できる。(i)では話者「私」が同じ被災者で、立場が他の被災者と少し異なるだけであるので、心理的距離は近く、受益の中味も「加害者がまじめに付き合うこと」による受益ということではほぼ一致する。しかし(ii)では立場が異なり、第三者である話者が行為者から受益する事は、物が売れずに困る生産者の立場での受益ではなく、風評が無くなり市場が落ち着くことが受益である。そのため、心理的な接近や投入の度合いは低いと思われる。本研究の「てもらう」文の用例からは「私」の投入の度合いは、まず一人称「私」を原点とし、次に他者であっても立場が同じ「私達」の「私」、対立的立場の一方である私側というように、その状況下で他者と同一体験により共感する私という心理的な接近の強い場合まで連続的であることが見出された。さらに「てもらう」と発話する「私」の範疇は、心理的に一致が無くてもその時だけ利害を一致させる「私」や、他者によって間接的に受益できるため、その他者の側に立つ(ii)のような私というように低下していく。「てもらう」文で表される受益の話者「私」は、このように心理的な要因だけでなく、同じ話者「私」であっても「私」の範囲には巾があることが指摘できる。

(i) (自主避難地域で弔いを続ける避難圏内の僧侶)

「電力会社の幹部がテレビ中継で頭を下げたり…(略)今は不信感だけです。被害を与えている地域に、まじめに付き合ってもらいたい。」(4.16A)

(ii) (農林水産副大臣が、検査数値を上回った品目のみを会見で言及した官房長官に)

「基準値を下回った品目も言ってもらい、風評被害を防ぎたい」(3.25A)

そこで他者が受益をすると、話者「私」も受益した他者の心理的なプラス化に共感し、話者「私」自身の心理もプラスに変化、すなわち受益するということになる。

心理学の観点からも他者の身になってみることに、宮崎・上野（1985）によって次のように説明されている。宮崎・上野（1985）は、「視点の内側としての心情を理解するには、その“ものになる” ことによって、つまり身体感覚を通して（pp.134-135）」、「他者に仮想的自己を派遣し、他者に “なって” その心情を実感的に理解すること」であり、それは「他者の共感的理解（empathic understanding）をおこなうこと（p.144）」であると述べている。

これらの話者「私」の心の動きを他者受益の「てもらう」文に当てはめると、話者「私」が他者になってみて受益した他者と同じ体験をすること、(28) では「楽しむ」、(29) では「抜ける。それから来る」という体験をするということになる。そして話者「私」はそこで他者の受益に共感し、(28) で楽しむ受益に共感し、「私」が楽しみ、幸せな気持ちになる。(29) では楽をする、奥さんと過ごせるという受益に共感し、「私」が嬉しい気持ちになる、ということである。そこで、話者「私」も心理的に受益すると説明できる。<sup>111</sup>

次にこの B.「話者誘因的てもらう」文という他者受益の「てもらう」文を、話者「私」の受益結果への原因と〈想定プロセス〉という観点からまとめる。

### 5. 3. 1. 1. 3 話者受益への原因化とプロセス化

他者受益の「てもらう」文も、話者「私」が他者に自己投入、仮想的に他者を体験、他者の受益状態に誘発されて、話者も心理的受益状態になる。結局話者「私」も受益を体験している。したがって、他者の受益に「てもらう」と言うのは、話者「私」も受益状態になるため、他者受益を「てもらう」と表現することは話者「私」の受益を表すということになるからである。

また、話者「私」は他者への自己投入によって他者に対して自らとの関与づけを積極的に行っている。話者「私」は他者受益から受益できることを「想定」し、絵本を送ったり、休みを提案するという援助的な行為を働きかけ、そこから間接的な受益を期待するというプロセス化を行っている。そして、他者の受益が話者「私」の受益となり得るのは、他者受益を間接的に疑似体験し、他者の受益に共感して話者「私」も受益するという、受益を体験しているからである。たとえ他者受益からの間接的な受益でも、想定から働きかけ、

---

<sup>111</sup> このような他者受益の「てもらう」文は他にも次のように見られる。

(i) (野球選手が)

「真剣に野球をして、少しでも被災地の方に勇気を持ってもらえるように頑張っていきたい。」

(3.25M)

(ii) (H 市が被災地の親子を桜祭りに招待)

「被災者にも自慢の桜を見てもらい、元気を取り戻してもらおうと招待を決めた。」 (4.16M)

被災者が (i) のように勇気を持つこと、(ii) の桜を見て元気を取り戻すことは被災者の受益であり、話者「私」はそこから間接的に受益する。

そして最終的に話者「私」に受益が還るのは、〈想定プロセス〉の思考回路である。言い換えると、このように複雑な話者「私」の受益の仕方ができるのは他者受益の話者への関与づけと原因化、そしてその受益が話者「私」に還るという〈想定プロセス〉の思考回路に沿っているからであろう。この「てもらう」文を図に表すと、図 5.12 のようになる。図で実際に話者「私」が誘因となる働きかけは実線で、しかし話者「私」への直接的な作用は無いため、点線で話者「私」が心理的に捉えた受益ということを表している。

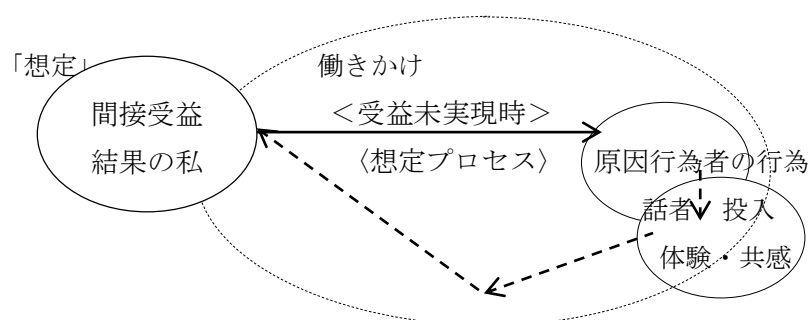


図 5.12 B. 「話者誘因的てもらう」文の受益〈想定プロセス〉

図 5.12 で、基本的な〈想定プロセス〉と異なるのは、話者「私」が直接行為者に自己投入して、同じプラスの影響結果状態になってみることによって共感し、受益するという、間接的な受益だという点である。すると、働きかけを行っても行為者が受益状態にならない場合、例えば積極的に話者「私」が働きかけて絵本を送っても、行為者が受け取らなかったり喜ばなかったりする場合には、話者「私」の心理的な間接受益は無く、既実現時の話者「私」への受益プロセスは無くなることになる。

次に、同様に間接的な受益を表す D. 「拡張関与的てもらう文」について考察する。

### 5. 3. 1. 2 拡張関与受益の「想定」原因化

D. 「拡張関与的てもらう文」の中に、「想定」がある「てもらう」文と無い「てもらう」文がある。4.2.5 で拡張関与「てもらう」文を「想定」の有無で分け、「想定」のある「拡張関与てもらう文」を D-1.、「想定」の無い「拡張関与てもらう文」を D-2.としている。ここでは D-1 の「拡張関与的てもらう」文を考察し、D-2 の「拡張関与的てもらう」文は次の 5.3.2 で考察する。

#### 5. 3. 1. 2. 1 D-1「拡張関与的てもらう」文の特徴

D-1「てもらう」文は、話者「私」が関与しないことに対して、受益未実現の段階で、話者「私」が受益できると気づく文である。用例からは、実際には働きかけられるが、行為者が期待通りに行為をするか否かが、A. 「想定再帰的てもらう」文と比べ確定的ではない。

さらに、話者「私」が、話者「私」の受益にとって間接的な行為者の行為が、話者「私」の期待通りの結果になったかならなかったかということを表す文は、本研究の資料からは見られなかった。そのため、この D-1「拡張関与的でもらう」文は、結果実現の確実性という点から A.「想定再帰的でもらう」文とも B.「話者誘因的でもらう」文とも異なる文であると言える。そして、その用法は、期待用法が中心的な用法だと言えるだろう。

次に、話者「私」が D-1「でもらう」文で受益できると期待する行為者の行為とはどのようなものかを見る。次の用例からわかることは、話者「私」が働きかけても、働きかけの対象となる行為や事態の生起が確実ではないことである。

(30) (被災地支援ショップ店長)

「(消費者が:筆者加筆)長い目で見て買ってもらうことが、雇用と生活の安定につながる」と店長の [名前] さんは話す。(4.7M)

(31) (被災者)

「[名前] は観光地でした。もう一度復活して多くの人に来てもらいたい。」(4.10M)

(32) (図書館員同士の会議。パソコンでの新しい書式では発注先に何を確認させ、その結果、どのような支払いの流れになるかを説明している。)

「(略) 出てくるってふうになりますんで、まーいちおう向こうで一、これをまず照合して、でこっちの金額すーあの信用してもらって、あの一、明細起こしてもらうつ、てゆうふうに、な、なるようになりました。」(m9265)

「長い目で見て買う」ことも「多くの人が来る」ことも「こっちの金額を信用する」ことも、話者「私」の受益結果の原因として生起することを話者「私」は見込むのではない。話者が関与できない事態への期待を「でもらう」文で表している。もし行為者が期待通りの行為をしたり事態が期待通りになったらいい、という想定から期待までは、〈想定プロセス〉に当てはまっている。(31) の願望の「てもらいたい」、(32) では「て節」のような〈想定プロセス〉に特徴的な「でもらう」文末表現や従属節での接続表現があることから、これらの「間接でもらう」文が〈想定プロセス〉に沿っている事を表していると言える。

さらに、話者「私」が原因事態に働きかけられない場合として、原因事態が自然現象である次のような場合が挙げられる。(33) (34) では、原因事態の生起に期待をするだけである。これらは<受益未実現時>の発話であり、(33) は条件節、(34) は「て節」で受益原因を〈想定プロセス〉に組み込んでいる。

(33 再掲) (残暑が厳しいという雑談の話題で)

「そろそろ、30 度は遠慮してもらわないと。」(m9000)

(34 再掲) (雑談で、旅行の候補地を挙げている)

「九州はいいんだけど、台風はやめてもらって。」(f10349)

D-1「拡張関与的てもらう」文の期待は、結果の実現を直接受けることではなく、間接的、心理的なプラスの影響である。自然現象は話者「私」がこれ以上 30 度が続いたらいやだ、台風が来たらいやだ、という状態があり、それらの行為をやめてもらう、遠慮してもらうことで心理的な安心が得られる。D-1「拡張関与的てもらう」文を図に示すと次の図 5.13 のようになる。図 5.13 で、実際の働きかけや受益への作用は見られないため、全てプロセスは点線となっている。その中で、話者「私」の〈想定プロセス〉があることを太い点線で、しかし行為や事態が話者「私」の期待通りに実現するかは定かではないため、話者「私」への受益は確実ではなく、細い点線で示されている。

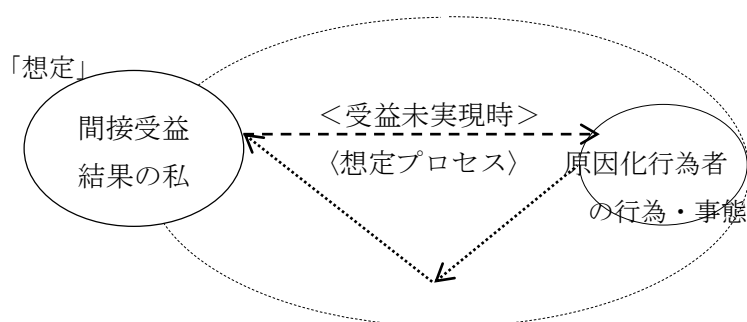


図 5.13 D-1「拡張関与的てもらう」文の〈想定プロセス〉

図 5.13 で、基本的な〈想定プロセス〉と異なるのは、話者「私」が行為者や事態に働きかけられず、また行為者の行為や事態も話者「私」に向かうわけではないことである。話者「私」はその影響が話者「私」の受益結果に向けて及ぶように「期待」をするだけである。しかし、このことは見方を変えれば、話者「私」が何に対しても私に受益という変化結果をもたらす原因として期待を持てば、それが叶うと受益だと捉えるという特徴が指摘できる。これらの期待した結果になることは、言い換えると、話者「私」が関心を寄せた行為者の行為や事態の実現によるのである。

次に受益原因の中身とプロセスについて考察する。

### 5. 3. 1. 2. 2 受益原因の想定プロセス化

話者「私」が関心を向けるのは、そこから受益できると気づいた事態や行為である。仕事上信用してもらうことは行為者との接点があるために受益見込みはしやすいが、(29) のようにお客が長い目で見えて買う事が受益だと考えること、(33 再掲) のように台風が来ないことが受益だと気づくことは、話者「私」が、関与性の低いことに対して逆に積極的な関心を向けているということだと言える。<sup>112</sup> つまり、話者「私」は、自らと関与が無

<sup>112</sup> 藤井 (2012:111-112) は条件文に現される前件と後件の因果関係について「自然・物理的・生物的現象のみでなく、社会的制度や規則に則った因果関係や、心理的・感情的連鎖としての

い自律的な事態に対しても積極的に関心を寄せ、その成り行きや結果に期待するということである。

「てもらう」文に、事態生起への積極的な関与と期待の姿勢があることを指摘したが、話者「私」がコントロールできないことにも関心を向け、期待をするということは、「てもらう」文にだけあるのではない。日本語には、関与しない事に対しても関心を向けて、その結果に対して期待通りになるか否かが言語化されている形式として、可能の意味を含意する自動詞がある。その先行研究を示し、本研究の「てもらう」文にある、話者「私」の自律的な事態への関心ということとの共通点を指摘して、さらにそれを、「てもらう」文の否定が「てもらえない」と可能形を用いて表現される理由として指摘する。

山田（2001:3-4）は室町時代の自動詞について、対応する他動詞を持つ自動詞は『いくら宣伝してもなかなか売れない』のように、否定は『可能』の意味を帯びる」と説明している。<sup>113</sup> そして日本語のこの自動詞の可能の意味について、自動詞「キレヌ」を取り上げて、これにある二種の用法のうち1つに、「(切ろうとしても) 切れない」の意味があり、山田（2001:5-6）は「意味上はすでに可能の意となっている」用法であると説明している。<sup>114</sup> 山田（2001）の説明するこの「(切ろうとしても) 切れない」の意は、不可能の意味であろう。<sup>115</sup> そして、自然な成り行きへの「予想・前提・期待」があり、そのようになるものと思ったり期待したりしていたのに、そうならないことが不可能として意識されることが「可能」の意味の始まりだと説明している。

したがって、他動詞で動作主が意図を持って動作・事態を起こすのとは異なり、自然な成り行きの事態や動作の動作主が起こす動作については、表現者はその動作・作用を「受ける」立場で結果の状態を期待することになる。そしてさらに、自然に起こったことの影響が期待通りであれば、その影響を受けて話者「私」は心理的プラス状態となる。期待通りにならない場合にはがっかりするなど、プラスの状態は実現しないことになる。

これを「てもらう」の D-1「拡張関与的てもらう」文に当てはめれば、話者「私」が働きかけられない動作・事態に対し、話者「私」は結果状態への「想定」・期待が適うと「てもら

---

因果関係や(略)話者が感じている様々な現象をも含む広義の概念である」としている。そして、話者による条件文という観点では「それらの因果関係が客観的世界に確立しているか否かということより、話者がその因果関係を世界知識で想定しているかどうかという点が、自然言語における条件構文を理解する上で重要である(pp.111-112)」と述べている。この説明から、間接的であれ、「てもらう」文の因果関係には話者「私」によって心理的、感情的に捉えられた関係も含まれると考える。

<sup>113</sup> 山田（2001:3-4）はさらに、このような動詞は三上章の「所動詞」の典型的なものであり、さらにこのような「所動詞」はロドリゲスが日本語特有とも言うべき動詞だとして『日本大文典』に「絶対中性動詞 (verbo neutron absolutiuo)」として取り上げ、説明していることを紹介している。

<sup>114</sup> 山田（2001:5-6）はそこで、もう1つを「切れることがない(なかった)」の意で、単なる否定の自然勢であると説明している。

<sup>115</sup> この点については、中国語についても張（1998:260）が「結果可能表現は、本来『現実における動作主の意図の不実現』を表す言表である。通時的に見ると、可能表現は自発表現→不可能表現→可能表現というように変遷してきたものである」と指摘している。



う」という結果的にプラスの変化状態になる。反対に、「想定」・期待通りにならない時は、話者「私」は不可能である「てもらえない」という表現になる。そのことから、「てもらう」文に期待の意味があることは、逆にこの否定形が不可能形であることから指摘できる。「してもらわない」と表現するのは期待ではなく、働きかけて行為者に行為を起こさせる意志が無いことを表している。<sup>116</sup>

話者「私」の、自らの非関与の事態に対するこのような積極的な関心を示すことは、本研究 5.2 で説明した、話者「私」の受益原因事態への関与化である。そしてこれは、非関与の動作・事態からの影響を表す被害の受身文には無い事態の捉え方である。被害の受身文が生起した事態から「受ける」までのプロセスを含意させているのに対し、「てもらう」文は、原因事態の生起や成り行きを期待する部分、すなわち〈想定プロセス〉によって非関与の事態を受益原因化することが受身文との差異として説明できる。

次に、話者「私」が〈受益未実現時〉の間接的な受益を表す「てもらう」文をまとめる。

### 5. 3. 1. 3 受益未実現時の間接受益「てもらう」文のまとめ

D-1「拡張関与的てもらう」文と、先の B「話者誘因的てもらう」文とは、いずれも話者「私」が〈受益未実現時〉に受益結果を「想定・期待」している。さらにこれらは直接話者受益と関与の無い、間接的な原因事態からの受益を表している。そして、これらの原因事態はさらに、受益未実現の段階で受益結果を「想定」する際に、必須の〈想定プロセス〉として見込まれている。〈想定プロセス〉は話者「私」が行為者の行為の結果、再帰的に受益できるという思考回路の枠組みである。話者「私」が関与の無いことから受益を「てもらう」と表すのは、〈想定プロセス〉に支えられて、関与の無いことからの「私」の受益を捉えられるからだと考えられる。

次に、〈受益既実現時〉の局面で間接的に受益したことを「てもらった」と発話している D-2「拡張関与的てもらう」文の話者「私」の受益の捉え方を考察する。

### 5. 3. 2 〈顧みプロセス〉の間接「てもらう」文

本項では「想定」も働きかけも無く、受益した結果、何かの原因から受益した受益原因を顧みて意識する D-2「拡張関与的てもらう文」の結果の受け方を考察する。話者「私」に

---

<sup>116</sup> 山田（2004）は「てもらう」文の可能の意味について、「テモラエルは、形式としてはテモラウの可能形という扱いをされることが多い。テモラウ受益文は働きかけ性を含意することが多いため、働きかけがないことを積極的に示すためにも用いられる」と説明している。「てくれる」と「ほぼ同一の意味となる」としているが、次の例のような場合には「テモラエルを使うと話者が直接受益者とはならず（略）、テモラエルは使えない」としている。

（i）戦後のあの混乱期に、日本人の孤児をだいじに育て上げてくれた／＊モラエタ中国の恩人である。

その理由を「（i）のテモラエルは依頼の結果の実現を可能として捉えており、そのような依頼の意味がテクレルにはないためと考えられる」と説明しているが、本研究では「てもらう」にあるのは、話者「私」の関与しない（できない）事態への、話者の結果状態への「期待」であると説明する。

関与が無いことから受益状態になり、それから受益したと表現しているこの「てもらう」文は、「想定」も働きかけも無いが、直接話者「私」に行為者の行為が向かう C.「話者遠因的てもらう」文との共通性がある。C.「話者遠因的てもらう」文にある〈顧みプロセス〉に沿うことで、D-2「拡張関与的てもらう」文で関与の無いことを原因として「てもらう」と表現できることを考察する。

### 5. 3. 2. 1 D-2「拡張関与的てもらう」文の特徴

D-2「拡張関与的てもらう」文というのは、次のように話者「私」の受益が既に実現した段階で、受益状態になっていると気づく「てもらう」文である。

(35) (翻訳事務所の部長が入社してくれた有能な社員の評価をしている。他機関に依頼するコストや手間の話から、その社員が期待した仕事以上の、「仕事上の判断ができる」ことを、コストや手間という点でも会社に貢献していると評価している)

「まあ、あの、いろいろ自分なりに、(うん、うん、うん。ええ 聞き手の相槌：筆者加筆) 判断を、できる、してもらって、してもらって。」(f2616)

(36) (ケアホームの職員が (ホームの経営者に)

「ここまで育ててもらって申し訳ないけど、家族と一緒に (県外避難することにした：ドキュメント記事により筆者の加筆)」(3.22M)

(37) (被災者と介護 記事)

「一人暮らしで、医療と介護の両輪で支えられているという男性は『看護師さんには気持ちの部分でも支えてもらっている』と話す。」(4.8M)

「(話題の行為者が) 自分なりに (仕事の) 判断する」「ホームがここまで私を育てる」「看護師が私の気持ちを支える」というのは、話者「私」が受益を期待していたことではない。期待もせず、向けられる行為でもないことに対し「てもらう」言っている。(35) と (36) は「て節」で受益原因を説明し、(37) は「ている」で現在受益状態が継続していることを表している。

### 5. 3. 2. 2 受益原因の顧みプロセス化

(35) (36) (37) の「てもらう」文は、話者「私」が受益状態になっていると気づき、ただ受益状態になっているというだけでなく、何等かの原因があってその原因からの影響で受益状態になったと捉えたことを表している。以前の状態に比べた今の変化結果の原因を辿るのは、5.2 で考察した C.「話者遠因的てもらう」文と同様であり、〈顧みプロセス〉だと言える。例えば (36) では仕事の経験を積んだ話者「私」が、そのキャリアという受益はホームでの仕事によると考えている。また (37) での気持ちの安定は話者「私」がその原因を看護師さんの接し方によって得られたとして、受益原因の行為と関与づけている。

したがって、D-2「拡張関与的でもらう」文も、C.「話者遠因的でもらう」文と同様〈顧みプロセス〉によって結果から受益原因を辿って、直接作用の無い原因を受益プロセス化している文だということができる。それを図にすると次のようになる。(37) では話者「私」は実際に行為者が話者「私」に好意的行為をしたとしても、それとはまた別に話者「私」が感受した受益の原因を、心理的に顧みて辿り探り当てようとしている。そのため、辿り方を点線矢印で示してある。<sup>117</sup>

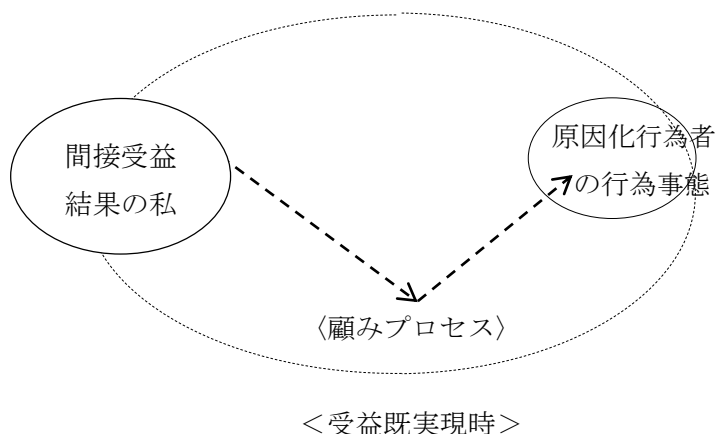


図 5.14 D-2「拡張関与的でもらう」文の〈顧みプロセス〉

C.「話者遠因的でもらう」文との差異は、C.文では原因行為者からの行為が話者「私」に直接向けられており、それが話者「私」がマイナスまたはゼロ状態であったためと、話者「私」自身にもわかっていることである。一方、ここで考察している D-2「拡張関与的でもらう」文は、「私」が受益原因となる行為や事態の毛化だと捉えているだけである。そのため、図では原因から話者「私」に向かう矢印は無く、話者「私」から点線の矢印によって心理的に、しかし積極的に原因行為や事態を顧みて関与づけていることを示している。以上のことから、この D-2「拡張関与的でもらう」文は、C.「話者遠因的でもらう」文の、結果からの〈顧みプロセス〉という思考回路と、積極的な原因を求める関与づけという指向性に沿うことによって、話者「私」は自らに向けられないことから受益を捉え、表現することができるのだと考えられる。

「でもらう」文は先行研究で、被害の受身文と意味的な相補性を持つと言われている。先行研究指摘から、被害の受身文の受け方と相補的と言われるのはこの D-2 の「拡張関与的でもらう」文についてであるという本研究の考え方を述べる。

先行研究で、被害の受身文と間接「でもらう」文は、補文の事態に関与しない「私」が

<sup>117</sup> この図で、話者「私」が捉えた受益は、会社等原因行為者の行為が話者「私」の受益のための意志的行為とは限らない。そのため、受益未実現時の話者「私」を行為の動機としたという意味の受益前の話者「私」との間の点線は示さない。

補文の事態からの影響を受けることを表すという共通性を持つという指摘がある。鷲尾（1997:45）は受動文の記述する状況について「関与受動」(Inclusion Passive)と「排除受動」(Exclusion Passive)という区別を立て、直接受動は関与受動になると説明している。本研究の用例に見られる D-2「てもらう」文の受益原因は、「社員」も「ホーム」も「看護師」も、話者「私」との接点が無いわけではない。客観的には話者「私」は社員として会社に所属しており、またホームで働いており、そして看護師からは体のケアを受けている。したがって、話者「私」と関係の無いことからの受益というよりも、D-2「てもらう」文の原因の間接性は話者「私」の心を感じた受益であり、客観的に事態を把握する話者とは異なる把握の仕方によるため表現できるというのが本研究の考え方である。D-2「てもらう」文の話者「私」の受益は、あくまでも話者「私」が気づいた変化結果に対し、「私」自身がその原因事態を顧みて、その行為や事態のおかげで今の「私」の受益状態があるのだ、と判断していることを表している。このような話者「私」の捉え方による影響の結果について、次の柴谷（2000）の「影響の感じ手の感知の仕方による」というのが、本研究での D-2「拡張関与的てもらう」文の受益の仕方であると考ええる。

柴谷（2000:150）は、自動詞の受身は日本語には特に顕著であると指摘し、その理由を受身文の主語がいわゆる有情物、典型的には人間に限られ、その主語は行為を「うくる者」が事態から受けた影響を情意的に表現するためだと山田（1908）を引用し、指摘している。<sup>118</sup> そして受け手が情意的に表現することの中身を、柴谷（1997）は受身の主語は作用を受けるものを表す位置であることから、「ある行為を感知したという意味、さらにそれによって可能になる影響を感じる主体としての理解が生まれて、当該行為を迷惑と感じる心理的な作用を受けたという解釈が成り立つのである」と述べている。<sup>119</sup> 自動詞の受身文や被害の受身文と意味的に相補性を有する「てもらう」文というのは、受ける主体としての話者「私」が、話者「私」に向かわない受益原因行為や事態と捉えたことからの影響を受け、それを受益と感じたことを表すこの D-2「拡張関与的てもらう」文であると考ええる。

また、次の尾上（2003）の出来文の要素も D-2「拡張関与的てもらう」文を部分的に説明すると考える。尾上（2003）は日本語の〈受身〉〈可能〉〈自発〉〈意図成就〉〈尊敬〉等を表す「ラレル」文を、〈出来(しゅったい)文〉というスキーマで捉えている。出来文とは、「事態をあえて個体の運動（動作や変化）として語らず、場における事態全体の出来、生起として語るという事態認識の仕方を表す文 (p.36)」だということである。そのうち〈自発〉について尾上（2003）は「〈自発〉用法とは、動作主が特にそうしようと意図したわけ

<sup>118</sup> 山田（1908：375）は日本語の受身の特性を「(略) 日本語本来の受身文の主語はいわゆる有情物、典型的には人間に限られ、そしてその主語は行為を「うくる者」であるが、『うく』といふ意識の観察は実に自己がその動作作用の影響を蒙りたる一刹那の意識の状態にすぎずして決して動作作用其の者の進行をいふにあらざるなり」と述べている。

<sup>119</sup> 坪井（2003:53）は迷惑受身について、二格表示が単なる行為者とどう違うのか、という問題に突き詰められるとして、「働きかけられる側のその働きかけに対する認識を前提とするような性質のもの」と述べている。

ではないのに、事態が生起したという表現である」と説明している。そしてこの〈自発〉の主語について尾上（2003:37）は、『事態出来の場』（『』は筆者加筆）であると認められる限り、それを（第一）主語として出来文を語ることができる」と指摘し、「非動作主に視点を置くために出来文を使う用法」だと述べている。

この説明は、受益事態出来の場を被行為者である話者「私」自身とし、「私」という場の中に意図せずに発生した心理的受益を捉える本研究の D・2「拡張関与的てもらう」文に当てはめられると思われる。

すなわち D・2「拡張関与的てもらう」文では、話者「私」は自らに向かわない非関与の事態を、受益結果を体感した時点から〈顧みプロセス〉の枠組みに沿った思考回路によって自らと関与づけ受益原因化している。そしてその影響結果としての話者「私」の受益と捉えているため、「てもらう」で表現するのである。

次に、本節で見てきた間接的な受益を表す「てもらう」文の考察をまとめる。

### 5. 3. 3 プロトタイプの枠組みからの派生

本研究では、「てもらう」文は、話者「私」の受益を表すのに、どのように受益をするのか、何から受益したのか、ということを含意させることを説明してきた。本節で考察したのは、話者「私」に行為者の行為や作用が直接向かわないことに話者「私」が「てもらう」と発話する理由である。5.3.1 で示した他者受益による話者「私」の間接的受益、5.3.2 で示した期待用法の「拡張関与的てもらう」文では、間接的な事態であっても話者「私」が受益できると見込むなら、話者「私」は受益のために間接的な事態に自らを積極的に関わらせてその事態を原因化し、受益という影響を受けに行く。この積極的な関与は受益への〈想定プロセス〉化である。また、5.3.3 で示した、受益結果を意図せず受けた「拡張関与的てもらう」文では、話者「私」は直接的な作用が無いが心理的に受益だと感知して、その変化結果の原因を間接的な事態に求めている。この積極的な関与づけは受益結果からの〈顧みプロセス〉化として説明できることを示した。

つまりこれらの「間接てもらう」文は、5.1 で見た、話者「私」の受益のひとまとまりの中に時間的なプロセスがあること、5.2 で見た、原因を必須として関与させた受益であること、という「てもらう」文の思考プロセスの枠組みに支えられているために、事態や行為が間接的であっても「てもらう」という表現形式で話者「私」の受益が表現できると考えられる。したがって、これらの間接的な受益を表す「てもらう」文は、「働きかけてもらう」文という、「想定」から受益結果までをプロセスとして含意する〈想定プロセス〉の典型的「てもらう」文、また受益結果から、その受益作用を直接及ぼした行為や作用という原因を顧み、さらにその生起の原因を辿る〈顧みプロセス〉の典型的「てもらう」文をプロトタイプとするならば、それらの思考回路の枠組みを派生的に用いて話者「私」の受益を表す派生的「てもらう」文であると言える。

5.3 で考察した間接的な受益を表す「てもらう」文は、いずれも話者「私」が積極的に、

話者「私」に向かわない行為や事態を話者「私」の受益と関与づけて受益原因化し、期待したり顧みたりしている。日本語母語話者がなぜ非関与の事態にこのような強い関心を持てるのだろうか。それはこの「てもらう」文では、話者「私」の非関与の事態への〈自己投入〉という視座操作が行われているからだと思われる。B.「話者誘因的てもらう」文では、他者の身になって共感という他者への〈自己投入〉が行われている。D-1「拡張関与的てもらう」文では、想定した受益結果という未来への〈自己投入〉によって仮想的に受益体験をして、実現を期待している。また D-2「拡張関与的てもらう」文では、受益結果状態を体感している話者「私」は、受益原因がたとえ事態や自然現象であっても、それらを話者「私」にとっての行為者として捉え、あたかも有情物からの受益であるかのように見たてて感謝を表している。これらの「間接てもらう」文には、日本語話者の〈事態把握〉の特色が多分に表れていると言える。

受益原因との積極的な関与づけを図にすると、話者「私」と関与の無い行為や事態を受益原因化するには話者「私」と事態とをつなげる、矢印に当たる部分が必要である。「間接てもらう」文であっても、図 5.12、図 5.13、図 5.14 で見たように話者「私」と原因行為や事態は実践か太い点線ので繋がっている。そこでは話者「私」の積極的な関与づけは〈想定プロセス〉、〈顧みプロセス〉という時間的因果的プロセスを支えとして話者「私」の受益結果が原因化行為や事態とひとまとまり化されている。すると関与の無い事態が話者「私」の受益に結びつく。もし、このプロセスによるひとまとまり化が無い場合は、矢印もひとまとまりも無い次の図のようになるだろう。



図 5.15 関与づけられない受益原因と間接受益結果

関与づけやひとまとまりの結果へのプロセス意識は話者「私」の中にあり、客観的にはわからない。しかし、話者「私」が「てもらう」と表現することによって、「てもらう」という表現が含意する時間的プロセス性、因果性、関与性が聞き手に解釈され、「てもらう」と表現する事態が話者「私」にとって受益であると聞き手が理解できるのだろう。

ここまで、第 4 章の用例に見られる特徴から 3 つの点をこの第 5 章で考察してきた。次に 5.4 で考察のまとめを行う。

## 5. 4 話者受益表現「てもらう」の認知過程

授受動詞「もらう」の補助動詞的用法である「てもらう」は、話者「私」が発話する時、話者「私」は行為者に行為を要求したり依頼することを表す表現形式というだけではない。また、行為者の行為や何かの事態から恩恵や利益を受けたということを表すだけの表現形式でもない。これまで見た 5.1 から 5.3 の考察によって、「てもらう」文で発話する話者「私」は、自らの受益という変化結果が、行為者の行為や事態を原因としてそこからの作用や影響を「受ける」という時間的、因果的結果状態であるということを見てきた。ここでは、「てもらう」と表現する話者が自らの受益を、その原因事態を介したプロセスと変化結果をひとまとまりとして受益だと捉えていることをまとめる。

### 5. 4. 1 「てもらう」文の受益の認知過程

第 5 章考察では、「てもらう」文を、5.1 では時間順のひとまとまりの受益プロセス、5.2 ではプロセスの中の受益原因との関与づけ、5.3 では間接受益について考察した。

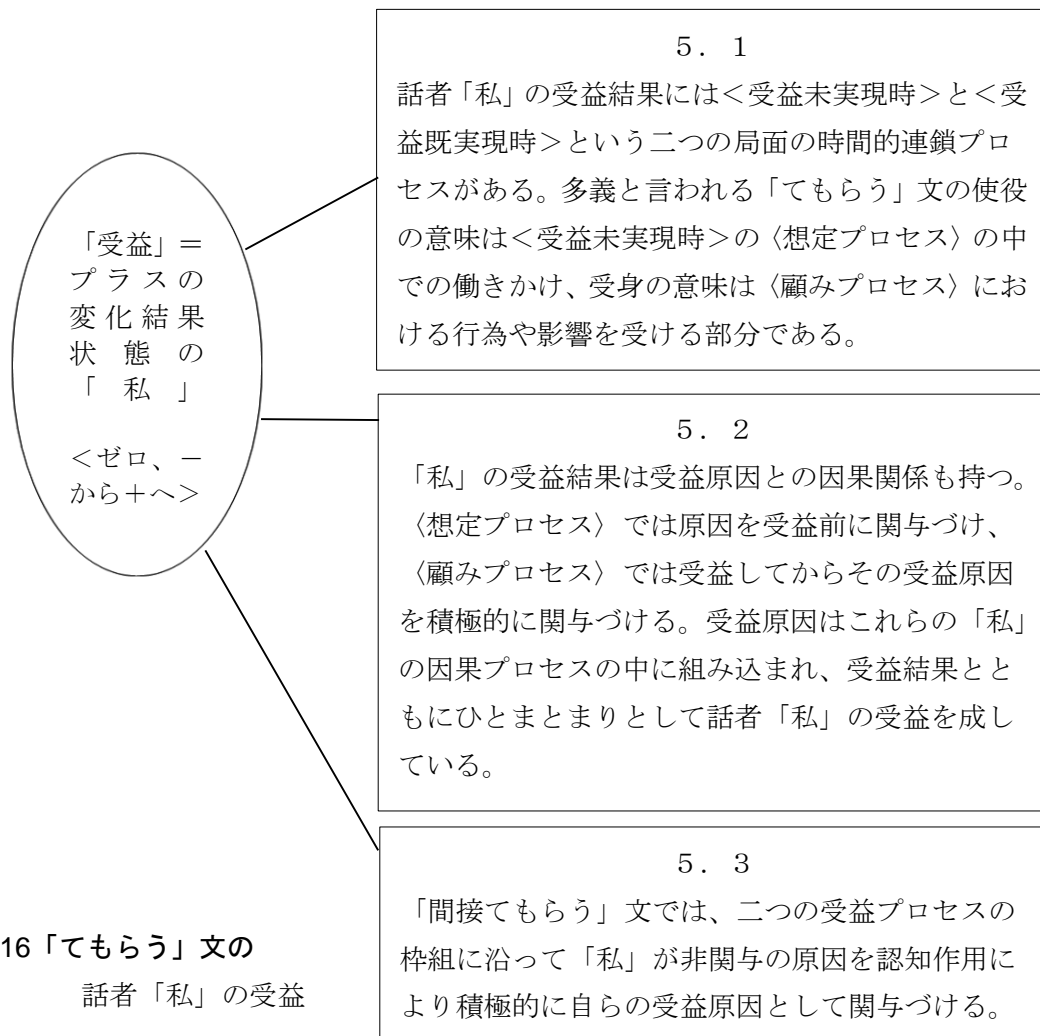


図 5.16 「てもらう」文の  
話者「私」の受益

「てもらう」文は、受益結果や、行為者に働きかけをするという部分だけを表すのではない。図 5.16 のように、5.1 で見た受益結果のひとまとまりの中のプロセスも、5.2 で見た、話者「私」の受益への原因の辿り方も、5.3 で見た、話者「私」が捉えた原因からの影響結果であることも含意している。そして、それらは全て、「てもらう」と表現する時に、話者「私」が受益結果であるプラスの変化結果状態になることと共に、「私」の中の時間と因果の脈絡も表現しているのである。それは、言い換えると話者「私」の変化結果を述べる時、結果だけでなく、そこに至る 1. プロセスも、2. 何によって変化状態になっているのかという原因も、3. ただ作用があることだけでなく、自らが捉えた原因から体感した影響という感じ方も、話者「私」のプラスの変化結果への要素として、全て含めてひとまとまりに捉えて、それを「てもらう」と表現しているのである。それらが「てもらう」に含意される意味であり、話者「私」の受益事態の捉え方である。

この受益結果と含意される意味とを図にすると、図 5.17 (b) のように描くことができる。例えば、「受益した」という結果だけであれば、図 5.17 (a) となるが、日本語の「てもらう」文では〈想定プロセス〉〈顧みプロセス〉や〈想定原因〉〈顧み原因〉、そしてそれらへの積極的関心、関与づけという捉え方が、受益結果への話者「私」の「認知過程」として含意され、(b) のように描かれる。

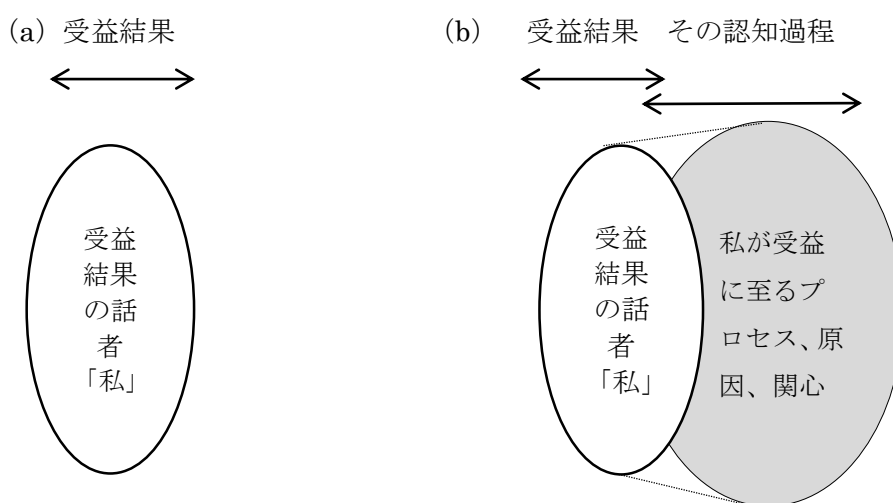


図 5.17 「てもらう」の補助動詞的用法に含意される認知過程

日本語の「てもらう」文では、このように単に受益結果を表現しているのではないことを説明した。中でも日本語に特徴的な認知過程として、本章 5.2 で、「てもらう」文が、受益原因を「～してもらって、その結果受益状態になりたい」というように見込んでいる〈想定プロセス〉だけでなく、話者「私」が受益した結果、なぜ「私」は受益状態になったのか、という結果からの〈顧みプロセス〉があることを説明した。そこでは原因となる行為



者の行為や事態を、結果になった話者「私」の受益体感から顧みて、その理由を逆に推測する、という事態の捉え方をしている。「結果になった」というだけではなく、なぜこの結果になったかという結果からその原因理由を推察する思考回路は、「てもらう」文だけにあるのではない。3.3.3 や 5.2.2.2 で、日本語に特徴的な表現形式である「のだ」文、「ている」文の結果残存用法に、同様の思考プロセスがあるという指摘があることを紹介し、「のだ」文のプロセスを挙げた。そこで「てもらう」文も表現形式の中にプロセスを含意することから、授受動詞「もらう」の補助動詞的用法も日本語話者の〈事態把握〉の特徴を表現する形式だと言えることを指摘した。

このような結果の状態や体感した痕跡から、見えているとは限らない原因を顧みて推察するという思考回路は、「のだ」文だけでなく、さらにアスペクトの「ている」という形式が表す意味範疇についても指摘されている。日本語のアスペクト表現「ている」は、今事態が進行中であるという意味だけでなく、結果の状態の残存という意味も表す。結果の実感的根拠からの原因推論を表す用法の「ている」は、日本語と文法的に近似していると言われる韓国語では表せないという指摘がある。

生越（2009:111-112）は日本語と韓国語とを比較し、「ている」の用法の中に韓国語には無い用法があるとして、「工藤（1995）が〈ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること〉と定義づけした」用法を挙げている。そこで生越は、日本語では帰宅した息子を出迎えた母親が、息子がお酒くさいのに気付いて「あ、お酒飲んだ」よりも「あ、お酒飲んでる」と言うが、韓国語ではむしろ「ko iss-ta 飲んだ」というタ形を使うと指摘している。そして、「韓国語の ko iss-ta には、日本語『テイル』の持つ『痕跡を見てそこから想起された見えを言語化する』機能がないと言える」と述べている。しかし、韓国語で「ている」を使わないのではなく、生越（2009:112）では、聞き手の動作の進行中である場面を話し手が見て、その場面設定を「昨日の夜渋谷で」というように明示して表現する時であれば、「飲んでたでしょう？」という意味で「masi - ko iss ess-cyo?」と言える」と説明している。

生越（2009）が指摘する日本語の「ている」文の特徴「『痕跡を見てそこから想起された見えを言語化する』機能」は、「てもらう」文にもあると言える。「てもらう」文は、話者「私」の受益結果の体験的感知を根拠として、そこから受益原因行為や事態を顧みて、その影響による受益結果なのだと捉えて「てもらう」で表現する。そこに「ている」文との共通点があると考えられる。

受益後に表現する「てもらう」文に「ている」が付加された文について、山田（2004:180-181）は（38）のような「見守る」「守る」「好意を持つ」等の動詞が表す動作について、「動作主の動作開始と同時に対象がその動作を認識するのではなく、多少の間の後に気づくことがある」と指摘している。

（38） いままでずっと見守って {a.もらっていた／b.イテモラッタ} 感じがした。

(山田 2004:180-181(27))

山田 (2004:180-181) の指摘は「見守る」、「好意を持つ」、「待つ」等、他動性の低い動詞に関しては、動作の対象と受益者の一致、不一致という構造による直接間接だけではなく、動作開始から多少の後にその動作に気づくような場合も間接と言えるというものである。そこでは、これらの他動性の低い動詞に関して「(b)の例文のように対象を受益者とする間接構造が用いられるのは、このような後からの気づき・認識が感じられる場合である(p.181)」と述べられている。<sup>120</sup>

山田 (2004) が間接性という観点で時間的距離の説明として「ている」を挙げているのに対し、本研究では「てもらう」の考察からこの説明に対し、「見守ってもらっていた」は、話者が受益した結果から顧みて受益原因に気づいたことを表すと説明する。確かに「見守る」というような動詞は話者への作用の直接性が希薄であると指摘でき、(38) で表現されているのは話者の心理的な、間接的な受益と言える。しかしそれだけでなく、受益を既に体感している話者は〈顧みプロセス〉によって、行為者の行為を受益結果にとっての原因として価値づけている。そのため、山田の述べるような他動性の低い動詞による事態だけでなく、例えば「貸す」という動詞でも「その本を貸してもらっ(て今持っ)ている」「その本を貸してもらっ(たから、今助かっ)ている」「その本を、(本当は買わなくてはいけなかったが、田中さんに)貸してもらっている」と、受益結果から顧みて、他者の行為のお蔭である状況を「てもらう」によって説明できる。この「ている」や「てもらう」にある、結果の状態を見てその原因を推察するという思考回路は、日本語表現の特色かもしれない。崔 (2009) によれば、中国語を母語とする日本語学習者には、他の「ている」の用法である動作の進行などに比べ、この「ている」の習得が遅れるということである。<sup>121</sup>

本研究の補助動詞的用法「てもらう」は、「のだ」文、「ている」文の結果残存からの原因推量用法と共通する受益の認知過程を含む〈事態把握〉を表現している。「のだ」文や「て

<sup>120</sup> 山田 (1999:117) は使役的、受身的な意味の観点から、「てもらう」+「ている」は受身的、「ている」+「てもらう」は使役的であると指摘し、両方が可能であると説明している。

(i) 買い物に行っている間、近所の人に子どもを見て {a.もらっていた/b.いてもらった}。  
(山田 1999:119(24))

「(i a) は、後から気づいた場合のような単純受影的な文脈で用いられ得るのに対して、『近所の人にお願ひして』のように使役的な文脈では相対的に自然さを欠く。逆に (i b) の方は、使役的な文脈では用いられ易いが、単純受影的な文脈では用いられにくく感じられる (p.119)」また、(ii a) は受身的「てもらう」、(iii b) は使役的「てもらう」の例である。

(ii) いつも勝手に遊ばせておくのだけれど、今日は、買い物に行っている間、近所の人に子どもを見て {a.もらっていた/b.?いてもらった} ことに後で気づいた。

(iii) 買い物に行っている間、近所の人にお願ひして子どもを見て {a.?もらっていた/b.いてもらった}。(山田 1999:119(25)(26))

<sup>121</sup> 崔 (2009:87) は、中国語を母語とする日本語学習者が、「鍵が落ちている。」と言えず「鍵が落ちた。(崔 (2009:81(4)(5)))」と言うことについて、「このように『結果の状態』の用法では、視点の置き方も異なる (つまり、日本語では出来事が起きた後の状態に視点が置かれ、中国語では出来事変化そのものに置かれる) ため、学習者は (略)『結果の状態』の用法をなかなか習得できないと考えることができないだろうか」と考察している。

いる」の当該用法が日本語の特徴的な表現形式であると指摘されていることから、本研究の補助動詞的用法「てもらう」がなぜ他言語にほとんど見られない日本語に特徴的な表現形式であるのかということが説明できる。

また、他言語話者は、日本語では他者がした行為だけでなく、話者からの感謝の意識を「てもらう」等授受補助動詞によって表現することを不思議に思うようである。本研究での日本語話者の事態や受益原因行為者への捉え方からこの疑問の説明の方向が見えてくる。

#### 5. 4. 2 体験的受益の話者「私」の〈事態把握〉

本論文では、日本語の授受本動詞「もらう」の補助動詞的用法「てもらう」について研究してきた。授受本動詞「もらう」の補助動詞的用法「てもらう」は、話者「私」の受益事態について、受益結果を客観的に描写するだけでなく、受益結果に至るプロセスや原因を含意させてひとまとまりに捉えるという〈事態把握〉の仕方を表現している。

これらは、話者「私」の体験的プロセスである。受益が未だ実現していない時点である〈受益未実現時〉であれば、「これからしてもらおう」「してもらいたい」という話者の期待や、行為者への見込みが「てもらう」文に含意されている。また、発話時が既に受益結果状態である〈受益既実現時〉であれば、「してもらった」「してもらっちゃった」というように、頼んだ結果の受益状態への満足や、話者に受益をもたらした行為者への感謝の気持ちを表現する「てもらう」となる。さらに、行為者の行為実現や事態に直接関与できないことに対しても、話者「私」は事態の推移や結果に期待し、また受益はそのおかげだという心情になる。それは表現すると、話者「私」の心情の開示となり、聞き手の同意や共感を促すことができる。

このように、話者「私」は「てもらう」と発話する時、自らが受益を体験し、そのプロセスや原因に対して期待や満足、感謝といった話者「私」の気持ちを表現に込めている。日本語では、「私がお願いした。だから行為者が行為をした。」、また「行為者が行為をした。だから話者『私』が受益をした。」と表現するのではない。もし、話者「私」が受益を体験する自らを受益場面の外から客観視し客体化して表現するなら「てもらう」は必要無い。

日本語話者の〈事態把握〉の視座が自らの体験的な自己にあることからこれらの感情は外から描写するだけでは捉えることができない。話者の頭の中の認識を表現する、「てもらう」が表現する話者「私」の授受動詞「もらう」の補助動詞的用法は、日本語話者が受益を、原因となる行為者との因果的繋がりや、原因行為や事態を介して時間も経て達成できる自らのプロセスと結果のひとまとまりと捉える中での、行為者に対する感情、行為や事態の影響への感情の表出ができる。そのため、日本語話者に必要な表現形式として生み出されたものであると言えるだろう。

本章で明らかになった「てもらう」文が含意する受益結果への時間的プロセスということと、受益原因を関与させた受益への因果プロセスという話者「私」の認知を踏まえ、次章で本研究の「てもらう」文の考察をまとめ、結論を述べる。

## 第6章 結 論

### 6. 1 本研究のまとめ

本研究では、授受動詞「もらう」の補助動詞「てもらう」を話者「私」が発話する際の用法について考察してきた。受益というプラスの変化結果は、その結果に至る時間的プロセスを伴って話者「私」の受益を表すひとまとまりを成している。また、変化結果の話者「私」は、話者「私」が捉えた受益の原因によって結果状態になるという影響の因果関係も含意している。受益という表れている結果だけ表現するのではなく、受益原因を介したプロセスとともに捉えるという〈事態把握〉の言語化が授受動詞の補助動詞的用法、「てもらう」文であると言える。それを図にすると図 6.1 のようになる。

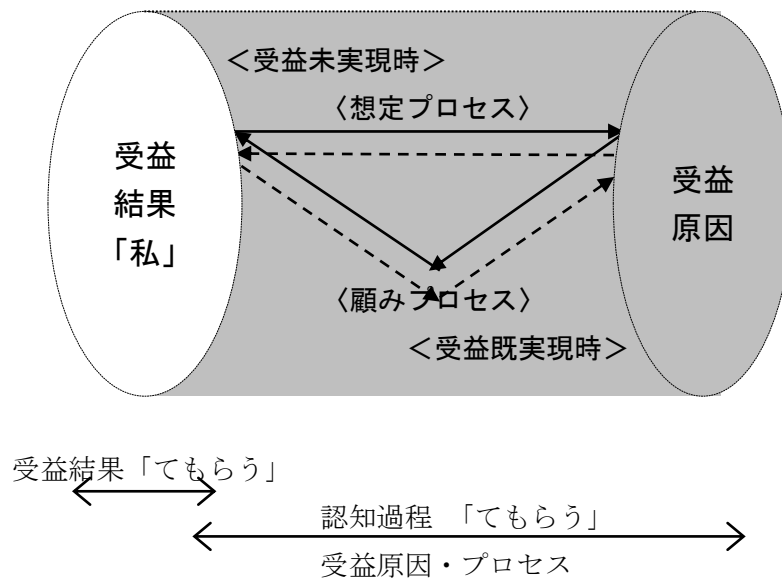


図 6.1 話者の発話する「てもらう」文の受益認知

図 6.1 で示されているように、話者「私」の「てもらう」文の受益結果に至るプロセスは、受益までの時間的な観点から＜受益未実現時＞と＜受益既実現時＞が区別されている。これらのプロセスは連鎖的につながっており、その接点は、受益をもたらす行為や事態という受益原因の実現や生起である。話者「私」は、自らが結果的に受益状態になるために、

どのように受益結果に至るのかという自分の中の受益過程に関心を持つ。そしてその過程を二通りの辿り方で辿る。それは、＜受益未実現時＞において自らの受益結果を想定し、その実現をプロセスとする〈想定プロセス〉と、＜受益既実現時＞に、自らの受益結果状態はなぜ、どのようにして起こったのかと顧みる〈顧みプロセス〉という二つである。「てもらう」文の〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉には、話者「私」が実現を見込む〈想定原因〉と話者「私」が顧みて受益原因だと定める〈顧み原因〉という話者「私」の受益にとっての原因が含意され、話者「私」の受益はその影響結果であるという因果関係も含意している。

本研究では話者「私」の受益結果に至る、話者「私」の捉えたこの 2 つのプロセスを併せて 5.4.1 で「認知過程」と称した。そして、授受動詞「もらう」の補助動詞的用法には、話者「私」にとっての受益という事態が結果だけ把握されているのではなく、この「認知過程」が把握され含意されていると結論づける。

「てもらう」については、従来の研究では文法的な観点から、「てもらう」を用いた文を働きかけと利益を受けることのどちらの文であるか、ということを取り上げてきた。そのため「てもらう」文は使役と受身に多義であり、それぞれの文脈によってどちらかの意味が強く出るとされている。さらに間接受身文と意味的相補性を成すということも言われている。本研究ではこれらの個々の例に対する説明に対し、1 つの「てもらう」という表現形式によって表現する、一見多義に見える事態を捉えて表現する話者の事態の捉え方があると考え、それを探ることを研究の目的の 1 つに挙げた。

研究目的 1：行為者に行為を働きかけるとして、「てもらう」はヴォイスの使役の観点で研究されているが、働きかけがある場合には使役的、無い場合には受身的だということである。「てもらう」文はさらに間接受身文との共通性も言及されている。これらを全て「てもらう」と表現することの統一的な説明を探る。

日本語話者は「てもらう」と発話する時、典型的には話者「私」の受益事態を表現している。<sup>122</sup> 5.1 では「てもらう」文に時間的プロセス意識が含意されていることを考察した。話者「私」は自らの受益という結果状態を＜受益未実現時＞から＜受益既実現時＞の受益結果に向けたひとまとまりの時間順のプロセスとして捉えている。＜受益未実現時＞では〈想定プロセス〉によって受益結果を想定し、話者はこれから受益状態になることを目指す。そのため、この時点で行為者に「てもらう」と発話することは働きかけ機能を持つ。そこで使役的「てもらう」文となる。逆に受益した結果の時点で話者が「てもらう（てもらった）」と表現すれば、それは行為者や事態の影響結果、受益状態となったことを表す受身的な「てもらう」文となると説明できる。そのため「てもらう」は多義であるとされる

---

<sup>122</sup> 本研究の資料から抽出された「てもらう」文も、第三者間の授受を「てもらう」と表現している例が見られなかった。

が、本研究ではこれを話者「私」の受益結果に至る受益プロセスとすることで 1 つの「てもらう」事態にとっての時間的局面として説明できることを示した。さらに、話者が関与しないことからの受益も、このプロセスの枠組みに沿って、派生的に 1 つの「てもらう」事態の局面として捉えられる。

もう 1 つの研究目的は、次のようなものである。

研究目的 2：日本語話者は「私」の受益を、単に「私は受益した。」とは表現しない。「彼がした。私は嬉しい。」というように行為者の行為を表す文に、私の受益を表す文を付加するのでもない。「てもらう」文では、他者の行為や事態を言語的に明示化し、私がそれを「てもらう」と、私が受益結果を 1 つにまとめて表現する。日本語ではなぜ「てもらう」を用いた文で 1 つにまとめて表現しているのか、日本語にそのような表現形式がなぜ存在するのかについて考察する。

この回答でも、話者「私」の発話する「てもらう」文では、話者「私」の受益結果を表すということをまず前提に置く。話者「私」にとって受益という事態は結果的状态である。なぜ「てもらう」を用いた文で 1 つにまとめて表現しているのかについて、話者「私」が「てもらう」と発話する時、話者「私」は自らの受益結果状態にとって、彼がした行為や事態を自らの受益への時間的推移を伴う変化プロセスだという把握とともに、自分の受益状態へのプロセスの中に含意される受益原因だと関与づけて捉えている。そして、それらのプロセスを受益結果とひとまとまりに、「私の受益事態」として捉えているからである。

日本語にそのような表現形式がなぜ存在するのかについては、日本語話者の〈事態把握〉の特徴による。日本語話者は、認知言語学で指摘されているように自らを視座としてその視座を持ちながら、想定する未来の事態や他者の事態に投入し、臨場的、体験的に事態を捉える。本研究の受益においても、話者「私」が「てもらう」と表現するのは、話者「私」を視座に置く「私にとっての受益」である。

「てもらう」は、話者「私」が他者の行為や事態からの作用や影響を直接的または間接的にも受けて、その結果、話者「私」自らの状態が以前の状態に比べてプラスに変化したことを表現する。そこで話者「私」が体験する受益は、自らの実感的受益である。話者「私」が受益状態になることは私自身のプラスの変化であるので、ただ単に「受益した」というだけでなく、「私」がどのようにすれば受益できるのか、なぜ受益したのかに関心を持つ。そのため、これらの受益プロセスや受益原因を自らの受益結果とともにひとまとまりに表現する形式が、日本語に必要なのだと思われる。

本研究で授受動詞「もらう」の補助動詞的用法に 2 つの目的に対する回答として話者「私」の受益という〈事態把握〉において、話者「私」が受益結果だけでなく、その原因を介した時間的、因果的プロセスを含意させ、プロセスを辿って結果状態との関係を表現することを考察した。

次に、ここに至る本研究を概観する。

序論では、本研究がなぜ授受動詞「もらう」の補助動詞的用法を研究するのかについて、説明した。そこで、日本語で話者「私」の受益を表すのに、授受動詞の補助動詞的用法「(て) くれる」と「(て) もらう」がある事、「(て) くれる」がダイクシスとして説明されているのに対し、「(て) もらう」の統一的説明はなく、受け手を主語とすることや、主観性、ヴォイスとしての文法的な観点等から説明されていることを示した。

また、「てもらう」は話者「私」が主語である場合、「てくれる」と同様話者「私」が受益の受け手としての方向性を持つ。しかし、従来の文法的な観点からの分析では「てもらう」は使役と受身に多義的だとされ、どちらかというに使役的な観点から分析される傾向にあった。一方で「てもらう」文の主語は第三者間の授受の一方であったり、小説の主人公であったり、詞の心情発露の主体であったりと、様々であった。そのため「てもらう」の多義の理由を説明しきれていなかった。そこで、授受補助動詞という形式が主観を表すという先行研究からも、本研究では話者「私」の発話という観点から「てもらう」を研究することにした。

認知言語学の観点からは、日本語話者は自らを視座とし、事態を自らと関与づけて事態に臨場し、体験的に把握をする傾向が指摘されている。そこでは英語など客観的な〈事態把握〉の言語とは異なり、日本語話者「私」が自らを原点として事態を把握すると説明されている。たとえ未来の事態でも他者の事態でも、日本語話者「私」はそれらの事態に自己を投入し、臨場的、体験的に捉え表現するということである。本研究では、「てもらう」を日本語話者「私」の受益における〈事態把握〉のあり方という観点から、「てもらう」と発話する話者の受益の捉え方を探ることでその統一的な説明ができると考え、研究の立場とすることを提示した。そこで、本研究では文法的な補助動詞形の研究ではなく、話者「私」の発話する補助動詞的用法を考察するために、話者「私」の自然産出文を調査対象とし、自然会話コーパスと新聞のインタビュー記事等から用例を抽出した。

「てもらう」は、さらに類型論の研究からは、日本語の授受動詞「もらう」の補助動詞的用法は、他言語にほとんど見られないと指摘されている。そのような日本語の「もらう」の補助動詞的用法を「てもらう」文として、話者「私」が使役的な事態も受身的な事態もなぜ「てもらう」文で表現できるのか、そして、他者がしたことと私が「てもらう」ことという2つの事態をなぜ1つにまとめる表現形式「(他者にし) てもらう」で表すのかを探ることを研究目的とした。

第2章では、本研究の対象である授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」に関する先行研究を概観した。そこでは序論で問題点として示した様に、「てもらう」は「てくれる」に対し、働きかけがあるという点で特徴づけられ、従来の研究は働きかけを使役と受身の文法的観点から分析したものであることを指摘した。それに対し本研究では、話者が

発話する「てもらう」文という観点から話者の「てもらう」と発話する際の受益認知のあり方を考察すると言う立場を示した。その理由は、文法的な単文における働きかけの有無の考察は、話者「私」自身には、働きかける「てもらう」文か、受益を表す「てもらう」文かはわかっているからである。また、「てもらう」文では働きかけがある文も無い文も、話者「私」が心理的に受益する文も 1 つの表現形式で「てもらう」と表せる多様な受け方を表す。そして働きかけがある文だけでなく働きかけが無く受益を表す「てもらう」文、話者「私」の心理的な受益を表す「てもらう」文、受益した結果から受益を振り返る「てもらう」文も行為や事態の影響を受けることを表す。したがって、「てもらう」文はむしろ話者「私」が受益という他者の行為や事態の作用や影響を結果的に「受ける」ことを表す文であるということを本研究の見方とした。

第 3 章では、第 2 章で示した話者「私」の発話という観点で、話者「私」が受益することを表現するという本研究の「てもらう」文の理論を説明した。まず「てもらう」文に指摘される受益ということについて本研究では、話者「私」のプラスの変化結果状態であるということを述べた。次に「てもらう」文の典型とされる「働きかけてもらう」文が、働きかけて、その結果を再帰的に話者「私」が「受ける」ことであると説明した。そして、話者「私」は、自らが行為者の行為を起こす使役と自らが「受ける」受身が連鎖プロセスを成し、話者「私」は再帰的に受益結果に至るという見方ができることを説明した。ここでは、話者「私」は働きかけた再帰結果として受益できること、話者「私」が働きかけの前に既にその結果を頭の中で「想定」していること、話者「私」はその「想定」を実現させるために働きかけるということが「働きかけてもらう」であると述べた。しかし、「てもらう」文には思いがけず「てもらう」文や、話者「私」に向かわない事から心理的な受益を表すタイプの「てもらう」文もあり、受益結果から、それが原因から受けたことであるという意識もあるとも説明した。これらは全て他者の行為や事態の影響を結果的に「受ける」ことを表す「てもらう」文であるとして、第 3 章の最後に「てもらう」文を話者受益の 3 つのタイプとしてまとめた。

第 4 章では、第 3 章での本研究の見方の確認を話者「私」の自然産出文の用例をもとに行った。その結果、まず第 3 章での 3 つのタイプの「てもらう」文は、実際には 4 つのタイプの「受ける」ことを表す「てもらう」文として抽出、分類された。最もプロトタイプであるのは、その用例の多さから「働きかけてもらう」タイプであることも明らかになった。その他、間接的な受益にも 3 つのタイプが細分された。さらに、これらの抽出用例からは、これらを 1 つの表現「てもらう」で表す話者「私」の意識について、従来の働きかけや受身との対比や受益の直接間接性以外に、「てもらう」に後接する表現の特徴から本研究では新たな観点を見出した。それは話者「私」が想定して働きかけるという、＜受益未実現時＞での「てもらう」文と、働きかけがあっても無くても、話者「私」が受益結果に



なってから「てもらう」と発話する＜受益既実現時＞の「てもらう」文があるということである。さらに、「てもらう」文には時間的プロセスがあること、全ての「てもらう」文が何らかの行為や事態という原因を関与させたプロセスがあることが用例から明らかになった。

本研究では、話者「私」の受益には＜受益未実現時＞の局面と＜受益既実現時＞局面は時間的な受益結果までのプロセス、また原因からの影響結果であるというプロセスとして話者「私」の頭の中に連鎖してあるものとし、それを第5章の考察観点とした。受益という結果のプロセスであれば、二つの事態の局面を1つにまとめて1つの形式で表現することも自然なことであると考えからである。

第5章では、5.1で「てもらう」に後接する文末表現の特徴から、話者が受益の未実現から既実現への各時点で「てもらう」と発話していること、そこには＜受益未実現時＞から＜受益既実現時＞へという時間順の〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉というプロセスが話者「私」のひとまとまりの受益に含意されることを考察した。また、未実現と既実現の切り替えは受益原因行為や事態の実現を境にその前か後かであり、話者「私」は受益結果に対する受益原因を経たプロセスによって受益するという意識についても指摘した。時間順のプロセスでは、本研究の目的について、＜受益未実現時＞ではこれから働きかける期待や働きかけが行われ、使役的な「てもらう」文が説明できる。また、＜受益既実現時＞では話者「私」は受益した結果状態から「てもらう」と受益事態を表現するため、受身的な「てもらう」文になると言える。

5.2では「てもらう」が複文従属節に接続表現を伴って現れる場合を考察した。抽出された複文では前件と後件が話者「私」という統一的主語であり、5.1で見た文末の「てもらう」文と同様、時間的因果的〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉を持っている。そして、接続表現の特徴から、従属節の行為や事態を受益原因として、主節で話者「私」の受益事態を言い表していることがわかった。そこでは、話者「私」が積極的に受益の原因を意識してそれを受益プロセスに組み入れている。

＜受益未実現時＞には想定した原因（〈想定原因〉）を介して結果までの受益のひとまとまりを表す〈想定プロセス〉があり、＜受益既実現時＞には顧みた原因（〈顧み原因〉）を介した受益のひとまとまりを表す〈顧みプロセス〉がある。これらは5.1で見た「てもらう」が文末に現われる文と並行することから、話者「私」が「てもらう」と発話する際には、文の単複に関わらず、話者「私」に〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉のという受益結果への思考回路があることを指摘した。受益原因をプロセスに組み込んだ関与づけは、「てもらう」で表す話者「私」の受益結果のプロセスには時間順だけでなく、受益結果の原因となる行為者の行為や事態との因果関係も含意されていることになる。

すなわち、複文従属節を条件節や「て節」で＜受益未実現時＞に「てもらう」と表現していることは、複文従属節を受益の原因と見なし、主文に表される受益結果への〈想定プ

プロセス)を話者「私」が描いていることである。複文従属節で、「て節」で<受益既実現時>に「てもらって～した」と表現していることは、主文に表現されている受益結果状態が複文従属節の「てもらう」を原因として受益状態になったのだ、という〈顧みプロセス〉を話者「私」が描いているということである。これらを用例から説明した。この因果の脈絡は、話者「私」の頭の中で受益原因と受益結果状態とは条件文でも理由文でも、話者「私」にとっては受益結果へのひとまとまりのプロセスであり、その辿り方が〈想定プロセス〉と〈顧みプロセス〉の二通りあることを示している。つまり、話者「私」にとっての受益原因との因果関係は、〈想定プロセス〉であっても〈顧みプロセス〉であっても、話者「私」の原因からの影響結果としての受益というひとまとまりであるということを考察した。

5.3 では受益は話者「私」に直接作用しないこと、関与しない事からも間接的に受益する3種類の「間接てもらう」文について、話者「私」が直接受益作用を受ける「働きかけてもらう」文や思いがけず直接行為を受ける場合の「てもらう」文と同様の〈想定プロセス〉、〈顧みプロセス〉を持っており、それらの枠組みから、話者が非関与の行為や事態からの間接的な受益も表現できると説明した。そのため「間接てもらう」文は各典型的なタイプの「てもらう」文の派生として説明できる。この「てもらう」文には、話者「私」の非関与の事態への〈自己投入〉という視座操作が行われており、日本語話者の〈事態把握〉の特色が多分に表れていると言えることを考察した。

5.4 では「てもらう」文が単に受益した結果だけを表現するのではなく、5.1 から 5.3 の、話者「私」にとっての「てもらう」受益プロセスを含意させてひとまとまりに受益を捉えて表現しているのだということを説明した。日本語話者は受益を表す際に、自らの受益結果にとって、ただ単に受益したというだけではなくそのプロセスと結果をひとまとまりに捉えたことを表現したい場合がある。話者「私」は「てもらう」と発話する時、ひとまとまりの中に、自らが受益を体験し、そのプロセスや原因に対して期待や満足、感謝といった話者「私」の気持ちを含意して聞き手に伝えている。そのため、類型論的には希少であると指摘されている「てもらう」という表現形式が必要になると考察した。

また、本研究では各所で、事態の結果だけでなくこのようなプロセスを話者「私」の思考として含意させて辿る〈事態把握〉の表現に「のだ」文や「ている」の結果残存機能があることを指摘し、「てもらう」文との共通性を説明した。これらは日本語に特徴的な表現形式だと言われ、それは日本語に特徴的な〈事態把握〉のあり方の言語化であるからだと考えられる。

最後に結論として第6章では、本研究のまとめとして、研究目的に対する回答を示した。先に本研究では<受益未実現時>における〈想定プロセス〉と<受益既実現時>における〈顧みプロセス〉の2つの受益プロセスがあることを第5章で示したが、これらを併せて、話者「私」の受益という〈事態把握〉における「認知過程」と称した。

私の受益という結果的事態を〈想定プロセス〉でも〈顧みプロセス〉でも、<受益未実現時>から<受益既実現時>までの「認知過程」とのひとまとまりとして1つの表現形式

で表すということで、本研究の目的の答えを示すことができる。

「てもらう」文はなぜ使役と受身に多義なのか、という事に対しては、話者「私」が自らの受益を＜受益未実現時＞から＜受益既実現時＞までの時間的な推移のひとまとまりとして捉えているからである。

次に、日本語ではなぜ、「彼が私に親切にした。私はとても嬉しい。」と言うだけでは済まずに、「彼に親切にしてもらった」と言うのか、という事に対しては、5.2 で見たように、〈想定プロセス〉でも〈顧みプロセス〉でも他者の行為や事態が話者「私」の受益のプロセスの中の受益原因として含意されているからである。他者の行為や事態をひとまとまりとして捉えていなければ、話者「私」の「てもらう」受益も無く、「他者がした。私は嬉しい。」でも、また「他者がしてくれた。」でも、話者「私」が受益した事だけを独立に表現すればよい。話者「私」が「てもらう」と発話する時、「てもらう」によって表現される話者「私」の受益では、話者「私」が頭の中でこれらの受益プロセスによって他者と繋がり、事態を私にとって影響を与えるものと捉えてひとまとまりの受益として〈事態把握〉をしている。

このように考えると、「てくれる」と「てもらう」の差異が見えてくる。「てくれる」と「てもらう」は共に表現形式は授受動詞の補助動詞形であり、その用法の意味は、複合的な行為や事態のひとまとめ表現である。「花子がコピーを取ってくれる」も、花子がコピーを取ること、花子がそれを私のためにすること、という2つの事柄を内在させている。「てくれる」という表現形式は、他者がすることが必然的に「私」に向かい、私が受益を捉えることを表す。一方、本研究の「てもらう」は考察してきたように、発話の話者「私」が受益の主体である。話者「私」が受益というプラスの変化結果になるためには、話者「私」が受益前の状態から受益後の状態になる推移の時間的な巾が必要である。また、「私」に変化を与える原因が必要であり、話者「私」は〈想定プロセス〉でプラスの変化結果になるべく、また〈顧みプロセス〉で変化結果になってから、変化を与える原因に積極的に関わっていく。これらの「てもらう」における話者「私」の認知思考である〈想定プロセス〉、〈顧みプロセス〉はさらに、話者「私」に向かわない事からも「私」の受益を「てもらう」と表現することを可能にしている。

すると、恩恵的行為や事態が話者「私」に向かうことを表す「てくれる」というダイクシスと、話者「私」が結果事態を結果とそのプロセスとをひとまとまりに捉えた話者「私」にとっての受益を表す「てもらう」文では、同じ複合的な事態の受益表現であるにもかかわらず、話者「私」の受益における「認知過程」の点で〈事態把握〉の在り方が大きく異なっていると言える。それを図 6.2 に示した。

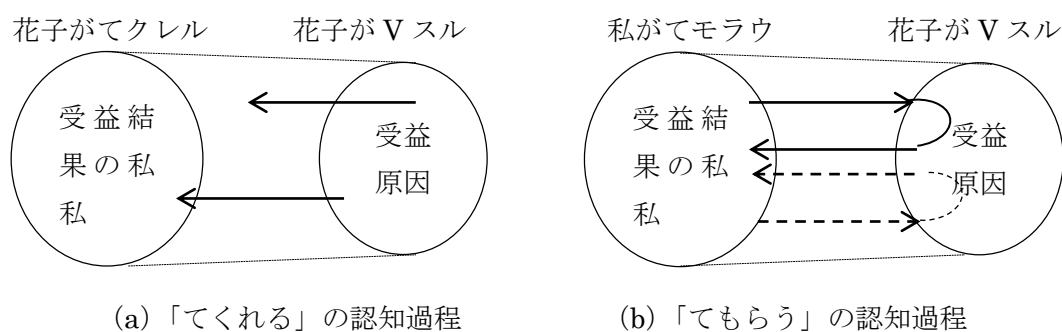


図 6.2 補助動詞的用法「てくれる」と「てもらう」の認知過程

同じ1つの話者「私」の受益を表す「花子が私に親切にする」という事態も、「花子が親切にしてくれる」という、花子の親切行為が私に向かうことを表す「てくれる」と、「花子に親切にしてもらう」という、花子の親切行為を「受ける」私がなぜ「受ける」のか、どのように「受ける」ことになるのかという「認知過程」を受益結果に含意する「てもらう」とは、話者「私」の事態の捉え方が異なったものだということである。

日本語ではなぜ、1つの表現形式「てもらう」にこれらの「認知過程」を含意させて表現するのだろうか。それは、話者「私」が体験した変化結果が話者「私」自身に起こっているからであると考えられる。話者「私」自身は、プラスの変化前の状態にあって、それがプラスに変化したならば、その変化はなぜ、何から、どのように受けるかという我が身のことであるため、それを解明したいと考えるのだと思われる。話者「私」自身が体感する変化であるのに、なぜかプラス状態になったというのではなく、その原因理由を分かりたい、そしてそれを他者に伝えたいと思うのではないだろうか。単に「受益した」「受益状態だ」というだけでは、私にとっての受益の経緯や原因との関与性は表現できない。話者「私」にとってマイナス、またはゼロ状態からの変化結果であるからこそ、プラスに変化した事情を解明し、また説明したいと思うのは、「私」の自然な感情なのではないだろうか。したがって、「てもらう」文で話者「私」が受益結果を述べるだけでなく、受益結果に至る「認知過程」含意させるのは、発話の「てもらう」文では受益が話者「私」自身に体験的に感じ取られた、話者自身に起こった変化結果であるからである。

## 6. 2 本研究の意義

本研究の意義として3つの点を挙げる。第1点目は、従来の文法の観点からは十分ではなかった「てもらう」の意味を、発話の話者の〈事態把握〉の観点から説明したことであ

る。第2点目は、本研究の「てもらう」が日本語話者に特徴的な〈事態把握〉を言語化した形式の1つであるということを示した点である。さらに、「てくれる」と「てもらう」の差異も、〈事態把握〉の認知過程の在り方の差異として説明できると示したことを挙げる。第3点目は、日本語教育にとっての意義である。日本語に特徴的な「てもらう」を、話者が事態に臨場し、体験的に捉えるという〈事態把握〉のあり方から、「話者『私』にとって」の事態の意味づけを習得課題として提案するということである。順に説明する。

第一点目として、授受動詞「もらう」の補助動詞的用法である「てもらう」文の意味の解明に、発話の話者の〈事態把握〉という点から取り組んだ研究はまだ無い。

これまで授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」は、文法の観点から授受という方向性と、行為者に行為を働きかける使役的意味、行為者から行為を受けるという受身的意味についてヴォイスの観点で研究されてきた。しかし、これらの観点では「てもらう」がなぜ働きかけも「受ける」ことも「させ」と「られ」の区別と異なり1つの「てもらう」で表現できるのか、さらには被害の受身との相補的な、受益という意味を持つ表現形式だということも、それぞれが統一的に説明されているとは言えなかった。本研究ではこのように多義と言われる「てもらう」も、話者「私」の認知という観点からは、使役と受身が受益までのプロセスの〈受益未実現時〉と〈受益既実現時〉のどの時点で捉えて発話するかによって説明できると述べた。使役的働きかけと受身的な影響結果の含意は、話者「私」がそれらを受益結果に至るひとまとまりの事態として捉えているということである。つまり、受益を補助動詞という形式で「私」の体験として表現する日本語話者にとって、使役と受身は時間的因果的連鎖プロセスとして捉えているという見方を明らかにしたことが、本研究の意義である。従来の「てもらう」文の分析とは異なり、認知の観点からの見方を新たに提示し、日本語の授受動詞の補助動詞形の研究に貢献できることを意義として挙げる。

第2点目は、本研究の「てもらう」も日本語話者に特徴的な〈事態把握〉を言語化した形式の1つであるということを指摘した点である。

授受動詞「もらう」の補助動詞的用法は、類型論的に他言語にほとんど見られない表現形式であると指摘されている。従来はその指摘に止まっていたが、本研究で日本語に「てもらう」という表現形式があるのは、日本語話者が結果的に顕れている事態をただそれだけ表現するのではなく、そのプロセスや原因といった「認知過程」を話者「私」の事として捉える〈事態把握〉の仕方を表現しているからだということを指摘した。この〈事態把握〉が日本語話者に特徴的だと言えるのは、顕れている事態に対してその原因を推論する思考プロセスを表現する形式である「のだ」文、「ている」文の結果残存用法も、日本語に特徴的な表現形式だと指摘されているからである。結果から原因やプロセスの推測という特徴的な思考回路を、本研究では「顧み」と命名して説明した。このことは、日本語話者の、これらのような「認知過程」を言語化した形式がまだ他にもある可能性を示唆し、日

本語話者の〈事態把握〉と表現形式の関係についての研究を促すものであると考える。

さらに、授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」という表現形式が他言語に無いのは、話者「私」が日本語話者の〈事態把握〉の傾向である、自らを中心として事態を臨場、体験的に捉えるという表現スタンスで受益事態を表現する形式だからであるということ了指摘する。さらに本研究では認知言語学の指摘である、日本語話者が臨場できない場合の表現として〈自己投入〉ということを採用した。認知言語学の観点では、日本語話者は未来の受益にも、他者の受益にも自己を仮想的に投入し、そこから受益を把握するということである。本研究では「想定」という概念にこの未来への〈自己投入〉が行われている事、間接的な他者受益の「てもらう」文における他者への〈自己投入〉においても、この〈自己投入〉が行われていることを説明した。このような把握の仕方は、客観的な〈事態把握〉の言語では必要性が低く、「てもらう」のような表現形式の存在が多くはないことが予想され、そのために逆に「てもらう」が日本語に特徴的だと言えるのだと考える。

本研究はさらに、他言語に「てもらう」という表現形式がほとんど無い理由を、日本語話者が願った事態だけでなく原因を介して事態をプロセスのひとつとまりとして捉えていることを指摘した。「てくれる」では動作主が同一主語による二つの動作を表現しているが、「てもらう」では、他者の行為や事態を話者「私」が「てもらう」と表現する理由として、話者「私」にとっての受益事態というひとつとまりの捉え方を挙げる。話者「私」の受益結果は同じ授受動詞の補助動詞的用法「てくれる」でも表現できる。しかし、とりわけ「てもらう」による受益の〈事態把握〉は他者行為者や事態からの影響という話者「私」以外の参与者を介するため、話者「私」が受益結果に至るプロセスをどのように受益できるか、またはできたか意識化し、受益原因行為者や事態を見込んだり、受益結果はそのお蔭だとして積極的に関与させていることを表現できる。他者のお蔭というのは、そこから「てもらう」が他者への積極的な関わり方というポライトネス機能を説明できると提案する。

第3点目は、日本語教育への提案ということを意義として挙げる。日本語に特徴的な表現形式は、「のだ」文、「ている」文、そして本研究の「てもらう」文も、日常会話で使用頻度が高いものである。日本語学習者から見れば、日本語での使用頻度が高いにも関わらず習得が容易ではない表現形式でもある。それは、これらの表現形式を学習者の母語が持たないというよりも、これらの表現形式によって表される〈事態把握〉を学習者の母語の世界ではあまりしない、言い換えると同一の現象に対し、異なる〈事態把握〉をするためであると考えられる。その異なる〈事態把握〉の要因として、1つには、話者が事態を自己・中心的な視座を持ったまま事態に臨場し、体験的に事態を捉えるか否かということが挙げられる。

この点で、自己を観られる対象化して自己までも客観的に観て表現する母語を持つ学習者には、日本語母語話者の認知を理解できるか否かが習得に影響すると思われる。本研究の「てもらう」文の用例からは、話者「私」は受益という事態を私自身にとっての事として捉え、「想定」、「顧み」プロセスや原因と自らを関与づけていることが明らかになってい

る。本研究の意義は、日本語学習者のこれらの表現形式の習得のための提案の1つとして、日本語話者の事態の捉え方を理解するということを挙げる。日本語では、話者「私」が事態を捉える中心であり、原点である。そのため、「私にとってその事態がどうであるか」という把握の仕方を身につける事が、例えば顧みの思考回路を身に着けるために役に立つということである。

孫（2012:7）は中国人学習者が中国で日本語を学習する場合の授受補助動詞の非用傾向を、学習者の談話完成テストによる実態調査で指摘している。そして、話者が第三者から受益したことを聞き手に伝える際に非用が起りやすいことを指摘しているが、孫（2007:5）では「てもらう」が「てくれる」に比べて使用率が（圧倒的に）低いこと、習得も「てくれる」よりも遅れることを述べながらも、分析では「てくれる」と「てもらう」を区別せずに行っている。例えば学習者が「てくれる」を非用している例として「後輩が」話者の代わりに図書館に本を「返したんだ」と産出している例と、「話者が」「上司のおかげで、車でおくられてきました」と産出している例とを共に授受補助動詞の非用として分析している。本研究からは、これらの非用の原因が同じものであるとは考えず、「てもらう」の非用は、「てもらう」の意味の中にある話者「私」の体験的また、体験から感受した受益であることが習得できていないためだと考える。話者「私」の発話する「てもらう」は、本研究で述べてきたように、話者「私」自らの体験的受益を主観的に表現する。この例のように、受益結果から自らの受益体験を上司のお蔭と捉える時、「てもらう」の中にそのプロセスと原因とが含意されて表現されている。しかし、学習者にはそれが把握できていないため、「おかげで」と「被動」の意味の受身形とを併用したと思われる。

このように、本研究は日本語教育においても「てもらう」の非用や誤用の解明に寄与し、より良い教育方法への発展に貢献できると考える。

次に、今後の研究課題を挙げる。

## 6. 3 今後の課題

本研究で日本語話者が発話する「てもらう」文は、受益結果と、その話者の受益結果にとってのプロセス、原因という認知過程を含意した表現形式であることを明らかにした。話者の〈事態把握〉を表す授受動詞「もらう」の補助動詞形「てもらう」のような表現形式は、例えば序論でも示したように、韓国語では本動詞の「もらう」はあるがそれを補助動詞として用いる「てもらう」という用法は無いと指摘されている（山田：2004）。そのため日本語の「てもらう」文を韓国語に訳すには語彙や文型を組み合わせるに近しい意味を出すことになる。徐（2008）は日本語の小説を韓国語訳にした文に対し、それをさらに直訳することによって日本語による原文と韓国語での訳とを対比させている。そこでは「てもらう」の訳出方法を紹介し、日本語の「てもらう」には韓国語に訳す場合との差異を提

示している。徐（2008）をまとめると、韓国語に比べ、日本語の「てもらう」では話者が出来事と自分との関わりをより強く表し、話者中心に事態を把握して表現するが、韓国語では事態を日本語よりも客観的に表現するということである。徐（2008）より数例を紹介し、このことをさらに本研究の分析を当てはめてみる。

(1) a. どちらの世界からもうまく受け入れてもらえなかったんだね。(神の子 191)

b. enu ccok sekey-lopwute-to ceytaylo inceng-pat-ci mos hay-ss-ci.

どの 方の 世界-から-も うまく 認定-もらう-不可-過去-ね

直訳：どの方の世界からもうまく認定されなかったね。

(2) a. …前に紹介してもらった大杉が顔を出した。(東京 219)

b. cen-ey sokae-pat-ass-te-n osuki-ka elkwul-ul naymil-ess-ta.

前-に 紹介-もらう-過去-回想-過去連体 大杉-が 顔-を 出す-過去

直訳：前に紹介された大杉が顔を出した。

(徐 2008:176-177(219)(218) ハングル文字の文を省略。筆者による下線。以下同様。)

(1a) の日本語原文の「てもらう」のニュアンスは、本研究の見方では、受け入れてもらうという期待がまずあり、結果としてその期待が叶わなかったことが表現されている。一方、(1b) の韓国語訳では結果を受ける局面を受身文で表しているだけである。また (2) では同様に行為を受けたことを表す (2b) の韓国語訳に対し、(2a) の日本語の「てもらう」文では紹介されたことが話者「私」にとって受益だという判断が表れている。

(3) a. 「あいつらがこっちにいるから、手伝ってもらうことになってんだ。」(東京 210)

b. ku nyese-k-tul-i yeki iss-ese towa-cwu-kilo hay-ss-e.

あの やつ-達-が ここ いる-から、手伝う-てくれる-ことにする-過去

直訳：あいつらがここにいるから、手伝ってくれることにした。

(徐 2008:175(217))

(3a) は話者「私」が受益をするために頼んで、意識の上では手伝うという未実現の行為の結果、受益することを確認していることがわかる。しかし (3b) の韓国語訳の「てくれる」の意味では、あいつらの意志による行為を話者「私」は「受ける」だけである。また、文末にある「ことにする」という、話者「私」が決定権を持つ表現形式とあいつらの意志による行為の生起との間で矛盾が起きている。

(4) a. だから一番広い部屋を用意してもらったんだ。(神の子 34)

b. kulayse kacang nelp-un pang-ul cwunbiha-y talla-ko hay-ss-e.



それで 一番 広い 部屋を 準備してくれ-と 言った。

直訳：それで一番広い部屋を準備してくれと言った。

(徐 2008:178(220))

(4b) の直訳では、行為を頼んだということまでが表現されているだけである。頼んだ結果を受益したということは訳の文には表されていない。一方、(4a) の日本語の原文では「てもらう」で表現されることによって、話者「私」が一番広い部屋が用意されるという受益を想定し、依頼し、その結果一番広い部屋が用意されて話者が受益したというプロセスと結果が読み取れる。

以上をまとめると、本研究の分析からは、日本語の「てもらう」文には、(1a) では「てもらう」に含意される受益結果への期待があり、しかし結果が達成できなかったというプロセスが表れている。(2a) では受けたことが受身文と異なり、受益であるという話者「私」の判断が表わされている。(3a) (4a) では「てもらう」で表される、働きかけて受益するというプロセスと結果を表している。しかしこれらは、韓国語の訳では表しきれいていないと言える。つまり日本語の「てもらう」文は、話者自らの受益にとっての「認知過程」も表すという独自の意味を表現しているということがわかる。

このように、「てもらう」という表現形式が無い他言語では、やはり表しきれない意味がある。ここでは韓国語との対照について先行研究を概観したが、その他の言語についても、本研究で結論づけた「てもらう」文の意味と訳された意味との対比を行うことは、今後の課題である。

さらに、このような話者「私」のひとまとまりの受益への期待やその行為者の行為への見込み、そして受益結果から顧みる行為者との繋がりを表現しないことは、日本語でのポライトネスの表し方の1つを表現できないということに繋がると考えられる。本研究の「てもらう」文は、対人調整機能があるという指摘を山本(2006)や王(2004,2006)が指摘している。それに対し、本研究ではそれとは異なる観点の日本型ポライトネスを今後の研究として考えている。

従来、「てもらう」文は行為者の行為を起こさせるが、使役と異なり行為者への働きかけへの配慮が指摘されている。確かに本研究での資料からも相手の意志を問う形式、条件節による期待の提示といったストラテジーで話者は仮想した自らの受益結果を実現させるため、行為者への配慮を示している。また、行為者への負担への配慮以外にも、山本(2006)は授受補助動詞全般について対人関係と表現機能について研究しており、語用の観点から本研究と同じ自然会話コーパスも資料に含め、発話データによる検証を行っている。例えば山本(2006)は「てもらう」を付加しなくてもよいところに「てもらう」を使うこと、「てもらう」の恩恵の与え手という持ち上げも指摘している。しかし、逆に持ち上げ機能をなぜ「てもらう」が担うのかについては深く言及されてこなかったように思われる。

日本語ではなぜ相手が授与行為をしていないのに、恩恵の与え手として扱うのかという疑問を日本語学習者から受けることがある。王（2004,2006）は、実際の恩恵は他者が受けるのに、お見舞いの品を「病院で食べてもらおうと思って…」と「てもらう」を使うことを日本語話者の謙遜であるとして、中国語話者はこのような言い方はしないと述べている。これを本研究の観点では、日本語では他者に〈自己投入〉した話者が他者の受益を自己も味わうからだと説明できる。5.3.1.1 で見たように、他者受益からの間接的な受益を表す「てもらう」文も、話者「私」の受益へのプロセスを持っている。

関与の無いことからの影響は、これまでは被害の受身文という自動詞や排除の事態からの被害との対比で指摘されてきた。しかし、本研究の「てもらう」は、その補助動詞的用法に表される原因行為者との関与性、その積極性が、相手との距離縮めというポジティブな働きをするのではないかと考える。例えば、日本語ではなぜ「させて頂く」という表現があるのかを考えてみる。これは、私が「本日（店を）休みにします」と掲示に書くのではなく「休ませて頂きます」と客に示す理由は、本研究で指摘した、他者を介したプロセスの結果の話者「私」があるという考え方から来るのではないだろうか。店主の話者「私」は客によって休みを与えられた受益者として自らを位置づけていることを客に示すことによって、1つには客との繋がり、いわゆるポジティブ・ポライトネスとしての距離縮めを行っていると考えられる。人を話者「私」の受益結果の原因として関与づけることによって、話者「私」は人と繋がる。これが日本型と言えるのは、行為者を敢えて話者「私」の結果的な受益へのプロセスの一部として組み込み、関与させるという「認知過程」によるものであると考えるからである。もう 1 つは、従来指摘されているような、客を恩恵の与え手として遇する、持ち上げるという機能である。従来、この持ち上げのみが指摘されてきたが、謙譲語という理由だけで「させて頂く」という表現がそのまま行為者を持ち上げることになるとして、「てもらう」という 1 つの表現形式の持つ意味にまで言及されてこなかった。本研究の「てもらう」文の表す意味の解明をさらに進め、日本語の待遇意識のもとに对人的な繋がり意識があることを、具体的に示すことが今後のさらなる研究の課題である。

また、事態のひとまとまりの考え方についても、言語間の差異があるということについて、その解明も課題である。井上（2012:11-12）は次の（5）の例では、日本語では「場所＋で」を明示し、「もう」を加えずに可能結果を表現している。中国語では「就」をつけることによって予想よりも早かったことを表現している。

- (5) (通勤電車で、ふだんは最寄り駅の A 駅から数えて 7 駅目の G 駅でないと座れないが、今日は乗客が少なく、A 駅で座れた)
- a. 今日は A 駅で座れた。
  - b. 今天 在 A 站 就` 坐上 座位 了.  
今日 で A 駅 もう 座る 座席 場面編化  
‘今日は A 駅でもう座席に座れた。’

c. ?? 今天 在 A 站 坐上 座位 了.

今日 で A 駅 座る 座席 場面編化

‘今日はA 駅で座席に座った。’ (井上 2012:11(28))

そして、「このような日本語と中国語の違いは、動作の時点や地点に『段階性』を付与する様式が両言語で異なることから生ずる」と説明している。そこで井上 (2012) は「日本語では、(5) のような『事態実現に要する段階のスケール』を想定するだけで地点に段階性が付与される。中国語はこれとは逆の表現様式をとる。『就』を用いて事態実現に要する段階が想定より少ない (より軽い条件で事態が実現した) ことを述べることにより、文に『想定より前の段階で』という含みを持たせる」と説明している。つまり、この指摘では到達限界達成時が予想に対して早いということの表し方の差異として説明されている。これを、状態の持続を無標とし、「了」で限界を区切る中国語に対し、日本語では目標範囲の限界点までというひとまとまりの枠があり、その枠の中での達成時点の局面という区切りがそれぞれある、と見る事はできないだろうか。木村 (2012:151-152) も「北京官話の動作動詞は、デフォルトが非限界的であり、これが有標化を経て限界化する」と述べている。<sup>123</sup> 木村 (2012:151-152) は「動詞接辞の LEvs (了) にせよ、ZHE (着) にせよ、結果補語にせよ、動作動詞に対する有標化は全て限界化に働くという点に北京官話の特徴がある (( ) は本論文筆者加筆)」と説明し、「北京官話のように、無標の動作動詞がそれ自身 [+継続相]」であり、そのことに連動して、持続・進行を表す動詞接辞が存在しないという状況は、普通話の口語も含めて中国語の多数の方々に観察されるものであり、恐らくそれはかなりの広範囲にわたる汎方言的な現象であると予測される」と述べている。<sup>124</sup> この指摘は、そのまま中国語と「てもらう」文のひとまとまり性との差異として指摘できる。語彙的に限界点を打っていく中国語と、始めから到達・達成までのひとまとまりの枠を「想定」し、その達成までの、今どの時点 (地点) にあるかということを表す日本語の差異は、今後の研究として興味深い。日本語では話者「私」の頭の中にあるひとまとまりの中に、段階的各局面、つまりプロセスがあると考えられるからである。

さらに、歴史的な推移の観点での課題もある。本研究では話者「私」の受益ということを見てきたが、本研究の資料には見られなかった「てもらう」の使い方として、話者「私」が関与しない受益についても表現されることがある。

<sup>123</sup> 木村 (2012:138) は北京官話を、北方方言に属すると説明している。

<sup>124</sup> 動詞接辞 (verbal suffix) の「了」は (i) のように「動詞に後接して、〈限界性 (bounded) のある動作〉が参照時において〈既実現済み〉であることを表す。言い換えれば、動作が一定の具体的な限界点に既に到達済みであることを示す」と説明している。

(i) 小李 包完了 餃子。

李さん 包む - 尽きる - LEvs 餃子

[李さんは餃子を作り終えた。] (木村 2012:149(21))

(6) Nくんも K嬢にキスし てもらって嬉しそうでしたね！(大阪 Hちゃん)

(雑誌／総合／娯楽 TVガイド 2004年9月3日号 関東版(第43巻第44号、通巻2222号)東京ニュース通) (『現代日本語書き言葉均衡コーパス』KOTONOA オンライン公開 A(少納言)500 サンプル No.32 下線は筆者)

(6) は、「N 君が K 嬢にキスしてもら」って嬉しそうだったということを雑誌紙面上で大阪の H ちゃんが述べている。この H ちゃんという(述べている)話者は、N 君と K 嬢の行為の授受を眺める視座であり、N 君は視座である話者「私」の注視点である。このことから、視座である話者「私」と受益者とはイコールではない「てもらう」文があることがわかる。話者「私」は客観的に花子と太郎、N 君と K 嬢の行為の授受を表現しているのである。このような話者「私」の受益を表現しない、言わば客観的な描写の「てもらう」文について、時代の推移によって出てきたのか否か、もしそうであればその時期について研究することが必要であると考ええる。

これらのような課題を通して、今後も日本語母語話者にある〈事態把握〉のあり方を他の表現形式に対しても探りたいと考えている。

## 参考文献

- 天野みどり (1991) 「経験的間接関与表現—構文間の意味的密接性の違い—」 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 pp.191-210
- 天野みどり (2003) 「文の理解における類推の適用の可否—二受動文とテモラウ受益文の違い—」『和光大学表現学部紀要』第4号和光大学表現学部 pp.1-13
- アハマド ハーネム (2006) 「アラビア語を母語とする日本語学習者における『授受動詞』の習得に関する研究」『日本語・日本文化研究』第16巻大阪外国語大学日本語学科 pp.53-62
- 有田節子 (2007) 『日本語条件文と時制節性』日本語研究叢書20 くろしお出版
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」『認知言語学論考』No.3 ひつじ書房 pp.1-49
- 池上嘉彦 (2006a) 「〈主観的把握〉とは何か」月刊『言語』Vol.35 No.5 大修館書店 pp.20-27
- 池上嘉彦 (2006b) 『英語の感覚・日本語の感覚<ことばの意味>のしくみ』日本放送出版協会 NHK ブックス[1066]
- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』筑摩学芸文庫 筑摩書房
- 池上嘉彦 (2009) 「〈認知言語学〉から〈日本語らしい日本語〉へ向けて」池上義彦・守屋三千代編『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』ひつじ書房 pp.2-47
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語の主観性・主体性」『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』ひつじ書房 pp.49-67
- 池上嘉彦 (2012) 「〈言語の構造〉から〈話者の認知スタンス〉へ—〈主客合一〉的な〈事態把握〉と〈主客対立〉的な〈事態把握〉—」『國語と國文学—文法研究の現在—』Vol.89-11 東京大学国語国文学会 pp.3-17
- 井上 優 (2011) 「日本語・韓国語・中国語の『動詞+授受動詞』」『日本語学』Vol.30, No.11 明治書院 pp.38-48
- 井上 優 (2012) 「テンスの有無と事象の叙述様式—日本語と中国語の対照」影山太郎・沈力編『日中理論言語学の新展望2 意味と構文』くろしお出版 pp.1-26
- 上野田鶴子 (1978) 「授受動詞と敬語」『日本語教育』No.35 日本語教育学会 pp.40-48
- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂
- 王 燕 (2004) 「テモラウ構文の外的連関について—中国語母語話者を対象とする日本語教育の立場から—」『21世紀言語学研究：鈴木泰之教授古希記念論集』白帝社 pp.243-262

- 王 燕 (2006)『日本語教育の立場から見た授受表現：中国語母語話者を対象とする場合』  
東京大学博士論文
- 大堀壽夫 (2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 岡本順治 (1997)「イベント構造から見た使役表現—使役の意味の広がり—」筑波大学現代  
言語学研究会編『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社 pp.161-201
- 荻野千砂子 (2007)「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』第 3 巻 3 号 日本語学会  
pp.1-16
- 奥川育子 (2007)「語りの談話における視点と事態把握」『筑波応用言語学研究』No.14 筑  
波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域  
pp.31-43
- 奥田靖雄 (1993)「動詞の終止形 (その 1)」教育科学研究会国語部会編『教育国語』2.12  
むぎ書房 pp.44-53
- 奥津敬一郎・徐昌華 (1982)「『～てもらう』とそれに対応する中国語表現—“请”を中心に  
—」『日本語教育』No.46 日本語教育学会 pp.92-104
- 生越直樹 (2009)「コラム テンス・アスペクト」池上義彦・守屋三千代編『自然な日本語  
を教えるために—認知言語学をふまえて』ひつじ書房 pp.111-112
- 小野尚之 (2004)「日本語受身文の事象構造分析」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と  
言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版 pp.165-180
- 尾上圭介 (2003)「ラレル文の多義性と主語」月刊『言語』Vol.32.No.4 大修館書店 pp.34-41
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 金水 敏 (2000)「1. 時の表現」金水 敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定と取り立て』  
[日本語の文法 2] 岩波書店 pp.1-92
- 金水 敏 (2004)「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹  
編『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版  
pp.47-56
- キム・ウンヨン (2006)「日韓両語の授受表現の比較分析—韓国語母語話者の『～てもらう』  
の習得過程の実態を中心に」『新潟大学国際センター紀要』第 2 号新潟大学国際セ  
ンター pp.129-143
- 金 慶珠 (2008)『場面描写と視点—日韓両言語の談話構成とその習得』東海大学出版
- 金 珉秀 (2003)『現代日本語における授受動詞の意味論的研究』筑波大学博士学位論文
- 木村英樹 (2012)『中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する  
研究—』白帝社
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつ  
じ書房
- 久野 暲 (1978)『談話の文法』大修館書店
- 熊田道子 (2000)「待遇意識からみた『～てくれる』系表現と『～てもらう』系表現」『早

- 稲田大学大学院文学研究科紀要』第 46 輯第三分冊早稲田大学大学院文学研究科 pp.63-72
- 崔 亜珍 (2009) 「SRE 理論の観点から見た日本語のテンス・アスペクトの習得研究—中国人日本語学習者を対象に—」『日本語教育』142 号日本語教育学会 pp.80-90
- 坂原 茂 (1985) 『日常言語の推論』東京大学出版会
- 佐久間 鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』厚生閣 (復刊 (1983)) くろしお出版
- 澤田 淳 (2006a) 「『テモラウ』構文における『ニ - ガ』交替と構文拡張」日本言語学会編 第 132 回『日本言語学会大会予稿集』 pp.93-98
- 澤田 淳 (2006b) 「ヴォイスの観点から見た日本語の授受構文」上田功・野田尚史編『言外と言内の交流分野』大学書林 pp.253-263
- 澤田 淳 (2006c) 「日本語の他動詞構文の事象構造に関する認知言語学的考察—非動作主—主語の他動詞構文を中心に—」『言語科学論集 (Papers in linguistic science)』第 12 号 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座 (山梨正明研究室) pp.19-34
- 澤田 淳 (2007) 「『主観性／客観性』から見た日本語の授受構文について—『話し手／主語指向性』、『受け手／与え手指向性』の観点から—」『KLS』No.27 関西言語学会 pp.1-11
- 澤田 淳 (2008) 「日本語の介在使役構文をめぐる—認知言語学と語用論の接点—」児玉一宏・小山哲春 (編) 『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房 pp.61-73
- 澤田 淳 (2009) 「日本語の他動詞構文と受益構文の構文ネットワーク—日英語の対照分析を含めて—」『KLS』No.29 関西言語学会 pp.215-225
- 澤田 淳 (2012) 『日本語ダイクシスの語用論的研究—語用論的文法のアプローチ』京都大学博士論文
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 柴谷方良 (1997) 「『迷感受身』の意味論」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房 pp.1-22
- 柴谷方良 (2000) 「3. ヴォイス」仁田 義雄・柴谷 方良・村木 新次郎・矢沢 真人『文の骨格』[日本語の文法 1] 岩波書店 pp.119-186
- 徐 珉廷 (2007) 「『V てもらう』は韓国語でいかに現れるか—その出現形式と要因—」『言語教育・コミュニケーション研究』第 2 集 昭和女子大学大学院 pp.67-79
- 徐 珉廷 (2008) 『日本語話者と韓国語話者における主観的な事象把握>の対照研究』昭和女子大学大学院博士論文
- 進藤三雄 (2009) 「報道記事における客観性—体系機能文法の観点から」『アドミニストレーション』第 16 巻 1 号 熊本県立大学総合管理学会 pp.25-53
- 菅井三実 (2001) 「現代日本語の『ニ格』に関する考察」『兵庫教育大学研究紀要』21. 兵庫教育大学 pp.13-23
- 菅井三実 (2000) 「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』20. 兵

- 庫教育大学 pp.13-24
- 鈴木重幸 (1984) 『教育文庫 3. 日本語文法・形態論』 第 10 版 むぎ書房 pp.392-397
- 鈴木 泰 (2012) 『語形対照 古典日本語の時間表現』 笠間書院
- スチワロードム・スイリラック (2009a) 「受動受益的『～テモラウ文』と受身文の互換性の要因について」『学習院大学人文科学論集』 18 号 学習院大学文学部 pp.99-123
- Sirilak SUJIWARODOM (2009b) 「受動受益的『～テモラウ』文とそれに対応するタイ語の表現」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』 No.6 国際交流基金 pp.11-22
- 関根和枝 (2010) 「授受補助動詞から本動詞へー授受補助動詞文が表すことー」『言語教育コミュニケーション研究』 第 5 集 昭和女子大学大学院 pp.13-29
- 関根和枝 (2011) 「授受補助動詞『てもらう』と give」『言語教育・コミュニケーション研究』 第 6 集 昭和女子大学大学院 pp.27-45
- 関根和枝 (2012) 「授受補助動詞『てもらう』の語用ー受ける視座からー」『言語教育・コミュニケーション研究』 第 7 集 昭和女子大学大学院 pp.31-52
- 孫 成志 (2012) 「JFL 環境における中国人学習者の授受補助動詞の使用と習得ー『～テクレル』と『～テモラウ』系を中心にー」『日本語教育／言語習得ー香港日本語教育研究会第九回国際日本語教育・日本語研究シンポジウム予稿集』 pp.1-8
- 高見健一・久野暲 (2002) 『日英語の自動詞構文』 研究社
- 竹林一志 (1998) 「日本語の「～にV してもらう」構文についてー非対格性との関連をめぐってー」月刊『言語』 Vol.27 No. 9 大修館書店 pp.115-120.
- 竹林一志 (2007) 『「を」「に」の謎を解く』 笠間書院
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点ー不自然さ・わかりにくさの原因をさぐるー」『日本語教育』 No.85 日本語教育学会 pp.25-37
- 田中真理 (2005) 「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田史志編『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版 pp.63-82
- Darya AKKUS (ダリヤ・アックシュ) (2008) 「日本語とトルコ語における『物・行為の授受を表す表現』の比較」『ことばの科学』 第 21 号 名古屋大学言語文化研究会 pp.61-80
- 張 威 (1998) 『日本語研究叢書 10 結果可能表現の研究ー日本語・中国語対照研究の立場からー』 くろしお出版
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』 くろしお出版
- 坪井栄治郎 (2002) 「受影性と受身」西村義樹編『認知言語学 I : 事象構造』 東京大学出版会 pp.63-86
- 坪井栄治郎 (2003) 「受影性と他動性」月刊『言語』 Vol.32 No.4 大修館書店 pp.50-55
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第 1 巻』 くろしお出版
- 部田和美 (2009) 「授受動詞『ヤル・クレル・モラウ』文の意味分析ー抽象の対象物を含む



- 授受動詞文を中心にー」筑波大学言語学論叢 オンライン版第 2 号 (通巻 28 号 2009) pp.33-47
- 中右 実 (1994)「日英条件表現の対照」『日本語学』Vol.13,No.9 明治書院 pp.42-51
- 仁田義雄 (1990)「働きかけの表現をめぐって」佐藤喜代治編『国語論究 2 文字・音韻の研究』明治書院 pp.369-406
- 仁田義雄 (1991)「ヴォイス的表現と自己制御性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 pp.31-57
- 仁田義雄 (1995)「シテ形接続をめぐって」『複文の研究 (上)』くろしお出版 pp.87-126
- 沼田善子 (1999)「授受動詞文と対人認知」『日本語学』Vol.8 No.8 明治書院 pp.46-54
- 長谷川哲子 (2006)「『もらう』に関する日本語とスペイン語の対照」『大阪産業大学論集人文科学編』大阪産業大学教養部 118 号 pp.45-57
- 長谷川哲子 (2007)「授受表現における日本語とスペイン語の対応」『大阪産業大学論集人文科学編』大阪産業大学教養部 121 号 pp.55-77
- 原田登美 (2007)「ー『日本語会話データベース (上村コーパス)』に見るー日本語会話における〈授受表現〉の使用実態とポライトネス・ストラテジー」『言語と文化』11. 甲南大学国際言語文化センター pp.117-138
- 日高水穂 (2007)『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房
- 藤井聖子 (2012)「条件構文をめぐって」澤田治美編『ひつじ意味論講座 第 2 巻 意味と構文』ひつじ書房 pp.107-131
- 堀口純子 (1987)「『～テクレル』『～テモラウ』の互換性とムードの意味」『日本語学』4 月号 Vol.6 明治書院 pp.59-72
- 益岡隆志 (1991)「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 pp.105-121
- 益岡隆志 (2001)「日本語における授受動詞と恩恵性」月刊『言語』Vol.30,No.5.大修館書店 pp.26-32
- 益岡隆志 (2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 松木正恵 (1992)「『見ること』と文法研究」『日本語学』Vol.11,No.8 明治書院 pp.57-71
- 松下大三郎 (1928)『改撰標準日本文法』徳田政信編 (1990 改訂第 3 版) 勉誠社
- 宮崎清孝・上野直樹 (1985)『視点』東京大学出版会
- 三上 章 (1953)『現代語法序説』(1972 くろしお出版復刊第一刷) 刀江書院
- 宮地 裕 (1965)「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」国語学会編集『国語学』No.63 武蔵野書院 pp.21-33
- 村木新次郎 (1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 pp.1-30
- 茂呂雄二 (1985)「児童の作文と視点」『日本語学』第 4 巻 12 号明治書院 pp.51-60
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版

- 山岡政紀 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現－日本語語用論入門』 山岡正樹・牧原功・小野正樹編 明治書院
- 山田 潔 (2001) 「玉塵抄の中性動詞－『読ムル』の用法」『玉塵抄の語法』清文堂出版 pp.2-22
- 山田敏弘 (1999) 『日本語におけるベネファクティブの記述的研究』 大阪大学博士論文
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ－「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』 明治書院
- 山田敏弘 (2005) 「現代日本語文法－方向性表現を例に補助動詞を考える－」『國語学 解釈と教材の研究』学燈社 pp.70-77
- 山田敏弘 (2006) 「文法カテゴリーとしての『方向性』とその談話機能」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 3 複文・談話編』くろしお出版 pp.119-135
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』(1933 年刊行第 8 版) 寶文館
- 山本祐子 (2002) 「『～テモラウ』の機能について－『テクレル』と比較して－」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』第 48 号 名古屋女子大学 pp.263-276
- 山本裕子 (2006) 『方向性を持つ補助動詞の意味と機能』名古屋大学大学院博士論文
- 由井紀久子 (1996) 『日本語動詞における意味の抽象化過程の研究－補助動詞用法をもつ動詞の意味分析－』大阪大学博士論文
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較動詞の文法』くろしお出版
- 吉川千鶴子 (2005) 「視座と視点の日英比較」『滋賀大学教育学部紀要Ⅱ, 人文科学・社会科学紀要』No.55 滋賀大学教育学部 pp.33-53
- 米盛裕二 (2007) 『アブダクション 仮説と発見の論理』勁草書房
- 鷲尾龍一 (1997) 「他動性とヴォイスの体系」『中右実編日英語比較選書 7 ヴォイスとアスペクト』第 I 部 研究社 pp.1-106

- Croft, W. (1991) *Syntactic categories and grammatical relations: the cognitive organization of information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, W. (1993) 'Voice: Beyond Control and Affectedness'. In: Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.) *Voice: Form and function*. (Typological studies in language; v.27). Amsterdam: John Benjamins. pp.89-117.
- Langacker, R.W. (1990) 'Subjectification', *Cognitive Linguistics* 1. pp.5-38
- Newman, J. (1996) *Give: A Cognitive Linguistic Study*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Shibatani, M. (1996) 'Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account' *Grammatical Constructions: their form and meaning* edited by Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson. Clarendon Press. pp.157-194
- Shibatani, M. (2000) 'Japanese Benefactive Constructions: Their Cognitive Bases and Autonomy' *Syntactic and Functional Explorations: In Honor of Susumu Kuno* Edited by Ken-ichi Takami, Akio Kamio and John Whitman Kuroshio Publishers.

**参考辞典**

『邦訳 日葡辞書』(1980) 第一刷 土井忠生・森田 武・長南 実 編訳 岩波書店

『角川 古語大辞典』第五卷(2001) 初版発行 中村幸彦・板倉篤義・岡見正雄編 角川書店

『日本国語大辞典』(2001) 第2版第12巻 小学館日本国語大辞典第2版編集委員会／小学館国語辞典編集部

**資料**

**【コーパス】**

現代日本語研究会(1999)『女性のことば・職場編』ひつじ書房

現代日本語研究会(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房

国立国語研究所(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス〔BCCW〕領域内公開データ』

**【新聞】**

2011年3月12日から2011年4月20日までの朝日新聞朝刊と夕刊、号外から本論筆者が「てもらう」を運用した文を抽出。

## 謝 辞

本研究のテーマは、授受動詞「もらう」の補助動詞的用法である。それは、筆者が昭和女子大学大学院博士後期課程入学後に開始した研究トピックである。昭和女子大学大学院修士課程で日本語教育現場にいた筆者は、学習者が「てください」と発話し、ネイティブの日本語教師がそれに対し、どのような印象を持ったかということ調べ、まとめた。しかし、昭和女子大学大学院の修士の時に受講できた認知言語学の講義をきっかけとして言語学に興味に移り、博士課程では言語学に関する講義を受講することができた。そのため、大学院での研究は言語学の観点からまとめたものとなった。

博士後期課程では、石橋玲子先生に論文執筆形式の整え方、論理構成、また論文の提出までの細かいアドバイスを頂いた。心理学にも日本語教育にも精通されている石橋先生の、根気強い論文の組立て方のアドバイスによって、博士論文という形式に仕上げる事ができた。それが無ければ、この日を迎えることができなかったであろう。

筆者の論文は内容の面で池上嘉彦先生の認知言語学の御講義に強く影響を受けている。池上先生には日本語が認知言語学の観点で、話者「私」が自分を中心とした日本語話者の主観的な〈事態把握〉の傾向、その言語化の傾向や他言語の〈事態把握〉との比較をお教え頂いた。そして認知言語学の観点から日本語を考えることの奥深さと面白さを気づかせて下さった。また、筆者が持っていく質問にいつも丁寧にお答え下さり、常に温かく励まして下さった。筆者は修士時代から本年 3 月末まで受講させて頂くという幸運に恵まれ、学問上の知識、学問への姿勢を教えて頂いた。本論文は、池上先生の認知言語学の御講義とアドバイスがあったからこそ執筆できたと思う。

査読をして下さった金子朝子先生からは第二言語習得の講義を受けさせて頂き、表や数値の意味をご指導頂くことができた。また、日本語教育の鈴木洋子先生からは、学習者の多様性同様、様々な角度からの読者を考慮する御指摘を頂き、盲点に気づくことができた。

創価大学の守屋三千代先生には、外部審査員を快くお引き受け頂くとともに、認知言語学の立場からの意義深いアドバイスを頂いた。お忙しい中、博士論文を査読して下さいました。以上の先生方に、心より感謝申し上げます。

研究の基礎となる言語学の知識については、筆者は中田清一先生に生成文法の基礎を教えて頂いた。日本語文法では現代日本語文法の礎としての知識を山田潔先生の講読に参加させて頂いて得ることができた。また昭和女子大学博士後期課程では、コーパス言語学を投野由紀夫先生に教えて頂き、井上優先生の対照言語学の集中講義も受講することができた。これらの講義を受講できたことが、筆者の言語学の知見を広げる上で不可欠の要素であり、感謝に耐えない。

本論文ではまた、英語の要旨や英語のサポートをしてくれた伊藤真梨子氏の助力無しには完成できなかった。専門がバイオテクノロジーであるにも関わらず、認知言語学の勉強

から始め、筆者の研究へのサポートを最優先して協力してくれたことに、心から感謝する。また、社会人である筆者に便宜を図り、快くメールでのネイティブチェックのやり取りを許可して下さった昭和女子大学国際交流センターの WAREN Ashley 先生の温かさには精神的にも助けて頂いた。

さらに認知言語学の観点からのアドバイザーとして、先輩の徐珉廷氏、島映子氏、論文完成までに多くのアドバイスや励ましをくれた同じ博士後期課程の皆様に深く感謝する。そして、社会人として修士課程に入った筆者と同時期に大学生になった娘、さらに息子は、学業を終えて社会人としての仕事があるにもかかわらず惜しみなく家事や情報知識の協力をしてくれ、筆者を支えてくれた。彼らの祖父母にあたる筆者の両親の介護のために筆者の論文が遅々として進まないことへの理解を示し、温かく応援してくれたので、論文を仕上げる事ができたと思っている。

このように、本論文の完成には非常に多くの方々の温かいご指導と励ましと支えがある。今改めて心よりお礼を申し上げたい。